

# 国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

にし ふく せ しん でん  
西福田新田遺跡

ごう しみず  
郷清水遺跡

かみ なか じま  
上中島遺跡

かみ たき の さわ  
上滝ノ沢遺跡

なか の はら D  
中の原D遺跡

くぼ すすき  
窪畑B遺跡

1999

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅳ

にしあぐに しん でん  
西福田新田遺跡

ごう しみず  
郷清水遺跡

かみ なか じま  
上中島遺跡

かみ たま の かわ  
上滝ノ沢遺跡

なか の ほん  
中の原D遺跡

くぼ はた  
窪畑B遺跡

1999

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

# 序

上新バイパスは、国道18号の上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と冬期間の降雪による交通障害を解消するため建設された全長24.6kmの大規模バイパスです。本バイパスの建設にともない行われた発掘調査によって、縄文時代をはじめ、それまで遺跡の存在すら知られていなかった奈良・平安時代の遺跡が調査され、当地のみならず、越後の古代史の大きな展望を開く成果が得られました。

本書は上新バイパス建設に関わる発掘調査のうち、昭和62～平成3年度の間に調査された、中郷村西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・上滝ノ沢遺跡・中の原D遺跡・窪畑B遺跡の発掘調査報告書です。

西福田新田遺跡と郷清水遺跡では、淡江川を挟んで対峙する、縄文時代の陥穴状土坑列が検出されました。上中島遺跡では縄文時代晩期初頭の土器群がまとまって出土し、これまで様相が不明であった当該期の研究に貴重な資料を提供しました。

郷清水遺跡・上中島遺跡・上滝ノ沢遺跡・窪畑B遺跡では、平安時代の炭窯が多数検出され、当時の妙高山麓における生業の一端を垣間みることができました。

この報告書が縄文時代・平安時代に限らず、歴史を解明するための資料として広く活用され、広い意味での文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、本書の刊行までの間、多大なご協力とご援助を賜った地元の方々、ならびに中郷村教育委員会・新井市教育委員会をはじめ、高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成11年3月31日

新潟県教育委員会

教育長 野本憲雄

# 例 言

- 1 本報告書は一般国道 18 号上新バイパスの建設に伴い、新潟県が建設者から受託して実施した下記遺跡の発掘調査報告書である。

|          |                              |
|----------|------------------------------|
| 西福田新田遺跡  | 新潟県中頸城郡中郷村大字西福田 1226 ほか      |
| 郷清水遺跡    | 新潟県中頸城郡中郷村大字藤沢 1464-1 ほか     |
| 上中島遺跡    | 新潟県中頸城郡中郷村大字二本木字上中島 1700 ほか  |
| 上滝ノ沢遺跡   | 新潟県中頸城郡中郷村大字二本木字上滝ノ沢 1493 ほか |
| 中の原 D 遺跡 | 新潟県中頸城郡中郷村大字松崎字中の原 540-1 ほか  |
| 窪畑 B 遺跡  | 新潟県中頸城郡中郷村大字市屋 535-2 ほか      |

上記のうち、新たに上滝ノ沢遺跡、中の原 D 遺跡、窪畑 B 遺跡が周知化された遺跡である。遺跡登録を行うにあたり、調査段階で「中の原遺跡」と仮称されていた遺跡は周知の遺跡「中の原 A・B・C 遺跡」と区別するため、「中の原 D 遺跡」と名称が付された。同じように「窪畑 B 遺跡」として調査された遺跡を登録するにあたり、周知の遺跡「窪畑 A 遺跡」を「窪畑 A 遺跡」として名称変更した。本報告書では登録された遺跡名を用い、記述している。

- 2 発掘調査は新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする。）が主体となり、昭和 62・63 年度、平成元・2・3 年度に実施した。
- 3 整理および報告書にかかる作業は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする。）が県教委の委託を受けて平成 9・10 年度に実施した。
- 4 本書の作成は立木（土橋）由理子（埋文事業団調査課第二係文化財調査員）、吉澤環（同主任調査員）があたった。執筆分担は、第Ⅲ章 2. A.、第Ⅳ章 2. B.、第Ⅴ章 2. B.、第Ⅵ章 2.、第Ⅶ章 2. B.、第Ⅷ章 2. B. が立木（土橋）吉沢のほかに、立木（土橋）である。編集は立木（土橋）が担当した。ただし、第Ⅸ章 2. は榎バレイオ・ラボ、第Ⅹ章 3. は学習院大学 木越邦彦氏に依頼した。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の注記記号は西福田新田遺跡を「西フクダ」、郷清水遺跡を「ゴウスイ」（調査年度の 87、91 を並記）、上中島遺跡を「上中」、中の原 D 遺跡を「中ハラ」、窪畑 B 遺跡を「クボ」として、出土地点・層位などを並記した。
- 6 各遺跡における報告書掲載の遺物番号は、原則として時代別の土器・石器ごとに通し番号とした。本文・観察表・図面図版・写真図版の遺物番号は一致する。
- 7 各遺跡の遺構番号は、各調査現場で付されたものを原則として使用した。
- 8 挿図・遺構図版の平面図の方位は、真北を表わす。発掘調査時に方位が出されていなかったものは、国家座標に基づき真北を定めた。なお、上越地方の国家座標は第 8 系の第 4 象限に該当する。
- 9 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を文中に [ ] で示し、巻末に一括して掲載した。
- 10 遺跡の順序および周辺の地質については、早津賢二氏よりご教示を賜った。
- 11 国家座標については、博田純氏よりご教示を賜った。
- 12 上中島遺跡の縄文土器については、長野県埋蔵文化財センター 百瀬長秀氏、新潟市教育委員会 渡邊朋和氏、新潟県企画調整部 渡邊裕之氏よりご教示を賜った。
- 13 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。厚くお礼申し上げる。

（敬称略、五十音順。）

飯塚博和 石原正敏 猪瀬美奈子 奥野友生 加納由美 小瀬博史 木下智夫 小島正巳 斎藤弘道 佐藤雅一  
清水克彦 鈴木悠雄 関根慎二 高橋勉 館野孝 田中耕作 田辺早苗 谷藤保彦 立木宏明 黄田明 中野純  
野村忠司 博田純 早坂広人 原川雄二 増子正三 百瀬長秀 綿田弘実 渡邊朋和 渡邊裕之

# 目 次

## 第Ⅰ章 序 説

|              |   |
|--------------|---|
| 1. 調査に至る経緯   | 1 |
| 2. 発掘調査と整理作業 | 3 |
| A. 発掘調査      | 3 |
| B. 整理作業      | 5 |
| (1) 整理経過     | 5 |
| (2) 整理体制     | 5 |
| (3) 報告書の記載方法 | 6 |
| a. 遺構        | 6 |
| b. 遺物        | 6 |

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

|             |   |
|-------------|---|
| 1. 周辺の地形と地質 | 7 |
| 2. 周辺の遺跡    | 8 |
| A. 地理的環境    | 8 |
| B. 縄文時代の遺跡  | 8 |

## 第Ⅲ章 西福田新田遺跡

|              |    |
|--------------|----|
| 1. 調査の概要     | 10 |
| A. 調査の方法と経過  | 10 |
| B. グリッドの設定   | 11 |
| 2. 遺跡        | 11 |
| A. 遺構        | 11 |
| (1) 概要       | 11 |
| (2) 各説       | 11 |
| B. 遺物        | 12 |
| (1) 概要       | 12 |
| (2) 縄文時代の土器  | 12 |
| a. 沢地出土の土器   | 12 |
| b. 包含層出土の土器  | 12 |
| (3) 縄文時代の石器  | 13 |
| a. 沢地出土の石器   | 13 |
| b. 包含層出土の石器  | 13 |
| 3. まとめ       | 13 |
| A. 陥穴状土坑について | 13 |
| B. 土器について    | 13 |

## 第Ⅳ章 郷清水遺跡

|             |    |
|-------------|----|
| 1. 調査の概要    | 14 |
| A. 調査の方法と経過 | 14 |
| B. グリッドの設定  | 15 |

|                |    |
|----------------|----|
| 2. 遺跡          | 15 |
| A. 基本層序        | 15 |
| B. 遺構          | 15 |
| (1) 概要         | 15 |
| (2) 各説         | 16 |
| a. 陥穴状土坑       | 16 |
| b. 炭窟          | 17 |
| c. 土坑          | 22 |
| d. 道路状遺構       | 23 |
| e. 溝状遺構        | 24 |
| C. 遺物          | 24 |
| (1) 概要         | 24 |
| (2) 縄文時代の土器    | 24 |
| (3) 縄文時代の石器    | 25 |
| (4) 古墳時代の遺物    | 25 |
| 3. まとめ         | 26 |
| A. 遺構          | 26 |
| (1) 陥穴状土坑      | 26 |
| (2) 炭窟         | 26 |
| (3) 道路状遺構の構築時期 | 27 |
| B. 遺物          | 28 |

## 第V章 上中島遺跡

|                 |    |
|-----------------|----|
| 1. 調査の概要        | 29 |
| A. 調査の方法と経過     | 29 |
| B. グリッドの設定      | 30 |
| 2. 遺跡           | 30 |
| A. 基本層序         | 30 |
| B. 遺構           | 30 |
| (1) 概要          | 30 |
| (2) 各説          | 31 |
| a. 住居跡          | 31 |
| b. 土坑           | 32 |
| c. そのほかの遺構      | 34 |
| d. 炭窟           | 35 |
| C. 遺物           | 36 |
| (1) 概要          | 36 |
| (2) 縄文時代の土器・土製品 | 36 |
| a. 分類と記述の方法     | 36 |
| b. 遺構出土の土器・土製品  | 38 |
| c. 包含層出土の土器・土製品 | 53 |
| (3) 縄文時代の石器     | 56 |
| a. 分類と記述の方法     | 56 |
| b. 遺構出土の石器      | 57 |
| c. 包含層出土の石器・石製品 | 60 |
| (4) 弥生時代以降の遺物   | 61 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| a. 弥生土器 .....     | 61 |
| b. 古墳時代の土器 .....  | 61 |
| 3. まとめ .....      | 62 |
| A. 遺跡の形成 .....    | 62 |
| B. 縄文土器について ..... | 62 |

## 第VI章 上滝ノ沢遺跡

|                |    |
|----------------|----|
| 1. 調査の概要 ..... | 67 |
| 2. 遺構 .....    | 67 |
| 3. まとめ .....   | 67 |

## 第VII章 中の原D遺跡

|                     |    |
|---------------------|----|
| 1. 調査の概要 .....      | 68 |
| A. 調査の方法と経過 .....   | 68 |
| B. グリッドの設定 .....    | 68 |
| 2. 遺跡 .....         | 69 |
| A. 基本層序 .....       | 69 |
| B. 遺構 .....         | 69 |
| (1) 概要 .....        | 69 |
| (2) 各説 .....        | 69 |
| a. 住居跡 .....        | 69 |
| b. 土坑 .....         | 70 |
| C. 遺物 .....         | 71 |
| (1) 概要 .....        | 71 |
| (2) 縄文時代の土器 .....   | 71 |
| (3) 古墳時代以降の遺物 ..... | 71 |
| 3. まとめ .....        | 72 |
| A. 縄文時代 .....       | 72 |
| B. 平安時代 .....       | 72 |

## 第VIII章 窪畑B遺跡

|                   |    |
|-------------------|----|
| 1. 調査の概要 .....    | 73 |
| A. 調査の方法と経過 ..... | 73 |
| B. グリッドの設定 .....  | 73 |
| 2. 遺跡 .....       | 73 |
| A. 基本層序 .....     | 73 |
| B. 遺構 .....       | 74 |
| C. 遺物 .....       | 74 |
| (1) 概要 .....      | 74 |
| (2) 縄文時代の土器 ..... | 74 |
| (3) 縄文時代の石器 ..... | 75 |
| 3. まとめ .....      | 76 |

## 第IX章 自然科学分析

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 1. 試料について .....              | 77 |
| 2. 樹種同定分析 .....              | 77 |
| A. はじめに .....                | 77 |
| B. 炭化材樹種同定の方法 .....          | 77 |
| C. 結果 .....                  | 78 |
| D. まとめ .....                 | 78 |
| 3. 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書 ..... | 82 |
| 〈要約〉 .....                   | 83 |
| 〈引用・参考文献〉 .....              | 85 |

## 挿図目次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| 第1図 遺跡位置図 .....                 | 2  |
| 第2図 周辺の主な遺跡 .....               | 9  |
| 第3図 西福田新田遺跡 陥穴状土坑の長幅比 .....     | 11 |
| 第4図 郷清水遺跡 基本層序 .....            | 15 |
| 第5図 郷清水遺跡 陥穴状土坑の長幅比 .....       | 16 |
| 第6図 郷清水遺跡 炭窟分類図 .....           | 17 |
| 第7図 郷清水遺跡 炭窟の分布 .....           | 27 |
| 第8図 郷清水遺跡 道路状遺構と現在の道路の関係 .....  | 28 |
| 第9図 上中島遺跡 押型文土器の分布 .....        | 53 |
| 第10図 上中島遺跡 石器の器種別分布 .....       | 59 |
| 第11図 上中島遺跡 古墳時代の土師器の分布 .....    | 61 |
| 第12図 上中島遺跡 遺跡の消長 .....          | 64 |
| 第13図 上中島遺跡 S I 11 覆土出土の土器 ..... | 65 |
| 第14図 上中島遺跡 捨て場の5群・6群土器 .....    | 66 |
| 第15図 上新バイパス関係遺跡炭窟出土炭化材樹種 .....  | 81 |

## 表目次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| 第1表 上新バイパス関係遺跡炭窟出土炭化材樹種同定結果 ..... | 80 |
| 第2表 放射性炭素年代測定結果 .....             | 82 |
| 第3表 西福田新田遺跡 陥穴状土坑計測表 .....        | 89 |
| 第4表 西福田新田遺跡 縄文土器観察表 .....         | 89 |
| 第5表 西福田新田遺跡 包含層出土石器の点数集計表 .....   | 89 |
| 第6表 西福田新田遺跡 石器観察表 .....           | 89 |
| 第7表 郷清水遺跡 陥穴状土坑計測表 .....          | 90 |
| 第8表 郷清水遺跡 炭窟計測表 .....             | 90 |
| 第9表 郷清水遺跡 縄文土器観察表 .....           | 91 |

|      |        |            |           |
|------|--------|------------|-----------|
| 第10表 | 郷清水遺跡  | 石器組成表      | 91        |
| 第11表 | 郷清水遺跡  | 石器観察表      | 91        |
| 第12表 | 上中島遺跡  | 土器観察表      | 92 - 105  |
| 第13表 | 上中島遺跡  | 石器組成表      | 106 - 107 |
| 第14表 | 上中島遺跡  | 石器観察表      | 106 - 107 |
| 第15表 | 中の原D遺跡 | 土器観察表      | 107       |
| 第16表 | 窪畑B遺跡  | 縄文土器観察表    | 108       |
| 第17表 | 窪畑B遺跡  | 包含層出土の石器組成 | 108       |
| 第18表 | 窪畑B遺跡  | 石器観察表      | 108       |

## 図版目次

### 図面

#### 西福田新田遺跡

|      |            |                  |
|------|------------|------------------|
| 図版 1 | トレンチ配置図    | 1 : 2000         |
| 図版 2 | 遺構全体実測図 1  | 1 : 400          |
| 図版 3 | 遺構全体実測図 2  | 1 : 400          |
| 図版 4 | 遺構個別実測図 1  | 1 : 40 SK1 ~ 11  |
| 図版 5 | 遺構個別実測図 2  | 1 : 40 SK12 ~ 20 |
| 図版 6 | 縄文時代の土器・石器 |                  |

#### 郷清水遺跡

|       |           |  |
|-------|-----------|--|
| 図版 7  | トレンチ配置図   | 1 : 2000   |
| 図版 8  | 遺構全体配置図 1 | 1 : 800  |
| 図版 9  | 遺構全体配置図 2 | 1 : 800  |
| 図版 10 | 遺構全体実測図 1 | 1 : 400  |
| 図版 11 | 遺構全体実測図 2 | 1 : 400  |
| 図版 12 | 遺構全体実測図 3 | 1 : 400  |
| 図版 13 | 遺構全体実測図 4 | 1 : 400  |
| 図版 14 | 遺構全体実測図 5 | 1 : 400  |
| 図版 15 | 遺構個別実測図 1 | 1 : 40 '87 - 陥穴 2 ~ 8                              |
| 図版 16 | 遺構個別実測図 2 | 1 : 40 '91 - 陥穴 3 - 3 ~ 8                          |
| 図版 17 | 遺構個別実測図 3 | 1 : 40 '91 - 陥穴 3 - 1・2、'91 - 陥穴 1 - 1 ~ 3         |
| 図版 18 | 遺構個別実測図 4 | 1 : 40 '91 - 陥穴 2 - 1・2・3、'91 - 陥穴 4 - 1・2         |
| 図版 19 | 遺構個別実測図 5 | 1 : 40 '91 - 陥穴 4 - 3 ~ 8                          |
| 図版 20 | 遺構個別実測図 6 | 1 : 40 '91 - 陥穴 5 - 1 ~ 3、'87 - SK15 ~ 17・20・23・24 |
| 図版 21 | 遺構個別実測図 7 | 1 : 40 '87 - SK18・19・21・22・25・STA471 付近陥穴状土坑       |

- 図版 22 遺構個別実測図 8 1:80 '87-1~3・7・10~12号炭窯
- 図版 23 遺構個別実測図 9 1:80 '87-4~6・8・13・14号炭窯
- 図版 24 遺構個別実測図 10 1:80 '87-A~K号炭窯
- 図版 25 遺構個別実測図 11 1:80 '91-3E・4B・6A・5H・7F・7A炭窯
- 図版 26 遺構個別実測図 12 1:80 '91-8F・9G・9C・10E・10B炭窯・'91-11・12G炭窯
- 図版 27 遺構個別実測図 13 1:80 '91-12E・12F・15C・16A・17B・17C炭窯
- 図版 28 遺構個別実測図 14 1:80, 1:40 '91-18B・19A・炭窯・'91-4B焼土土坑・  
'91-14A・15C・18B・4B・6A土坑
- 図版 29 遺構個別実測図 15 1:80 '91-8E・12F・11G・12G・19C土坑・'91-11・12G土坑
- 図版 30 縄文時代の土器・石器
- 図版 31 縄文時代の石器・古墳時代の遺物

#### 上中島遺跡

- 図版 32 トレンチ配置図 1:2000
- 図版 33 遺構全体配置図 1:800
- 図版 34 基本層序
- 図版 35 遺構全体実測図 1 1:200
- 図版 36 遺構全体実測図 2 1:200
- 図版 37 遺構全体実測図 3 1:200
- 図版 38 遺構全体実測図 4 1:200
- 図版 39 遺構全体実測図 5 1:200
- 図版 40 遺構全体実測図 6 1:200
- 図版 41 遺構個別実測図 1 1:40 SI11
- 図版 42 遺構個別実測図 2 1:80 SI10・SI25・26
- 図版 43 遺構個別実測図 3 1:40 SFP1・SK3・7~9・13・16・18
- 図版 44 遺構個別実測図 4 1:40 SK17・19~21・27・29・30・31・34
- 図版 45 遺構個別実測図 5 1:40, 1:20 SX2・6・23・24・33・SD4
- 図版 46 遺構個別実測図 6 1:40 12・14号炭窯
- 図版 47 遺構個別実測図 7 1:40 28・32号炭窯
- 図版 48 包含層出土土器の重量分布図
- 図版 49 縄文時代の土器 1 SI11
- 図版 50 縄文時代の土器 2 SI11
- 図版 51 縄文時代の土器 3 SI25・26
- 図版 52 縄文時代の土器 4 SI25・26、土坑、風倒木
- 図版 53 縄文時代の土器 5 捨て場
- 図版 54 縄文時代の土器 6 捨て場
- 図版 55 縄文時代の土器 7 捨て場

- 図版 56 縄文時代の土器 8 捨て場  
図版 57 縄文時代の土器 9 捨て場  
図版 58 縄文時代の土器 10 捨て場  
図版 59 縄文時代の土器 11 捨て場  
図版 60 縄文時代の土器 12 捨て場  
図版 61 縄文時代の土器 13 捨て場  
図版 62 縄文時代の土器 14 捨て場  
図版 63 縄文時代の土器 15 捨て場  
図版 64 縄文時代の土器 16・土製品 捨て場  
図版 65 縄文時代の土器 17 包含層  
図版 66 縄文時代の土器 18 包含層  
図版 67 縄文時代の土器 19・土製品 捨て場  
図版 68 縄文時代の石器 1 S111  
図版 69 縄文時代の石器 2 捨て場  
図版 70 縄文時代の石器 3 捨て場、SK15  
図版 71 縄文時代の石器 4 S125・26、包含層  
図版 72 縄文時代の石器 5 包含層  
図版 73 縄文時代の石器 6 包含層  
図版 74 縄文時代の石器 7 包含層・弥生時代以降の遺物

#### 上滝ノ沢遺跡

- 図版 75 トレンチ配置図 1:2000、遺構個別実測図 1:80

#### 中の原D遺跡

- 図版 76 トレンチ配置図 1:2000  
図版 77 遺構全体配置図 1:400、遺構個別実測図 1 1:80、1:40 S11、SB1  
図版 78 遺構個別実測図 2 1:40 S13 炉、SK1～6  
図版 79 縄文時代の土器・古墳時代以降の遺物

#### 窪畑B遺跡

- 図版 80 トレンチ配置図 1:2000  
図版 81 遺構全体配置図 1:400、遺構個別実測図 1:80  
図版 82 遺物分布図 1:100  
図版 83 縄文時代の土器 1  
図版 84 縄文時代の土器 2  
図版 85 縄文時代の石器

## 写真

### 西福田新田遺跡

- 図版 86 陥穴 SK1～5・12 半載・完掘  
図版 87 陥穴 SK6～10 半載・完掘  
図版 88 陥穴 SK11・13～16 半載・完掘  
図版 89 陥穴 SK17～20 半載・完掘、陥穴状土坑列完掘、全景  
図版 90 沢地全景・近景  
図版 91 縄文時代の土器・石器

### 郷清水遺跡

- 図版 92 '87-陥穴 SK2～6 半載・完掘  
図版 93 '87-陥穴 SK7・8 半載・完掘、'87 陥穴状土坑群完掘状況、'91-陥穴 4-6、'91-陥穴 3-7・8 半載・完掘  
図版 94 '91-陥穴 3-2～6 半載・完掘  
図版 95 '91-陥穴 3-1、'91-陥穴 1-1～3、'91-陥穴 2-1 半載・完掘  
図版 96 '91-陥穴 2-2～3、'91-陥穴 4-1・2 半載・完掘  
図版 97 '91-陥穴 4-3～5・7・8 半載・完掘  
図版 98 '91-陥穴 5-1～3、'87-SK15～17 半載・完掘  
図版 99 '87-SK18・20・23～25 半載・完掘  
図版 100 '87-SK19・21・22 半載・完掘、'87-SK15～25 完掘状況、'87-1・2号炭窟 半載・完掘  
図版 101 '87-2・7・10・12号炭窟 半載・完掘  
図版 102 '87-3・5・8・11・12号炭窟 半載・完掘  
図版 103 '87-4・5・6・A～K号炭窟 半載・完掘  
図版 104 '87-13・14号炭窟、'91-4B・3E 炭窟 半載・完掘  
図版 105 '91-4B・5H・6A 炭窟 半載・完掘  
図版 106 '91-6A・7F・7A 炭窟 半載・完掘  
図版 107 '91-7A・8F・9G 炭窟 半載・完掘  
図版 108 '91-9C・9G・10E 炭窟 半載・完掘  
図版 109 '91-10B 炭窟、'91-11・12G 炭窟 半載・完掘  
図版 110 '91-11・12G 炭窟、'91-12E・12F・15C 炭窟 半載・完掘  
図版 111 '91-15C・16A・17B 炭窟 半載・完掘  
図版 112 '91-17B・17C・18B・19C 炭窟 半載・完掘  
図版 113 '91-19A 炭窟、'91-4B 焼土土坑、18B・15C・4B・6A 土坑 半載・完掘  
図版 114 '91-8E・12G・12F・土坑 半載・完掘  
図版 115 '91-17B・19C 土坑、道路状遺構、溝状遺構 半載・完掘  
図版 116 溝状遺構 1 半載・完掘 遺跡遠景 航空写真  
図版 117 縄文時代の土器・石器

図版 118 縄文時代の石器・古墳時代の土器

上中島遺跡

図版 119 SI25・26、SI10

図版 120 SI11

図版 121 SI11、SFP1、SK9・13 半載・完掘

図版 122 SK3・7・8・16・17・19・20 半載・完掘

図版 123 SK27・29・30・31・34 半載・完掘

図版 124 SK21・SX2・23・24・33、SD4 半載・完掘

図版 125 12・14・28・32号炭竈 半載・完掘

図版 126 遺跡全景、捨て場

図版 127 縄文時代の土器 1 SI11

図版 128 縄文時代の土器 2 SI11、SI25・26

図版 129 縄文時代の土器 3 SI25・26、土坑、風倒木、SFP1、炭竈

図版 130 縄文時代の土器 4 捨て場

図版 131 縄文時代の土器 5 捨て場

図版 132 縄文時代の土器 6 捨て場

図版 133 縄文時代の土器 7 捨て場

図版 134 縄文時代の土器 8 捨て場

図版 135 縄文時代の土器 9 捨て場

図版 136 縄文時代の土器 10 捨て場

図版 137 縄文時代の土器 11 捨て場

図版 138 縄文時代の土器 12 捨て場

図版 139 縄文時代の土器 13 捨て場

図版 140 縄文時代の土器 14 捨て場

図版 141 縄文時代の土器 15・土製品 捨て場

図版 142 縄文時代の土器 16 包含層

図版 143 縄文時代の土器 17 包含層

図版 144 縄文時代の土器 18・土製品 包含層

図版 145 縄文時代の石器 1 SI11、捨て場

図版 146 縄文時代の石器 2 捨て場 SK15

図版 147 縄文時代の石器 3 SI25・26、4D風倒木、包含層、7GP-8

図版 148 縄文時代の石器 4 包含層

図版 149 縄文時代の石器 5 包含層・弥生時代以降の遺物

上滝ノ沢遺跡

図版 150 遺跡全景、炭窯

中の原D遺跡

図版 151 SI1・2、SI3 半截・完掘、遺跡全景

図版 152 縄文時代の土器、古墳時代遺構の土器

窪畑B遺跡

図版 153 炭窯 半截・完掘、遺跡全景

図版 154 縄文時代の土器

図版 155 縄文時代の石器

# 第I章 序 説

## 1. 調査に至る経緯

一般国道18号は上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と、冬期間の降雪による交通障害に悩まされてきた。建設省はこれらの障害を解消するため、上越市下流入から中郷村市屋に至る全長24.6kmの大規模バイパス「上新バイパス」の建設を計画した。このバイパスは、昭和53年度から工事が開始され、平成3年度に全線が供用された。

上新バイパスの建設に先立ち、昭和51年10月4日に建設省北陸地方建設局高田工事事務所（以下、「高田工事事務所」とする。）から「建北高調第549号」で新潟県教育庁文化行政課（以下、「県教委」とする。）に、上新バイパス予定法線に関する埋蔵文化財の有無および発掘調査・保存などについての照会があった。これに対して県教委は、昭和52年3月23日付「教文第828号」で、周知遺跡資料により、中ノ原C遺跡・八斗葎原遺跡・窪畑遺跡の調査が必要であると回答した。これに基づき、昭和54年10月29日から10月31日にかけて予定法線内の分布調査を行った。この時、八斗葎原遺跡・窪畑遺跡では表採遺物がなかったが、用地未買収・雑木未処理など悪条件下の調査であったため、再度確認調査が必要ということになった。そして、昭和54年12月11日付「教文第1103号」で八斗葎原遺跡・窪畑遺跡の調査が必要である旨、高田工事事務所に通知した。昭和59年2月9日の直轄国道改築事業区域内における埋蔵文化財発掘調査打ち合わせ会議（以下、「埋文会議」とする。）において、八斗葎原遺跡を昭和61年度、窪畑遺跡を昭和62年度に発掘調査するよう要望が出された。中ノ原C遺跡については予定法線近接地のため、具体的な提示は出されなかった。

昭和59年9月17日に行われた昭和60年以降の調査についての協議の際に、県教委は予定法線内の分布調査の必要性を主張し、同年9月28日には、新井市志から中郷村市屋までの分布調査を実施した。この結果は、同年10月9日付「教文第793号」で北陸地建に回答され、調査が必要な遺跡として、周知の八斗葎原遺跡・窪畑遺跡のほかに、郷清水遺跡・上滝ノ沢遺跡・中の原D遺跡などが挙げられた。

昭和62年3月2日の埋文会議で、県教委は昭和63年に郷清水遺跡・上滝ノ沢遺跡、昭和64年度に八斗葎原遺跡・窪畑遺跡の調査を行うという、具体的な調査計画案を提示した。同年6月29日の建設省との協議では、県教委の示した8月中旬以降、新井市三本木新田B遺跡・西福田新田遺跡の調査に入るという予定に対し、建設省からは、時間があれば調査を完了してもらい、加えて郷清水遺跡・上滝ノ沢遺跡の調査も実施してほしいという要望が出された。これに対して県教委は、可能な限り行うとした。

昭和62年8月18日には三本木新田B遺跡の調査に着手した。調査は順調に進み、引き続き、郷清水遺跡、上滝ノ沢遺跡へと移行していった。しかし、郷清水遺跡の5,000㎡の未買収地は、次年度以降に調査が見送られた。この未調査部分については、同年12月10日の埋文会議において、中の原D遺跡・窪畑遺跡とあわせて、63年度に実施してほしいとの要望が出された。

1. 調査に至る経緯



第1図 遺跡位置図

(中郷村役場発行「中郷村全図2」1:10,000原図 平成2年)

昭和63年4月19日、高田工事事務所と協議がもたれ、竈畑遺跡は用地交渉が進んでいないため、郷清水遺跡の62年度未調査部分と中原D遺跡の調査を先行することで合意した。その後、5月9日から郷清水遺跡・中原D遺跡の調査に着手したが、竈畑遺跡の用地交渉にも目処が立ったため、こちらも調査に入るようになった。

平成元年3月17日の埋文会議で八斗薮原遺跡の調査の要望が北陸地建から出され、5月から調査に着手した。調査の進行にともない遺跡が西側に広がっていることが判明したが、その部分は法線外に存在する上中島遺跡の延長部と捉えるほうが妥当と判断されたため、新たに上中島遺跡として調査を継続することになった。

平成元年度までに、上新バイパス関係の調査はほぼ終了したが、平成2年度になって、上新バイパスが国道に昇格したことから、藤沢除雪ステーションの建設予定が浮上してきた。建設予定地は郷清水遺跡の範囲に係っていた。そのため、平成2年12月17日の埋文会議で、藤沢除雪ステーションに係る郷清水遺跡の調査の要望が出された。これを受けて、平成2年11月5日から13日に調査が実施され、本線と同様に、陥穴状土坑・炭屑などが検出された。平成3年度は9月20日から11月30日まで調査が行われ、この郷清水遺跡の調査をもって、上新バイパス全線の調査を終了した。

## 2. 発掘調査と整理作業

### A. 発掘調査

国道18号上新バイパス関係の埋蔵文化財調査は、昭和51年(1976年)度の法線決定以降、平成3年(1991年)度の全線供用まで続けられた。本報告書には、このうち昭和62年度調査の西福田新田遺跡・上滝ノ沢遺跡、63年度調査の中の原D遺跡・竈畑遺跡・竈畑B遺跡、平成元年度調査の上中島遺跡、昭和62・63年度・平成2・3年度の4年にわたり調査された郷清水遺跡の調査結果を掲載している。各遺跡の調査経過の詳細はそれぞれの報告の中で記述するとして、ここでは各年度の調査体制を記す。

#### 昭和62年度

調査主体 新潟県教育委員会(教育長 田中邦正)

管 理 総 括 大塚克夫(新潟県教育庁文化行政課長)

管 理 田中浩一(新潟県教育庁文化行政課長補佐)

矢部 亮(新潟県教育庁文化行政課長補佐)

庶 務 土田 玲(新潟県教育庁文化行政課主事)

調 査 調査指導 中島栄一(新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長)

調査担当 藤巻正信(新潟県教育庁文化行政課主任)

調査職員 金沢道篤(新潟県教育庁文化行政課文化財専門員)

木間桂吉(新潟県教育庁文化行政課嘱託)

## 昭和63年度

|         |                          |
|---------|--------------------------|
| 調査主体    | 新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）       |
| 管理 総括   | 大塚克夫（新潟県教育庁文化行政課長）       |
| 管理      | 矢部 亮（新潟県教育庁文化行政課長補佐）     |
| 庶務      | 境原信夫（新潟県教育庁文化行政課主事）      |
| 調査 調査指導 | 中島栄一（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長） |
| 調査担当    | 藤巻正信（新潟県教育庁文化行政課主任）      |
| 調査職員    | 本間桂吉（新潟県教育庁文化行政課嘱託）      |
|         | 田辺早苗（新潟県教育庁文化行政課嘱託）      |

## 平成元年度

|         |                          |
|---------|--------------------------|
| 調査主体    | 新潟県教育委員会（教育長 田中邦正）       |
| 管理 総括   | 大嶋圭己（新潟県教育庁文化行政課長）       |
| 管理      | 矢部 亮（新潟県教育庁文化行政課長補佐）     |
| 庶務      | 近 文蔵（新潟県教育庁文化行政課主任）      |
| 調査 調査指導 | 中島栄一（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財係長） |
| 調査担当    | 高橋保雄（新潟県教育庁文化行政課主事）      |
| 調査職員    | 山本幸俊（新潟県教育庁文化行政課文化財専門員）  |
|         | 西村弥生（新潟県教育庁文化行政課嘱託）      |

## 平成2年度

|         |                             |
|---------|-----------------------------|
| 調査主体    | 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）          |
| 管理 総括   | 大嶋圭己（新潟県教育庁文化行政課長）          |
| 管理      | 吉倉長幸（新潟県教育庁文化行政課長補佐）        |
| 庶務      | 境原信夫（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財第一係主事） |
| 調査 調査指導 | 本間信昭（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財第二係長）  |
| 調査担当    | 山本幸俊（新潟県教育庁文化行政課文化財主事）      |
| 調査職員    | 小田由美子（新潟県教育庁文化行政課文化財専門員）    |

## 平成3年度

|         |                            |
|---------|----------------------------|
| 調査主体    | 新潟県教育委員会（教育長 堀川徹夫）         |
| 管理 総括   | 大嶋圭己（新潟県教育庁文化行政課長）         |
| 管理      | 吉倉長幸（新潟県教育庁文化行政課長補佐）       |
| 庶務      | 白石雄蔵（新潟県教育庁文化行政課主任）        |
| 調査 調査指導 | 本間信昭（新潟県教育庁文化行政課埋蔵文化財第二係長） |
| 調査担当    | 藤巻正信（新潟県教育庁文化行政課文化財専門員）    |
| 調査職員    | 三浦泰介（新潟県教育庁文化行政課主任）        |
|         | 伊藤秀和（新潟県教育庁文化行政課嘱託）        |
|         | 佐藤執二（新潟県教育庁文化行政課嘱託）        |

## B. 整理作業

### (1) 整理経過

遺物の水洗・注記や遺構図面の整理などの基礎整理作業は発掘調査と並行して、あるいは発掘調査年度の冬期間に行った。報告書作成に関わる本格的な整理作業は、平成9年度から10年度にかけて行った。発掘調査から整理作業の再開まで、最短で6年が経過している。その間、平成4年度には新潟県埋蔵文化財調査事業団が発足し、それまで新潟県教育委員会が行ってきた発掘調査および整理作業が同事業団に委託されることになった。また、平成8年10月には新潟県埋蔵文化財センターが竣工し、それ以降の整理作業はセンターにおいて進めた。

平成9年度からの整理作業では、遺物は接合作業から、遺構図面は図面合わせから行った。ただし、遺構の性格の解釈については、発掘調査時や基礎整理時の所見に負うところが多い。

### (2) 整理体制

昭和62・63年度・平成元～3年度

発掘調査の体制と同様である。

平成9年度

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 平野清明）

整 理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 平野清明）

管 理 須田益輝（専務理事・事務局長）

若槻勝則（総務課長）

亀井 功（調査課長）

庶 務 泉田 誠（総務課主事）

整理指導 寺崎裕助（調査課第二係長）

整理職員 立木（土橋）由理子（文化財調査員）

平成10年度

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 野本憲雄）

整 理 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 野本憲雄）

管 理 須田益輝（専務理事・事務局長）

若槻勝則（総務課長）

本間信昭（調査課長）

庶 務 椎谷久雄（総務課主任）

整理指導 高橋 保（調査課第二係長）

整理職員 立木（土橋）由理子（文化財調査員）

吉澤 環（主任調査員）

なお、遺物の復元・実測、写真撮影、図面の整理・製図は、整理作業の嘱託職員・日々雇用職員によるところが多い。

### (3) 報告書の記載方法

#### a. 遺構

##### 記述・表記方法

遺構の説明をするにあたり、記述・表記方法を以下のように統一した。

説明した遺構は住居跡(SI)・土坑(SK)・ピット(P)・溝(SD)・不明遺構(SX)などであるが、ピットのように数が多いものや不明遺構については、規模が大きいものや、覆土や出土遺物から時期が推定できるものなどを選択して説明した。なお、遺構種別は、炭窯と陥穴状遺構のほかは基本的に前述の( )内に示した略称を用いた。風倒木痕は「風倒木」(遺構全体実測図では「風」と略した)。

##### 計測方法

遺構の大きさは特に断わりが無い限り、検出面における大きさである。深さについても同様に、検出面から底面までの値を計測値とした。

観察表は巻末に、遺跡ごとにまとめて掲載した。

##### 図面

図面は北に位置する遺跡から順に、遺跡単位で巻末にまとめた。各遺跡とも、基本的に3段階の縮尺の異なる図面を用意した。まず、遺構配置全体を1枚の図面に表わした「遺構全体配置図」(縮尺1:400または1:800)、次にこれを部分的に拡大した「遺構全体実測図」(縮尺1:200または1:400)、最後に「遺構個別図」(縮尺1:40または1:80)で個々の遺構を表現した。遺構個別図は基本的に、遺構種別ごとに北に位置するものから南へ位置するものへと、順に配列した。

#### b. 遺物

##### 石器

各遺跡とも、「第V章上中島遺跡」に示した分類を基本としている。

##### 土器

色調は農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。分類は遺跡ごとに行い、本文中で説明した。

##### 観察表

土器・石器とも、巻末に遺跡ごとにまとめて掲載した。

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

### 1. 周辺の地形と地質

西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡などが所在する中郷村は、新潟県の南西部に位置する。この地は東を関田山脈、南を妙高連峰、西を西頸城山地に囲まれ、北は日本海に面した頸城平野に向けて開いている。中央には関川が北流する。関川は妙高連峰南面を起源として妙高山の南裾を巡り、関田山脈の裾野を流れて日本海にそそぐ河川である。本報告書所収の遺跡は関川の左岸に位置し、西福田新田遺跡が関川支流の渋江川左岸にあるほかは、渋江川と片貝川に挟まれた3km程の範囲に存在する。

遺跡周辺の地質は、妙高山起源の渋江川火砕流堆積物に規定されており、その上位を二本木岩層なだら堆積物と矢代川岩層なだら堆積物が薄く覆う形になっている。このうち、矢代川岩層なだら堆積物は大倉山と火打山の間の谷から、矢代川にそって新井市までの約50km<sup>2</sup>の地域に分布し、矢代川流域では始良-丹沢火山灰層(AT)の上位に堆積している[早津1985]。

妙高山の噴出物は、矢代川付近を北限として関川左岸に幾重にもわたって厚く堆積し、地勢形成に大きな影響を与えているとともに、遺跡の発掘調査にあたっては、遺跡間にまたがる地層としての役割を果たしている。

縄文時代の地層には、赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物がある。赤倉火砕流堆積物は妙高山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は池の平までの範囲で認められる。噴出時期は、妙高高原関川谷内遺跡A地点で縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認されたことや[小池1998]、妙高村道添遺跡における遺物出土状況と<sup>14</sup>C年代の測定結果から、考古学的には有尾式期より新しく、諸磯c式並行期よりは古い時期、絶対年代では約5,300年前と捉えられている[早津1995]。

大田切川火砕流堆積物は妙高山の東方から北東にかけての、古二俣川・関川・片貝川流域に分布する。噴出時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末～後期初頭が考えられているが[早津・小島1985]、絶対年代については<sup>14</sup>C年代の測定値にばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている[早津1985]。

歴史時代にかかる地層には、高谷池火山灰層グループ(KG)[早津・新井1985]に含まれる、焼山起源の数枚の火山灰層がある。これらは上位から、KG-a、KG-b、KG-c(上下2層に細分される)、KG-d、KG-eと呼ばれており、それぞれの噴出時期は考古遺物・<sup>14</sup>C年代の測定などから次のように推定されている[早津1994]。KG-bが14～15世紀、KG-cが約1,000年前、KG-eが約3,000年前。同層の堆積速度から、KG-dはKG-eの数100～1,000年後、KG-aはKG-bの数100年後という噴出時期が推定されている。なお、KG-cの噴出時期については、『往古早川谷之絵図』にみる仁和3年(887年)の茶白山(焼山の古名)の噴火に関する記録と、『伴家文書』にみる永祿元年(989年)の噴火の記録が、KG-cの下部層と上部層にそれぞれ対応する可能性があると指摘されている[早津1994]。KG-cは妙高火山東方山麓地域の平安時代の遺跡で多く検出される。本報告書所収の遺跡でも検出されており、郷清水遺跡の炭層では、KG-c直下の炭の<sup>14</sup>C年代に1,060±80y.B.P.(t-17,092)が得られている[早津1994]。

## 2. 周辺の遺跡

### A. 地理的環境

今回報告する遺跡がある地域は、西を妙高火山群、東を関田山脈とこれに連なる丘陵に挟まれているため、山裾部においては地形的に閉塞的な印象を受ける。しかし、北は日本海に向かって広がる頸城平野に面し、南は関川沿いに信州へと通じており、近世には、北国街道がこの道筋を通過していたことが知られている。北国街道は近世五街道のひとつ中山道の追分宿から分岐し、越後高田城下を経由して平野へ抜け、佐渡への渡海場である出雲崎へと通じることができた。地形や遺跡の分布などから、古代には妙高山麓沿いに直江津へ至る道、頸城平野の東側山麓を横切り柿崎町直海浜に至る道、関川西岸沿いの近世北国街道に近い道などが、交通路として機能していたと考えられている【山本1991】。このような地理的条件により、この地は古くから人や物の交流が活発に行われていたと推定される。

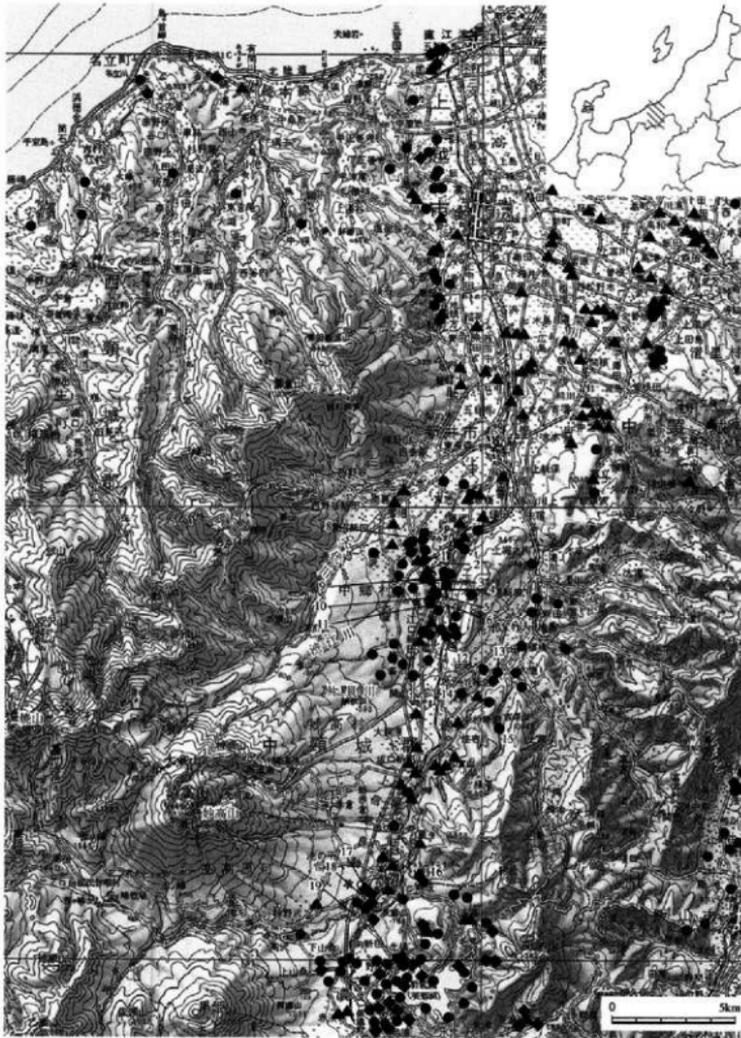
### B. 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡は妙高山麓に多く分布する。平野と丘陵の境には、山屋敷Ⅰ遺跡【上越市教委1978】のような大規模集落も存在するが、平野部には小規模な遺跡が点在するにすぎない。山麓部の関川左岸においては赤倉火砕流堆積物・大田切川火砕流堆積物が厚く堆積しており、その上位の遺構と下位の遺構を明瞭に区別している。その反面、妙高高原町田切から妙高村関山までの間は大田切川火砕流堆積物が非常に厚く堆積しているためか、縄文時代の遺跡の発見例は少ない。

草創期から早期の遺跡は妙高山東側の山裾に多く分布する。大塚遺跡【立木・寺崎ほか1996】、関川谷内遺跡【小池ほか1998】、中ノ沢遺跡【立木・寺崎ほか1997】ではまとまった量の押型土器が出土し、これまで空白であった当地の福年を作成する上で貴重な資料を提供している。このほかに押型土器が出土した遺跡としては、八斗蒔原遺跡【飯坂1997】、前原遺跡【橋谷田1997】、松ヶ峰遺跡群【小島1993ほか】、高床山周辺の遺跡群【高橋1994】、中古遺跡【室岡1986b】がある。

前期前葉から中葉の遺跡は関川谷内遺跡【小池ほか1998】、三本木新田B遺跡【立木・寺崎1997】などがある。とくに関川谷内遺跡では、有尾式土器が赤倉火砕流堆積物の下位から出土したことで、それまでの赤倉火砕流堆積物の噴出時期の再検討を必要が生じた【小島1995b】。前期中葉から中期前葉の遺跡は妙高山起源の火砕流の分布域においては、赤倉火砕流堆積物の上位、大田切川火砕流堆積物の下位に遺跡が存在する。妙高山麓では湯ノ沢遺跡群【新潟県1980】、龍峰遺跡【中郷村教委1987】、和泉A遺跡【荒川1994ほか】などがある。高床山南方の平坦地に遺跡遺跡【室岡1994・1995】、柿ノ木町遺跡【龍跡1992】、関川とその支流馬場川によって形成された段丘面上に大貝遺跡【岡本ほか1967】がある。

中期中葉以降、遺跡数は減少する。これ以後の遺物包含層は、大田切川火砕流堆積物の上位に存在する。後期には、山麓部で寒俣遺跡【本岡・室岡1976】、南田遺跡【龍跡1988】、龍峰遺跡【中郷村教委1987】、松原B遺跡【小島1995a】、小丸山遺跡【龍跡1990】などがある。平野部では炭山遺跡【三ツ井1998】において堅穴住居4基・配石遺構が検出された。晩期では龍峰遺跡【中郷村教委1987】において、晩期中葉までの大規模な集落跡が検出された。ここで検出されたような配石遺構は蔭生遺跡【中川ほか1967】、小丸山遺跡【龍跡1990】などにもみられる。



- 凡例
- 縄文時代
  - ▲ 奈良・平安
  - ◆ 縄文・奈良・平安

遺跡名

- |          |         |         |        |          |
|----------|---------|---------|--------|----------|
| 1. 西福田新田 | 5. 中の塚D | 9. 八斗御原 | 13. 遺添 | 17. 関川谷内 |
| 2. 柳清水   | 6. 雲畑目  | 10. 龍峰  | 14. 藤生 | 18. 中ノ沢  |
| 3. 上中島   | 7. 炭山   | 11. 和泉A | 15. 中古 | 19. 大堀   |
| 4. 上滝ノ沢  | 8. 小丸山  | 12. 南田  | 16. 兼俣 |          |

第2図 周辺の主な遺跡 [国土地理院1:20,000地形図「高田」平成9年製図修正]

## 第三章 西福田新田遺跡

### 1. 調査の概要

#### A. 調査の方法と経過 (図版1)

西福田新田遺跡は渋江川左岸の北向きの緩斜面上に立地する。南側は渋江川に面する崖面になっている。この崖は川沿いの県道敷設時に切り崩されており、本来の崖線より10mほど後退していると推定される。

調査は当初、3,440㎡を対象として実施したが、遺跡範囲の拡大により、実質9,455㎡の発掘調査を行った。調査期間は昭和62年8月19日から10月9日までである。

8月19日から25日まで、丘陵部(STA430～445)に幅4～4.5mのトレンチを4本設定し、重機で表土を除去した後、人力で精査を行った。この間においては、遺物・遺構とも検出されなかった。

8月24日からは山側裾部(STA445～457)にも同様のトレンチを設定し、調査を行った。ここでは黒色土中に焼土が散布しているのが数か所検出され、中には付近から縄文土器が出土するものもあった。土坑も複数検出されたので、27日から各トレンチの間の表土を除去し、面的な調査に切り替えた。

8月28日には、STA451からSTA457にかけて土坑が列をなして分布しているのが捉えられ、これらが陥穴状土坑の可能性が出てきた。そこで、9月1日にはSTA451からSTA457の範囲についてグリッドを設定し、本格的に二次調査へ移行した。この時点で、土坑列を配列からI群～IV群に分類した。陥穴状土坑列は、個々の精査・図面作成・写真撮影などを9月9日までに終了し、10日に全景写真を撮影した。

9月3日には陥穴状土坑列I群の南側で、陥穴状土坑とは異質の覆土に木炭粒を含む浅い土坑が検出された。周辺から平安時代の所産とみられる土師器片が出土することから、当該期の遺構である可能性が考えられた。後に炭窯とわかった土坑である。同日、STA446～449にある沢地の調査を開始した。沢地の縁辺部には焼土が9箇所ほど点在しており、周囲から縄文土器の細片が出土した。沢地は覆土の黒色土を重機で取り除きながら調査を進め、10月1日までにほぼ調査を終了した。遺物は、表裏縄文土器片と両面加工石器などが出土した。

10月6日から9日には渋江川沿いの崖縁部の調査を行った。遺構は土坑が2基検出され、遺物は押型文土器・条痕文土器のほか、磨石類が出土した。

10月9日までに二次調査対象範囲全体を完掘し、10月12日から15日まで残務整理を行い、調査を終了した。

## B. グリッドの設定 (図版3)

グリッドはSTA451からSTA457にかけての範囲に、STA453を起点として設定した。なお、この時のSTA453は、STA453の東幅杭と西幅杭を結んだ延長線上に、東幅杭から西へ20mのところを点と落とし、位置を復元したものである。

グリッドの東西の主軸はSTA453の東幅杭と西幅杭を結んだ線であり、この線上にあるSTA453から西幅杭を望み、そこから90° 振った延長線を南北方向の主軸とした。グリッドは10m四方に区切った。グリッド名は北から南へ1・2・3・・・、西から東へA・B・C・・・とし、「1A」など組み合わせて呼称した。

## 2. 遺跡

### A. 遺構

#### (1) 概要 (図版2・3)

二次調査の対象としたSTA446からSTA457は、北向きの緩斜面である。標高は渋江川に近い南側が約215mであり、そこから徐々に下がって、北側では約204mを測る。

北側のSTA448付近は沢地になっており、そこでは焼土とみられる赤色土が9か所ほど点在しているのが確認された。これらの焼土は発掘限界面より上位の黒色土中に存在していた。焼土の周囲ではこのほかの遺構は検出されなかった。遺物は表裏縄文土器片・両面加工石器が出土した。なお、この範囲についてはグリッドは設定していない。

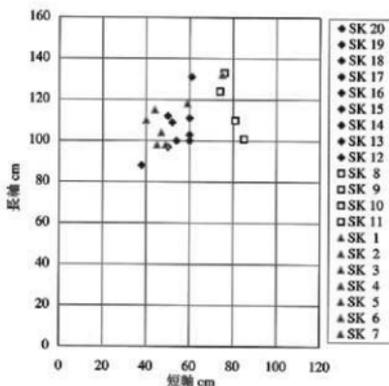
STA451からSTA457にかけての範囲はグリッドを設定して調査を行った。陥穴状土坑20基と土坑2基を検出した。陥穴状土坑は概ね3列に分けられる。土坑2基は南側の陥穴列のさらに南側で検出された。2基はともに円形の皿状の土坑で、覆土に炭化物粒を多く含んでいた。遺物は出土しなかった。炭窯と推定される土坑である。

#### (2) 各説 (図版3～5・86～90)

##### 陥穴状土坑

配列から3群に分けた(第3表)。多くの陥穴状土坑の覆土は水平堆積であるが、中には、SK4・SK6・SK7・SK10・SK11・SK14・SK15・SK18のように、掘り返した可能性があるものも認められた。

以下、群ごとに説明する。



第3図 陥穴状土坑の長幅比

陥穴状土坑1群 (SK1~SK7) (図版4・86・87)

陥穴状土坑群では最も南側の、8B・7C・7Dで検出された。東西方向に7基の陥穴状土坑が2~5mおきに並ぶ。個々の陥穴状土坑の形態は、隅丸長方形で、底部に小ピット1基をもつ。大きさの平均値は長軸約111cm、短軸49cm、深さ76cm程度である。長軸方向はいずれもN-28°-W前後を測る。

陥穴状土坑2群 (SK8~SK11) (図版4・87・88)

7A~C・6Cで検出された。1群にほぼ並行する形で東西方向に4基の陥穴状土坑が並ぶ。間隔は4~7mほどで、1群より広い。個々の陥穴状土坑の形態は、楕円形で、底部に1~2基の小ピットをもつ。大きさの平均値は、長軸117cm、短軸79cm、深さ91cm程度である。1群のものより若干幅広い印象を受ける。長軸方向はN-43°-Wで1群より西へ振れている。

陥穴状土坑3群 (SK12~SK20) (図版5・86・88・89)

2B・3B・4~6C・6Dで検出された。9基の陥穴状土坑が、北西-南東方向に緩やかな弧を描いて並ぶ。間隔は約5mである。個々の陥穴状土坑の形態は、隅丸長方形で、底部に1基の小ピットをもつ。大きさの平均値は長軸106cm、短軸54cm、深さはばらつきがあるが、93cm前後にはほぼまとまる。長軸方向はN-40°-Eで、1群・2群とは異なる。

## B. 遺物

### (1) 概要

遺物の多くは遺跡北側の沢地と、陥穴状土坑列の南側の崖縁から出土した。所属時期は縄文時代早期~前期である。

### (2) 縄文時代の土器 (図版6・91)

#### a. 沢地出土の土器 (1~5)

1・2・5は表裏縄文土器である。2は口縁端部にも縄文が施文されているようである。

3は器面の荒れが激しく判然としなが、表面には縄文が施文されているようである。内面は指押さえ痕の痕がよく残り、凹凸が激しい。4は上端が輪積みの接合部分で割れている。内面には3同様の指押さえ痕がよく残る。

#### b. 包含層出土の土器 (6~11)

6は表裏縄文土器である。7は沈線で弧線が描かれている。8は格子目の押型文が帯状施文されている。9は薄手の器壁で、表面に細かい条線が走る。口縁には爪形が連続刺突されている。10も表面に条線が引かれるが、9より太めである。11は羽状縄文が施文されている。

## (3) 縄文時代の石器 (図版6・91) (第V章2.C.(3)a.参照)

## a. 沢地出土の石器 (1~4)

沢地では剥片石器が比較的まとまって出土した。

1は尖頭器の蓋部である。周縁には細かい階段状の剥離がめぐるが、断面形がレンズ形というより多角形に近いことから、未成品の可能性がある。3は両極石器で、2対の極をもつ。2は厚手の横長剥片の下端に微細な剥離痕が連続する。4は厚手の剥片を素材とする石核である。両面から2~3cm四方の大きさの剥片が剥離されている。遺跡内からこれに該当する大きさの剥片、あるいは剥片を素材とする石器が出土していないので、これ自体が猛器的な石器であった可能性もある。

## b. 包含層出土の石器 (5~12)

ほとんどが調査範囲南側の崖縁から出土した。

5は複剥離打面の剥片で、背面に原石面をもつ。今回出土した剥片石器では唯一の珪質頁岩製である。6~12は磨石類である。11がA類、6・8がB類、7がD類、12がE類、9がF類に分類される。

## 3. まとめ

## A. 陥穴状土坑について

西福田新田遺跡では、3群20基の陥穴状土坑が検出された。個々の陥穴状土坑は基本的に平面形が隅丸長方形で、掘り形は箱形、底面に小ピットを有する。この形態は、湯沢町岩原I遺跡の早期後半~中期前葉に位置付けられている陥穴状土坑D類 [佐藤1990] に類似する。西福田新田遺跡からは早期前葉から前期の遺物が出土している。妙高山麓の早期前葉の陥穴状土坑は円錐形を呈するので [立木(土橋)1996]、西福田新田遺跡のものは前期に属すると考えておきたい。前期の中での詳細な位置付けは難しい。

淡江川対岸の郷清水遺跡 (本書 第IV章) でも、前期に属する陥穴状土坑が検出されているが、本遺跡の陥穴状土坑との関係は不明である。

## B. 土器について

早期の表裏縄文土器 (1・2・5・6) は、妙高山麓では、妙高高原町大堀遺跡 [寺崎1996] に次いで2例目の出土例である。細片のため詳細は不明であるが、胎土に繊維を含まない点で、大堀遺跡のI群A類に比定される。大堀遺跡のI群A類は長野県小佐原遺跡 [廣瀬1980]、三枚原遺跡 [廣瀬1977] に類例を求められている。これらの土器は、本県の室谷上層や関東の井草~夏島・稲荷台古に並行すると考えられている [廣瀬1995、宮崎・金子1995]。よって、西福田新田遺跡の表裏縄文土器も大堀遺跡I群A類と同様に、早期初頭に位置付けられると考えておきたい。

7は早期中葉の田戸下層式併行の土器と推定される。

## 第IV章 郷清水遺跡

### 1. 調査の概要

#### A. 調査の方法と経過 (図版7)

郷清水遺跡は渋江川右岸の崖線から南側の小沢を越え、村道江端稲荷山線までの東向き緩斜面に位置する。

調査は昭和62・63年度、平成2・3年度の4か年にわたり実施した。

昭和62年度は、およそSTA465～495までの範囲について調査を行った。調査は昭和62年9月1日に着手した。2日には地山上位の暗～黒褐色土上面で100箇所を超える焼土の散布や、住居跡とみられる遺構も検出された。8日にはSTA482付近で検出された窪みから土師器が出土し、その下位に白色灰の堆積が認められた。同様の白色灰は炭窯の上位でも検出されていた。この白色灰は焼山の1,000年前の噴火に伴う可能性が考えられたため、試料を採取しておいた。9日には、基本層序中のⅡb層(白色灰)、Ⅲb層(褐色土)、Vb層(暗～赤褐色土)も火山灰であると考え、検討を行った。その結果、11日には、当初検出されていた焼土群が実はVb層に由来するもので、遺構ではないことが明らかとなった。同日、STA466付近のトレンチで陥穴状土坑と推定される土坑が複数検出された。

それまでの調査結果に基づき、STA465から478までのトレンチを拡張し、面的な調査を行った。面的な調査では、トレンチ調査で検出されていた陥穴状土坑や、炭窯のほか、並行溝状遺構が検出された。陥穴状土坑は渋江川の崖線に1列に並ぶ一群と、そこから南へ100mほど離れた、一段高い支線の緩斜面に存在する一群に分けられた。調査は10月中旬まで遺構精査を行い、下旬は記録作成に重点を置いた。10月末までに全ての作業を終え、撤収した。

昭和63年度は5月10日から6月17日にかけて、前年度未買収地(およそSTA497～500)と、前年度調査において、STA465～478までに設定したトレンチの間隙を調査した。前者は沢近くの斜面であり、遺構は検出されなかったが、縄文時代と古墳時代の土器が少量出土した。地形からみて、遺構が存在する可能性は低かったので面的な調査へは移行しなかった。後者では前年度と同様に、炭窯が検出された。5月30日には、STA476付近で同形の炭窯が数基重複しているのが検出された。その炭窯の精査を中心に6月17日まで作業を行い、同日撤収した。

平成2年度には、除雪ステーション建設予定地内を対象とした調査を一部行い、翌3年度にも調査を継続した。

平成3年度は15,010㎡を対象範囲として、8月19日から11月29日まで調査を行った。

8月20日、重機を用いて表土除去を開始し、この時点で炭窯1～2基を検出した。9月に入ると、陥穴状土坑が相次いで検出され、順次精査・記録作成を行っていった。9月下旬には炭窯も多く検出されるようになり、精査・記録作成は10月から11月上旬まで続いた。11月はそれまで検出された遺構の全体図作成に力をいれ、30日までに調査を終了した。

## B. グリッドの設定 (図版7)

昭和62・63年度の調査はトレンチを拡幅し、遺構を検出する方法で調査を行ったので、グリッドは設定しなかった。遺構図面の作成および遺物の取り上げはセンター杭を基準に行った。

平成3年度の調査では、本線のセンター杭を基準にグリッドを設定した。まず、STA467とSTA469の東幅杭(K-8とK-10)から西幅杭(K-11とK-13)を見通してセンター杭を復元した。復元したSTA467とSTA469を結ぶ線を南北軸とし、この南北軸を東へ30m平行移動した線を、グリッドのAライン東辺とした。これは真北から13°西偏する。これに直交する線を東西方向の軸としてグリッドを設定した。

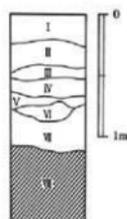
グリッドは10m四方の大グリッドと、それを2m四方にした小グリッドからなる。大グリッドの呼称は南北方向に北から南へ算用数字、東西方向に西から東へアルファベットを付し、その組み合わせで「1A」などとした。小グリッドは北西優位で1～25までの番号を付し、大グリッドの後に「1A25」のように表示した。なお、国家座標値はK-8が(X=109308, 86, Y=-24681.92)、K-10が(X=109269, 79, Y=-24672.72)である。

## 2. 遺跡

### A. 基本層序 (第4図)

基本層序は次の通りである。

- I層：黒褐色土。細粒でしまりは無く、粘性もほとんど無い。現表土。
- II層：黒色土。I層より色調がやや暗く、しまりはやや強い。粘性はほとんど無い。
- III層：暗褐色土。褐色土を少量均質に含み、しまりはやや強く、粘性はほとんど無い。色調はII層より明るい。
- IV層：黒色土。II層に類似するが、II層よりしまりが強く、粘性もやや強い。
- V層：暗褐色土。III層に類似するが、III層よりしまり・粘性ともに強い。
- VI層：褐色土。しまり・粘性ともに強い。
- VII層：暗褐色土。V層に類似するが、色調がやや暗い。しまりはV層よりやや強い。
- VIII層：黄褐色土。



第4図 基本層序

遺物包含層はI層からVIII層までである。遺構検出は基本的にVIII層上面で行ったが、炭層はそれより上位で検出されることもあった。

### B. 遺構

#### (1) 概要 (図版8・9)

郷清水遺跡では、縄文時代の陥穴状土坑・焼土・土坑、平安時代の炭層・土坑、時期不明の道路状遺構が検出された。説明は遺構種別ごとに記述するが、遺構名称については調査時に付されたものを生かしたため、同種の遺構であっても表記に不統一があることをあらかじめ断っておく。

## (2) 各説 (図版8～29・92～116)

## a. 陥穴状土坑 (図版8・9・15～21・92～100)

陥穴状土坑は北東向きの緩斜面を横切るような形で、列をなして検出された。配列から5群に分けられる(第7表)。以下、群ごとに説明する。

## 陥穴状土坑1群 ('87-陥穴2～8、'91-陥穴1-1～3・2-1～3・3-1～8) (図版10・11)

最も北側に位置する一群で、220.5mの等高線に沿って、22基が並ぶ。洪江川に面するところでは川に平行して、3～5m間隔で陥穴状土坑が並び、向きが南へ変わると、3～4基がひとまとまりとなり、それぞれのまとまりの間に24m～37mの空間をもつようになる。1991年度の調査区のもの、調査時点では3つのグループに分けられていたが、整理段階で1987年度調査分と合わせ、一連のものとして捉え直した。

個々の陥穴状土坑は楕円形で、底面に1～2基のピットをもつ。大きさは長軸140cm、短軸70cm、深さ100cm程度にまとまる。長軸方向は列に対して、ほぼ直交する。

## 陥穴状土坑2群 ('91-陥穴4-1～8) (図版12・13)

1991年度調査区12B・13C・13D・14D・14Eにかけて、8基の陥穴状土坑が3～4m間隔に並ぶ。等高線224.0mにほぼ並行して、北西-南東方向に列をなすが、1987年度調査区ではこれに連続する陥穴状土坑列は検出されなかった。

個々の陥穴状土坑は隅丸長方形で、底面に1基のピットをもつ。大きさは長軸120cm、短軸50cmにまとまり、深さは90～150cmとややばらつきがある。'91-陥穴4-6は道路状遺構に切られている。

## 陥穴状土坑3群 (3a群:'87-SK15・17・20・23～25・STA471付近、3b群:'87-SK18・19) (図版12)

1987・88年度調査区のSTA471付近で検出された。陥穴状土坑3a群と陥穴状土坑3b群に細分される。

陥穴状土坑3a群は等高線224.5mにほぼ並行して、約5mおきに陥穴状土坑が並ぶ。陥穴状土坑3b群は

3a群の南西側に2基(SK18・SK

19)が並ぶ。個々の陥穴状土坑は隅丸

正方形で、'87-SK25以外は底部に

2～3基のピットをもつ。大きさは1

辺70～90cm、深さ70cm程である。

STA471杭付近の陥穴状土坑は基本

層序確認のための壁面にかかっていた

ので、正確な断面形を知ることが

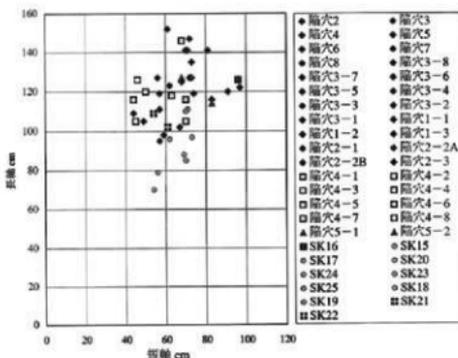
できた。それによると、掘込み面は

発掘限界面上位に存在する漸移層

であり、そこからの深さは75cmであ

る。底面のピットには遺茂木に由来

すると考えられる褐色土と、遺茂木



第5図 陥穴状土坑の長短比

を固定したとみられる黄褐色土の堆積が認められた。

#### 陥穴状土坑4群（'87-SK21・22）（図版12）

1987・88年度調査区のSTA471とSTA472の中間付近で検出された。陥穴状土坑3a群の南約10mのところらに'87-SK21と'87-SK22が東西に並ぶ。

個々の陥穴状土坑は隅丸長方形で、長軸100cm、短軸50cm、深さ100cm程である。'87-SK21は底面に1基のピットをもつ。

#### 陥穴状土坑5群（'91-陥穴5-1～3）（図版12・13）

1991年度調査区の17C・18Dで検出された。等高線にほぼ直交する形で3基が並ぶ。間隔は3.5m、6.5mと一定ではない。個々の陥穴状土坑は隅丸長方形で、長軸120cm、短軸70cm、深さ90cm程である。底面に1基のピットをもつ。

配列や個々の形態からみて、陥穴状土坑4群と連続する可能性もある。

#### b. 炭窯（図版8・9・22～28・100～115）

炭窯は46基検出されたが、1か所で数回の作り替えを行っているものもあるので、正確な形態を把握するのが困難なものもあった。所属時期は、覆土に平安時代に噴出したとされる焼山起源の灰白色火山灰(KG-c〔早津1994〕)が含まれているものがあつたことから、平安時代と考えておきたい。

炭窯の平面形は共通して長方形を呈する。大きさは、長軸が300～700cmとばらつきがあるが、短軸は150～200cmほどの範囲にまとまる。短辺に半円形の突出部をもつ。この突出部は煙道や焚き口の痕跡と推定される。このほかの特徴として、底部に溝のあるものが多く、この溝の形状で分類することができる。

A類：溝がない。

B類：中央を長軸に並行して伸びる溝をもつ。

C類：壁に沿ってU字形に回る溝をもつ。

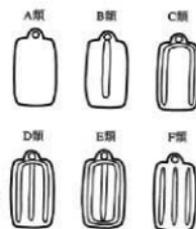
D類：壁に沿ってU字形に回る溝と、長軸に並行する溝をもつ。

E類：壁に沿って全周する溝と、長軸に並行する溝をもつ。

F類：長軸に並行する3条の溝をもつ。

G類：上記のいずれの分類にも当てはまらない。

なお、炭窯に残存していた炭の樹種同定と、<sup>14</sup>C年代の測定を行い、その結果を第IX章に掲載した。樹種同定では、すべての試料についてブナ属という結果が得られた。



第6図 炭窯分類図

次に、個々の炭窯の説明を行うが、位置・大きさ・分類などは一覧表を参照願いたい。

#### '87-1号炭窯（図版22・100）

東半分を失っているので全体の形態は不明である。

#### '87-2号炭窯（図版22・100）

北東辺を失っているが、南西辺に突出部をもつ。突出部近くの底部が直径70cmの皿状に窪むが、底部全

体では南西から北東にかけて緩やかに標高を下けている。

‘87-7号炭窯 (図版22・101)

両端に突出部をもつが、北側の突出部近くの底部に長軸約100cmの楕円形の窪みがあり、その周囲の底面が赤変している。被熱によるものと推定される。底部は南から北にかけて緩やかに標高を下けている。覆土の2層にKG-eが含まれている。

‘87-10号炭窯 (図版22・101)

南西に突出部をもつ。覆土の大部分を占める2層に炭が多く含まれる。

‘87-12号炭窯 (図版22・101・102)

両端に突出部をもち、その部分の底部に直径約60cmの皿状の窪みがある。底面は全体に南から北にかけて緩やかに標高を下げる。

‘87-11号炭窯 (図版22・102)

両端に突出部をもつ。北側の突出部は上位から掘込まれたピットによって攪乱を受けているため詳細は不明であるが、南側の突出部近くの底面には深さ約10cmの楕円形の窪みがある。底面はほぼ水平で、3基のピットがある。西側の溝にかかるピットは深さ約30cm、残り2基のピットは深さ約10cmである。覆土は最上位の1層にKG-eが含まれているのが確認されている。

‘87-3号炭窯 (図版22・102)

両端に突出部をもつが、南側のほうが大きく張り出し、近くの底部に浅い窪みをもつ。底面はほぼ水平である。

‘87-4号炭窯 (図版23・103)

南西端に突出部をもち、そこから北東に向かい、底面が緩やかに標高を下げる。

‘87-8号炭窯 (図版23・102)

北側の壁面を検出することができなかったため全体の形態は不明だが、残存する南側に突出部をもつ。突出部近くの底面は浅い皿状に窪んでいる。残存する底面はほぼ水平である。覆土から縄文土器片1点が出土した。

‘87-5号炭窯 (図版23・102・103)

両端に突出部をもつが、南側のほうがやや大きく張り出し、近くの底面が皿状に窪む。底面は南から北にかけてわずかに標高が高くなっている。

## \*87-6号炭窯 (図版23・103)

北西側に突出部をもつ。南東側は突出部はないものの、壁際に約60cmの皿状の窪みがある。底面は南東から北西にかけてわずかに標高が高くなる。底面は中央の溝を含んだ範囲が赤変している。被熱によるものと推定される。

## \*87-13号炭窯 (図版23・104)

突出部はないが、両端に直径約40cmのごく浅い窪みがある。底面はほぼ水平で、南東壁際沿いの溝にかかる深さ18cmのビットが1基存在する。覆土の2層にKG-cとみられる白色火山灰が多く混じる。

## \*87-14号炭窯 (図版23・104)

両端に突出部をもつが、南側のほうが大きく張り出す。南側突出部近くの底面は浅い皿状に窪んでいる。底面は南から北にかけてわずかに標高が高くなる。

## \*87-A~K号炭窯 (図版24・103)

10基の炭窯が重複して検出され、最も北に位置する炭窯から順にA号~J号と呼称した。ほかに、断面で確認されたK号がある。これらの重複する炭窯は、長軸方向がほぼ一致し、突出部が一線上に載ることから、比較的短い間に何度も繰り返して作られた結果、生じたものと推定される。

土層の堆積状況から、重複している炭窯が一方から順に作り替えられたのではなく、前後しながら作られていた様子が窺われる。重複する11基の炭窯が、先行する炭窯の掘り形をどの程度まで生かしていたのかは不明である。

覆土の2層には、KG-cとみられる白色火山灰を主体とする土が堆積している。

A号とB号の間で確認されたK号には炭が残存しており、木材の窯詰めの様子を知ることができた。

残存していた炭の大きさは、直径1cm、長さ20cm以下の材から直径10cm、長さ20~85cmの材まであり、多様である。材は基本的に炭窯の長軸に直交する方向に置かれているが、このとき、長くてまっすぐのものは中央に、短かかったり、曲がったりしているものは壁際に置かれている。曲がっているものは故意に短くして、置き易くしていたのかもしれない。

## \*91-3 E 炭窯 (図版25・104)

両端に突出部をもつが、南側のほうが大きく張り出す。南側突出部近くの底面は直径約50cmの皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平である。覆土の2層にKG-cが含まれている。

## \*91-4 B 炭窯 (図版25・104)

南側に突出部をもち、その近くの底面が直径約60cmの皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平である。覆土から縄文土器片1点が出土した。

## \*91-6 A 炭窯 (図版25・105)

両端に突出部をもつが、南東側のほうが大きく張り出す。底面はほぼ水平であるが、南東側の方がわずかに標高が低い。覆土の1層にKG-cが含まれる。

91-5 H 炭窯 (図版 25・105)

南側に突出部をもち、その近くの底面が直径約 60 cm の皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平である。覆土の 2 層に KG-c が含まれている。

91-7 F 炭窯 (図版 25・106)

南西側に突出部をもち、その近くの底面が直径約 90 cm の皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平である。

91-7 A 炭窯 (図版 25・106)

両端に突出部をもつが、南側のほうが大きく張り出す。南側突出部近くの底面は長軸約 100 cm、短軸約 60 cm の楕円形の皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平である。

91-8 F 炭窯 (図版 26・107)

両端に突出部をもつ。南東側の突出部は長さ約 120 cm、幅約 70 cm の長方形で、断面形は底面から緩やかに立ち上がる形をしている。底面はほぼ水平であるが、四隅に深さ 3~7 cm のピットがある。覆土の 2 層に KG-c が含まれる。

91-9 G 炭窯 (図版 26・107・108)

北側が擾乱を受けているため、全体の形態は不明である。残存する南側に突出部があり、その近くの底面に直径約 40 cm の皿状の窪みがある。底面はほぼ水平である。覆土の 1 層に KG-c が含まれる。

91-9 C 炭窯 (図版 26・108)

南半分を失っているため、全体の形態は不明である。残存する北側には突出部があり、その直下が、やや窪んでいる。

91-10 E 炭窯 (図版 26・108)

北東隅が擾乱を受けているため、全体の形態は不明である。残存する南西側には突出部があり、近くの底面は窪んでいる。底面はほぼ水平で、北西隅に深さ 5 cm のピットがある。

91-10 B 炭窯 (図版 26・109)

両端に突出部をもつが南東側のほうが大きく張り出す。南東側の突出部近くの底面は直径約 60 cm の皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平であるが、北側のほうがわずかに標高が低い。底面の四隅には 2~3 cm のピットがある。覆土の 1 層に KG-c が含まれている。

91-11・12 G 炭窯 (図版 26・109・110)

突出部はないが、南側の底面に直径約 50 cm の皿状の窪みがある。底面はほぼ水平であるが、北側のほうがわずかに標高が高い。覆土の 1 層に KG-c が含まれている。

## '91-12 E 炭窯 (図版 27・110)

西側が攪乱を受けているため全体の形態は不明である。残存部は突出部のない長方形で、'91-11・12 G 炭窯にあるような底面の窪みもない。底面は南から北へ向けて標高を下げている。

## '91-12 F 炭窯 (図版 27・110)

南側に突出部をもつ。突出部近くの底面は直径約100cmの浅い皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平で、四隅に深さ2~3cmのピットがある。突出部近くの窪みの中と、底面の中央には炭が残されており、長軸に対して直交する方向に材が並べられていた様子を窺うことができる。炭の大きさは、長さ20~40cm、直径7cmほどであった。

## '91-15 C 炭窯 (図版 27・110・111)

両端に突出部をもつが、南西側のほうが大きく張り出す。南西側の突出部近くの底面は直径約40cmの浅い皿状に窪んでいる。底面はほぼ水平で、四隅と長軸の中間に一对のピットをもつ。ピットの深さは約1cmである。覆土の2層にKG-cが含まれている。

## '91-16 A 炭窯 (図版 27・111)

両端に突出部をもつが南側のほうが大きく張り出す。南側の突出部近くの底面は浅く窪んでおり、底面はそこから緩やかに標高を上げている。覆土の2層にKG-cが含まれている。

## '91-17 B 炭窯 (図版 27・111・112)

南側に突出部をもち、底面は北に向けてわずかに標高を下げている。底面中央を道路状遺構1が横断している。炭窯の覆土に掘込みを認めることができなかったので、道路状遺構1の埋没後、炭窯が構築されたと考えられる。

## '91-17 C 炭窯 (図版 27・112)

両端に突出部をもつが、北側のほうが大きく張り出す。南側の突出部の近くの底面には直径約40cmの皿状の窪みがある。底面はほぼ水平である。覆土の2層にKG-cが含まれている。底面から縄文土器片1点が出土した。

## '91-18 B 炭窯 (図版 28・113)

両端に突出部をもつ。南側の突出部近くの底面には、直径60cmほどの皿状の窪みがある。覆土の1層にKG-cが含まれている。

## '91-19 A 炭窯 (図版 28・113)

南側が攪乱を受けているので全体の形態は不明である。残存する底面には3状の溝があり、中央の溝の南端は半円形に膨らんでいる。突出部近くの底面にある窪みに由来するものかもしれない。覆土の2層にKG-cが含まれている。覆土から土師器小片が出土した。

91-19 C 炭窯 (図版 28・112)

両端に突出部をもつが、南側のほうがやや大きく張り出している。

c. 土坑 (図版 28・29・113～115)

87-S K 16 (図版 20・98・100)

STA470の西側で検出された。北側に87-2号炭窯が隣接する。長軸約120cm、短軸約100cmの楕円形を呈し、掘り形は深さ約50cmの皿形をしている。形態から貯蔵穴の可能性が考えられる。立地からみて、陥穴状土坑3群に含まれるとも考えられるが、掘り形が特異であるので、陥穴状土坑の可能性は低いと思われる。ただし、覆土は陥穴状土坑と大差ない。

91-4 B 焼土土坑 (図版 28・113)

4 B 21に位置する。直径約40cmの皿状の土坑である。覆土の2層は地山の土とよく似ているので、この部分については掘りすぎている可能性がある。なお、周辺にこれと関連するような遺構は検出されていない。

91-14 A 土坑 (図版 28)

14 A 5・10に位置する。平面形は隅丸長方形で、長軸約120cmを測る。掘り形は深さ約180cmの円筒形である。発掘時の所見では井戸の可能性があるとされている。

91-15 C 土坑 (図版 28・113)

15 C 23に位置する。直径約100cmの円形の土坑である。

91-18 B 土坑 (図版 28・113)

18 B 7に位置する。西側に91-18 B 炭窯が隣接している。直径約100cm、深さ約80cmの円筒形の土坑で、底面にピットが2基存在する。91-18 B 炭窯と関連のあるものなのかは不明である。

91-4 B 土坑 (図版 28・113)

91-4 B 炭窯の西側130cmのところと位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約190cmを測る。覆土の1層にKG-cが含まれる。

91-6 A 土坑 (図版 28・113)

91-6 A 炭窯の南西160cmのところと位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約200cmを測る。覆土の1層にKG-cが含まれる。

91-8 E 土坑 (図版 29・114)

91-8 F 炭窯の南西260cmのところと位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約280cmを測る。

## 91-12 F 土坑 (図版 29・114)

91-12 F 炭窯の北 60 cm のところに位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約 300 cm を測る。覆土の 2 層に KG-c が含まれる。

## 91-11 G 土坑 (図版 29)

91-11・12 G 炭窯の西 110 cm のところに位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約 290 cm を測る。覆土は 12 G 土坑と同質である。

## 91-12 G 土坑 (図版 29・114)

91-11・12 G 炭窯の東 160 cm のところに位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸約 190 cm を測る。覆土は 11 G 土坑と同質である。

## 91-11・12 G 土坑 (図版 29)

91-11・12 G 炭窯の南 160 cm のところに位置する。南半分は調査範囲外のため発掘していないが、楕円形の皿状の土坑であると推定される。基本層序の II 層を掘込んでおり、最上部の覆土 (3 層) に KG-c が含まれている。

## 91-19 C 土坑 (図版 29・115)

91-19 C 炭窯の北西 110 cm のところに位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸約 340 cm を測る。覆土の 2 層に KG-c が含まれる。

## d. 道路状遺構 (図版 8～14・115)

長さ 1.2～3m、幅 50 cm、深さ 10 cm 程の長円形もしくは溝状の落ち込みが波板状に近接しながら連なっている範囲を道路状遺構とした。波板状の痕跡については、ひとつには物資運搬のコロに伴う枕木の痕という解釈 [早川 1991] がある。このほか、7 世紀第 3 四半期の構造年代が与えられる埼玉県東の上遺跡の道路状遺構では、上層の舗装部材の安定を図るためのもの、凹凸面の構築で表面積を増大させ、雨水の地下浸透を円滑にするためのもの [銀田 1994] などの解釈がなされている。

郷清水遺跡で検出された道路状遺構は、調査区南側を南西-北東方向に走る。1987 年度の調査区と 1991 年度の調査区で別個の番号が付けられていたが、整理時に 3 条に大別した。

## 道路状遺構 1 (図版 11～13・115・116)

1987 年度調査区の STA473 の西側付近から 1991 年度調査区 16 A・17 A・16 B・13 C・12 F にかけて、波板状の痕跡が断続的に検出された。

## 道路状遺構 2 (図版 12・14・115)

1987 年度調査区の STA475 の西側付近で、遺状遺構 1 と同様の波板状の痕跡と、その下に重複して深さ約 10 cm の溝が検出された。19 A・17 C の 2 か所で炭窯に切られる。遺状遺構 2 は上新バイパス建設直前まで使われていた小道に位置が重なる (第 8 図)。

## 2. 遺跡

### 道路状遺構 3 (図版 11～13)

1991年度調査区の16C～19Aにかけて検出された。道路状遺構1・2のような波板状の痕跡はなく、幅50～130cm、深さ2～3cmの浅い落ち込みが連続する。16Cで二股に分かれて一方は18Aへと至る。16C～19Aの方は、道路状遺構2と同様に現代の小道に位置が重なる。

### e. 溝状遺構 (図版 12～14・116)

溝状遺構は道路状遺構に並行して2条検出された。両者の間隔は15～18mである。個々の溝状遺構は幅約40cm、深さ約10cmで、底面に深さ10～20cmのピットがおよそ50cmおきに連続する。

埼玉県東の上遺跡の道路状遺構では、波板状の痕跡を挟み、12mの間隔を保って側溝が掘られている。この側溝の底面には0.3～1mの深さのピットが連続して掘られている。このピットは雨水などを帯水させることで急流が生じることを防ぎ、浸食崩壊を未然に食い止める役目を果たしていたと考えられている[飯田1994]。

郷清水遺跡の溝状遺構もこれに類似しているので、道路状遺構に関連する側溝であると考えておきたい。

### 溝状遺構 1 (図版 12・13・116)

91-17B炭窯が上部に構築されているので、これより古い時期に埋没したと推定される。

### 溝状遺構 2 (図版 12・13)

南側に接する18C18において、小範囲の硬化した黒色土が存在し、その中から土師器の細片がまとまって出土した。胎土や口縁端部の作りから、古墳時代の遺物であると考えられるが、詳細な時期は不明である。

## C. 遺物

### (1) 概要

遺物は縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器などが深箱に3箱出土した。遺構から出土したものは少量で、多くは包含層からの出土である。際だった遺物集中地点は形成されていないが、縄文土器は調査範囲北側に、古墳時代の遺物は南側に多く分布していた。

### (2) 縄文時代の土器 (図版 30・117-1～7)

土器は早期から晩期のものがある。

早期には押型文土器があるが、細片のため図化できなかった。

1は前期の土器とみられる。同一原体の回転方向を変えて、羽状縄文を施文している。

2はLRの地文に沈線で区画される、後期中葉加曾利B式併行の土器である。

3は口縁に貼り付けられた隆帯上に沈線が引かれている。沈線が途切れる部分は突起状に盛り上がっている。隆帯の上下には沈線が強く引かれ、隆帯がよりはっきり見える。

4は口縁が屈曲して外反する。屈曲部の列点を挟み、上下に縄文帯が平行する。内面の口縁には1条の沈線がめぐる。5は口縁の縄文帯の下に平行沈線が引かれ、その間に列点が刺突されている。口縁内面には1条の沈線がめぐる。4・5は晩期中屋式に併行する土器であろう。

6・7は胎土・原体ともよく似ているので、同一個体の可能性がある。6は口縁端部に丸棒状工具の側面が押し付けられ、弧状に窪んでいる。口縁外面には幅広い沈線がめぐる。7は長さ約4cmの縄の側面圧痕が2か所にみられる。両端はループ状になっているようである。撻りは1段左撻りである。

### (3) 縄文時代の石器 (図版30・31・117・118-1~18) (第V章2.C.(3)a.参照)

石器の多くは磨石類であり、剥片石器はほとんど出土しなかった。

1は'87-13号炭窟の覆土から出土した、両極石器である。2対の極をもつ。2も両極石器であるが、比較的大きめの剥離痕をもつので、石核の可能性もある。

3は打製石斧で両側面の表裏に剥離を行い、左右対称になるように整えられている。とくに素材とした剥片の腹面右側が左側に比べ厚いので、その部分の厚みを減らすための剥離が集中して行われている。刃部は主に表面への剥離で作りに出されている。

4~12は磨石類である。4~7はA類、8はB類、12はC類、10はD類、9・11はE類に分類される。13~15は特殊磨石である。

16・18は台石である。16の撻り痕は弱く、表面は赤変している。18は中央に円形の窪みがある。

17は砥石で、両面に砥面がある。

### (4) 古墳時代の遺物 (図版31・118-1~9)

古墳時代の土師器は古墳時代前期に属するものと考えられる。漆町福年[田嶋1986]では8群あたりに相当しよう。

1は高杯で、円柱状の脚部を、杯部のソケット状に作り出された部分にはめ込んでいる様子がよくわかる。

2・3は小甕で、内湾気味の口縁部が短く立ち上がる。体部内面は荒いケズリで整えられている。

4・7は外反する口縁部内外面に横方向のハケ目が残る。4の体部内面上方は横方向のハケ目、それより下はケズリで整えられている。

5・6は小甕の底部で、内外面ともハケ目が残る。6は底部外面に、円盤状の粘土をはめ込んだ接合痕が明瞭に残されている。

8は小甕で、球状の胴部から口縁が直立気味に立ち上がる。内外面がよく磨かれている。

9は四角柱の砥石で、平行する筋状の痕跡が多数残されている。筋は鋭い金属などのようなもので付けられたと推定される。

### 3. まとめ

#### A. 遺構

##### (1) 陥穴状土坑

###### a. 構築時期

検出面のローム層は矢代川岩屑なだれ堆積物に対比される。矢代川岩屑なだれ堆積物の<sup>14</sup>C年代は17,900 ± 450y.B.P.(Gak-457)、20,200 ± 800y.B.P.(Gak-456)が得られているので [早津1985]、これより新しいことは確実である。しかし、陥穴状土坑の上位に時期を限定できるような堆積物がないので、下限はほかの遺跡の陥穴状土坑との形態の比較で考えたい。

郷清水遺跡の陥穴状土坑は平面形が楕円形あるいは隅丸長方形で掘り形は箱形を呈する。底部にはピットをもつ。これと類似のものに、湯沢町岩原 I 遺跡の陥穴状土坑D類がある。D類の構築時期は早期後半から中期前葉に位置付けられている [佐藤1990]。郷清水遺跡では前期と後期～晩期の縄文土器が出土しているが、後期～晩期の陥穴状土坑は一般に狭長化する傾向がみられるので、検出された陥穴状土坑は前期に属すると考えておきたい。

これまで、妙高山麓の縄文時代の遺跡において、多くの陥穴状土坑が調査されてきており、それらの事例の蓄積により、時期による形態変化を追うことが可能となってきた。

早期前葉から前期中葉までの間に、大堀遺跡 [立木(土橋)1996] のような漏斗形から、中ノ沢遺跡 [立木(土橋)1997] のⅡ類円錐形、Ⅰ類箱形へ推移していくことがわかっている。底部ピットも漏斗形から円錐形へと変化するなかで生じているようである。今回郷清水遺跡で検出された陥穴状土坑は前期の所産と思われるが、前期のなかでの詳細な位置付けは難しい。

###### b. 立地

郷清水遺跡では5群の陥穴状土坑が検出された。淡江川の対岸の西福田新田遺跡でも類似する形態の陥穴状土坑が検出されている。所属時期はやはり前期と推定される。この2遺跡について陥穴状土坑群の立地をみると、川と尾根状の地形をうまく生かしていることがわかる。

妙高山麓の縄文時代の陥穴状土坑は、大堀遺跡や中ノ沢遺跡にみるように、川沿いの斜面地、とくに川へと下る崖縁に好んで配列されている。時期に関わらず勢いよく流した配列があったようである。

##### (2) 炭窯

郷清水遺跡の炭窯は形態がほぼ一定であること、二次堆積と推定されるが、灰白色火山灰(KG-c)に覆われるものが多く存在したことから、構築時期に大きな時期幅はないと推定される。KG-cは平安時代(10世紀後半ないしその直前)の噴出物である [早津1994]。二次堆積とはいえ、多くの炭窯の覆土にKG-cがみられたことは、これらの炭窯がその噴出時期とそう離れていない時期に構築されたことを示している。ここから、検出された炭窯の構築時期を平安時代に位置付けておきたい。

検出された炭窯は、形態から伏窯であると考えられる。伏窯は、炭材を置いた上に、細い木、木業など

を載せ、さらに土を被せ、焚き口を密閉して焼くというものである [遠藤 1995]。炭窯の脇に土坑を伴う例が7基あったが、これらの土坑は炭窯を覆う土が掘り出されたためにできたと考えられており [小池 1998]、郷清水遺跡の炭窯が伏窯である可能性を補強するものである。

郷清水遺跡の炭窯の多くは、長軸が南北方向か、北東-南西方向を向く。そして、突出部は南側に位置する。両端にあるものは、より大きい方か、底面に皿状の窪みを伴う方が南に位置することが多い。これは、南西方向から北東方向に向かって緩やかに標高を下げるという遺跡の地形に制約されて、煙道と焚き口が決定されていたことを示しているであろう。基本的には、焚き口を北側、煙道を南側に設定したものと推定される。

ところで、炭窯を構築する際には、地形もさることながら、その土地の風向も考慮される。日本では、冬は北西の季節風、夏は南よりの風が多く、春や秋は決まった風向きをもたないのが一般的である。これに対して、郷清水遺跡の所在する中郷村は、妙高山麓の山裾にあるため四季を通して南北方向の風が多く、特に南から吹く風は「妙高おろし」と呼ばれている [細谷 1978]。このような環境を踏まえると、郷清水遺跡の炭窯の多くが南北方向にあわせて構築されていたのは、風向きも考慮された結果であるということが想像される。

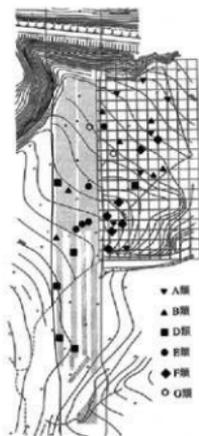
郷清水遺跡の炭窯をもう少し細かくみると、底面の溝の形状による分類群ごとに、立地が分かれていることに気付く。A類とF類は調査範囲東側に、D類・E類は西側にまとまる。とくにE類はSTA472付近にまとまっている。

底面の溝はこれまで排水溝の名で表現されることがあったが、前掲書等 [遠藤 1995] [杉浦 1992] には、竈詰めする際、壁際に沿って設置された丸木を台として、木材を橋渡しするように並べている様子が描かれているので、これらの溝は台とされていた丸木の痕跡とも考えられる。形状に多少の違いがあっても機能的には問題がないものと仮定すれば、形状の違いは炭窯を構築した個人あるいは集団の癖と捉えられるのではなかろうか。

郷清水遺跡と同様の炭窯は、妙高高原町関川谷内遺跡 [小池 1998]、中郷村上滝ノ沢遺跡・上中島遺跡・窪畑B遺跡 (本報告書 第V・VI・VII章参照) など、妙高山麓一帯で検出されている。新潟県内の炭窯は渡辺氏によって集成されている [渡辺 1998]、郷清水遺跡などのような形態の炭窯は北陸地方の炭窯の形態に近いようである。富山県立野ヶ原遺跡 [富山県教委 1977]、立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群 [立山町教委 1988] などに類似があるが、後者は中・近世以降の所産と推定されている。今回検出された炭窯は平安時代の所産と推定されるが、この形態の炭窯の初源を考えるための手掛かりを提供することになろう。

### (3) 道路状遺構の構築時期

郷清水遺跡の道路状遺構と溝状遺構は、現在まで利用されていた小道とほぼ重なることから、遺構構築時から現在まで、断続的に道としての機能を果たしていたと思われる。検出された道路状遺構・溝状遺構がいつごろ構築されたのかは定かではないが、平安時代の炭窯に切られていたことから、それより古いことは確実である。また、炭窯が道路状遺構と無関係な分布を示すことから、炭窯構築時には完全に埋設し



第7図 炭窯の分布

ていたと推定される。上限については、周辺に古墳時代前期の土器片の分布がみられたので、そのあたりに置かれる可能性がある。

郷清水遺跡と類似の構造をもつ東の上遺跡の道路状遺構は7世紀第3四半期に構築されたものであり、道路状遺構は幅12mの律令国家の官道の規格に基づくものであった。これに遡る古墳時代の道路状遺構の例は奈良県鴨神遺跡にある。5世紀後半には整備されたと考えられているもので、幅2.5m～3.3mの道路状遺構が、地形や地盤の状況により異なる方法を用いて構築されていた。そこでも郷清水遺跡のような波板状の痕跡が検出されている〔近江1994〕。

郷清水遺跡の遺状遺構は幅が一定ではなく、構造も場所によって異なる。これは鴨神遺跡にみるような古墳時代の道路状遺構のあり方により近いものであるといえる。炭窯との切り合い関係や周辺の遺物出土状況を考え合わせた場合、郷清水遺跡の道路状遺構の構築時期が古墳時代に遡る可能性は十分ありうる。

## B. 遺物

遺物は縄文時代の土器・石器、古墳時代の土器などが出土したが、ごく少量であった。

縄文土器は前期中葉かと思われる1、後期中葉と思われる2のほかは、晩期に属する。晩期の資料は、いずれも中葉までに収まると推定される。

古墳時代の土器は、前期に属すると考えられる。多くは調査範囲南側から出土したが、住居跡に伴うような出土状況ではない。



第8図 道路状遺構と現在の道路の関係

(右図:中郷村役場発行「中郷村全図2」1:10,000原図 平成2年)

## 第V章 上中島遺跡

### 1. 調査の概要

#### A. 調査の方法と経過 (図版32)

上中島遺跡は妙高山北東山麓の、西から東へ伸びる舌状の緩斜面上に位置する。遺跡の北側と南側には小河川が流れている。

調査はまず、平成元年5月9日、上中島遺跡の北側に隣接する八斗葎原遺跡から着手した。八斗葎原遺跡は12,000㎡を対象に、2m幅のトレンチを18本設定して調査したが、遺構は近世以降の溝が1本検出され、遺物は縄文土器が9点(うち1点は押型文土器)出土したにすぎなかったため二次調査へは移行せず、6月8日に調査を終了した。この八斗葎原遺跡の調査中、5月18日に、遺跡西側に設置されていたカルバートボックスから西へ100mほどの地点で、縄文土器が採集された。その場所は本来の調査対象範囲から外れていたが、調査する必要があると判断された。そこで、5月23日に文化行政課に事情を説明し、建設省と協議を行う準備を始めた。24日には建設省と支障物件などについての打ち合わせを行った。5月30日に建設省と協議をもち、カルバートボックスの西側約7,000㎡について、新たに面的調査に入ることが決定した。後日、この場所が法線外に存在する上中島遺跡の延長部にあたるということが明らかとなったため、遺跡名は「上中島遺跡」と呼称することに決定した。

上中島遺跡は5月24日からトレンチを設定し、基盤層の地形や遺構・遺物の分布状況の概況を把握した。6月3日にはトレンチ調査の結果をもとに、建設省と今後の予定について協議がもたれた。その席で、調査を要する範囲が沢に狭まれた約6,500㎡であることを改めて確認した。

6月6日から重機を用いた表土除去と作業員による精査を開始した。用水近くは攪乱されているものの、ほかは包含層が比較的良く残されていることがわかった。また、焼土も検出され始めた。9日には、測量業者によりグリッド杭が打設された。6月29日にベルトコンベアーを導入し、7月3日からは作業員も増員し、本格的な作業が始まった。

調査は北から南へと展開しながら、包含層発掘・遺構精査・記録作成を行った。7月5日には早津賢二氏が来跡し、遺跡の土層について説明を受けた。

7月下旬に9DでS I 11が検出され、続いてその南側で土器捨て場が検出された。8月4日には14号炭窯が検出され、複数時期の遺構が存在することが確認された。8月25日に7Gで、S I 25・S I 26の焼土が検出された。H列より南側は遺構密度が低かったため、調査は順調に南へと展開し、9月20日までに発掘した。この日までに記録類の作成もほぼ終了した。同日、ベルトコンベアーを撤去し、26日に遺跡全体写真を撮影した。29日まで残務整理を行い、調査を終了した。

なお、調査中の啓発活動として、8月3日、中郷村教育委員会主催の小学生を対象とした発掘教室が開かれた。

## B. グリッドの設定 (図版33)

グリッドは国家座標に基づいて、STA527を通る $Y=-24440$ のラインを軸に設定した。大グリッドは10m四方とし、その中を2m四方に分割して小グリッドとした。大グリッドの呼称は、南北方向に北から南へアルファベット、東西方向に西から東へ算用数字を付し、その組み合わせで「1A」などとした。小グリッドは北西係位で1～25までの番号を付し、大グリッドの後に「1A25」のように表示した。

グリッド枕の国家座標値は、5A ( $X=108200, Y=-24440$ )、5K ( $X=108100, Y=-24440$ ) である。

## 2. 遺跡

### A. 基本層序 (図版34)

基本層序は以下の通りである。

I層：暗褐色土。現表土で、耕作に使われており、木の根を多く含む。

II層：褐色火山灰質土。大田切川火砕流に伴う火山灰を主とする。

III層：黒褐色腐植土。

IV層：褐色火山灰質土。赤倉火砕流に伴う火山灰を主とする。

V層：暗褐色腐植土。

VI層：暗黄褐色土。V層とVI層の土壌が混じる、漸移層。

VII層：黄褐色土。矢代川岩屑なだれ堆積物であり、遺跡周辺では3m以上の層厚をもつという。この上面を発掘限界面とした。

上記のほか、I層とII層の間に灰白色火山灰層が存在する。発掘調査時に焼山起源の噴出物と推定された火山灰で、現在細分されている焼山起源の火山灰のうち、KG-cに比定されるものであろう。遺構覆土にみられる灰白色火山灰は、この火山灰に該当すると考えられる。

I層～III層まではあまりしまりがなく、IV層以下はしまりがある。また、IV層以下は下位の土層へいくにしたがって、スコリアなどの礫が混じる割合が高くなる。

遺物包含層はI層からVI層までである。I・II層が縄文時代後期・晩期、III・IV層が縄文時代前期・中期、V・VI層が縄文時代早期の遺物を包含する。遺構検出は基本的にVII層上面において行った。

### B. 遺構

#### (1) 概要 (図版33)

遺構検出面のVII層上面の地形は、南西から北東に向けてなだらかに下る斜面で、標高はおおよそ236～240mである。南東側は深さ約1mの沢地となっている。このほか、7Eから9Dにかけて旧沢地とみられる深さ10cmほどの浅い落ち込みが確認された。また、風倒木痕が多く検出されたが、遺構と切り合い関係が認められるものうち、遺構より新しいものはごく少数であった。なお、調査対象地北側は近年の水田造成の際にVII層上部まで削平を受けており、本来のVII層上面は残っていないかった。

遺構には住居跡4基、土坑17基、炭窯4基、溝1条、捨て場1か所などがある。住居跡は縄文時代後期

～晩期に属すると考えられる。土坑のうち、焼土の入った1基は覆土から押型土器が出土しており、早期の所産と推定される。遺構覆土は黒色土が主体であったため、黒色がかつたⅥ層以上の面で検出することは困難であった。そのため遺構検出はⅥ層上面で行った。よって、検出された遺構は、上部が失われている可能性が高い。なお、個別記載のなかで、特に断わりがなければ検出面はⅥ層上面である。

## (2) 各 説 (図版35～47・119～126)

### a. 住居跡 (図版41・42・119～121)

#### S I 11 (図版41・120・121)

9 D 18・23に位置する。南東側を用水掘削により破壊されているため、全容は不明であるが、残存部分から楕円形の堅穴住居であることがわかる。残存部の大きさは長軸約4m、短軸約2.3mである。左右対称の楕円形であるとすれば本来の短軸は3m前後であったと推定される。中央には炉石とみられる被熱した安山岩の角礫が、弧状に配されて2個存在した。ほかの炉石と焼土は遺構検出時に入れたトレンチによって破壊された可能性がある。床面は地形に沿って西から東へやや傾いており、10cmほどの比高差がある。中央の炉石周辺には貼床が残っていた。貼床の土は暗褐色土と黄褐色土の混じったものである。壁は西辺から南辺にかけて、検出面からの深さ4cm程のものが残っていたが、本来の壁はもう少し深かったと考えられる。セクションでⅥ層を挿入しているのが確認されているが、そこから床面までの深さは約25cmである。柱穴は4基で、いずれも根固め石をもつ。直径は10cm前後で、深さは西側2基が約50cm、東側2基が約35cmである。

覆土は2層に分層され、下位に黒褐色土、上位に暗褐色土が堆積している。

遺物は覆土に含まれており、床面に接しているものはない。このことから、遺物はS I 11廃絶後に廃棄されたものと考えられる。そのため、S I 11の所属時期を厳密に限定することは難しい。しかし、覆土から出土した遺物の時期が晩期初頭から前葉までに限定されること、周辺の包含層出土遺物もほぼ同時期に限定されることなどから、S I 11も晩期初頭から前葉に属すると考えたい。

#### S I 10 (図版42・119)

8 C 20・25に位置する。当初、Ⅵ層で焼土のみ検出された。その後Ⅵ層上面で柱穴とみられるピットも検出されたため、先に検出されていた焼土検出部分を伊とする住居跡と仮定した。ピットは1.2～2mの間をおいて検出されたが、配列は不明である。床面は検出されなかったが、焼土が検出された高さ存在したと推定される。

焼土は、不整楕円形の皿状の土坑中に黒色土とともにブロック状に堆積していた。土坑底面に被熱した様子はみられず、この場所で火が使用されたのかという点に関しては確証が得られない。

S I 10は住居跡と仮定したものの、柱穴の配列が明確につかめないこと、伊がその場所で機能していたかどうか確証が得られないこと、掘形が不明である点、などから断定は難しい。仮に住居跡とした場合、所属時期は周囲の包含層の出土遺物から、晩期に属する可能性が高い。

#### S I 25 (図版42・119)

7 G 17を中心とする6m四方にひろがる。西側が風倒木痕を切っている。北西にはS I 26が隣接する

が、新旧関係は不明である。なお、出土遺物は S I 25・S I 26 出土のものを含わせて掲載した(図版 51・52-47~82)。

S I 25 ははじめに中央の焼土が検出された。焼土は不整楕円形の浅い土坑に入っていたが、純粋なブロックは検出面から数cmの深さまでしか存在せず、多くは黒褐色土に斑状に混じる状態であった。焼土の周囲を掘り下げていくと、Ⅶ層上面で2個1対のピット5組が焼土を取り巻くように検出された。そのため、柱穴に囲まれた範囲を住居跡とし、先に検出されていた焼土の入った土坑を炉跡とすることにした。ただ、住居跡とした範囲の広さと比較して、炉跡がやや大きい感がある。炉跡とした土坑の長軸は約1.5m、柱穴の間隔は、最も広い西端と東端の間で約6mである。

#### S I 26 (図版 42・119)

7 G 6 を中心とする3m四方に広がる。西側が風倒木痕を切っている。南東には S I 25 が隣接するが、新旧関係は不明である。

S I 26 も S I 25 と同様、はじめ焼土が検出された。焼土の残存状況は S I 25 とほぼ同様であったが、純粋な焼土の残りは薄く、少ない。焼土の周囲を掘り下げていくと、焼土の東側の黒色土中で、30cm四方の淡黄褐色土が検出された。淡黄褐色土の中央には円形に黒色土が入っているのが認められた。半載してⅦ層まで下げると、淡黄褐色土は根固め土であり、中央の黒色土部分は直径約25cmの柱跡であることがわかった。焼土周辺では、根固め土は残存しないものの、このほかにも同規模のピットが検出されており、S I 26 の柱穴と推定される。ただし、配列などは明らかにすることはできなかった。

#### b. 土坑 (図版 43~45・121~123)

##### S F P 1 (図版 43・121)

7 B 16・17 に位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸116cm、短軸58cm、深さ26cmを測る。上部は水田造成により削平されている。壁面の土や礫は被熱により赤化している。覆土は炭化物・焼土・暗褐色土の混合したものである。堅緻で、しまりがあり、ほかの遺構覆土とは様相が異なる。覆土(2層)からの出土遺物に早期の押型文土器(図版 52-83)があるが、後世の流れ込みとは考え難い。よって、この遺構は早期に属すると推定される。

##### S K 13 (図版 43・121)

9 C 16 に位置する。南西に S I 10 が隣接するが、S I 10 の床面とした高さより低いところで検出されていることから、S I 10 より古い遺構と考えられる。不整形の皿状の土坑で、直径約90cm、深さ約15cmを測る。20~40cmの角礫数点が入っていたが、礫の多くは土坑底面に接しておらず、間にしまりの無い黒色土が入っていた。遺物は出土していない。

##### S K 9 (図版 43・121)

8 D 3 に位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸110cm、短軸85cm、深さ20cmを測る。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

## S K 8 (図版43・122)

8 C 11に位置する。東側を風倒木痕に切られているが、楕円形の皿状の土坑で、長軸110cm、短軸90cm、深さ15cmを測る。底面は小さな凹凸があるが、ほぼ平坦で、壁は急角度で立ち上がる。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

## S K 7 (図版43・122)

4 D 10に位置する。上部に擾乱を受けているが、不整楕円形の土坑で、長軸120cm、短軸76cm、深さ35cmを測る。底面は凹凸が激しく、横断面形は「W」形を呈する。覆土は堅緻で、しまりがあり、ほかの遺構とは区別される。この点ではS F P 1に類似する。ただし、被熱した形跡は認められなかった。遺物は、無文の土器片が出土した。

## S K 18 (図版43)

4 E 5に位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸210cm、短軸110cm、深さ44cmを測る。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

## S K 3 (図版43・122)

2 F 9・10・14・15に位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸250cm、短軸164cm、深さ35cmを測る。底面はほぼ平らであるが、小さな凹凸がある。覆土は基本的に暗褐色土の単層であるが、色調に若干の差が認められる。全体に炭化物の小粒がまばらに混じる。遺物は出土していない。

## S K 16 (図版43・122)

4 F 23、4 G 3に位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸250cm、短軸160cm、深さ30cmを測る。底面は凹凸が激しく、場所によっては直径40cmほどのビット状になっているところもある。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

## S K 17 (図版44・122)

4 F 24・25、4 G 4・5に位置する。不整形の土坑で長軸190cm、短軸110cmを測る。深さは北東側が深く40cm、南西側が浅く20cmである。覆土は暗褐色土と黒褐色土が混じる単層である。遺物は出土していない。

## S K 19 (図版44・122)

5 F 18に位置する。不整形の皿状の土坑で、直径160cm、深さ35cmを測る。覆土は暗褐色土と黒褐色土が混じる単層である。遺物は出土していない。

## S K 20 (図版44・122)

5 F 19に位置する。不整楕円形の皿状の土坑で、長軸130cm、短軸75cm、深さ25cmを測る。壁の立ち上がりは比較的急角度である。底部・周辺部に凹凸があり、土坑とするにはやや問題が残るかもしれない。覆土は暗褐色土と黒褐色土の混じる単層である。遺物は出土していない。

## 2. 遺跡

### S K 21 (図版 44・124)

6 F 7に位置する。不整形の皿状の土坑で、直径120 cm、深さ27 cmを測る。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

### S K 27 (図版 44・123)

8 G 4に位置する。不整形の皿状の土坑で、直径68 cm、深さ10 cmを測る。覆土は黒色土の単層で、炭化物を少量含む。遺物は出土していない。

### S K 29 (図版 44・123)

8 G 9に位置する。円形の皿状の土坑で、直径70 cm、深さ18 cmを測る。壁の立ち上がりが比較的急角度である。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

### S K 31 (図版 44・123)

4 H 21に位置する。南西側を風倒木痕に切られるが、楕円形の皿状の土坑と推定される。残存部分の大きさは、長軸160 cm、短軸120 cm、深さ10 cmを測る。底面は平らで、壁の立ち上がりは急角度である。覆土は暗褐色土の単層である。遺物は出土していない。

### S K 30 (図版 44・123)

8 H 1・6に位置する。円形の皿状の土坑で、直径110 cm、深さ15 cmを測る。底面に小さな凹凸がある。覆土は2層に分層される。遺物は、縄文土器(図版52-84)が出土した。

### S K 34 (図版 44・123)

5 I 17に位置する。円形の土坑で直径110 cm、深さ60 cmを測る。掘り形はほぼ円筒形であるが、壁面には小さな凹凸がみられる。覆土は2層に分層される。遺物は出土していない。貯蔵穴などではないようである。

### c. そのほかの遺構 (図版 39・44・45・124・126)

#### 捨て場 (図版 39・126)

9 Fを中心として、9 E・9 Gにも広がる。南北方向は約20 m、東西は10 m以上の広がりをもつ。ただし、東側は調査範囲外であるため全容は不明である。もともと沢地で低くなっていた場所に、土器や石器を投棄したものらしい。後期～晩期前葉の遺物が大量に出土した。

### S X 6 (図版 45)

2 E 12に位置する。上部は水田造成による削平を受けていた。楕円形の皿状の窪みで、長軸112 cm、短軸50 cm、深さ12 cmを測る。底面にはピット状の凹凸がある。覆土は暗褐色を主体とし、炭化物を含む。上面には灰白色火山灰がブロック状に堆積している。遺物は出土していない。底部の形状などから、人為的な掘込みとするには、やや疑問が残る遺構である。

## S X 2 (図版 45・124)

3 E 8に位置する。風倒木根の覆土の上で検出された。上部は水田造成による削平を受けていた。楕円形の皿状の窪みで、長軸124 cm、短軸70 cm、深さ14 cmを測る。覆土は2層に分層され、上位の覆土は灰白色の火山灰である。遺物は、縄文土器(図版52-85)が出土した。

## S X 23 (図版 45・124)

4 F 19に位置する。12号炭窯の下位から検出された。不整形の筒状の落ち込みで、直径74 cm、深さ84 cmである。覆土は暗褐色土の単層である。発掘後は湧水が多く、数10分ほど放置すると半分は水没するような状態であった。遺物は出土していない。

## S X 24 (図版 45・124)

8 F 6に位置する。不整形の楕円形の落ち込みで、長軸138 cm、短軸104 cm、深さ18 cmを測る。底面や壁面に小さな凹凸がある。覆土は黒色土であるが、ほかの遺構に比べて、黒さが際立っている。遺物は出土していない。底部や壁面の形状から、人為的な掘り込みとするには、やや疑問が残る遺構である。

## S X 33 (図版 45・124)

3 J 23・24に位置する。I層で検出された。南東側は試掘トレンチで削平されている。不整形の楕円状で、残存部分の大きさは長軸140 cm、短軸116 cm、深さ30 cmである。覆土は黒色土を主体とするが、間に灰白色火山灰が2層にわたり堆積している。自然の落ち込みに火山灰が溜まった可能性もある。

## S D 4 (図版 45・124)

2 D 18・19・20に位置する。東西方向に走る溝である。西側は調査範囲外に連続し、北側の沢地(原川)に伸びていく。幅はおおよそ70～120 cmの間で不規則に変化している。横断面は弧状を呈するが、底面には凹凸がある。原川に接しているため、大量の湧水がみられた。原川によって形成された自然の小沢の可能性もあるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

## d. 炭窯(図版 46・47・125)

## 14号炭窯(図版 46・125)

7 E 5、8 E 1に位置する。上部は攪乱を受けており、覆土や掘込みも下部の一部分を除き、原形をとどめていなかった。そのため、不明の点が多い。残存部分は不整形長方形で、長軸330 cm、短軸122 cm、深さ20 cmを測る。覆土は底部に炭化物層が堆積し、その上を少量の灰白色火山灰と炭化物を含む暗褐色土が覆っていた。底面は多少の凹凸があるが、ほぼ平らで、被熱した部分がみられる。無文の土器片が出土した。

## 12号炭窯(図版 46・125)

4 F 14・15・19・24に位置する。隅丸長方形で長軸470 cm、短軸190 cm、深さ25 cmを測る。南辺には

半径20cmほどの半円形の突出部がある。覆土は最下部に炭化物層があり、その上位に、中間に灰白色火山灰を挟みこむ形で、炭化物を含む暗褐色土が堆積していた。炭化物層は周縁部ほど厚い。炭化物直下の床面には焼土が残存する部分が見られた。縄文土器(図版52-86)と古墳時代の土師器(図版74-3)が出土した。

#### 28号炭窯(図版47・125)

6H22に位置する。北側は用水掘削による攪乱を受けて、失われていた。残存部分から、隅丸長方形で南辺に20cmほどの突出部をもつ平面形であったことが窺われる。短軸180cm、深さ40cmを測る。覆土は最下部に大きな炭の塊を含む層が10cmほどの厚さで堆積し、その上位に、間に灰白色火山灰層を挟みこむ形で、暗褐色土が堆積していた。炭化物層直下の床面には焼土とみられる赤色の部分が見られた。

#### 32号炭窯(図版47・125)

4L16・17・21・22に位置する。上部は攪乱されているが、I層中で検出された。楕円形に近い隅丸長方形の炭窯で、長軸336cm、短軸204cm、深さ18cmを測る。全体に浅い皿状であるが、南壁際に長軸60cmの楕円形の落ち込みがある。底面からの深さは約10cmである。覆土は攪乱されたように炭化物が散在しており、自然堆積とは考え難い。出土遺物に無文の土器片がある。

## C. 遺物

### (1) 概要(図版48)

遺物には縄文時代の土器・石器・土製品、古墳時代の土師器などがある。縄文時代の遺物の所属時期は草創期～晩期と幅広いが、主体をなすのは後期末葉～晩期初頭の遺物である。後・晩期の遺物の多くはSI11と捨て場から集中して出土し、そのほかの時期のものも多くは包含層から出土した。古墳時代の土師器は、調査範囲の西側に分布していた。

### (2) 縄文時代の土器・土製品(図版49～67・127～144)

#### a. 分類と記述の方法

土器の分類はまず時期ごとに群として分類し、各群のなかで器種・文様に基づく細分を試みた。細片が多いので、細分は文様に重点を置いて行った。なお、後期～晩期のいわゆる粗製土器については、時期の判別が困難であるため第6群(後期末葉～晩期)の中でまとめて扱うことにした。

#### 第1群 草創期

#### 第2群 早期

#### 第3群 前期

#### 第4群 中期

#### 第5群 後期末葉～後葉

#### 1類 深鉢または鉢形土器

#### A 下端を隆帯で画した口縁部文様帯に、沈線で楕円・直線などを描くもの。

- B 口縁部に1条の隆帯文をもつ。隆帯上にはヘラ状工具による刺突痕がめぐる。
- C 刺突列点文帯をもつ。基本的に2条の平行沈線間に刺突列点が施される。
- D 磨消縄文の沈線で文様を描く。
- E 器面を磨き込み、磨消縄文で描出された文様を浮かび上げらせるもの。
- F その他。

## 2類 壺形土器

## 第6群 後期末葉～晩期

## 1類 深鉢または鉢形土器

- A 口縁部に隆帯文をもつ。隆帯上には列点がめぐる。
- B 口縁部に隆帯文をもつ。隆帯上は強いナデによって、窪んでいる。多くは、口縁内面が帯状に厚くなっている。
- C 口縁部に三叉文を主とする文様をもつ。沈線のみで表現されるものと磨消縄文で表現されるものに大別される。
- D 体部に入組文をもつ。磨消縄文で表現されるものと、沈線で表現されるものがある。
- E 体部に縄の手工文を主とする文様をもつ。磨消縄文により表現されるものと、沈線で表現されるものがある。
- F 磨消縄文による縄文帯をもつ。
- G 刺突列点文帯をもつ。基本的に2条の平行沈線間に円形刺突列点が施される。
- H 無文土器。
- I 口縁に沈線をめぐらした無文土器。
- J 輪痕裏が残る無文土器。
- K 全面に縄文が施文された土器。
- L その他。

## 2類 浅鉢形土器

- A 口縁部に三叉文を主とする文様をもつ。沈線のみで表現されるものと磨消縄文で表現されるものに大別される。
- B 体部に綾帯縄文をもつ。
- C 磨消縄文による縄文帯をもつ。
- D 刺突列点文帯をもつ。
- E 口縁端部が、隆帯・縄文・沈線などにより加飾される。
- F 工字文をもつ。
- G その他。

## 3類 台付鉢形土器

## 4類 壺形土器

## 5類 皿形土器

## 6類 片口形土器

## 7類 注口形土器

上記分類に従い記述を進めるが、個々の土器の出土位置・胎土・色調などの属性は観察表に記すので、そちらを参照願いたい。

b. 遺構出土の土器・土製品

住居跡（図版49～52・127～129）

S I 11（図版49・50・127・128）

S I 11の覆土と、調査時点で「S I 11」として取り上げられた、周辺の包含層の土器をまとめた。図版では、包含層出土のものは、遺物番号のとなりに（ ）で出土グリッドを並記した。

第2群 早期（図版49・127-1）

1は山形押型文土器である。

第3群 前期（図版50-28）

28は口縁端部に王冠状の細かい凹凸があるが、これは器面の施文に使った縄の側面の圧痕と考えられる。器面に施文された縄文はループ文であり、胎土に繊維も含まれることから、前期前葉の土器であろう。

第6群 後期末葉～晩期（図版49・50）

1類B（7～11・13）

7は口縁が外反し、唇局部より下には3本の平行沈線がめぐる。口縁には弧線が連続し、正面には逆「の」字が描かれている。8・9は口縁に粘土紐が貼り付けられ、粘土紐と口縁端部との間に強いナデが加えられている。10は口縁端部が外側に引き出され、強いナデが加えられている。11は貼りつけた粘土紐をつまみ出して突起としている。突起部分の口縁端部は突起とともに、捻るようにして外側へ引き出されている。強いナデにより、隆帯は器面にめり込んでいる。

13は口縁に短い粘土紐を貼り付け、突起を作り出している。口縁端部の直下には細く、浅い沈線がめぐる。体部には稲妻状沈線が描かれたあと、丁寧な磨きが施されている。内面は横方向の磨きで仕上げられている。

1類C（5・6・12）

5・6は同一個体の可能性がある。平行沈線の間に入組三叉文が描かれ、空白部には半截竹管による刺突が連続する。12は磨消縄文で入組三叉文が描かれ、文様部分が赤彩されている。

1類E（2）

2は口縁が外半し、端部はきっちり面取される。口縁には平行沈線が引かれ、間に波状の沈線が描かれている。体部には沈線で鍵の手文と見られる文様が描かれているが、これも、おそらくは平行沈線間に描かれていたと推定される。内面は粗い横方向のナデで仕上げられている。

1類F（3a・3b・4）

3a・3bは同一個体と推定され、平行沈線間に無節の縄文が施文されている。3bは縄文施文後、沈線で弧線・弧線を描き、無文部を磨き潰している。4は磨消縄文で弧線を描いている。

1類H（27・31・39）

27・31は内外面が磨かれた無文土器である。39は小形の土器であるが、作りは雑である。内面は横ナデされているが、輪積みの凹凸は明瞭に残っている。外面は、底部を含む全面が磨かれている。

1類I（34・35）

34は器面を磨いたあと、口縁に浅い平行沈線をめぐらせている。35は多方向のなでのあと、口縁に縄文を施文し、さらに3条の平行沈線を引いている。このような例はごく少数である。

1類J (32・36・37)

36は外面に厚く炭化物が付着する。32は口縁内面に1条の沈線がめぐる。37は薄く、内面の磨きが丁寧である。

1類K (33・29・30)

33は細かい縄が横方向に回転施文されている。

1類L (14a・14b)

14a・14bは同一個体である。斜めの平行沈線の間が、細かい刺突で充填されている。14aの口縁端部の突起には縦・横の短沈線が写|かれている。

16の口縁端部の突起の頂部には刺突が加えられている。

底部 (38・40～45)

38は小形の土器の底部でよく磨かれている。40～42・44・45は網代痕をもつ底部である。43は底面に荒いケズリが施されている。

2類C (18～20・22・23)

18は口縁端部が内側へつままれて、厚くなっている。二股にわかれる突起が付けられていたと推定されるが、その片側のみが残存している。沈線で区画された口縁部文様帯には縄文が施文され、赤彩されている。口縁の内外面に煤・炭化物が付着している。19は口縁端部が丁寧に面取りされている。文様は平行沈線の間非常に細かい燃りの縄文が施文されている。20の口縁端部は内側へつままれて厚くなっている。沈線で区切られた文様帯には縄文が充填され、赤彩されている。焼成後の穿孔が認められる。22は細かい縄文が全面に施文されたあと、横方向の沈線が写|かれている。23は口縁端部の直下がわずかに厚さを増しており、その部分に縄文が施文されている。口縁内面は少し下がった所に弱い削りがめぐるため、ほかの部分より厚いように感じる。皿に近い器形の可能性もある。

2類E (17)

17の口縁端部は面取されているが、一部は面取りされずに残され、低い突起のようにになっている。口縁内側の1cmほど下がったところには削りが全周し、口縁部が厚くなっているような錯覚を受ける。1か所、焼成前に穿孔されている。

2類G (15・626・627)

15は無文で、焼成後に穿孔されている。ほかに無文の626・627(図版128)がある。

3類 (21・25・26a・26b)

21は全体に風化が激しいため、文様の把握が困難であった。口縁部の文様帯には、平行沈線間に入組三叉文が描かれているようである。沈線内は赤彩されている。台の部分には「十」字形とレンズ形の透かし彫りがある。沈線で文様が施文されているが、構成は不明である。25・26a・26bは台の部分で、三叉文の透かしをもつ。25は磨消縄文で変形した三叉文が描かれ、三叉の部分が見えかきとなっている。現存する透かしのほかに、透かしと見られる切り込みが下側に残されている。その配置を見ると、透かしは文様の流れに沿って、左上と右下に対で彫られていたことがわかる。26a・26bは同一個体である。変形した三叉文が上下に向かい合うように描かれ、三叉文部分が透かしとなっている。現存する三叉文のほか、下側にも

透かしの上半分を認めることができる。

5類 (46)

46は粘土紐を貼り付けたような、低い高台をもつ。

7類 (24)

24の注口部分はボタン状の粘土瘤を貼り付け、その中央に小孔を貫通させた痕跡器官的なものである。文様は上下2段の文様帯をもつ。上段は、始めに口縁端部の直下に1本の沈線をめぐらし、その次に、「T」字に近い三叉文を上下逆転しながら交互に彫去している。「T」字の横棒にあたる部分はかみ合い、縦棒にあたる部分は、上に向くものは左へ、下に向くものは右へ流れている。下段でも、「T」字に近い三叉文を上下逆転しながら配しているが、「T」字の横棒にあたる部分は文様帯の上端と下端を画す沈線となっており、縦棒にあたる部分がかみ合っている。三叉文で囲まれた空白部分にレンズ形の弧線を充填した結果、木の葉が連続するような文様となっている。ここから、上段と下段は異なる文様が表現されているが、構成要素である三叉文やそれを描く手法を見れば、基本的に同じであることがわかる。

S I 25・26 (図版51・52)

S I 25・26の検出状況はあまり良好とはいえるものではなかった。そこで、S I 25・26に関わるピット・炉から出土した土器とともに、周辺包含層の土器もあわせて掲載する。図版では、包含層出土のものは出土グリッドを遺物番号とともに( )で並記した。

7G Pit 1

6群 後期末葉～晩期 (図版51)

1類H (48)

48は内外面ともよく磨かれているが、内面の口縁端部直下は磨き残されて沈線状になっている。

4類 (47)

47は口縁端部直下に平行沈線を引き、その間に断面「V」字状の刻みを連続させている。その下には沈線による曲線が描かれているが、全体の構成は不明である。拓本では三叉文に見えるところもあるが、24のような明らかに三叉文を意識した彫法の仕方ではない。

7G Pit 2

3群 前期 (図版51-49・50)

49は胎土に繊維が含まれる。器面には縄文が施文され、口縁には爪形が連続して刺突される。50は蕨状縄文が施文されている。

6群 後期末葉～晩期 (図版51)

1類 (53・55～59)

53は稲妻状沈線が施文されていたと推定される。

ほかに、1類Iとみられる55、1類Hとみられる56・57、1類Kとみられる58や、これらの底部であろう59がある。

4類 (51)

51は器面の摩耗が激しく文様は不明瞭であるが、レンズ形の文様が連続しているようである。

不明 (52・54)

54は三叉文の彫が認められる。三叉文の頂部には扁平な粘土粒が貼り付けられている。52は磨消縄文で、赤彩されている。

#### 7 G Pt3

6群 後期末葉～晩期 (図版51)

1類 K (60)

60は口縁端部が丸みを帯びた面取がされている。

S | 25 炉

6群 後期末葉～晩期 (図版51・52)

1類 F (61)

61は口縁端部には刺突が連続する。二股にわかれた突起が付けられていたようだが、その半分が残存している。文様は平行沈線の間に刺突が連続し、その下に縄文が施文されている。

1類 I (64)

64は口縁端部がよく面取されている。

2類 B (63a・63b)

63a・63bは同一個体である。63aは口縁端部は面取されて内傾している。口縁には縄文帯が横走り、沈線で描かれた鍵の手文とみられる文様の一部が残存している。

2類 C (62a・62b・62c)

62a・62b・62cは同一個体である。62aの口縁端部は幅広く、よく磨かれたあと、羽状沈線が刻まれている。口縁には綾絡文が磨消縄文で描かれている。口縁・口縁端部の文様とも、赤彩されている。

S | 25・26 炉

6群 後期末葉～晩期 (図版51・52)

1類 C (65)

65は口縁部に磨消縄文で描かれた渦を挟み、三叉文が向かい合う。

S | 25・26 周辺

3群 前期 (図版51 - 66 - 69)

69a・69b・69c・69dは同一個体であろう。胎土にごく微量の繊維が含まれる。口縁端部は面取され、口縁部と胴部の下のはうには1～2段の歯状連続刺突文がめぐる。その他の胴部には麻状縄文が施文されている。底面はナデにより整えられている。前期前半の神ノ木式に比定される。

68は羽状縄文が施文されている。67は胎土に繊維を含み、器面に不規則な縄文が施文されている。66は胎土に繊維を含み器面に縄文が施文されている。拓本で無文に見える部分には無節Rが弧状に連続する。縄文の端部であると思われる。

6群 後期末葉～晩期 (図版51・52)

1類A (70～72)

70は陸帯上の連続刺突部分が赤彩されている。71は波状口縁の波頂部に突起が付けられている。突起の頂部は篋状工具でえぐられている。口縁には粘土紐が貼り付けられ、波頂部と波底部の間には三角形の突起が作り出されている。ほかの部分には列点が付けられている。陸帯の下から体部にかけて、平行沈線が引かれている。雰囲気は稲妻状沈線に似る。72は体部に平行沈線で稲妻状沈線が引かれる。沈線は連続して引かれておらず、屈局部で継ぎ足している。とくに左側のほうは、羽状沈線の方向転換する所に半円状の沈線を足して、連続するようで見せている。

1類C (74・75)

74は口縁内面が厚く、しっかり面取されているため、ほかと段をもって区別される。口縁には磨消縄文で斜めに区画する文様が描かれ、空白部分に独立した三叉文が彫去されている。75は器面の荒れが激しい。

1類F (76)

76は縄文部分にも磨きが及び、かすれている。内面の調整は荒い横ナデである。壺の可能性もある。

1類I (79)

79は口縁に2本の沈線がめぐる。

1類K (82)

82は口縁端部が丸く面取され、内面が磨かれる。

1類L (73)

73は沈線で工字文が描かれている。文様部分は赤彩されている。

2類A (78)

78は内外面とも非常によく磨かれている。口縁内面は鋭く面取されている。全体の構成は不明だが沈線で三叉文が描かれている。

2類C (80)

80は文様帯が赤彩されている。上の沈線から縦方向の沈線が分岐しているが、構成は不明である。鎌の手になるのかもしれない。

2類E (77)

77は内傾気味に幅広く面取された口縁端部に、粘土粒が2つ並んで貼り付けられている。内面からみて左側は山形に、右側はボタン状である。154 (図版54)によく似ている。

4類 (81)

81は口縁端部に二股に分かれる突起が連続して付けられている。残存する口縁には縄文が施文されたあと、下半分に磨きが施され、2か所に穿孔されている。縄文部分は赤彩されている。

土坑など (図版52・129)

SFP1 (83)

83は早期の押型文土器である。残存部には楕円押型文が密接施文されている。口縁端部にも同一原体により施文されている。

## S K 30 (84)

84は羽状縄文が施文された深鉢である。前期の土器であろう。

## S X 2 (85)

85は縄文施文の深鉢体部破片である。

## 12号炭窯 (86)

86は縄文が施文された深鉢口縁部破片である。ほかに縄文土器の無文部分、古墳時代の土師器が出土した。

## 4 D 風倒木 2 (87)

87は楕円押型文が帯状に施文されている。

## 4 E 風倒木 (88・89)

88は細かい縄文が羽状に施文されている。89は縄文施文のあと、沈線が横方向に引かれている。

## 5 D 風倒木 (90)

90は楕円押型文が帯状に施文されている。楕円形の大きさや形が不揃いである。

## 5 D 風倒木 1 (91～93)

91は口縁端部に突起が取り付けられている。口縁には沈線で文様が描かれるが、構成は不明である。

92は内屈気味の口縁に磨消縄文で沈線がめぐる。体部には平行沈線が、1段おきに方向を変えて施文された結果、羽状となっている。93は底部に網代痕が残る。ほかに縄文土器の無文部分が出土した。

## 6 B 風倒木 1 (94)

94は半截竹管状工具で横方向の沈線が引かれ、それを挟んで斜めの沈線が引かれている。ほかに縄文土器の無文部分が出土した。

## 7 A 風倒木 1 (95)

95は楕円押型文が帯状に施文されている。

## 7 B 風倒木 2 (96・97)

96・97は楕円押型文が帯状に施文されている。96は楕円の粒が細かく揃っているが、97は粗く、空白部は格子目のように見える。ほかに縄文土器の無文部分が出土した。

## 7 B 風倒木 3 (98)

98は山形の押型が帯状に施文される。山形はきっちり作られず、弱い波状を呈する。

上記のほか、4 D風倒木1、6 G風倒木、SK7、32号炭窟、14号炭窟から無文の土器片が出土した。

捨て場 (図版53～64・130～141)

### 第2群 早期 (図版53～99～101)

99・100は山形押型文、101は楕円押型文である。いずれも帯状施文で、101は口縁端部にも施文されている。

### 第3群 前期 (図版53～102)

102は半截竹管文により縦・斜めの沈線が引かれている。

### 第4群 中期 (図版53～103)

103は平行沈線の間に連続刺突が行われている。それ以下の部分には燃糸文が施文されている。

### 第5群 後期前葉～後葉 (図版53・55)

1類A (186～189)

186は波状口縁に沿って沈線で文様が描かれている。文様は突起部分に連続し、そのまま内面に至る。突起部分は、丸棒状工具を巻き込むようにして作られており、貫通孔となっている。ほかに正面からやや深めの刺突が行われている。187はやや内湾気味の平口縁で、598同様楕円文が描かれている。細片だが、188・189も同種であろう。

1類B (190a・190b・190c)

190a・190b・190cは平口縁の深鉢で、同一個体と思われる。口縁部をめぐる隆帯の所々に、口縁端部につながる集約部をもつ。集約部の先は延長された隆帯が曲げられて、皿状の突起となっている。集約部のほかに口縁から垂下し、隆帯に至る短い隆帯が間隔を置いて取り付けられている。隆帯上の刺突は、右から左下へ向けてやや斜めに行われている。

1類C (191～194)

193・194がこの仲間である。刺突列点文の間隔に沈線が引かれることで、その部分はあたかも隆帯であるかのように見える。191・192は口縁部に刺突列がめぐり、刺突列の下側に強いナデが加えられることで、193などと同様に見える。191の刺突の方法は器面に対してほぼ垂直に工具を押し付けて行っているが、192は下から上へ突き上げるように行っており、施文方法に違いが見られる。

1類D (109～121・124・125・129・130)

109は縄文帯を「L」字状の沈線が区切っている。外面には炭化物が厚く付着している。110a・110b・110cは縄文帯が沈線で区切られ、それをまたぐようにして「S」字状の文様が描かれている。「S」字の上のほうは矩型を呈している。112～118は点対称に向かい合う「フ」字状の入組文が描かれている。拓本では確認が難しいが、111は左側に、左下から右上に伸びる弧線がある。正面の弧線に連続するとすれば、入組文が描かれている可能性がある。横走する2本線の下の縄文帯部分には、1.5cm程の間をおいて、もう1本が引かれているが、縦方向のナデによって、周囲の縄文とともに消えかかっている。

119～121は横走する縄文帯をもつ。119は下側の無文帯に、直径約1mmの円形の刺突が、1cm程の間隔をおいて連続する。

124・125は波状口縁で、縄文を地文とし、羽状沈線が描かれている。

129・130は口縁端部に2個1対の突起をもつ。129は外面の縄文施文後、瘤の内面が磨かれ、縦の短沈

線が引かれている。130も縄文施文後、突起の頂部が平らになるように磨かれている。

#### 1類E (122・123・126～128c)

126はL Rや無節の縄が縦横に回転されて地文が作られている。残存部分の下半分には、篋状工具で羽状沈線が描かれている。上半分はほぼ完全に磨き消されたあと、篋状工具で施文されているが、文様構成は不明である。122・123・127は篋状工具で入組文が描かれたあと、周囲がよく磨かれている。地文は127が無節のほかは、L Rである。128a・128b・128cは波状口縁で、口縁端部には、縄文施文後、瘤が貼り付けられている。瘤の上には丸棒状工具が縦に押し付けられている。文様は「フ」字が点対称に向かい合う入組文である。入組文の縄文充填部分には沈線で入組文が描かれている。

#### 1類F (104・131)

131は縦横の沈線で文様が描かれている。胎土に砂粒を多く含み、色調も橙色に近い。ほかの土器とは、やや異質な感じがする。104は縄文を地文に沈線で格子目文を描いている。その後、口縁端部から粘土紐を垂下させている。粘土紐は軽い刺突により、波打っている。

#### 2類 (105～108)

105～107は直立する口縁部に縄文が施文されている。105の胴部には無文部を抱いたレンズ形の磨消縄文が連続し、文様の接点には円形の文様が入り出されている。この部分は瘤付き土器であれば、瘤が貼り付けられるはずのところである。106・107は沈線でレンズ形の文様が描かれているが、かなり扁平になっている。108の器壁は非常に薄い。文様は磨消縄文で描かれているが、構成は不明である。注口土器の可能性もある。

### 第6群 後期末葉～晩期 (図版54～64・67)

#### 1類A (195～199)

195は平口縁で、台形状の突起をもつ。突起の頂部には丸棒状工具の側面圧痕が3本並列する。口縁には厚さ2～3mm程の隆帯が貼り付けられており、その隆帯上に円形の圧痕がめぐる。圧痕は始めに爪をたて、そのまま、指先を押し付けるようにして付けられている。内面はよく磨かれている。197は平口縁で、口縁部に断面四角形の隆帯を貼り付け、その上に円形の圧痕がめぐる。圧痕は195と同一の方法で付けられている。196の隆帯は197より低い、同じ方法で円形の圧痕が付けられている。

198a・198bは平口縁で、口縁に貼り付けられた隆帯上には、楕円形の圧痕が連続する。圧痕は丸棒状工具の側面を押し付けたあと、その周囲を磨いて整えられている。198aには隆帯から口縁端部にかけて粘土瘤が貼り付けられ、その上に円形の圧痕が付けられている。

199は薄い粘土紐を貼り付け隆帯としているが、よく磨かれて器面に埋没し、非常に低いものとなっている。隆帯上には刺突列があるが、刺突の後にも磨かれているので、あまりはつきりしたものではない。隆帯と口縁端部の間は強くナデられて凹線となっている。

#### 1類B (200～237)

200は波状口縁で口縁部には隆帯が貼り付けられている。隆帯上は磨かれており、圧痕はない。隆帯の作りは1類Aに類する。205は内外面とも篋状工具でよく磨かれており、とくに外面の口縁端部直下は強い磨きによって隆帯状になっている。その隆帯の中央には丸棒状工具で1状の沈線が引かれている。波状口縁の波頂部から波底部に至る中間に、粘土粒が付けられており、そこから横方向の沈線が引かれている。この沈線の内側まで磨きが及んでいる。206は口縁部に隆帯が貼り付けられているが、強い磨きのため、周

器の器面とはほぼ同じ高さとなっている。隆帯上は斲状工具でなでられている。隆帯の波頂部には縦方向の斲痕がある。波頂部からは稲妻状沈線が施文されている。施文後に器面に施された磨きは、稲妻状沈線の輪郭を磨き潰している。204・207は波頂部を欠くが、残存部分の作りは206と共通する。208・209は波頂部に斲痕をもたないが、そのほかの部分は206などと共通する。209は波状口縁の波頂部から波底部に至る中間に、粘土粒が付けられている。

210は波頂部が二股にえぐられたあと、磨きが施されている。口縁端部直下には5mm程の厚さの粘土紐が貼り付けられ、隆帯となっている。その上下には平行して磨きが施されている。

212・213は、口縁端部から粘土紐が貼り付けられ、一部は左右からつままれて突起になっている。213は突起を作り出した後、さらに隆帯上を磨いている。

214・215は口縁に粘土粒が貼り付けられ、そこから左右に強いナデ痕が付けられている。ナデのあと、内外面が磨かれているが、214では口縁のナデ痕内まで磨きが及ぶことはない。

216は口縁部に粘土紐が貼り付けられ、隆帯となっている。貼り付け位置が高いため、隆帯上に作られた突起部分は小さな波状口縁のようである。218は粘土粒を貼り付けて突起としているが、やはり取り付け位置が高く、しかも間隔が狭いため、凹凸のある口縁となっている。

217は粘土紐が貼り付けられているが、強くなでられているため、明瞭な隆帯とはなっていない。一部は口縁端部とともに外側に引き出されて、瘤のようになっている。

219～221は口縁端部から粘土紐が貼り付けられ、隆帯となっている。隆帯上には横方向の磨きによって生じた浅い凹部がある。隆帯貼り付け後、口縁端部との境目を磨いて隙間を埋めているが、山形に隆起した部分については磨き残しがあり、口縁端部との間に細い溝が残されている。220では2つの突起が残っているが、向かって左側の突起は低く、口縁との間も完全に磨き潰されている。

222は口縁端部から1cmほど下に粘土紐が貼付けられている。粘土紐と口縁端部との間は強い横ナデが施されている。口縁には220などに見るような、三角形の突起がある。しかし、この突起は左右の隆帯と一体ではなく、突起部分だけ別に貼り付けられている。口縁端部との間は磨き潰されている。224も口縁端部から1cmほど下に隆帯が貼り付けられ、波頂部正面にはボタン状の粘土粒が付けられている。波頂部は粘土塊を付け足して、台形状に整えられている。波底部近くには山形の突起があるが、頂部はこれまで見てきたもののように明瞭な稜線をもたない。この突起は粘土紐の貼り付けによるものだが、器面との接合はあまり丁寧ではなく、もとの粘土紐の形をよくとどめている。器面の磨きののち、波頂部から沈線で文様が描かれている。231・232も口縁から下がったところに薄い粘土紐が貼り付けられ、その間に弱いナデを加え凹線が作り出されている。

223・225～228は粘土紐が口縁端部から貼り付けられているが、器面との接合は雑で突起部分ではもとの粘土紐の形をとどめている。突起の左右には浅い凹線が付けられている。

229は口縁端部直下にごく薄い粘土紐を貼り付け、左右からつまんで小さな三角形の突起を作り出している。突起は間隔をおいて付けられており、突起と突起の間は弱いナデによって、ごく浅い凹線が付けられている。波頂部の口縁端部は内面から外面に向かってわずかに押し出されている。230は突起部分に粘土が貼り付けられ、その間隔はナデにより浅い凹線が付けられている。基本的には229と同じ作りであるが、突起の下側に磨きが及んでいる点、やや丁寧な作りといえよう。233は細片だが、これらと同じものと考えられる。

234は粘土粒を口縁端部から貼り付けて三角形の突起を作り出している。突起の左右には、粘土粒貼り付けの際に生じたナデ痕が残るのみで、装飾的なナデは認められない。235も粘土紐が付けられ、突起と隆帯が作り出されている。よく磨かれて器面とほとんど一体化しており、突起・隆帯ともあまり目立たない。

236・237は口縁端部から貼り付けられた隆帯上に、縦方向の寛匠痕が付けられている。寛匠痕は206に似るが、付けられている部位は波頂部ではない。

201～203は口縁部に明瞭な隆帯をもたないが、口縁内面を厚く作るという特徴が1類Bと共通することから、ここに含めた。201は外面と、内面の口縁の厚くなる部分より下が削りとられる。口縁端部のみ横ナデで平滑に整えられている。207も基本的に201と同じ作りであるが、外面の口縁も横ナデで整えられている。203は口縁内面が緩やかに厚みを増す。器面は内外面とも磨きにより整えられている。外面の口縁には丸棒状工具により沈線が引かれている。

1類A・Bに伴うと推定される、体部に羽状沈線または稲妻状沈線が施文されている土器を一括した(238～248)。

239・238は細い沈線で稲妻状沈線が引かれ、その後磨きが施され、輪郭は磨き潰されている。241は239などよりは太い沈線で引かれ、沈線の内側まで磨きが及んでいる。

240・242～245は沈線で羽状沈線文が描かれている。沈線を引いたあと、器面に磨きが施されるが、沈線内には磨きが及んでいない。

246～248は沈線が引かれ、その後の器面の磨きに伴い、輪郭が磨き潰されている。

#### 1類C (253～271・315)

253は沈線で非連鎖的三叉文を描き、そのあと器面を磨いている。254は波状口縁と推定される。沈線で入組三叉文を描いている。255は口縁部に三叉文が陰刻され、そのあと沈線と半月形の列点が施文されている。260は拓本では見えずらいが左側の弧状部分から左へ分岐する沈線が引かれ、三叉文となっている。

262の波状口縁の波頂部の窪みは、丸棒状工具を外側から内側へ引くことで作出されている。波底部には粘土が貼り付けられ、山形の突起となっている。横に長い粘土紐を貼り付けて、つまみ出したのではなく、貼り付けた粘土瘤の上面が三叉状に彫去されている。その中央には丸棒状工具による刺突が加えられているが、貫通はしていない。また、正面には口縁をめぐる沈線の延長となる沈線が引かれている。文様は、LRの縄文施文のあと沈線と磨きによって描かれている。先端が渦巻状に入り組む三叉文で、右下には沈線が横走しており、ここで文様帯が区画されている。258・259は非連鎖的三叉文の一部であると思われる。細片であるが、256・257・261・263～265もこの仲間であろう。315は口縁端部に断面「V」字状の刻みが入れている。器面の剥落がひどいので判然としないが、文様は沈線で描かれ、拓本左側の方に三叉文が認められる。

268～271には変形した三叉文が沈線で描かれ、その下に列点がめぐる。270は文様部分が赤彩されている。268・269・271は同一個体の可能性がある。269の三叉文は両端が叉状となり、三叉というより横位の「I」字状になっている。266a・266bは同一個体である。縄文を地文に沈線で文様が描かれている。連鎖的三叉文の一部と推定される。267は流水文であるが、描出時に三叉文が意識されている。

#### 1類D (274・335)

274は沈線に挟まれた縄文帯に連鎖的入組文が描かれる。器壁は薄く、色調はあざやかな橙色で出土土器

のなかでは目立つ存在である。335は沈線で逆三角形の文様が描かれる。土器の券図気はS I 11出土の深鉢(図版49-2)に似ている。

#### 1類E (252・275～282・302・305・306)

鍔の手法はおもに磨消縄文で描かれる。縄文は描かれる文様を割り付けたあとに施文されており、横方向の文様には横方向、縦方向の文様には縦方向に縄が転がされている。そして、縄文部分の両脇をなぞるように沈線が引かれている(276～280・282)。

275は屈曲部の縄文帯に、沈線で鍔の手法が描かれている。302は外屈気味の口縁部に磨消縄文で垂下する文様が描かれている。

306の口縁部には中央を丸棒状工具で押さえられ、「B」字状となった突起が付けられている。文様は特殊な鍔の手法で、縦方向は直線で、横方向は弧線で描かれている。

鍔の手法と刺突列を組み合わせているものに276・277・279a・279c・281・282・305がある。305に沈線と列点を施文している工具はほかのものよりかなり細めである。281・282は磨消縄文を伴わず、沈線のみで鍔の手が描かれている。

252は正確には鍔の手法とはいえないかもしれない。縦の縄文帯と横の縄文帯の接点に三又文が彫去されている。縄文帯と三又文は赤彩されている。内面は粗いナデで調整されている。

#### 1類F (249・295～301・303・304・307～310・314)

297は口縁部に突起をもち、突起以外の部分には笄状工具による斜めの刺突が加えられている。磨消縄文による施文は綾絡帯縄文の可能性ある。301は口縁部が外側へ屈曲する。298は内湾気味の口縁部に綾絡帯縄文と見られる文様が施文されている。297・298・301には文様や、口縁形態に中屋式の影響を見ることが出来る。

295・296・310は口縁部に横走する縄文帯をもつ。296は下側の縄文帯が弧状を描くのかもしない。310は縄文帯が赤彩されている。

314は内外面ともよく磨かれた丁寧な作りの土器である。文様構成は不明であるが、上方の弧線左側に三又文が描かれている可能性がある。309は口縁部に丸棒状工具による圧痕が連続する。307の口縁部には鋭い沈線により周囲を削り込むことで、瘤状の突起が作出されている。

303・304は縄文と沈線・列点により横位の文様帯が描かれている。303・304は刺突列が沈線に挟まれるのではなく、沈線や縄文部分に食い込んでおり、異質である。

#### 1類G (272・273・283～294・466・468・469・473・474)

283～288は沈線に挟まれた刺突列が複数段重なっている。口縁部には連続する押圧痕が残る。273・293は屈曲する口縁の屈曲部に施文されている。273は弧状の沈線に平行して列点が並ぶ。半歯状文の一種であろう。272もこの仲間と考えられる。体部破片でも、沈線に挟まれた刺突列が複数段重なっているのを確認できる(289～292)。466は平行沈線間にD字状の刺突が連続する。

468・469は口縁部が屈曲して開く深鉢である。468は3本の平行沈線の間に刺突列が充填される文様帯が、2段にわたり施文されている。469は、刺突列が3段にわたり施文されている。

473・474は屈曲して開く口縁部の付け根に刺突列が施文され、口縁部も刺突により加飾されている。

#### 1類L (250・251・311～313・316～334・336～341・343)

311～313は磨消縄文で楕円形の文様が描かれる。いずれも構図は不明である。249・250・251は沈線

の雰囲気がほかの稲妻状沈線が描かれた土器に似る。

全体の文様構成などは不明であるが、口縁に刺突などの装飾をもつものを一括した。このうち、316～318などは刺突部分に向かい、左下がりの平行沈線が引かれている。331は丸みを帯びた口縁端部に、丸棒状工具が直交方向に押し付けられている。

体部破片は、沈線で施文されるもの(336～339・342)、沈線で区画したなかを刺突で充填するもの(340・341)などがある。

343は沈線で粗大な工字文が描かれている。

#### 2類A (132～141・143～145・150～152・610)

132は波状口縁の液頂部が台形状を呈する。液頂部波頭にはごく浅い沈線が引かれている。磨消縄文(RL)により施文されているが、破片のため、全容はつかめない。縄文部分と三叉文部分は赤彩されている。胎土はほかの土器と比べ白っぽい。口縁の特徴から、御経塚1式に比定される。134は口縁部近くの破片であろう。貼り付けられたボタン状の突起に縦・横の圧痕が加えられ、その中が赤彩されている。文様は磨消縄文で渦巻きと三叉文が描かれている。縄文は沈線で区画された部分ごとに施文されているが、沈線は縄文施文のあとに引かれている。あらかじめ文様を削り付けてから縄文を施文していることがわかる。133は人面が取り付けられている。顔面は、丸棒状工具の側面を横に押し付けて凹凸を作ることで表現されている。後頭部は三叉文が彫去され、端部には浅い沈線が引かれている。この沈線は132の液頂部に引かれた沈線の雰囲気によく似ている。顔面の両脇に貼り付けられた隆帯は腕・脚を表現するものだろう。脚の間には三叉文が彫去されている。このほかの部分には磨消縄文により三叉文などが描かれている。外面全体が赤彩されている。135も細片だが、三叉文が認められる。136aの体部には磨消縄文で文様が描かれ、突起へ向かって沈線が分岐している。文様は、縄文帯を斜めに下がる沈線の様子からみて、変化した三叉文が描かれていたものと思われる。口縁の突起は丸棒状工具を直交方向に置き、その両側の粘土をつまみ上げるようにして作出されている。136bの口縁の突起は両側からつまみ上げて作出されている。胎土や口縁の作りも136aによく似ており、同一個体と考えられる。

137・138は磨消縄文で入り組み三叉文が描かれている。

141は磨消縄文で変形した三叉文が描かれている。縄文は非常に細かいLRで134と同様に、区画された部分ごとに施文されている。口縁には突起が付いているが、表面を欠損しているため、形などは不明である。土器自体赤みが強いが、縄文部分はさらに赤彩されている。144・145・150～152にも変形した三叉文が施文されていたと推定される。

610は沈線で上下が区画された中に入り組み三叉文が描かれている。上下を区切る沈線と三叉文の沈線は独立せずに、上下の沈線から籠状に分岐した沈線が入り組み、結果として入り組み三叉文となっている。

140は渦巻きと三叉文が浮き彫りで表現されている。渦巻きの部分は比較的しっかり見えるが、それを挟んで対峙する三叉文は拓本にしてかろうじて確認できる程度のものである。この三叉文は本来であれば完全に彫去されるべきところを、彫り残された、という感じのものである。彫去された部分は赤彩されている。内面は磨かれており、口縁にはやや強めのナデが加えられ、1条の沈線のようにになっている。器壁は薄く、胎土は白っぽい。139・143も上側の沈線の左側の幅が広がっていくので、三叉文へ続くかと推定される。

2類B (142)

142は磨消縄文(LR)により綾格帯縄文が描かれている。横帯部分と綾格帯部分の縄文は一気に施文されており、その上に沈線を引くことでそれぞれの文様が初めて区別されている。

2類C (146～149)

146～149は磨消縄文により横方向の縄文帯が表現されている。146の下位の縄文部にはごくわずかしが残っていないが、異方向の沈線が見える。

2類D (172・173)

172・173は底部近くの破片と思われる。沈線の間に列点が付けられている。

2類E (153～156)

156は口縁部内側がやや厚くなっている。口縁部には粘土紐が貼り付けられ、間に沈線が引かれている。外側から向かって左側の沈線は「T」字文とみられるが、オコゲがつまっているので正確な形は不明である。向かって右側の環弧状に貼り付けられた粘土紐の上には縄文が施文されている。155は内傾気味の口縁部には、粘土紐貼り付け後、縄文・沈線で施文している。沈線は「T」字文である。底部は多方向からのケズリで整えられている。体部外面には輪痕が明瞭に残るが、内面は平滑に磨かれている。内面は底面から4cmほど上がったところ以上に、炭化物と煤が付着している。とくに、下の幅3cmほどは、炭化物が帯状に付着している。これに対して、外面はほとんど付着物が認められない。153は口縁の内側が厚みを増している。口縁部には、細い丸棒状工具で付けられた刺突が連続する。刺突は外面から内面に向けて行われており、刺突痕の内側は赤彩されている。154は内傾するように面取された口縁部に粘土粒が2個貼り付けられている。1個は円盤状、1個は山形である。

2類F (170・171)

170・171の文様は流水文の一種と思われるが、施文後、器面が磨かれているため、沈線部分がつぶれてしまっている。

2類G (157～166)

体部の文様構成は不明であるが、口縁部に特徴のあるものを一括した。

159は縄文帯が波状口縁の波頂部に向かって斜めに描かれている。波頂部は丸棒状工具の側面が押し付けられ、小さく二股に割れている。157は口縁部に粘土紐が貼り付けられ、その上に寛状工具による刺突が加えられている。158は体部に磨消縄文(無節)で文様が描かれている。口縁部に貼り付けられた粘土層は、上部が横方向になでられ、浅い皿状になっている。164は波状口縁の波頂部内側に円盤状の粘土粒が貼り付けられている。165は外反する口縁外面に円盤状の粘土粒が貼り付けられている。

160の突起は粘土粒を貼り付け、周囲を笠の様なもので丁寧になでつけて成形されている。突起の頂部には円形の圧痕がある。162・163は突起を含めた口縁がよく磨かれている。163は焼成前に穿孔されている。161は波頂部に直交する丸棒状工具痕がある。

166の口縁は王冠状に細かく波打っている。ひとつひとつの窪みは、丸棒状工具を外側から内側へテコを押すようにして作られているため、内側に粘土がはみ出している。

3類 (542～551)

台付鉢の底部を一括した。542は多孔底土器で、台の内外面ともよく磨かれている。543は台と体部の境に、丸棒状工具で右から左へ連続刺突が行われている。刺突のあと、台の部分に「T」字に近い形の三

又文が彫去されている。下端は沈線が連続して1本となっている。「T」字を交互に逆転させながら彫去した結果、「工」字文のような文様が描き出されている。544も三叉文を逆転させながら彫去することで「工」字文のような文様となっている。下端の「T」の横棒に相当する部分の右側だけが長く伸び、左側は縦棒と同じくらの長さで止められている。そのため543のように連続する沈線とはなっていない。沈線を引きいたあと、全面が磨かれているため、沈線が少し潰れている。

545は残存部の下端部に透かしの上半分が残っている。おそらく三叉文形の透かしであったのだろう。器面には磨消縄文の横帯があり、赤彩されている。546は磨消縄文で文様が描かれているが、構成は不明である。拓本右下の弧線の下に、円形刺突の上半分だけが残っている。

547～551は無文の白である。

#### 4類 (175～185)

175は沈線で区画された中に磨消縄文で三叉文が描かれている。上下にある列点は左から右へ向かって刺突されており、ほかの土器に多くみられる刺突の方向と逆である。176は頸部分に大きく三叉文が描かれるが、ほかに連続するものなのかは現存部分では知ることができない。176は177と同一個体の可能性がある。178は器壁が厚く、器面が黒っぽい。磨消縄文で三叉文が描かれている。179は沈線で連鎖入組文が描かれる。180は口縁端部に2個一対の突起が付く。口縁は突起のある部分がやや高い、緩やかな波状をなす。体部に沈線で施文されている。181・182は眼鏡状の把手が付く。184は短く立ち上がる口縁に沈線がめぐる。183は球状の体部が付くのであろう。185は内面の作りが荒いので遊の体部とした。

#### 5類 (167～169)

167は内外面ともによく磨かれており、外面は底面を中心として沈線で文様が描かれている。全体の構成は不明だが、中心の円形を取り巻き、三叉文的な文様がめぐるようである。168にも渦巻き状の文様が認められる。169は底面に、磨消縄文で渦巻きが描かれている。

#### 6類 (174)

174は無文の片口形土器である。片口部分のみ残存しているため、全容は不明である。

#### 1類H～K (図版58～62)

いわゆる粗製土器であり、捨て場出土土器の大部分を占めている。同じ捨て場から出土した有文土器にかなりの時期幅があるので、これらの土器も1時期に収まるものではないだろう。しかし、有文土器の大半は後期末～晩期初頭に属するので、粗製土器についても同様の傾向があると推定される。そこで、器形や調整・施文をもとに分類し、計量することで、粗製土器の組成のおよその傾向をつかむことにした。なお、分類群同士の比率は、H(無文)が49.1%で大半を占め、残りはK(縄文)20.4%、I(沈線)15.8%、J(輪積)14.5%である。ほかにごく少数の条痕文の付された細片がある。これらの土器には補修孔をもつ土器が散見される(507～512)。完形に復するものはほとんどなかったが、口縁付近の破片から推定される器形から、次のように分類できる。

- 内湾気味に立ち上がる。
- 直立する(バケツ形)。
- 外反して立ち上がる。
- 口縁部が屈曲して開く。

これは口縁端部の作りで細分される。

## 2. 遺跡

- 1 無調整。
- 2 面取されている。面取は丸いものと、平坦なものがある。
- 3 施文されている。施文には、突起の貼り付け、刺突、沈線などがある。
- 4 口縁の内側が厚くなるもの。

上記分類に従い、記述を進める。対象とした資料は器形を推定できる口縁部破片に限定しているが、小片も多いので、ここで算出された数値はあくまで目安にすぎないことを断っておく。H～Kを通して、a類(内湾気味に立ち上がる)・b類(直立する)の2つの器形が大多数を占めるが、口縁部破片に限定した分類、という資料的制約の影響を受けているのかもしれない。

### 1類H (344～405・507～512)

無文土器。a 1類 (23点)・a 2類 (60点)・b 1類 (30点)・b 2類 (77点)・c 2類 (2点)・d類 (26点)がある。a 1類とa 2類の比率はおよそ2:6である。a 1類では内面に磨きがあるものは少数だった。a 2類では内面に磨きがあるもの66.7%、ないもの33.3%であり、口縁の作りと内面の調整方法には、相関関係が認められるといえよう。a 2類の面取は丸く仕上げるものが50%で、平らに仕上げるものうち5mm以上の幅をもつものは20%である。

b 1類とb 2類の比率はほぼ3:8で、面取の有無についてはa類とほぼ同じである。b 1類のうち、内面に磨きがあるものは19点、ないものは11点である。b 2類の面取は、丸く仕上げるものが37.7%、平らに仕上げるものうち、5mm以上の幅をもつものは15.6%である。b 2類では内面に磨きがあるもの36.4%、ないもの63.6%で、磨きなしの方がやや多い。これはa 2類の割合と逆転している。

このほか、口縁内面に列点がめぐるものがある。

### 1類I (436・439～463・467)

口縁に沈線をめぐらした無文土器。a 2類 (47点)・b 2類 (15点)が75.8%:24.2%の割合で存在する。口縁をめぐる沈線は幅5mmを超える太いものと、それ以下の細いものがある。a 2類・b 2類とも、太:細が7:3の割合で施文されている。ほかに口縁端部に施文されるものがある。

### 1類J (342・406～435)

輪積痕が残る無文土器。a 1類 (11点)・a 2類 (29点)・b 1類 (1点)・b 2類 (25点)・d 3類 (2点)がある。a 1類とa 2類の割合はほぼ2:3である。a 1類のうち内面に磨きがあるものは30.4%、ないものは69.6%である。a 2類では内面に磨きがあるものとなないものの割合は25.8%:74.1%である。

### 1類K (475～503)

全面に縄文が施文された土器。a 1類 (11点)・a 2類 (29点)・a 3類 (3点)・b 1類 (12点)・b 2類 (25点)・d類 (4点)がある。a類とb類の割合はほぼ同じである。口縁端部の面取の有無は、両者ともおよそ有:無=3:7である。縄文を縦方向に施文する496は、富山県本江遺跡【小島ほか1979】の後期後半に類例がある。上中島遺跡ではこの1個体のみ出土した。

### 1類H～Kの底部 (513～536)

底部は網代痕の残るもの (513～530)、網代痕の残るものうち、周囲がナデられるもの (515・517・518・528～530)、木葉・笹葉の痕が残るもの (535・536)、磨かれて無文のもの (531～534)、に大別される。比率としては、網代痕のものが多く、笹葉痕は1個体 (535)、木葉痕はほかに1個体を数えるのみである。

これらの土器の内面には、底面の大きさに関わらず、底面から約2cm上がったところに、幅1～2cmの

帯状に炭化物が付着している。

そのほかの底部 (537～541)

磨きによって仕上げられた小形の土器の底部537・538・541がある。541は丸底気味で、体部には粗雑な平行沈線がめぐる。539・540は削りによって、丸底が作り出されている。

### 土製品

耳飾り (552～558)

552は肩部周縁に篋状工具による刺突がめぐり、内側にはやや丸みを帯びた三叉文が彫去されている。553は内削ぎされた面に三叉文が彫去されている。その下に1条の沈線がめぐる。555は端部に沈線が引かれ、その脇に連続刺突が行われる。刺突は外側に連続するものと、内側に連続するものが補充しあい、全周しているようである。刺突が内外入れ替わる点から、細い沈線が内面に垂下している。557は隆帯で渦巻が表現され、隆帯上と端部に刺突が連続する。ほかに磨きにより隆帯と同じ形の渦巻が描かれている。556は内面中間あたりに隆帯が横方向に貼り付けられ、その上に連続刺突が加えられている。隆帯に沿って三叉文が彫去されている。554は内面下半分が削られて薄くなっている。上半分には2本の沈線がめぐる。端部には細かい刺突が連続する。558は内面に沈線で鼓形の文様が描かれ、その中を篋状工具の刺突が充填している。端部には土器の口縁端部に付くような「B」字状の突起が付けられている。

玉 (559)

559は楕円形の玉で、長軸方向に沿って円形の貫通孔がある。丸棒の周りに粘土を巻付けて成形されている。表面には縦方向の溝が深く彫られているが、内面や後縁に磨滅したような痕は認められない。

### c. 包含層出土の土器・土製品 (図版65～67・142～144)

#### 第1群 草創期 (図版65～560)

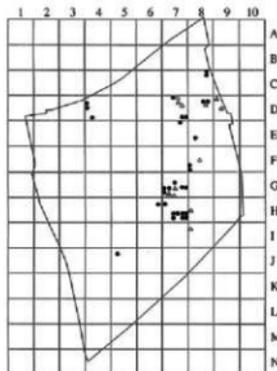
560は爪形文土器で、胎土に繊維が含まれる。

#### 第2群 早期 (図版65～561～578)

包含層から出土した押型文土器の文様別の分布は第9図に示した。出土した押型文土器は基本的に山形文か楕円文が帯状に施文されている。

561～563は6H 10・14・15からまとまって出土した。いずれも細かい楕円押型文が帯状に施文されているので1個体になるかと思っただが、561だけは直径がやや大きいようである。562・563の下半分は密接施文となっており、562は口縁端部にも同一原体で施文されている。器形は上半分がややすほまり、下半分が砲弾状となっている。563は図上復元したものである。

564～569は山形押型文が帯状に施文されている。564は口縁端部にも施文されているようだが、風化しており判断としない。569は縦方向に施文されている。570～576は楕円押型文が帯状に施文されている。576・570・571には残存する口縁端部にも施文されている。577は楕円の粒が寛く、密接施文のようである。



凡例

- 山形押型文
- 楕円押型文

第9図 押型文土器の分布

578は胎土に繊維が含まれる。外面の縄文は何回か重ねて施文されており、部分的に蕨手状になっている。内面の口縁の一部にも、同様の縄文が施文されている。口縁端部には、口縁に並行して縄の側面圧痕が付けられている。

### 第3群 前期 (図版65・66 - 579 - 589b)

583は口縁端部に刺突が加えられ、細かく波打っている。体部には蕨状縄文が羽状に施文されている。580は口縁に半載竹管状工具の背面による刺突列が、4段にわたり付けられている。体部には羽状縄文が施文されている。579は半載竹管状工具による押し引き文の上にコンパス文が描かれ、下に縄文が施文されている。前期中葉の黒浜式に並行する土器であろう。582は口縁の台形になっている端部に刺突が行われている。体部には羽状縄文が施文されている。

589a・589bは集合沈線と結節浮線文で飾られる、諸磯c式並行の土器である。581の胎土は繊維と多量の金雲母が含まれ、ほかと一見して異なる。口縁には沈線が横走し、体部にも同一原体で斜めの沈線が引かれる。

584・585は胎土に多量の繊維が含まれる。体部に縄文が施文され、底部近くには刺突列点がめぐり、刺突の原体は585が半載竹管、584が爪形である。

588は図面上で復元したものである。内湾気味に広がる波状口縁に、括れをもつ体部が付く。波頂部と波底部に2個1対の突起が付けられている。文様帯は口縁部2帯、体部2帯、底部1帯の5段構成である。器形の括れと文様帯の境は、口縁部を除けば、一致している。文様は、半載竹管状工具による平行沈線で描かれている。口縁部文様帯は山形の口縁に沿って平行線が通らされた下に、2個1対の渦巻文が描かれる。渦巻文は4組連続していたと推定される。それぞれの渦巻文の中心と、渦巻文同士の下側の接点には、ボタン状の粘土粒が1つずつ貼り付けられている。その下には中間を平行沈線で区切られた、矢羽状文が描かれている。矢羽状文は口縁部文様帯の粘土粒が貼り付けられたあたりを境として、方向を変えている。方向を変えた所に生じる三角形の空白部分にも、2個1対の粘土粒が付けられている。その下の文様帯には2個1対の渦巻文が描かれているが、口縁部のもより大きく、残存する部分の大きさから計算すると、表と裏で都合2組が描かれていたと考えられる。こちらには粘土粒の貼り付けは行われていない。底部文様帯は横方向の平行沈線のみが描かれている。底面は磨きによって平滑に整えられている。

586は波状口縁の頂部が円形にえぐられている。口縁内面には粘土紐が貼り付けられ、帯状になっている。口縁端部には細い粘土紐が斜めに渡されている。口縁外面は三角形の彫り込みが連続し、歯歯状になっている。器面は結節浮線文で飾られている。587は口縁の内外面に粘土紐が貼り付けられ、その直下に並行して、結節浮線文が付けられている。外面は縄文を地文としている。

### 第4群 中期 (図版66 - 590 - 592)

590は横方向に取り付けられた隆帯上半載竹管文の列点がめぐり、「B」字状突起が取り付けられている。隆帯から下には沈線が垂下し、その間を格子目状の沈線が充填している。592は波状口縁で、底部に向けて細くなる体部には、沈線で蕨手文が描かれる。蕨手文の間を埋めるように、逆「U」字の沈線が引かれ、その中は縄文により充填されている。

591a・591bは口縁内面に粘土帯が貼り付けられている。口縁部には圧痕のある隆帯がめぐり、渦巻き状の隆帯の剥落痕が残る。体部には、歯状工具による波状の沈線が縦方向に引かれ、その間を横方向の沈線が埋めている。

## 第5群 後期前葉～後葉 (図版66)

## 1類A (598)

598は波状口縁の波頂部に杯状の突起をもつ。口縁に沿って楕円文が描かれている。

## 1類F (593～597b・600)

593・594は沈線で施文されている。

595は高さの違う2個の突起をもつ。突起の上には、内面側に降ろされる沈線と外面側に降ろされる沈線が向かい合って引かれている。口縁には粘土帯が貼り付けられ、その上に縄文と1条の沈線が施文されている。596は大きな角状の突起が付けられている。口縁は磨消縄文で横帯が作られている。沈線で区画された無文部は、よく磨き潰されている。

597a・597bは頸部のくびれる鉢で、同一個体と推定される。597aの口縁は沈線で加飾される。口縁内面は稜線をもって、厚みを増している。597bは磨消縄文で横に連結する渦巻文が描かれる。

600は波状口縁の波頂部に丸棒状工具の側面圧痕がある。ボタン状の円盤が貼り付けられ、そこから沈線が引かれているが、左右対称ではなく、全体の文様構成は不明である。

## 第6群 後期末葉～晩期 (図版66・67)

## 1類A (601)

601は波状口縁で、波頂部から稲妻状沈線が施文されている。口縁貼り付けられた隆帯には楕円形の圧痕が連続する。圧痕の施文方法は捨て場出土の195などと同様である。口縁端部から隆帯にかけて残る剥落痕は、縦位の隆帯の存在を示すものだろう。口縁端部の内面側は削りとられるように面取されている。

## 1類B (599・602・603)

599は波頂部に大小の楕円形の円盤が重ねられたような突起が付けられている。口縁には粘土紐が貼り付けられ、その上が強クナデられる。粘土紐の波頂部にあたる部分は、低い三角形の突起になっている。

602・603は波状口縁で、波頂部から稲妻状沈線の一種とみられる沈線が引かれている。口縁には粘土紐が貼り付けられ、その上は強クナデられている。波頂部と波底部の間には粘土紐がつままれ、三角形の突起が作り出されている。口縁端部との境は磨き残され、三角形の小さな空間が生じている。603の波頂部には刺突痕がある。

## 1類C (605・606・612)

612は口縁が「く」字に外反し、体部が球形に近い形をしている。屈曲部や体部の文様帯には丸棒状工具で列点が付けられている。刺突は左から右へ向かって進められており、点と点の間には、工具を引きずった痕がわずかに残されている。わずかに残る口縁部をみると、屈曲部の列点の口縁部側に縄文帯が存在したことがわかる。体部の列点の、上の列点には上位に、下の列点には下位に、それぞれ縄文帯があるが、切り合い関係から、はじめに縄文が施文され、次に列点を付ける部分を磨き潰し、最後に列点を付けていることがわかる。上下の列点の間は、とくに丁寧に磨かれたあと、三叉文が彫去されている。通常では受口状になっている左側と、「V」字状になっている右側が入り組むところであるが、ここでは完全に独立したものとなっている。同じような例は金沢市米泉遺跡第3群土器深鉢1類にもあるが、少数のようである。

605はRLの縄文を地文として、入組三叉文が描かれている。606は沈線で三叉文が描かれている。

## 1類L (604・607)

605・607は胎土に非常に多量の雲母を含む。605は隆帯と沈線で文様が描かれ、604は沈線で円形に区

## 2. 遺跡

切られた中に縄文が充填されている。この2点については時期を特定できなかった。

### 2類A (608a・608b・611)

608a・608bは同一個体である。波状口縁で、波頂部を含む口縁端部がよく磨かれている。波頂部から波底部へ至る途中に「B」字状の突起が付けられている。文様は沈線で上下を区画された横帯内に、入り組む三叉文を連続して描くのが基本で、同様の文様帯が縄文帯を挟んで2段重なっている。

611は口縁が屈曲して開く。幅広く面取された口縁端部には粘土紐が取り付けられたあと、縄文が施文され、「T」字文が彫去されている。体部の文様帯は、平行沈線間に列点が充填されたものが上下を区画し、その間に磨消縄文で入り組み三叉文が描かれている。612の文様に似るが、こちらはしっかりと入り組んでいる。また、個々の入組三叉文同士の間は、2本の斜線によって隔てられている。文様帯は全体が赤彩されている。

### 2類C (614)

614は内外面がよく磨かれ、黒色を呈する。赤彩された文様帯との対比が鮮やかである。

### 1類K (615)

615は全面に捺糸文が施文されている。条の間隔が非常に広い。焼成後、1対の補修孔が開けられている。時期は後期末～晩期に含まれるものなのか、不明である。

### 1類H (616)

616は内外面ともよく磨かれ、口縁は弱い波状を呈する。

### 2類G (609a・609b)

609a・609bは同一個体で、口縁が直立気味に立ち上がる。口縁端部の台形状の突起には丸棒状工具の側面圧痕が6個並んで付けられている。その下の口縁部には菱形文が彫去されており、それを中心として対弧状の沈線が引かれている。文様帯は突起部分も含めて、赤彩されている。

3類 613は台付鉢の台で平行沈線が引かれている。屈曲部と台の外面に炭化物が付着している。

4類 617は平行沈線が引かれている。618は波状の沈線を2段重ねることで、網目状に見える効果が得られている。その下には縄文が施文されている。617・618は弥生土器の可能性がある。

## 土製品 (図版67)

### 土偶 (619・620)

619は脚の部分であろう。粗雑なナデで作られている。上面は接合面で破損しているようである。620は中期の中空土偶の腰の部分と推定される。沈線で渦巻きなどの文様が描かれている。

### 耳飾 (621～625)

621は沈線で「工」字文が描かれ、篋状工具の刺突も行われている。622・623は三叉文が彫去されている。624は端部に沈線が引かれ、その両脇に篋状工具の刺突が連続する。625は外面の上半分に指圧痕が連続し、端部には篋状工具による短い長さの削りが連続する。

## (3) 縄文時代の石器 (図版68～74・145～149)

### a. 分類と記述の方法

出土石器は以下のように分類する。本書所収遺跡の石器分類はこれに準じる。

石鏃 矢の先端につける石製の矢じり〔鈴木1991〕。

搔器 剥片の端部に急斜度の剥離を連続して行い、刃部を作り出すもの。

石錐 錐状の突出部をもつ石器。

両極石器 両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。2個1対の極をもつものと、4個2対の極をもつものがある。

剥片 石核からの剥片生産あるいは石器製作の過程などで生じた石のかけら。なお、使用痕のあるものや、微細な剥離痕のあるものを不定形石器に分類する例もあるが〔高橋1990ほか〕、今回は「使用痕のある剥片」などと表現し、別の分類項目は設けない。

打製石斧 「礫または大型の剥片を素材とし、大ぶりの成形・調整によって斧形に仕上げられた石器」〔藤巻1991〕。

磨製石斧 全面が研磨され、斧形に仕上げられた石器。

捺切石器 剥片の縁辺に顕著な摩耗痕があるもの。おもに砂岩製の剥片を素材とする。

台石 大形で安定性のある扁平な礫の、1面あるいは両面に凹部などの作業面をもつ石器。

砥石 断面凹状の砥面と溝状の砥面をもつ石器。

磨石類 「素材となる礫（転石）の正面および側面に磨痕・敲打痕・くぼみ痕を有するもの」〔北村1990a〕。  
使用痕の組み合わせで以下の8類に細分される〔高橋1990〕。

- A類 磨痕。
- B類 磨痕+凹痕。
- C類 磨痕+敲打痕。
- D類 磨痕+凹痕+敲打痕。
- E類 凹痕。
- F類 凹痕+敲打痕。
- G類 敲打痕。

特殊磨石 「三角柱・四角柱・楕円柱状などの河原石（転石）を素材とし、その稜の部分に細長い機能面を有するもの」〔北村1990a〕とし、使用痕の組み合わせで以下の4類に細分される。

- A類 稜上の磨面のみもの。
- B類 稜状の磨面のほかに、磨面があるもの。
- C類 稜状の磨面のほかに、端部に敲打痕があるもの。
- D類 稜状の磨面のほかに、磨面・端部の敲打痕があるもの。

上記の分類に従い記述を進める。実測図は左側を表面または背面、右側を裏面または腹面と表現する。石器の左右はとくに断わりがない限り、表面に向かったときの左右である。出土地点・石材・計測値などは観察表に記したので、そちらを参照されたい。なお、石材名のうち安山岩については、剥片石器の素材となる黒色緻密のものを「無斑晶質安山岩」として区別したほかは、「安山岩」として一括した。

#### b. 遺構出土の石器（第13表）（図版68～71・145～147）

##### S | 11 (1～9・11～13・15)

覆土から黒曜石製の搔器1点・両極石器2点・使用痕のある剥片2点・剥片3点、無斑晶質安山岩製の使用痕のある剥片1点・石核1点・剥片1点のほか、磨製石斧3点、磨石類2点、捺切石器1点が出土し

た。付近の包含層で砥石も1点出土している。

1は掻器で、背面に礫面のある剥片の打面部に刃部を作り出している。2は両極石器で2対の極をもつ。3は使用痕のある剥片で、両側縁に微細な剥離が連続する。4は剥片で礫面を打面としている。

5は使用痕のある剥片で、上下の端部に微細な剥離が連続する。6は剥片で礫面を打面としている。11は角礫を素材とする石核である。12は剥片の背面右側に急斜度の剥離が施されている。腹面右側にも大きめの剥離が施されている。背面が礫面に覆われた厚手の剥片が素材とされているので、何かの未成品であるかもしれない。

7は砂岩製の擦切具で、下端と左側縁の剥離は摩耗している。

8・9・10は磨製石斧である。8は小形で非常に薄い。刃部右側がやや傷って擦り減っている。

13・15は磨石類A類である。14は砥石であるが、裏面に凹痕がある。

#### 捨て場 (16～38)

土器の出土グリッドで、捨て場とされていたグリッドと同一のグリッドから出土した石器を、整理段階で捨て場出土の石器として抽出した。石器の器種別に分布図を作成したが、それを見ると、捨て場には黒曜石製の剥片類と砂岩製の砥石類が集中し、磨石類や石皿はあまり含まれていないことがわかる。換言すれば、石器製作に伴う屑などが多い、ということであり、「捨て場」の性格を端的に示す。

多数出土した黒曜石製の石器には、両極石器・石核・剥片・原石などある。数量分布は第10図に示すとおりである。とくに、9 F 18・19・20・23・24・25に分布が集中しており、この部分だけでも石核4点、両極石器10点、剥片類44点が出土した。黒曜石はいずれも信州産とみられる透明度の高い石である。成品はないが、分布状況などから石器製作に伴って生じた剥片類を一括廃棄したのではないかと考えられる。

16～24は黒曜石製である。16は掻器で、単剥離打面の剥片の下端部に刃部が設けられている。17・18は両極石器で、1対の極をもつ。19～21は使用痕のある剥片である。22～24は石核である。22は打面を転移して多方向に作業面を設けている。23は2対の極をもつ両極石器とみることができ、単剥離面を打面として固定し、そこから小形の剥片を生産しているようなので、石核とした。24は礫面を打面とする石核である。

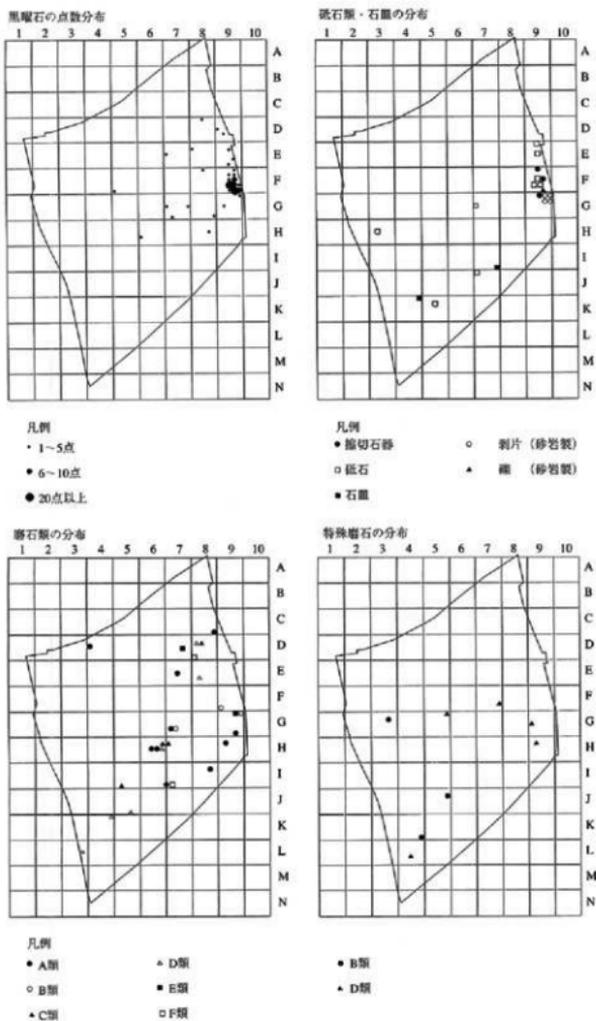
25・28は、刃部のない石斧のような形に整えられている。25は軽石を素材としており、滑らかな役割が考えられる。28は25よりは硬い安山岩を素材としている。砥石のようなものであろうか。

26・27・29は砂岩製の擦切石器である。26は剥片の下端が摩耗している。27は両面が平滑によく研磨され、縁辺は後をもって刃部が作り出されている。29はほかのものと比べると大形で、背面は摩耗している。おそらく砥石から剥離された剥片を素材としているのであろう。上面の腹面側に微細な剥離痕が連続する。下端の両面にも剥離痕が連続する。

30～33は砥石である。31・32は側面が敲打によって整えられている。32には凹痕もある。33は、40 cm程の長さがあったと推定される大形の砥石が、中程で割れたものである。2点の破片が接合しているが、大きいほうと小さいほうでは厚さが異なる。これは、大きいほうの破片が、破損後も継続して使用されたことに起因する。

36は石皿で、両面に擦り面がある。

34・35・37は磨石類である。34がB類、35がD類に分類される。



第10図 石器の器種別分布

38は特殊磨石で、D類に分類される。

S K 15 (39)

39は特殊磨石でD類に分類される。

S I 25 (42)

磨石類で、B類に分類される。

7 G P-8 (40)

40は使用痕のある剥片で、周縁に微細な剥離痕がめぐる。素材の剥片の打面は複剥離打面である。

4 D 風倒木 2 (41)

41は黒曜石製の凹基無蓋石皿である。

c. 包含層出土の石器・石製品 (図版71～74・147～149)

包含層の石器出土点数は第13表に示した。ただし、この点数には捨て場出土の石器も含まれている。石器の器種別分布は第10図に示した。大まかにとらえるなら、捨て場に黒曜石製の石器と、砥石関連の遺物が集中し、そのほかの包含層に磨石類・特殊磨石類が分布していることがみとれる。

43・44は石錐である。43は両面に剥離を施し、形を整えている。これに対し、44は先端をごく簡単な剥離で作り出すのみで、両面を丁寧に剥離している43とは対照的である。先端の摩耗痕が顕著であり、半径約1mmのドーム状にすり減り、摩耗していない部分との境は、稜線をもって区別される。摩耗面は剥離面の内側まで入り込んではいないので、対象物はあまり柔らかいものではなかったのだろう (図版149 - 顕微鏡写真 参照)。

45は両極石器で1対の極をもつ。上中島遺跡では珍しい、玉髓製の石器である。46は使用痕のある剥片で、下端に微細な剥離が連続する。素材となった剥片の打面は礫面打面である。47も使用痕のある剥片で腹面上端に剥離が連続する。

48・49は石核である。48の下面は中央から放射状に複雑な割れを起こしており、一部は左側面にまで及んでいる。上端は階段状に剥離している。49は上下左右から求心的に剥離が行われている。上下の縁辺には潰れがみられる。48・49では両極打撃が行われていた可能性がある。

50は磨製石斧である。刃部には刃こぼれとみられる剥離痕が連続する。

51は粘板岩の節理面で割れた薄い剥片を素材としている。両面が磨かれ、縁辺に剥離がめぐる。下端は刃こぼれがみられる。

52の玉は中心に穿孔されている。孔の断面が鼓形を呈するので、錐状の工具で両面から穿孔された様子が窺える。

54・55は石皿である。54の側面と裏面には敲打痕が顕著に残る

53・56・57・58は砥石である。53の砥面は筋状である。筋状の砥面の横断面は浅い弧状を呈する。57の砥面も筋状であるが、53のものより浅く、幅広で、密接している。裏面にも同様の砥面が1条ある。側面と裏面は敲打痕で覆われている。56は石材が非常に軟弱で、ほかと全く異なる。砥面も断面「V」字状

であり、異質である。おそらく金属を対象としたのであろう。縄文時代の所産ではない可能性が高い。58は平坦な砥面をもつ。

59は台石で、表面に広い擦り面をもつ。擦り面の周囲には深い剥離がめぐる。

60～69は磨石類である。60～63がA類、64・66がC類、67がD類、65がE類、68・69がF類に分類される。分類ごとの分布は第10図に示すとおりである。調査範囲東側の沢地に沿って分布する傾向がみられる。

70・71は特殊磨石で、70がD類、71がB類に分類される。特殊磨石の分布は第10図に示した。

上記のほかに、台石などの素材となるような板状の偏平な礫が、一定量出土した。これらの礫はほとんどが安山岩であり、大きさにより3分類される。

平面形10cm四方で、厚さ3～5cmのもの。14点出土し、多くは捨て場などのある調査範囲東側に分布していた。これと同じ大きさのものは、S I 11の覆土からも1点出土した。

平面形20cm四方で、厚さ5～10cmのもの。台石の素材になるような礫である。13点出土し、多くは調査範囲西側に分布していた。

平面形30cm四方で、厚さ10cm以上。台石の素材となるような礫で、59などはこれらを素材としている。3点出土した。

#### (4) 弥生時代以降の遺物 (図版74・149)

##### a. 弥生土器 (1・2)

1・2は弥生時代中期の粟林式の甕である。1は口縁端部に縄文が施文されている。口縁部には櫛描波状文がめぐり、炭化物が厚く付着している。2は櫛描波状文の下に羽状文が施文されている。内面はよく磨かれている。

##### b. 古墳時代の土器 (3～7)

古墳時代の土器が出土したグリッドを第11図に示した。調査範囲の北西にまとまっており、縄文時代の遺物分布範囲と地点が異なることがわかる。出土した土器は甕・小甕に限定される。古墳時代前期に属すると考えられ、概ね漆町編年 [田嶋1986] の8群あたりに比定される。

##### 12号炭窟

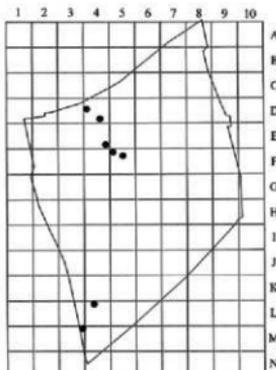
3は外面に厚く煤が付着する。

##### 5 F 風倒木

4は内面の口縁屈曲部に指押さえの痕が明瞭に残る。

##### 包含層

5は胎土に砂粒が多く含まれる。6は短く、丸みを帯びた口縁部が外側へ屈曲して開く。7はやや長めの口縁が外反する。



第11図 古墳時代の土器の分布

## 3. まとめ

## A. 遺跡の形成

上中島遺跡では縄文時代早期の土坑や縄文時代後期末葉～晩期前葉の住居跡4基・土器捨て場のほか、平安時代の炭類4基が検出された。遺構配置から、遺跡は調査範囲の東側に広がっているものと推定される。遺物は縄文時代草創期～晩期・弥生時代・古墳時代・平安時代のものが出土しており、断続的ながら、人々がこの地に去来していた様子が窺われる。

遺構のほかに風倒木痕が数多く検出された。これらの覆土からも遺物が出土しているが、多くは縄文時代早期や前期の遺物である。よって、これらの風倒木痕の多くは縄文時代早期～前期に形成されたと推定される。S I 25・26などは風倒木痕を切っているの、住居が構築される頃には、ここは風倒木痕も埋没した、比較的平坦な土地となっていたのだろう。縄文時代後期後葉～晩期前葉の遺物が多く出土した捨て場からは、ごく少数の早期～中期の遺物も出土している。捨て場が形成されていたのは沢地として周囲より若干低くなっていた場所であるが、生活用水を得るための沢に遺物を投棄するとは考え難いので、中期までは沢が存在していたものが、後期後葉以降は、水が枯れて単なる窪地と化したため、捨て場として利用されたのだろう。

## B. 縄文土器について (第12図)

1群(草創期) 発掘限界面は、矢代川岩間なだらけ堆積物と推定される。この堆積物の発生年代は約9,000年前と考えられている[小島・早津1998]。出土した爪形文土器は、爪形や器面の様子から草創期の所産と判断したが、土器の年代決定は、同じ堆積物を下限とする遺跡での種類の増加を待って、慎重に行う必要がある。

2群(早期) 早期では押型文土器が出土した。多くは山形文あるいは楕円文の単一文様・横位帯状施文であり、口縁端部にも施文される。小熊氏の福年の第2期[小畑1997b]にあたる。ただし、ほぼ完形に近い状態の562・563は上半部が帯状施文、下半分が密接施文となっており、密接施文が盛行する第3期との関係を考える上で、興味深い資料である。

3群(前期) 出土量は少ないが、前葉～末葉までの土器が出土した。前葉では、ループ縄文が施文された583などがある。中葉では、櫛歯状工具で口縁や底部に施文された、長野県の神ノ木式に比定される69がある。ほかに、半截竹管でコンパス文が描かれる579や羽状縄文で菱形を描出する582などがある。後葉～末葉では588がとくに注目される。この土器について、赤塩氏と三上氏が再提唱した長野県の「下鳥式」「晴ヶ峯式」の型式内容[赤塩・三上1994]に照らして検討する。器形は山形波状口縁のトロフィー形と俗称される形であり、晴ヶ峯式に特徴的なものである。口縁に付された突起もまた同様である。文様は平行沈線で下鳥式に見るような渦巻文が描かれ、要所にはボタン状貼付文がある。大雑把に捉えるならば、晴ヶ峯式の器形と文様構成に、下鳥式の文様要素を載せた土器、ということになる。これを、変容過程で古い要素が残存したものと理解するならば、晴ヶ峯式の高相を示す資料と捉えられるだろう。

4群(中期) 中期の土器は、前葉の590と、後葉の591・592・103があるのみで、少数である。590は

破片のため詳細は不明だが、新保・新崎式【加藤1988】の範疇で捉えられそうである。592は口縁部文様帯の喪失、磨消縄文の使用などの特徴【鈴木・山本1988】から、加曽利EⅣ式に併行すると考えられる。

5群（後期前葉～後葉）前葉では堀之内Ⅰ式に併行する597がある。後葉の土器の多くは捨て場から出土し、甗付土器【安孫子1989】に分類される一群（1類D・E、2類）が主体である。破片が多く、全容を知ることができる資料は無いが、全体に瘤の貼付が少ない点を特徴としてあげることができる。文様の描出方法には、単に磨消縄文で表現するものと、浮き彫り風に削り出すものの2者が認められた。

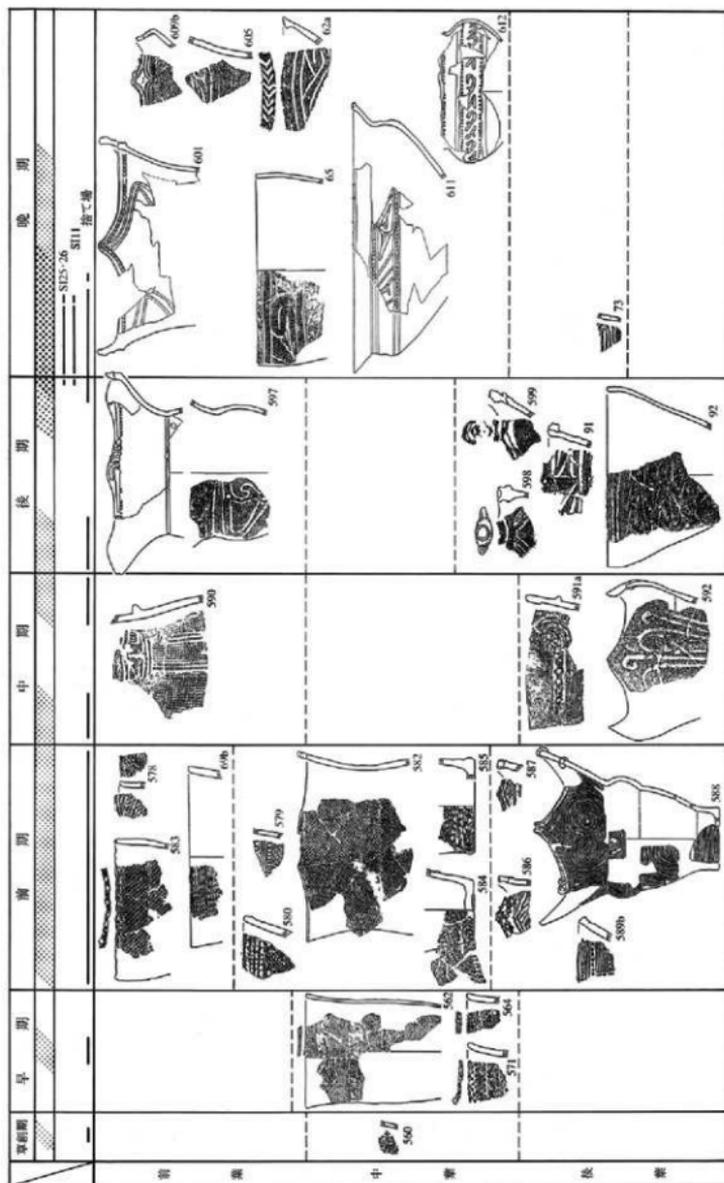
6群（後期末葉～晩期）上中島遺跡の主体をなす土器群であり、多くは長野県の福年という、「後期末or晩期最初頭」【中沢1988】～佐野Ⅰ式【永峯ほか1967】の範疇で捉えられる。一括資料に恵まれない数期にあって、当遺跡ではSⅠ11と捨て場から比較的良好な状態で資料を得ることができた（第13・14図）。ただし、該期の編年を考える上で指標とされる、大洞式の土器がほとんど存在しないため、明確な位置付けをすることは難しい。逆にいえば、大洞式の土器を組成しないことが、本土器群の特徴のひとつと言える。

SⅠ11の覆土からは、第13図に示した土器が出土した。深鉢・浅鉢・台付鉢・注口があり、深鉢と浅鉢には無文と有文のものがある。有文の土器のうち、台付鉢21・25、注口24には長野県宮崎遺跡2号住居址出土土器【横山ほか1988】にあるような、変形した三叉文が描かれている。やや崩れてはいるが、深鉢3・4・7も、文様が斜めのモチーフを指向している点では同類と考えて差し支えないであろう。2は口縁が屈曲して開き、体部に鍵の手文が描かれるという、北陸の中屋式以降の特徴を備えている。以上のような有文土器のあり方から、SⅠ11出土土器は、佐野Ⅰ式に併行する土器群であるといえる。なお、24の口縁部文様帯の工字文風の文様は、粗大な工字文とまではいかないものであり、新しい要素とは考えられるが、佐野Ⅱ式まで下げることはできないだろう。このほかにも新しい要素として、鍵の手文もみられるので、SⅠ11全体としては宮崎遺跡2号住居址より若干新しい方に位置付けられる可能性がある。これに伴う粗製深鉢を第13図下段に示した。法量に大小の差があり、大形のものには、無文のもの・輪積直の残るもの・縄文が施文されるもの・沈線により加飾されるものがある。また、口縁端部が面取の変化で装飾される浅鉢17は、口縁端部を隆帯や縄文などで加飾する、156のような浅鉢の後出的なものと推定される。

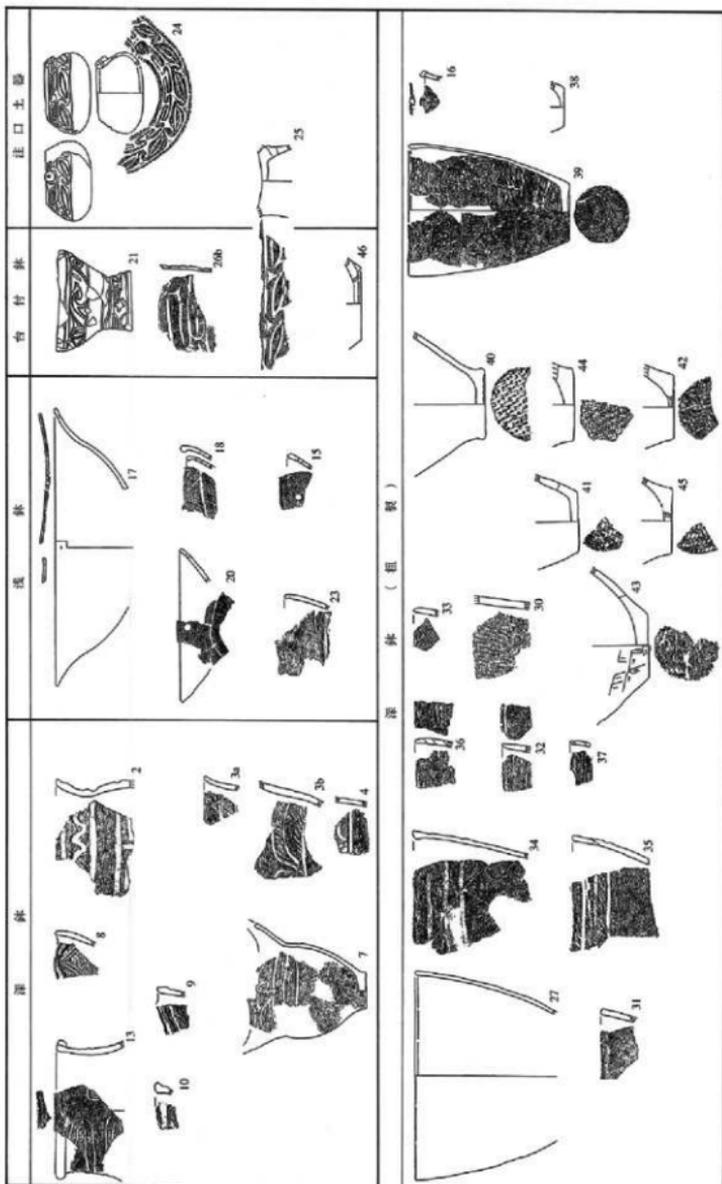
SⅠ11の土器群では、浅鉢に北陸、そのほかの有文土器に信州との共通性が見て取れ、粗製深鉢に在地的な色合いが濃く出ている。数期における当地域の土器組成の一端を垣間見ることができる資料である。

捨て場からは第14図に示す有文土器が出土した。北陸的な土器と信州方面にみられる土器があり、北陸的な土器は浅鉢に多い。粗製土器は北陸で主体をなす条痕文の土器が少なく、無文・沈線・輪積直など、信州方面との共通点が多い。両地域では客体的な、縄文が施された土器が一定量存在するのが特徴である。

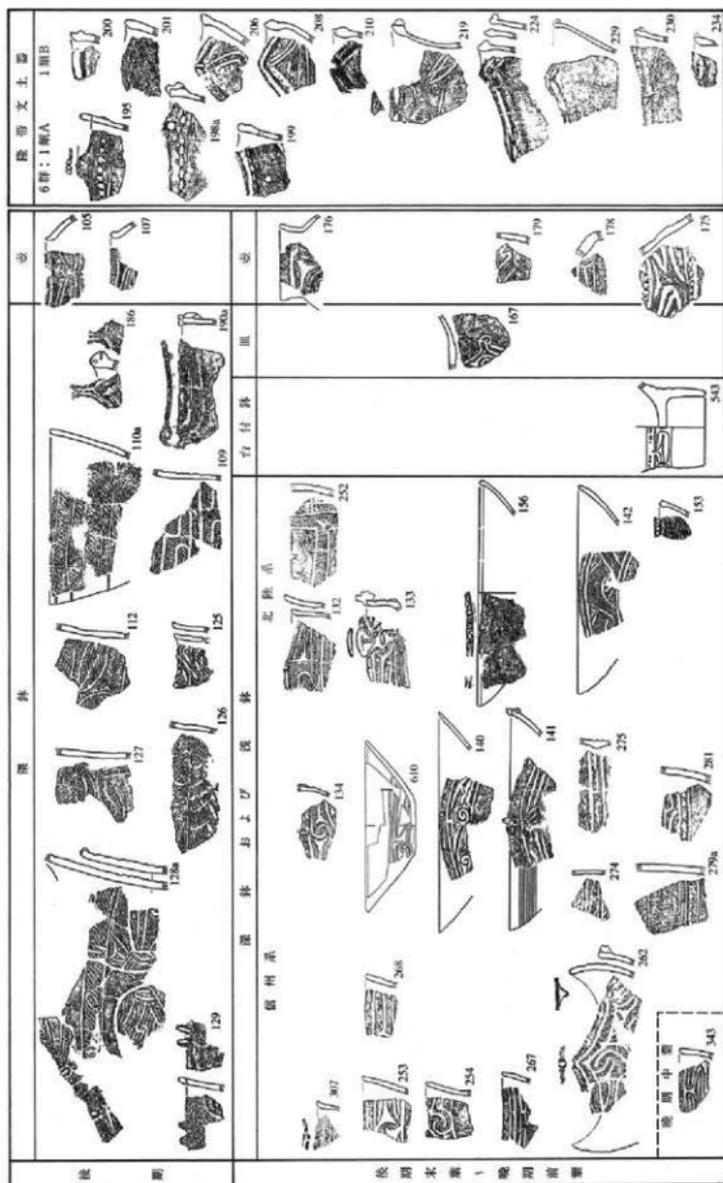
浅鉢132と深鉢252は北陸の御経塚2～3式に比定される、胎土がやや白っぽく、ほかと異なる土器である。おそらく搬入品であろう。これらが捨て場6群の最古祖であり、最新相には、大洞C<sub>2</sub>式に併行する343が当てられる。しかし、有文土器の多くは佐野Ⅰ式に併行する時期の中で捉えられる。佐野Ⅰ式【永峯ほか1967】は、設定後20年以上が経過し、その細分については幾つかの説が出されているが【永峯1981】【大原1981】、未解決の面もあるため【百瀬1992】、ここでは細分しない。このほか、口縁に隆帯文をもつ一群（1類A・B）がある。羽状沈線土器に承継を求められる土器群【百瀬1984】である。この土器群を単純に細分した場合、次のような変化を想定できる。隆帯の貼付と加飾が一体（219など）→隆帯と突起・ナデによる加飾の分離（224など）→突起の貼付とそれに伴う装飾的ナデの残存（229など）→突起の残存と装飾的ナデの消滅（234など）。これを捨て場の土器（5群も含めた）の時間幅のなかで起こった変化とするのか、同じ時間幅のなかでの多様性とするのかについては、現時点では結論を出すことはできない。



第12図 遺跡の消長 (各枠内の---は前・中・後葉の境。時間幅は考慮していない。)



第13図 S I 11覆土出土の土器



第14図 捨て場の5群・6群土器

## 第VI章 上滝ノ沢遺跡

### 1. 調査の概要 (図版75)

上滝ノ沢遺跡は、澁江川火砕流堆積物により形成された北東に伸びる小支丘上に位置する。標高はおおよそ254～256mである。

STA538から554までの4,340m<sup>2</sup>を調査対象地として、昭和62年10月12日に調査に着手した。法線に平行する形でトレンチを6本入れたが炭窯1基が検出されたほかは、遺物・遺構とも検出されなかった。そのため、炭窯の記録を作成し、10月22日までに調査を終了した。

### 2. 遺構 (図版75・150)

炭窯が1基検出された。

#### 炭窯

STA558の南西約5mのところ検出された。南側が失われているが、平面形は端部中央が半円状に突出する長方形で、長軸方向はN-9°-Wである。残存部分の大きさは、長軸306cm、短軸200cm、深さ20cmを測る。底面壁際に深さ2cm程度の浅い溝が巡る。

### 3. まとめ

本遺跡は炭窯1基のほかは、遺構・遺物は検出されなかった。そのため、遺跡の正確な時期や性格・広がりとは不明である。

## 第Ⅶ章 中の原D遺跡

### 1. 調査の概要

#### A. 調査の方法と経過 (図版76)

中の原D遺跡は雲雀山北東の山裾に位置する。標高は約255mである。現松崎地区の墓地が東側に隣接する。

中の原D遺跡は南北端を沢に挟まれていたが、地形からみて、それぞれの沢の対岸にも遺跡がある可能性が高いと考えられた。そこで、中の原D遺跡本体の調査に先立ち、北側の沢の対岸を中の原D北遺跡、南側の沢の対岸を中の原D南遺跡として、調査を実施した。中の原D北遺跡は昭和63年5月18日、中の原D南遺跡は5月20日に、それぞれ調査を行った。その結果、中の原D北遺跡では遺構・遺物とも検出されなかった。中の原D南遺跡ではSTA582+15m付近で押型土器、STA582付近で現表土直下に堆積する黒色土から縄文土器片・打製石斧1点が出土した。そのため周囲で遺構検出に努めたが、遺構は検出されなかった。そのため、5月26日までにトレンチを埋め戻し、調査を終了した。

本来の対象地である中の原D遺跡は昭和63年5月17日から、13,000㎡を対象として開始された。対象地を地形から上段(およそSTA570~573)、中段(およそSTA573~575)上段では、斜面・下段(およそSTA575~579)に分けて、それぞれにトレンチを入れた。上段のトレンチでは5月18日、平安時代の土師器が出土した。その地点の土層を詳細に観察したところ、土師器が出土するのは現表土直下に堆積する黒色土中であり、その下位には、木炭片を含む黄色土粒混じりの黒色土が堆積していることがわかった。5月31日にはトレンチ壁面に、覆土に焼土が入った遺構断面が現われた。中段と斜面・下段のトレンチでは遺構遺物とも検出されなかった。

6月1日から重機を用いて、上段の表土除去を開始した。2日にはトレンチの土層断面で確認されていた焼土の入った遺構を平面で確認した。

6月8日以降、作業員による発掘を開始し、10日までに平安時代の住居跡と縄文時代の土坑数基が検出された。6月16日にはグリッドを設定し、翌日から図面作成にとりかかった。その後は遺構精査と記録作成を並行しながら進め、7月7日には調査をほぼ終了した。

#### B. グリッドの設定 (図版77)

グリッドはSTA572と東西軸杭を結んだ線を東西方向の軸線とし、この線から90°振った線を南北方向の軸線として設定した。グリッドは10m四方に区切り、東西方向を西から東へA・B・C・・・、南北方向を北から南へ1・2・3・・・とし、各グリッドはこれを組み合わせて「1A」などと呼称した。なお、調査中はSTA572(5D杭)を中心に、調査区を便宜的に南東・南西・北東・北西に4分割した。

## 2. 遺跡

### A. 基本層序 (図版77)

基本層序は以下の通りである。

I層：褐色土。現表土である。

II層：真黒色土。場所によっては、しまりの強弱で上下2層に細分される。

III層：黄色紋混じりの黒色土。

IV層：チョコレート色土に小礫が多く混じる。III層とV層の漸移層。

V層：黄色泥流。

遺物包含層はII～IV層、遺構確認面は平安時代の住居跡がII層上面、そのほかの遺構がV層上面である。

### B. 遺構

#### (1) 概要 (図版77)

住居跡4基と、土坑が5基検出された。住居跡は近年の耕作により、上部が失われていた。土坑はV層上面で検出された。多くは縄文時代に属するとみられる。このほか、6Cでは黒色土中で硬化した面が検出された。周囲から平安時代の土器細片がまとまって出土しているのも、ここも平安時代の住居跡の可能性がある。

遺構の分布をみると、平安時代の住居跡が調査範囲西側に、土坑が東側にまとまる。

#### (2) 各説 (図版77・78・151)

##### a. 住居跡 (図版77・78・151)

###### S I 1 (図版77・151)

5A5・10に位置する。西半分は調査範囲外であるため全容は不明である。黒色土中に住居が掘込まれている上、覆土も黒色土であったため、正確な掘り形の把握は困難であった。土層断面において、硬化した床面と地床炉が検出された。ピットも2基検出されたが、S I 1に伴うものなのかは不明である。床面とみられる6層の上位に堆積した4層から平安時代の土器が多く出土した。出土遺物から、S I 1は平安時代の住居跡であると考えられる。

###### S I 2 (図版77・151)

S I 1の南側で検出された。III層下面で比較的安定した面が捉えられたこと、平安時代の遺物がまとまって出土したことから、5A20・25のあたりをS I 2とした。S I 1との切り合い関係は不明である。S I 1同様、平安時代の住居跡と考えられる。

## 2. 遺跡

### S I 3 (図版78・151)

7B3において炉跡とみられる土坑が検出され、その南東側の5m×3mほどの範囲に床面と推定される硬化した面を確認した。西側は確認調査のトレンチにより削平されてしまったので、全容は不明である。炉跡は黒色土中から掘込まれており、V層まで達する。黒色土の壁面は焼けて黄赤変しており(4層)、その上に炭化物粒を含む黒色土が堆積している(3層)。さらに赤色粒子の混じる黒色土が堆積し(2層)、最上部を赤色焼土が覆っている(1層)。炉内の焼土中から被熱した安山岩の破片と土師器碗・長甕?の細片が出土したことから、S I 3は平安時代の住居跡と考えられる。

### S B 1 (図版77)

4E・5Eに位置する。平面形は細長い台形で、長軸約5m、短軸は北辺が約2.3m、南辺が2mを測る。長軸は約11度西偏している。柱穴は長軸方向に3対が並んでおり、個々の柱穴の大きさは、直径40cm～50cm、深さ約20cmである。北寄りに直径約1mの地床炉(S K 3)が存在する。東辺の延長線上のピットもS B 1の柱穴になるかもしれないが、対になる西側の柱穴が検出されていないので断定できない。周辺から遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。周囲の土坑の多くが縄文時代に属するので、S B 1も縄文時代に属する可能性がある。

#### b. 土坑 (図版78・151)

##### S K 1 (図版78)

6C 21・22に位置する。直径約80cm、深さ約12cmの皿状の土坑である。覆土は真黒色土が主体である。1層上面で縄文土器(図版79-2)が出土した。

##### S K 2 (図版78)

5D 19・24に位置する。南西側に攪乱がかかっているが、直径約70cm、深さ25cmの円形の土坑である。覆土はしまりのある真黒色土である。遺物は出土していない。

##### S K 4 (図版78)

4E 9に位置する。楕円形の皿状の土坑で、長軸100cm、深さ26cmを測る。覆土は真黒色土で、直径5～10cmの糠が多く入っている。縄文土器片1点が出土した。

##### S K 5 (図版78)

3E 11・12に位置する。直径70cm、深さ30cmの円形の土坑である。覆土は真黒色土である。縄文土器(図版79-3)が出土した。

##### S K 6 (図版78)

3E 7に位置する。直径120cm、深さ32cmの円形の土坑である。覆土は真黒色土である。遺物は出土していない。

## C. 遺物

### (1) 概要

中の原D遺跡では、縄文時代早期から後期の土器と、古墳時代の土師器、平安時代の土師器・須恵器が出土した。出土量は少なく、深箱に1箱程度である。

### (2) 縄文時代の土器 (図版79・152)

#### 18 トレンチ風倒木 (1)

1は押型土器の底部付近の破片である。槽円文が横位に密接施文されるが、底部近くでは縦位に施文されているようである。

#### SK1 (2)

2は内面が幅3mmほどの工具で磨かれ、外面に荒く条痕が付けられている。田戸上層併行の土器であろう。

#### SK5 (3)

3は縄文LRが施文されている。

#### 包含層 (4～9)

4は波状口縁の薄手の土器である。口縁端部には爪形の刺突が連続する。口縁には波頂部を中心に沈線で山形が描かれている。5は波状口縁で、波状に沿って、角棒状工具による結節沈線が引かれている。地文に条痕が施文されている。6は貝殻腹縁文が施文されている。4～6は田戸上層に併行する土器であろう。

7は中期の土器で、隆帯上に丸棒状工具により連続して圧痕が付けられている。

8は沈線で文様を描いたあと、LRの縄文を充填している。瘤付土器の仲間であろう。

9は外反気味の口縁に平行沈線が引かれている。後期後半に属するものであろう。

### (3) 古墳時代以降の遺物 (図版79・152-10～15)

10は古墳時代前期の小甕で、外反する口縁部にハケ目が残る。

11は須恵器長頸蓋の口縁部、12は甕の体部である。12の内面には同心円の当て具痕、外面に格子目タタキ具が残る。

13～15はS I 1から出土した。13は土師器鍋である。ロクロ成形後、底面がタタキ出されており、内面に無文当て具痕、外面に平行縦文タタキ具痕が残る。口縁は体部から直線的に伸び、体部との境に強いナデが加えられている。14は土師器小甕で、口縁部は直立する。体部にはロクロナデの痕が顕著に残る。底面は回転糸切り後、周囲にはみ出た粘土がナデつけられている。15は土師器無台甕で、内面に煤が付着する。灯明皿に転用されていたと考えられる。

### 3. まとめ

#### A. 縄文時代

遺構は、土坑と縄文時代に属すると推定される掘立柱建物1基が検出された。

遺物は、土器のみの出土である。土器は少量であるが、早期から後期のものがある。早期には中葉の田戸上層併行の土器(2・4～6)、後葉の押型文土器(1)がある。6は沈線と貝殻腹線文が施文されているが、このような土器は糸魚川市岩野E遺跡[高橋ほか1986]に類例がある。

#### B. 平安時代

平安時代の住居跡が3基検出されたが、近年の耕作による擾乱を受けており、遺存状況はあまり良好とは言えない状況であった。出土遺物が少量であるため、それぞれの住居跡の詳細な時期は不明である。S I 1出土遺物(13～15)については、タタキで成形する土師器鍋の存在や、無台椀・小甕の形態から、今池遺跡群Ⅷ期子安段階[坂井1984]に相当するものと考えておきたい。

遺構配置から、遺跡は調査範囲の南側および西側に広がっている可能性が高い。

## 第Ⅷ章 窪畑B遺跡

### 1. 調査の概要

#### A. 調査の方法と経過 (図版80)

窪畑B遺跡は、雲雀山東方の片貝川に向かって緩く傾く小尾根の末端付近に位置する。標高は約262 mである。

窪畑B遺跡は当初、遺跡の存在も知られておらず、隣接する窪畑A遺跡の調査に際して、偶然発見された遺跡である。

昭和63年6月21日、窪畑A遺跡の調査に着手したが、この遺跡は元来遺物散布が希薄であり、トレンチの調査でも遺構・遺物は検出されなかった。ところが、あわせて実施した隣接地 (STA593付近) の調査で、縄文時代前期・中期の土器がまとまって出土したほか、炭窯が検出された。そのため、ここを窪畑B遺跡として、およそSTA592～593の範囲、805 mを調査することになった。

窪畑B遺跡の表土除去は6月29日から重機を用いて進められ、30日には現表土下に埋没谷があることがわかった。縄文土器はこの埋没谷の覆土である黒色土上面に存在し、炭窯は尾根部黄色土上面で検出されることが明らかとなった。この時点で、縄文時代の遺構は炭窯などに破壊され残っていないことが予想された。

7月中旬には、検出された炭窯が、重複して数回作り替えられている様子が観察された。下旬には包含層発掘が進み、縄文時代前期の遺物が出土し始めた。7月27日までに調査をほぼ終了し、28日に撤収した。

#### B. グリッドの設定

グリッドは地形に合わせて任意に設定した。1グリッドを5 m四方とし、グリッドの呼称は南北方向に北から南へ算用数字、東西方向に西から東へアルファベットを付し、その組み合わせで「1A」などとした。グリッドの南北軸は、真北から約28°東偏する。

### 2. 遺跡

#### A. 基本層序 (図版81)

基本層序は次の通りである。

I層：暗茶褐色土。細粒で粘性がある。現表土。

II層：赤褐色土。細粒でサラサラしている。炭化物の粉を含む部分がある。

III層：真黒色土。

IV層：黒黄色土か、チョコレート色の漸移層。

V層：黄色泥流。礫を多く含む。

遺物は主にIII層から出土している。

## B. 遺構 (図版 81・153)

炭窟が1基検出された。

### 炭窟

3B・4Bに位置する。南西隅に攪乱を受けていたが、平面形は長方形で、両端に突出部をもつ。突出部は南側のほうが大きく張り出し、その底面は被熱している。底面はほぼ水平で、溝をもつ。底面は中央の溝周辺を中心に被熱しており、黄赤変している。覆土の炭層の堆積状況から、少なくとも3回の作り替えが行われていたと推定される。作り替えは南から北へ進んでおり、それぞれの炭層直下には壁面とみられる粘土層が存在する。最も新しい炭窟の覆土にはKG-cとみられる火山灰層が存在しているため、この炭窟の構築時期は郷清水遺跡の炭窟などと同じ頃であると考えられる。

炭窟はII層上面から掘込まれていた。II層は窪畑B遺跡の載る尾根全体に分布するが、炭窟周辺部に限り炭化物粒がブロック状に混入している。また、この部分のみ平坦である。このことから、II層が炭窟構築のために整地された面である可能性が考えられる。

遺物は覆土から縄文土器片が出土したのみである。

## C. 遺物

### (1) 概要 (図版 82)

遺物は縄文時代早期から後期の土器・石器が深箱に3箱出土した。遺物は平面的に比較的多くまとって出土し、時期ごとに分布域が異なるということにはなかった。

### (2) 縄文時代の土器 (図版 83・84・154-1-16)

1は押型文土器で、山形文が施文されている。

2は胎土に多量の繊維を含む深鉢で、口縁に結状体圧痕が連続する。結状体の側面を横方向に連続して押し付けて1条の線を描き、口縁部文様帯の下端を区画している。口縁部文様帯の中には斜めの圧痕を2段にわたって付けている。上の方が傾斜がきつい。口縁端部にも間隔をおいて圧痕が付けられている。口縁部には焼成前の穿孔が1か所認められる。体部は無文で、磨きに近いナデで仕上げられているが、ナデ痕や胎土の繊維の痕跡が見られる。また、輪積に伴う指押さえの痕が所々に残されている。内面は粗いナデしが行われていないため、胎土の繊維の痕跡が非常に顕著に認められる。

3・4は薄手の土器で、内面に指押さえの痕が明瞭に残る。胎土の繊維痕が多く見られるため文様は不鮮明であるが、無筋の縄文が施文されているようである。

5・6は胎土に繊維を多量に含む。文様はR Lの縄文が多方向に施文されている。

7は底部近くに刺突角が重なる。前期に属する土器であろう。8は胎土に繊維が含まれるが、内面はよく磨かれており、器面に繊維痕はほとんど認められない。外面は口縁部に半截竹管状工具による平行沈線が、2段引かれている。

10はRLとLRの原体を交互に施文することで、羽状縄文となっている。

9はバケツ形の深鉢で、口縁部にめぐらされた粘土帯が鋸歯状に削り出されている。口縁部文様帯は、横走する沈線の下端が区切られ、レンズ状のモチーフが半截竹管文の沈線により描かれている。レンズ状モチーフの中心と、個々のモチーフの間の上下にボタン状の貼付文が施されている。残存部からの計算では、レンズ状モチーフは5単位描かれていたと推定される。体部にはLRとRLのループをもつ原体を交互に用いて、羽状縄文が施文されている。

11はRLの縄文が縦方向に施文されている。中期に属すると推定される。

12は隆帯が貼り付けられ、おそらく渦巻きなどの文様を描き出していたのであろう。隆帯より下は櫛歯状工具で平行沈線と波状沈線が交互に描かれている。中期後半の土器である。

13は一对の橋状把手をもつ。一方の把手はキノコのように上が皿状になっている。口縁部文様帯は隆帯によって8分割されており、1区画おきに縄文が充填されている。把手で隠れてしまう器面にも縄文が施文されているので、隆帯の貼り付け→縄文施文→把手の取り付けの順で施文が進んだことがわかる。体部には波形のような渦巻きが磨消縄文で表現されている。沈線で区画された部分は丁寧に磨かれている。後期初頭の開沢類型〔鈴木1991〕に類する土器であろう。

14は口縁部と胴部の境がくびれる、波状口縁の深鉢である。口縁内面は段をもって厚みを増している。口縁端部には丸棒状工具の側面直痕が連続する。口縁端部に沿って沈線が1本引かれ、波状部分では横方向に引かれた沈線と交わり、波頂部に頂点をもつ三角形となっている。くびれ部に2条の沈線が引かれ、その上下に羽状沈線が2段ずつ施文される。正確には、異方向の平行沈線の始点を少しずつ横にずらしながら施文した結果、羽状になっている。そのため、場所によっては羽状沈線というより、稲妻状沈線が屈局部で途切れたような印象を受ける。後期中葉に属する土器であろう。

15は口縁部に2本の沈線が平行してめぐる。16は無文の注口土器である。注口部分は丸棒の周りに粘土板を巻付けて別に作り、体部に差し込んでいる。15・16は後期～晩期の土器であろう。

### (3) 縄文時代の石器 (図版85・155-1~13) (第V章2.C.(3)a.参照)

石器は包含層から出土した。剥片石器は少なく、磨石類が大部分を占める。図版82に分布を示した。

1は標面を打面とする剥片の縁辺部に微細な剥離痕が連続する。2は厚手の剥片の両端が欠損したものである。3は両極石器で2対の極をもつ。上下の極にはパンチ痕が残る。5も両極石器で、1対の極をもつ。下端の原石面にパンチ痕が残る。

4は大形の剥片を素材とする打製石斧である。加工は荒く、周縁に大きめの剥離痕が施され、形が整えられている程度である。上端を除く縁辺に潰れが見られる。

6~10は磨石類である。8・9がA類、6・10がB類、7がC類に分類される。11・12は特殊磨石で、11がD類、12がB類に分類される。13は石皿である。

### 3. まとめ

窪畑B遺跡では炭竈1基のほか、遺構は検出されなかった。

遺物は縄文時代のもので出土したが、幅広い時期のものが15m四方の範囲からまとまって出土しており、住居などが存在した可能性は低い。過去に西側の畑で大量の土器・石器が採集されたという地元の人の談話に基づけば、調査範囲は遺跡端部の捨て場のような場所であった可能性が高い。よって、遺跡は西側に広がっていると推定される。

出土した土器は少量だが、早期から晩期のものがある。早期は押型文土器(1)と絡条体瓦痕文土器(2)がある。早期末葉の絡条体瓦痕文土器は、妙高高原町大堀遺跡[寺崎1996]でも出土している。絡条体瓦痕文土器については施文の種類と施文部分から3段階の変遷が考えられている[綿田1996]。本遺跡の2は絡条体瓦痕文を直線的に多段施文する点、体部と内面の条痕を失っている点から、大堀遺跡のものよりは新しく、中段階に位置付けられる資料と考えられる。

前期の9は、口縁を巡る鋸歯状印刻文と体部に施された縄文から、鍋屋町式土器に併行するものと考えられる。口縁部文様帯を巡る、平行沈線で描かれたレンズ状のモチーフとボタン状貼付文類似の文様は、南関東の所謂砺波c式段階に位置付けられている埼玉県ゴシン遺跡[並木1978]4住出土土器にみられる[細田1993]。よって、鍋屋町式土器の細分段階[寺崎1993]に当てはめれば、2段階以降に位置付けられよう。

窪畑B遺跡では、幅広い時期の遺物が少数出土したに過ぎず、時期ごとの組成などを明かにすることはできなかった。しかし、個々の遺物は比較的残存状態が良好であるため、各時期の土器様相の一端を知ることができた。

## 第Ⅷ章 自然科学分析

### 1. 試料について

今回報告する遺跡では、平安時代の炭窯が多数検出された。炭窯は遺跡間で共通する形態をしており、焼山起源の灰白色火山灰KG-cが覆土に堆積している例が複数の炭窯でみられたことから、ほぼ同時期に構築されたと考えられる。

上記のような炭窯に対して、次の科学分析を行った。

①樹種同定：炭窯の形態とそこで焼かれた樹種との間に相関関係があったのか、炭窯の形態には関わりなく地域に通常の炭が焼かれていたのか、という点を検討する。

②<sup>14</sup>C年代測定：炭窯の構築年代を検討する。

分析に用いた試料は、①が報告書作成時に整理担当者が分析者に送付したものであり、②が発掘調査時に発掘担当者が分析者に送付したものである。

### 2. 樹種同定分析

植田弥生(パレオ・ラボ)

#### A. はじめに

平安時代の炭窯から検出された炭化材の樹種同定結果を報告する。当遺跡は新潟県中郷村に所在し、標高250～350 mの妙高山麓に位置する。炭窯の形態とそこで焼かれた樹種との間に相関関係があったのか、炭窯の形態には関わりなく地域に通常の炭が焼かれていたのかなどを検討することを目的に、各炭窯から無作為に抽出された各1点ずつ(一部2点)の炭化材を樹種同定した結果を報告する。試料は、郷清水遺跡の19基の窯から出土した炭化材19試料、窪畑B遺跡の1試料、松崎遺跡の1試料、上中島遺跡の4基からの4試料、合計25試料である。

#### B. 炭化材樹種同定の方法

炭化材から横断面(木口)・接線断面(板目)・放射断面(柃目)の3方向の破断面を作り、走査電子顕微鏡で組織を拡大し同定した。横断面は手で割り、接線断面と放射断面は片歯剃刀を各断面の方向にそって当て弾くように割った。この3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM-T100型)で観察と写真撮影を行った。

### C. 結果

同定結果の一覧を表1に示した。各窯の炭化材から無作為に抽出された25試料29点の炭化材は、すべてブナ属であった。

郷清水遺跡の炭化材の形状は、22点のうち11点が丸木であり、そのほかのものも樹心部から半分に割れた状態や横断面が樹心部から原状に割れた状態のものが多くいずれも樹芯部に近い材で、材の直径は1~6cmのものが多かった。窪畑B遺跡・上滝ノ沢遺跡・上中島遺跡の炭化材の形状は、角状や不定形の破片がほとんどでその放射方向の径は1.3~2.5cmであった。ただし上中島遺跡の試料24は横断面が樹芯から扇状に割れたものであり、推定直径は約4cmであった。4遺跡のどの試料も大径木から割り出された材というよりは、比較的径の細い材を炭にしていたように見受けられた。

炭化材は樹皮が付いていないものや樹芯部が欠けているものがほとんどであるので炭化材の年輪数が伐採した木の樹齢とは直接対応しないが、どの程度の樹齢の木または枝が利用されていたかを見る目やすとして、できる限り年輪数を記録した。年輪数が10以下のもの(試料3, 6, 15)は少なく、18年輪以上が数えられた炭化材が半数以上の18点あり、最高数値は窪畑B遺跡の炭化材で放射径が2.5cmで40年輪が数えられた。

樹皮が付いていた炭化材が6試料あり、そのうち3試料については樹皮の内側に接した最終形成部が確認できた。試料1(第12図 写真6)と試料11(第12図 写真2)は小型の管孔が数層形成され早材部で終わっていたことから、晩材形成に移る前の夏頃に伐採されたと推定される。試料20(第12図 写真7)は非常に小型の管孔が疎らに分布する晩材部が形成されていたことから、秋以降から翌年の春前に伐採されたと推定される。この結果からは、伐採の時期は一定していなかったようである。

以下にブナ属と同定した根拠を記載する。

ブナ属 *fagus* ブナ科 図版1

丸みを帯びた小型の管孔が密に徐々に径を減じ、晩材部では極めて小型となり分布数もやや減少する散孔材。道管の壁孔は交互状から階段状で、穿孔は単穿孔と横棒数が10~20本の階段穿孔がある。放射組織は異性、1~3細胞幅のものや幅広く細胞高が高い広放射組織があり、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は冷温帯域の極相林を構成する主要樹種である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。

### D. まとめ

今回樹種を比較検討した4遺跡は、妙高山麓の標高約250~350m前後に位置し、最も北に位置する郷清水遺跡と最も南に位置する窪畑B遺跡との距離は約2.75kmであり、4遺跡は同様な植生環境下にあったと考えられる。そして立地から推測しても、ブナ属が豊富でそのほかにも種類数が豊富な冷温帯の落葉広葉樹林であったと想定できる。このような豊かな植生を背景に多種多様な樹種が焼かれていたのではないかと予想していたが、25基の窯から無作為に抽出された試料のすべてがブナ属であったことから、炭窯の炭材としてブナ属が強く選択使用されていた様子が伺えた。ただし今回は当地区の全体像を把握するために各窯から各1試料のみを同定したので、偏りが出た可能性もあり今後各窯から複数の試料を検討してみ

る必要がありそうである。良質の炭のとしてはコナラ・ミズナラ・クスギが有名であり、当地域にもこれらの樹種が生育していたと予想される中で検出されたのがブナ属だけであった結果は特異と言える。

当遺跡から約11km南に位置する妙高山の東麓に位置する関川谷地遺跡からは、平安時代の焼失堅穴住居の構築材と炭窯の燃料材の炭化材樹種が報告されている〔バリノ・サーヴェイ株式会社1998〕。住居構築材6点はケヤキとキハダであったのに対し、1号炭窯から出土した15点の木炭はすべてコナラ節で、用途に合わせた木材が選択されていたことが示された。関川谷内遺跡の立地環境は当遺跡とあまり変わらないと思われ、コナラ節もブナ属も冷温帯広葉樹林の主要な構成分類群であるが、関川谷内遺跡と当遺跡群では炭窯の樹種は明瞭に異なっていた。もし炭を焼く時の樹種選択性がこの2遺跡で異なっていたことが不変的であったならば、各遺跡の炭窯の用途や目的と関連付けて検討する必要があるのではないだろうか。

富山県射水郡小杉町の丘陵地に立地する平安時代の炭窯と製鉄遺構から出土した炭化材樹種が報告されている〔島地・林1983a,b、林1988〕。その結果は当遺跡群や関川谷内遺跡とは異なり、クリ・サクラ属・スルア・クマシラ属・コナラ類・ヒサカキなど多種多様な樹種が検出され、炭化材の形状からも周辺に生育していた樹木の径の大小を問わず伐採し焼いていたと推測されている。また林〔1988〕は堆土遺跡の結果から、クリは炭窯から多量に検出されるが製鉄炉ではコナラ節が多くクリはほとんど検出されなかったことから、製鉄用の炭としてコナラ類が適していると言われる通説を裏付けるとしている。事例が少ない時点で比較するのは早計かもしれないが、妙高山麓の炭窯では単一の樹種が検出される傾向が強いのにに対し、小杉町の丘陵地の炭窯では複数種が検出されるという違いが見られた。このことから、検出される樹種が多い炭窯と単一樹種のみが検出される炭窯があるのは、生産していた燃料炭の使用目的の違いがあったことを反映しているのではないだろうか。地域がだいぶ離れるが、群馬県富岡市野上の奈良・平安時代の炭窯2基の炭化材36試料はすべてクスギ節であり、樹種が強く選択されていた〔鈴木・能城1991〕。このように単一樹種が強く選択使用されていた炭窯の事例はほかにもあるようで、鈴木・能城〔1991〕も指摘しているようにある目的に応じて炭を生産していた可能性が考えられる。

## 《引用文献》

- バリノ・サーヴェイ株式会社 1998 「関川谷内遺跡の自然科学分析」『関川谷地遺跡Ⅰ』55-59 図版63  
(財)新潟県歴史文化財調査事業団
- 島地 謙・林 昭三 1983a 「出土木炭の樹種」『七美・太閤山・高岡碑内遺跡群発掘調査概要』68-76  
富山県教育委員会
- 島地 謙・林 昭三 1983b 「出土木炭の樹種」『黒民公園太閤山ランド内遺跡群調査報告(2)』57-61  
図版第37-39 富山県教育委員会
- 鈴木三男・能城修一 1991 「野上塩之入遺跡出土炭化材の樹種」『野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡』132-135  
(財)群馬県歴史文化財調査事業団

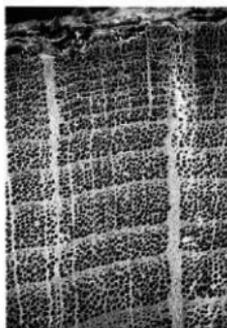
第1表 上新バイパス関係遺跡炭塵出土炭化材樹種同定結果

| 試料NO. | 遺跡   | 遺構          | 樹種  | 形状   | 横断面・(cm) | 計数年輪 | 樹皮 |   |
|-------|------|-------------|-----|------|----------|------|----|---|
| 1     | 郷清水  | '87-1号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 1.3  | 8  | 有 |
| 2     | 郷清水  | '87-3号炭窟    | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 4.0  | 18 | 無 |
| 3-①   | 郷清水  | '87-4号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 2.4  | 12 | 無 |
| 3-②   | 郷清水  | '87-4号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 1.1  | 11 | 無 |
| 4     | 郷清水  | '87-5号炭窟    | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 4.0  | 28 | 無 |
| 5     | 郷清水  | '87-6号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 1.3  | 16 | 無 |
| 6     | 郷清水  | '87-7号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 1.5  | 10 | 無 |
| 7     | 郷清水  | '87-8号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 2.0  | 11 | 無 |
| 8     | 郷清水  | '87-10号炭窟   | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 2.5  | 19 | 有 |
| 9     | 郷清水  | '87-11号炭窟   | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 3.0  | 36 | 無 |
| 10    | 郷清水  | '87-12号炭窟   | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 6.0  | -  | 無 |
| 11    | 郷清水  | '87-13号炭窟   | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 3.0  | 23 | 有 |
| 12    | 郷清水  | '87-14号炭窟   | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 2.5  | 32 | 有 |
| 13    | 郷清水  | '88-B号炭窟    | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 5.0  | 19 | 無 |
| 14    | 郷清水  | '88-G号炭窟    | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 2.5  | 35 | 無 |
| 15-①  | 郷清水  | '91-12F炭窟   | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 2.5  | 28 | 無 |
| 15-②  | 郷清水  | '91-12F炭窟   | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 2.0  | 22 | 無 |
| 16    | 郷清水  | '91-1号炭窟    | ブナ属 | 丸木   | 直径       | 1.5  | 9  | 有 |
| 17    | 郷清水  | '91-2号炭窟    | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 3.0  | 15 | 無 |
| 18    | 郷清水  | '91-12G炭窟   | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 3.0  | 28 | 無 |
| 19    | 郷清水  | '91-15B・C炭窟 | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 4.0  | 25 | 無 |
| 20    | 窪畑B  | 炭窟          | ブナ属 | 破片   | 放射径      | 2.5  | 40 | 有 |
| 21    | 上滝ノ沢 | 炭窟          | ブナ属 | 破片   | 放射径      | 1.3  | 30 | 有 |
| 22    | 上中島  | 12号炭窟       | ブナ属 | 破片   | 放射径      | 1.5  | 16 | 無 |
| 23    | 上中島  | 14号炭窟       | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 4.0  | 19 | 無 |
| 24    | 上中島  | 28号炭窟       | ブナ属 | 丸木破片 | 推定直径     | 4.0  | 28 | 無 |
| 25    | 上中島  | 32号炭窟       | ブナ属 | 破片   | 放射径      | 1.5  | 24 | 無 |

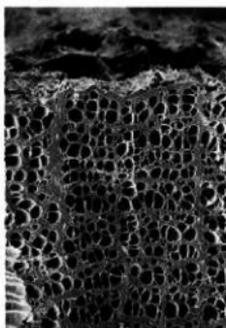
丸木破片：外形から丸木であることが判るが一部が欠けているもの。

放射径：樹芯部からの位置が推定できない破片の放射方向の長さ。

第15図 上新バイパス関係遺跡炭燻出土炭化材樹種



1. プナ属 (横断面)  
No.11 bar: 1.0 mm



2. プナ属 (最終年輪早材部)  
No.11 bar: 0.1 mm



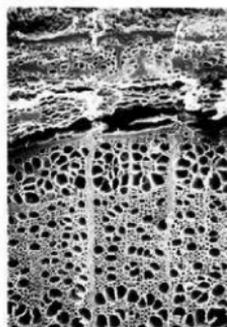
3. プナ属 (接線断面)  
No.11 bar: 1.0 mm



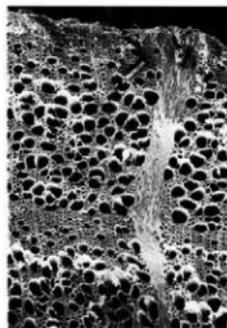
4. プナ属 (放射断面)  
No.11 bar: 0.1 mm



5. プナ属 (放射断面)  
No.1 bar: 0.1 mm



6. プナ属 (最終年輪早材部)  
No.1 bar: 0.1 mm



7. プナ属 (最終年輪晩材部)  
No.20 bar: 0.1 mm

## 3. 学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

1989年3月28日

新潟県教育委員会殿 1988年10月28日受領しました試料についての年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には $^{14}\text{C}$ の半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は $\beta$ 線の標準偏差 $\sigma$ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代です。また試料の $\beta$ 線計数率と自然計数率の差が $2\sigma$ 以下のときは $3\sigma$ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してあります。また試料の $\beta$ 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が $2\sigma$ 以下のときには、Modernと表示し、 $\delta^{14}\text{C}\%$ を付記してあります。

第2表 放射性炭素年代測定結果

| Code No.  | 試料   | 年代 (1950年よりの年数)             |
|-----------|--|-----------------------------|
| Gak-14042 | Charcoal from 窪畑B遺跡<br>No. 1 630719 炭塵         | 810 $\pm$ 80<br>A. D. 1140  |
| Gak-14043 | Charcoal from 窪畑B遺跡<br>No. 2 630722 炭塵         | 870 $\pm$ 100<br>A. D. 1080 |
| Gak-14044 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 3 880611 '87-B号炭塵   | 410 $\pm$ 90<br>A. D. 1540  |
| Gak-14045 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 4 880609 '87-B号炭塵   | 1180 $\pm$ 90<br>A. D. 770  |
| Gak-14046 | Charcoal from 上滝ノ沢遺跡<br>No. 5 871020 炭塵        | 750 $\pm$ 90<br>A. D. 1200  |
| Gak-14047 | Charcoal from 上滝ノ沢遺跡<br>No. 6 871020 炭塵        | 940 $\pm$ 90<br>A. D. 1010  |
| Gak-14048 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 7 870930 '87-2号炭塵   | 880 $\pm$ 90<br>A. D. 1070  |
| Gak-14049 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 8 870930 '87-10号炭塵  | 1180 $\pm$ 90<br>A. D. 770  |
| Gak-14050 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 9 870928 '87-7号炭塵   | 1030 $\pm$ 80<br>A. D. 920  |
| Gak-14051 | Charcoal from 郷清水遺跡<br>No. 10 871023 '87-14号炭塵 | 1050 $\pm$ 90<br>A. D. 900  |

以上  
木越邦彦◎

## 要約

### 西福田新田遺跡

1 西福田新田遺跡は中頸城郡中郷村大字西福田新田1226ほかに所在する。遺跡は妙高山麓北東裾を流れる、渋江川左岸の北向きの緩斜面上に立地する。標高は204～215mである。南側は渋江川に面する崖面になっている。

2 発掘調査は国道18号上新バイパス建設に伴い、昭和62年8月19日から10月9日にかけて実施した。調査面積は9,455㎡である。

3 調査の結果、北側で沢地、南側で縄文時代前期の陥穴状土坑列3群を検出し、縄文時代早期～前期の遺物が少量出土した。

4 陥穴状土坑は渋江川に沿った崖縁に2列と、斜面地形に沿う1列がある。いずれの陥穴状土坑列も、調査範囲外の東西に連続するものと推定される。

5 出土遺物は土器・石器を合わせて深箱1箱程度である。土器には、早期の表裏縄文土器・押型土器や、田戸上層式に比定される土器がある。石器は剥片石器が少なく、磨石類が多くを占める。表裏縄文土器や剥片石器は沢地から、磨石類は南側の崖縁から多く出土した。

### 郷清水遺跡

1 郷清水遺跡は中頸城郡中郷村大字藤沢1464-1ほかに所在する。遺跡は妙高山麓北東裾を流れる渋江川の右岸に位置し、渋江川に面する崖縁から南側の小沢を越え、村道江端稲荷山線までの東向き緩斜面上に広がる。標高はおよそ220～225mである。

2 発掘調査は、国道18号上新バイパス建設と、上新バイパス除雪ステーション建設に伴い行われた。前者は昭和62年9月1日から10月31日と昭和63年5月10日から6月17日にかけて実施され、調査面積は11,195㎡である。後者は平成3年8月19日から11月29日にかけて実施され、調査面積は15,010㎡である。

3 調査の結果、縄文時代の陥穴状土坑列5群、平安時代の炭窯46基、時期不明の道路状遺構などが検出された。遺物は縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器などが深箱に3箱出土した。

4 陥穴状土坑は、渋江川に面する崖縁に1列検出されたほか、斜面地形に沿って配列されているのが確認された。陥穴状土坑列は調査範囲外の東西に連続するものと推定される。炭窯は形態の特徴によって7分類され、分類によって立地が異なることが確認された。ほかに、作り替えの様子や、窯詰めの様子が見えるものもあった。

5 出土遺物は少量だが、土器の時期は縄文時代早期～晩期、古墳時代まで幅広い。石器は磨石類が大部分を占め、剥片石器はほとんど出土しなかった。

### 上中島遺跡

1 上中島遺跡は中頸城郡中郷村大字二本木字上中島1700ほかに所在する。遺跡は妙高山北東山麓の、西から東へ伸びる舌状の緩斜面上に位置する。遺跡の北側と南側には小河川が流れている。標高は236～240mである。

2 発掘調査は国道18号上新バイパス建設に伴い、平成元年5月24日から9月29にかけて実施された。調査面積は6,784㎡である。

3 調査の結果、縄文時代の住居跡4基、捨て場、土坑のほか、平安時代の炭窯4基が検出された。遺物は縄文時代の土器21箱・石器10箱、弥生時代以降の遺物1箱が出土した。

4 遺構は調査範囲東側を中心に分布していた。遺物の分布状況と合わせて考えると、遺跡は東西に広がるものと推定される。

5 捨て場と、比較的遺存状況の良好であったS111の覆土からは、縄文時代後期末～晩期初頭の土器がまとまって出土した。これまで資料の少なかった当該期を研究する上で貴重な資料である。

### 上滝ノ沢遺跡

1 上滝ノ沢遺跡は中頸城郡中郷村大字二本木字上滝ノ沢1493ほかに所在する。遺跡は妙高山北東麓の小支丘上に立地する。標高は254～256mである。

2 発掘調査は、国道18号上新バイパス建設に伴い、昭和62年10月12日から10月22日にかけて実施した。調査面積は4,340㎡である。

3 調査の結果、炭窯が1基検出されたほかは、遺構・遺物とも検出されなかった。

### 中の原D遺跡

1 中の原D遺跡は中頸城郡中郷村大字松崎字中の原540-1ほかに所在する。遺跡は雲雀山の北東山裾に立地する。標高は約255mである。

2 発掘調査は、国道18号上新バイパス建設に伴い、昭和63年5月17日から7月7日にかけて実施した。調査面積は4,950㎡である。

3 調査の結果、縄文時代と推定される住居跡と平安時代の住居跡を検出したが、遺存状況が悪く、詳細は不明である。

4 平安時代の住居跡が複数検出されたので、当時ここに集落が形成されていた可能性がある。住居の分布や地形から、遺跡の本体は調査範囲の西部に存在すると推定される。

5 遺物量は深箱2箱と少ないが、縄文土器は早期から後期（一部は晩期の可能性ある）のものがあるほか、土師器は古墳時代・平安時代のものがあり、時期幅が広い。

### 窪畑B遺跡

1 窪畑B遺跡は中頸城郡中郷村大字市屋535-2ほかに所在する。遺跡は雲雀山東方の片貝川に向かって緩く傾く小尾根の末端付近に立地する。標高は約262mである。

2 発掘調査は、国道18号上新バイパス建設に伴い、昭和63年6月29日から7月28日にかけて実施した。調査面積は805㎡である。

3 調査の結果、縄文時代早期～晩期の遺物が深箱に2箱出土したが、遺構は検出されなかった。

4 過去に西側の畑地で大量の土器・石器が発見されたという地元の人の談話に基づけば、調査範囲は遺跡端部の捨て場のような場所であったと推定される。

## 《引用・参考文献》

- 赤塩 仁・三上徹也 1993 「中部高地における縄文前期末業土器群の編年」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 赤塩 仁・三上徹也 1994 「下鳥式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義—縄文時代前期末業土器群の型式変化をととして—」『中部高地の考古学Ⅳ 長野県考古学会30周年記念論文集』長野県考古学会
- 安孫子昭二 1989 「竇付土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 荒川隆史 1994 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成5年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1995 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成6年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 1996 「和泉A遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成7年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤文一 1974 「第3章3 土器」『細池遺跡』糸魚川市教育委員会
- 飯坂盛泰 1997 「八斗葎原遺跡・野林遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成8年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 飯田充晴 1994 「埼玉県東の上遺跡の道路遺構」『季刊 考古学』第46号
- 石川日出志 1987 「[考I] 第4章Ⅱ 縄文時代晩期の土器」『史跡 寺地遺跡』新潟県青海町
- 石原正敏 1993 「新潟県の諸磯式土器」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 市村勝巳・百瀬新治 1988 「Ⅱ2(4) 縄文前期の土器」『長野県史 考古資料編』全1巻(4) 遺構・遺物 長野県
- 遠藤ケイ 1995 「炭焼き竈職人伝」『男の民俗学』山と溪谷社
- 近江俊秀 1994 「奈良県鳴神遺跡の道路遺構」『季刊 考古学』第46号
- 大原正義 1981 「北信濃山ノ神遺跡出土の土器について」『信濃』33-4 信濃史学会
- 岡本 勇ほか 1967 「新井市史第二次調査報告」新井市史編修委員会
- 小熊博史 1997 a 「卯ノ木遺跡出土土器の研究。一押型土器の再検討—」『長岡市立科学博物館研究報告』第32号 長岡市立科学博物館
- 小熊博史 1997 b 「新潟県における押型文系及び沈線文系土器群の様相」『シンポジウム 押型文と沈線文』長野県考古学員縄文時代(早期)部会
- 加藤三千雄 1988 「新保・新崎式土器様式」『縄文土器大観3 中期Ⅱ』小学館
- 北村 亮 1990 a 「第Ⅲ章4. B 15) 特殊磨石 16) 磨石類」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原I遺跡 上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 北村 亮 1990 b 「第V章2. 縄文時代早期の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原I遺跡 上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 小池義人 1998 「第Ⅲ章B(2) 炭窯」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡I』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 小池義人はか 1998 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第90集 関川谷内遺跡Ⅰ』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小島俊彰ほか 1979 「第3章 遺跡・遺物解説」『清川市史 考古資料編』清川市史編さん委員会
- 小島正巳 1993 「妙高山麓松ヶ峯237遺跡採集の押型土器一日式の波及—」『長野県考古学会誌』64 長野県考古学会
- 小島正巳 1995a 「妙高山麓松ヶ峯B遺跡出土の縄文時代後期中葉・後葉土器」『妙高火山研究所 年報』第3号 妙高火山研究所
- 小島正巳 1995b 「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所 年報』第3号 妙高火山研究所
- 小島正巳・早津賢二 1998 「新井市南部山間地域の遺跡分布(鳥坂・原通・泉・水原・平丸・上郷)—平成8年度実施の埋蔵文化財詳細分布調査報告—」新井市教育委員会
- 坂井秀弥 1984 「第Ⅵ章1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第35集 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会
- 佐藤俊幸 1990 「第Ⅴ章1. 陥穴状土坑について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集 岩原Ⅰ遺跡・上林塚遺跡』新潟県教育委員会
- 佐藤雅一 1999 「第2節第1項 草創期」『新潟県の考古学』古志書院
- 品田高志 1996 「新潟県の様相」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
- 上越市教育委員会 1978 「1 山屋敷Ⅰ遺跡」『岩木地区遺跡群発掘調査概報—昭和52年度—』上越市教育委員会
- 杉浦銀治 1992 「手経にできる炭焼き法」『炭焼革命—まちづくりと地球環境浄化のために—』佛牧野出版
- 鈴木徳雄 1991 「称名寺式の変化と文様帯の系統—「文様帯系統論」と文様帯連続説の再検討—」『土曜考古』第16号 土曜考古学研究会
- 鈴木保彦 1988 「加曾利E式土器様式」『縄文土器大観2 中期Ⅰ』小学館
- 高橋 保ほか 1986 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第45集 中原遺跡・岩野A遺跡・岩野E遺跡』新潟県教育委員会
- 高橋 勉 1994 「高床山遺跡群」『新井市遺跡確認調査報告書』新井市教育委員会
- 高橋保雄 1990 「第Ⅳ章2節 石器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集 清水上遺跡』新潟県教育委員会
- 田嶋明人 1986 「Ⅳ 考察—漆町遺跡出土土器の隔年の考察」『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター
- 立山町教育委員会 1988 「立山カントリークラブ増設工事地内遺跡群発掘調査概要」立山町教育委員会
- 親跡 喬 1988 「図録 南田遺跡」妙高村教育委員会
- 親跡 喬 1990 「図録 小丸山遺跡」中郷村教育委員会
- 親跡 喬 1992 「図録 柿ノ木町遺跡」妙高村教育委員会
- 立木(土橋)由理子・寺崎裕助ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集 大堀遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 立木(土橋)由理子・寺崎裕助 1997 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集 萩清水遺跡・三本木新田B遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 立木(土橋)由理子・寺崎裕助ほか 1997 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第84集 中ノ沢遺跡」新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 1993 「銅屋町式土器について」『第6回 縄文セミナー 前期終末の諸様相』縄文セミナーの会
- 寺崎裕助 1996 「第V章2. A. 縄文土器について」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集 大塚遺跡』新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 富山県教育委員会 1977 「富山県福光町・城端町 立野ヶ原遺跡群 第五次緊急発掘調査概要」富山県教育委員会
- 中川成夫・岡本勇・加藤晋平 1967 「蓬生遺跡」『頸南』新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
- 中郷村教育委員会 1987 「籠峰遺跡発掘調査概報」中郷村教育委員会
- 中郷村教育委員会 1988 「籠峰遺跡発掘調査概報Ⅱ」中郷村教育委員会
- 中沢道彦 1998 「第七節二 縄文晩期の器」『御代田町誌 歴史編上-原始・古代・中世-』御代田町誌編纂委員会・御代田町誌刊行会
- 並木 隆 1978 「ゴシン遺跡」埼玉県遺跡調査会
- 永峯光一 1967 「第3章 出土遺物・第4章 佐野式土器の編年」『長野県考古学会研究報告書3 佐野』長野県考古学会
- 永峯光一 1981 「縄文晩期の土器-中部・北陸地方」『縄文土器大成4 晩期』講談社
- 新潟県 1980 「新潟県遺跡地図 昭和54年度」新潟県教育委員会
- 西野秀和 1989 「第5章第1節 土器」『金沢市米泉遺跡』石川県埋蔵文化財センター
- 橋谷田裕治 1997 「前原遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成8年度 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 早川 泉 1991 「古代道路遺構に残された痕跡-波板状凹凸面の性格について-」『東京考古』9
- 早津賢二 1985 「妙高火山群-その地質と活動史-」第一法規出版
- 早津賢二 1994 「新潟焼山火山の活動と年代-歴史時代のマグマ噴火を中心として-」『地学雑誌』Vol.103, No.2(931)
- 早津賢二 1995 「妙高火山-赤倉火砕流の<sup>14</sup>C年代」『遺跡遺跡Ⅱ』妙高村教育委員会
- 早津賢二・新井房夫 1985 「妙高火山群テフラ地域のテフラ層」『妙高火山群-その地質と活動史-』第一法規出版
- 早津賢二・小島正巳 1985 「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群-その地質と活動史-』第一法規出版
- 平林 彰・綿田弘実 1988 a 「Ⅱ2(6) 縄文後期の土器」『長野県史 考古資料編』全1巻(4)遺構・遺物 長野県
- 平林 彰・綿田弘実 1988 b 「Ⅱ2(7) 縄文晩期の土器」『長野県史 考古資料編』全1巻(4)遺構・遺物 長野県

- 廣瀬昭弘・高橋桂 1977 「第1群土器～第8群土器」『三枚原遺跡』 木高村教育委員会
- 廣瀬昭弘 1980 「北信濃小佐原遺跡の表裏縄文について」『信濃』第33巻第4号 信濃史学会
- 廣瀬昭弘 1995 「表裏縄文研究の現状と課題」『長野県考古学会誌』77・78号 長野県考古学会
- 藤巻正信 1991 「第IV章2C1) g 打製石斧」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 城之腰遺跡』  
新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 細田 勝 1993 「関東地方南半における前期終末の様相」『第6回縄文セミナー 前期終末の諸様相』  
縄文セミナーの会
- 細谷 一 1978 「第一章 五 気候」『中郷村史』 中郷村史編集会
- 本間信昭・室岡博 1976 『妙高高原町文化財調査報告書第1集 兼保遺跡』 妙高高原町教育委員会
- 三ツ井朋子 1998 「炭山遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団 年報』平成8年度(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 南 久和 1989 「北陸晩期土器様式」『縄文土器大観4 後期 晩期 続縄文』小学館
- 宮崎朝雄・金子直行 1995 「回転文排系土器群の研究—表裏縄文系・摺糸文系・室谷上層系・押型文系土器群の関係—」『日本考古学』第2号 日本考古学協会
- 室岡 博 1982a 「奥の城(西峯)遺跡 第一次調査報告書」 中郷村教育委員会
- 室岡 博 1982b 「奥の城(西峯)遺跡 第二次調査報告書—昭和56年度—」 中郷村教育委員会
- 室岡 博 1986a 「妙高高原町文化財調査報告書第7集 兼保遺跡(D地区)」 妙高高原町教育委員会
- 室岡 博 1986b 「中古遺跡」 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1994 「道添遺跡 I」 妙高村教育委員会
- 室岡 博 1995 「道添遺跡 II」 妙高村教育委員会
- 百瀬長秀 1984 「羽状の沈線文をもつ土器の系統と展開—長野県の縄文時代後～晩期土器概観—」『長野県考古学会誌』49号 長野県考古学会
- 百瀬長秀 1992 「長野県の概況」『第5回縄文セミナー 縄文晩期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 百瀬長秀 1996 「長野県の様相」『第9回縄文セミナー 後期中葉の諸様相』 縄文セミナーの会
- 山本幸俊 1991 「第I章 北国街道の概説」『新潟県歴史の道調査報告書第二集 北国街道I』  
新潟県教育委員会
- 山本幸俊 1993 「第I章 北国街道IIの概説」『新潟県歴史の道調査報告書第五集 北国街道II』  
新潟県教育委員会
- 横山かよ子ほか 1988 「V1 土器」『長野市の埋蔵文化財第28集 宮崎遺跡』 長野市教育委員会・  
川田土地改良区
- 綿田弘実 1996 「中央高地における縄文早期末葉給糸体匠文土器」『長野県立歴史館 研究紀要』  
第2号 長野県立歴史館
- 渡邊朋和 1992 「新潟県における縄文時代晩期初頭～中葉の土器群」『第5回縄文セミナー 縄文晩期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 渡邊朋和 1998 「第VI章 C 考察」『金津丘陵製鉄遺跡群発掘調査報告書(分析・考察編)』 新津市教育委員会

第3表 西福田新田遺跡 陥穴状土坑計測表

| 測点 | 距離      | 長さ  | 幅  | 深さ  | 内径  | 土層    | 注      | 深さ  | 方位     |
|----|---------|-----|----|-----|-----|-------|--------|-----|--------|
| NO | cm      | cm  | cm | cm  | cm  | PC    |        | cm  |        |
| 4  | 1.5K.1  | 132 | 75 | 83  | 面17 | 深50   |        |     | N-32-W |
| 4  | 1.5K.2  | 104 | 37 | 61  | 面14 | 深36.5 |        |     | N-19-W |
| 4  | 1.5K.3  | 98  | 45 | 88  | 面14 | 深28   |        |     | N-23-W |
| 4  | 1.5K.4  | 98  | 49 | 68  | 面17 | 深34   |        |     | N-16-W |
| 4  | 1.5K.5  | 115 | 44 | 74  | 面20 | 深22   |        |     | N-34-W |
| 4  | 1.5K.6  | 118 | 59 | 77  | 面15 | 深22   |        |     | N-21-W |
| 4  | 1.5K.7  | 110 | 40 | 78  | 面20 | 深45   |        |     | N-33-W |
| 4  | 2.5K.6  | 134 | 74 | 102 | 面10 | 深20   |        |     | N-42-W |
| 4  | 2.5K.10 | 107 | 85 | 86  | 面15 | 深22   | P2 重12 | 深31 | N-60-W |
| 4  | 2.5K.11 | 110 | 81 | 88  | 面15 | 深22   |        |     | N-32-W |
| 5  | 3.5K.12 | 131 | 61 | 111 | 面18 | 深29   |        |     | N-7-E  |
| 5  | 3.5K.13 | 97  | 50 | 102 | 面10 | 深72.5 |        |     | N-17-E |
| 5  | 3.5K.14 | 111 | 60 | 94  | 面28 | 深38   |        |     | N-45-E |
| 5  | 3.5K.15 | 103 | 60 | 105 | 面10 | 深34   |        |     | N-32-E |
| 5  | 3.5K.16 | 100 | 54 | 61  | 面16 | 深15.5 |        |     | N-32-E |
| 5  | 3.5K.17 | 88  | 38 | 100 | 面10 | 深40   |        |     | N-50-E |
| 5  | 3.5K.18 | 100 | 60 | 63  | 面20 | 深35   |        |     | N-60-E |
| 5  | 3.5K.19 | 112 | 50 | 101 | 面14 | 深25.5 |        |     | N-50-E |
| 5  | 3.5K.20 | 109 | 52 | 101 | 面20 | 深29   |        |     | N-66-E |

第5表 西福田新田新田遺跡 包含層出土石器類の点数集計表

| 集点  | 器種 | 石材      | 点数 |
|-----|----|---------|----|
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 磨製角閃岩   | 1  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 2  |
| 1   | 陥穴 | 安山岩     | 2  |
| 1   | 陥穴 | 灰岩      | 6  |
| 1   | 陥穴 | 安山岩     | 0  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 3  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 3  |
| 1   | 陥穴 | 安山岩     | 3  |
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 5  |
| 1   | 陥穴 | 無灰燻質安山岩 | 1  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 2  |
| 1   | 陥穴 | 砂岩      | 2  |
| 合 計 |    |         | 29 |

第6表 西福田新田遺跡 石器観察表

| 図 版 | 目録No. | 出土位置 | 器種       | 石材      | 長さ   | 幅   | 厚さ  | 重さ    | 備考 |
|-----|-------|------|----------|---------|------|-----|-----|-------|----|
|     |       |      |          |         | cm   | cm  | cm  | g     |    |
| 6   | 1     | 陥穴   | 尖頭部      | 無灰燻質安山岩 | 3.8  | 4.4 | 1.5 | 27.6  | 差層 |
| 6   | 2     | 陥穴   | 使用部のある刃片 | 無灰燻質安山岩 | 7.1  | 9.8 | 1.7 | 94    |    |
| 6   | 3     | 陥穴   | 片断       | 無灰燻質安山岩 | 3.9  | 2.9 | 0.6 | 8     |    |
| 6   | 4     | 陥穴   | 片断       | 磨製角閃岩   | 3.9  | 4.1 | 0.7 | 13.3  |    |
| 6   | 5     | 陥穴   | 片断       | 磨製角閃岩   | 3.7  | 4.1 | 0.7 | 13.3  |    |
| 6   | 6     | 陥穴   | ローム上面    | B新 安山岩  | 6.7  | 6.2 | 3.6 | 142.9 |    |
| 6   | 7     | 陥穴   | ローム上面    | B新 安山岩  | 7.6  | 7.7 | 3.4 | 258.6 |    |
| 6   | 8     | 陥穴   | ローム上面    | B新 安山岩  | 9.4  | 7.4 | 4.5 | 506.2 |    |
| 6   | 9     | 陥穴   | ローム上面    | F新 安山岩  | 11.5 | 5.1 | 3.7 | 336.3 |    |
| 6   | 10    | 陥穴   | ローム上面    | 磨石部     | 7    | 8.3 | 4.6 | 344.5 |    |
| 6   | 11    | 陥穴   | ローム上面    | 磨石部     | 9.3  | 4.7 | 3.9 | 200.5 |    |
| 6   | 12    | 陥穴   | ローム上面    | 磨石部     | 8.1  | 7.1 | 4.7 | 325.4 |    |

第4表 西福田新田遺跡 縄文土器観察表

| 図 版 | 目録No. | 出土位置 | 器種 | 形状 | 器種 | 土層       | 色調 | 付属物 | 調査 | 備考 |
|-----|-------|------|----|----|----|----------|----|-----|----|----|
|     |       |      |    |    |    |          |    |     |    |    |
| 6   | 1     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 外外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 2     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 3     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 4     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 5     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 6     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 7     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 8     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 9     | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 10    | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 11    | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |
| 6   | 12    | 陥穴   | 土器 | 丸形 | 茶  | 内外：土色っぽい | なし |     |    |    |

拓土片断

英：英石、長：長石、茶：チャート、角：角閃石、番：番付。

第7表 郷清水遺跡 船穴計測表

| 図面番号(船名)NO | 長さ (cm)  | 幅 (cm) | 高さ (cm) | 埋藏 (cm) | 方位   |
|------------|----------|--------|---------|---------|--|
| 15-11      | 87船C2    | 123    | 62      | 114     | 直9 船15                                       |
| 15-11      | 87船C3    | 111    | 57      | 100     | P1 船30 船15.5 P2 船60 船28.5                    |
| 15-11      | 87船C4    | 142    | 71      | 114     | P1 船26 船15 P2 船25 船15.5                      |
| 15-11      | 87船C5    | 141    | 86      | 103     | 直16 船19                                      |
| 15-11      | 87船C7    | 127    | 56      | 103     | 直16 船19                                      |
| 15-11      | 87船C8    | 127    | 73      | 107     | P1 船14 船17.3 P3 船16 船9.5                     |
| 16-11      | 91船C3-8  | 139    | 74      | 120     | 直17 船13.1                                    |
| 16-11      | 91船C3-7  | 108    | 59      | 123     | 直16 船13.1                                    |
| 16-11      | 91船C3-6  | 115    | 69      | 123     | 直16 船13.1                                    |
| 16-11      | 91船C3-5  | 127    | 71      | 120     | 直14 船18.9                                    |
| 16-11      | 91船C3-4  | 125    | 68      | 147     | 直14 船19.5                                    |
| 16-11      | 91船C3-3  | 95     | 57      | 145     | 直14 船19.5                                    |
| 17-11      | 91船C3-2  | 105    | 49      | 128     | 直21 船17.5                                    |
| 17-11      | 91船C3-1  | 120    | 91      | 125     | P1 直19 船18.6 P2 直17 船10.8 P3 直18 船16         |
| 17-11      | 91船C4-1  | 116    | 83      | 127     | 直10 船35                                      |
| 17-11      | 91船C4-2  | 147    | 72      | 126     | 直12 船35                                      |
| 17-11      | 91船C4-3  | 152    | 61      | 111     | 直16 船46.8                                    |
| 18-11      | 91船C4-1  | 109    | 44      | 94      | 直16 船14                                      |
| 18-11      | 91船C4-2A | 141    | 70      | 99      | 直21 船43.3                                    |
| 18-11      | 91船C4-2B | 158    | 73      | 119     | 直14 船35                                      |
| 18-11      | 91船C4-3  | 116    | 57      | 116     | 直16 船29                                      |
| 18-2       | 91船C4-2  | 120    | 50      | 123     | 直15 船24                                      |
| 19-2       | 91船C4-3  | 146    | 68      | 101     | 直20 船17.7                                    |
| 19-2       | 91船C4-4  | 126    | 46      | 104     | 直13 船16.3                                    |
| 19-2       | 91船C4-5  | 116    | 44      | 101     | 直21 船11                                      |
| 19-2       | 91船C4-6  | 105    | 45      | 106     | 船28  |
| 19-2       | 91船C4-7  | 105    | 70      | 138     | 船9 船14.1                                     |
| 19-2       | 91船C4-8  | 118    | 63      | 146     | 船25.5  |
| 20-5       | 91船C5-1  | 114    | 83      | 88      | 直20 船53.5                                    |
| 20-5       | 91船C5-2  | 127    | 68      | 90      | 直10 船52                                      |
| 20-5       | 91船C5-3  | 126    | 62      | 92      | 直17 船50                                      |
| 20-5a      | 87船K16   | 126    | 56      | 45      | 船8   |
| 20-5b      | 87船K15   | 96     | 62      | 60      | 船8.5   |
| 20-5c      | 87船K17   | 97     | 73      | 62      | P1 直12 船60 P2 直11 船40 P3 直10 船40             |
| 20-5d      | 87船K20   | 85     | 70      | 73      | P1 直11 船36 P2 直9 P3 直30                      |
| 21-3a      | 87船C7の付添 | 136    | ---     | ---     | P1 直5 船8.8 P2 直4 船4.9 P3 直21 船4 直2 P4 直3 直23 |
| 20-5e      | 87船K24   | 66     | 56      | 71      | 船5 船20                                       |
| 21-3b      | 87船K23   | 70     | 54      | 77      | P1 直6 船5 P2 直6 船8                            |
| 21-3c      | 87船K25   | 88     | 69      | 88      | ---  |
| 21-3d      | 87船K18   | 101    | 71      | 102     | 直10 船30                                      |
| 21-3e      | 87船K19   | 110    | 70      | 113     | 直9 船25                                       |
| 21-3f      | 87船K21   | 101    | 61      | 110     | 直10 船49                                      |
| 21-4       | 87船K22   | 106    | 54      | 97      | ---  |

第8表 郷清水遺跡 位置 船穴計測表

| 図面番号(船名)No. | 位置     | 長さ (cm)       | 幅 (cm) | 形跡  | 主軸方向 | 埋蔵の寸法   | 備考    |
|-------------|--------|---------------|--------|-----|------|---------|-------|
| 22          | 87-1   | STA407の南      | (285)  | 155 | D?   | N-38°-E | 上部部分埋 |
| 22          | 87-2   | STA470の南      | 480    | 210 | E    | N-6°-W  |       |
| 23          | 87-3   | STA473の南西     | 375    | 180 | B    | N-42°-E |       |
| 23          | 87-4   | STA473の西      | 335    | 190 | D    | N-27°-E |       |
| 23          | 87-5   | STA475の南      | 289    | 183 | D    | N-7°-W  |       |
| 23          | 87-6   | STA477の北西     | 570    | 215 | E    | N-2°-E  |       |
| 23          | 87-7   | STA479の南東     | (370)  | 175 | D?   | N-11°-E |       |
| 23          | 87-8   | STA479の南      | 320    | 150 | B    | N-41°-E |       |
| 23          | 87-9   | STA479の南      | 320    | 150 | B    | N-41°-E |       |
| 23          | 87-10  | STA479の南      | 320    | 150 | B    | N-41°-E |       |
| 23          | 87-11  | STA479の南      | 320    | 150 | B    | N-41°-E |       |
| 23          | 87-12  | STA479の南      | 320    | 150 | B    | N-41°-E |       |
| 23          | 87-13  | STA477の南東     | 596    | 184 | D    | N-40°-E |       |
| 23          | 87-14  | STA491        | 320    | 184 | C    | N-8°-E  |       |
| 24          | 88-A-K | STA475の北東     | 280    | 163 | A    | N-7°-W  |       |
| 25          | 91-3E  | 2E23-24,3E3-4 | 265    | 195 | A    | N-0°    | 土坑付埋  |
| 25          | 91-4B  | 4B5-10,4C1-6  | 490    | 200 | B    | N-51°-W | 土坑付埋  |
| 25          | 91-6A  | 6A2-7         | 490    | 215 | E    | N-5°-E  |       |
| 25          | 91-7A  | 7A14-19-23    | 490    | 215 | E    | N-5°-E  |       |
| 25          | 91-8H  | 4H16-21,5H1   | 567    | 197 | A    | N-14°-W |       |
| 25          | 91-9F  | 6F23,7F2-3,7F | 610    | 200 | B    | N-13°-E | 北側に石敷 |
| 26          | 91-9E  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9C  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9D  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9G  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9I  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9J  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9K  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9L  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9M  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9N  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9O  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9P  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9Q  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9R  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9S  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9T  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9U  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9V  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9W  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9X  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9Y  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9Z  | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AA | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AB | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AC | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AD | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AE | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AF | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AG | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AH | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AI | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AJ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AK | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AL | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AM | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AN | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AO | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AP | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AQ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AR | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AS | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AT | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AU | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AV | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AW | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AX | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AY | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9AZ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BA | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BB | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BC | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BD | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BE | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BF | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BG | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BH | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BI | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BJ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BK | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BL | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BM | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BN | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BO | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BP | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BQ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BR | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BS | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BT | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BU | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BV | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BW | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BX | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BY | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9BZ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CA | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CB | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CC | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CD | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CE | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CF | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CG | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CH | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CI | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CJ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CK | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CL | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CM | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CN | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CO | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CP | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CQ | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CR | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CS | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CT | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CU | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CV | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CW | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CX | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に付埋 |
| 26          | 91-9CY | 8E5,8E1+612   | 730    | 215 | A    | N-38°-W | 北側に   |



第12表 上中島電線 土器観察表 (その1)

| 図  | 集積場所 | 出土位置         | 形状   | 内径部位 | 口径 | 分類 | 胎土       | 色澤       | 付着物   | 調査             | 備考        |
|----|------|--------------|------|------|----|----|----------|----------|-------|----------------|-----------|
| 48 | 511  | 任土(産)        | 深鉢   | 口    | 2  | II | 灰、長多、角、少 | 内外: 滑    | なし    | 文: 山形明瓦文       |           |
| 49 | 3    | 511          | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角   | 内外: 滑    | 外: コゴ | 内外: 滑; 外: 滑    |           |
| 49 | 3    | 511          | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角   | 内外: 滑    | 外: コゴ | 内外: 滑; 外: 滑    | 3aと同一類体   |
| 49 | 3    | 511          | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角   | 内外: 滑    | 外: コゴ | 内外: 滑; 外: 滑    | 3bと同一類体   |
| 49 | 3    | 511          | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角   | 内外: 滑    | 外: コゴ | 内外: 滑; 外: 滑    | 3cと同一類体   |
| 49 | 5    | 958(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | IC | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 文: 長多、同色       | 6. 同一類体か? |
| 49 | 6    | 958(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 | 6. 同一類体か? |
| 49 | 7    | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 8    | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 10   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 11   | 951(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | IC | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 12   | 951(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 13   | 951(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | IB | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 14   | 952(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 14   | 952(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | II | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑; 外: 滑 |           |
| 49 | 15   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 2I | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 49 | 16   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 2C | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 49 | 17   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 2C | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 49 | 18   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 2C | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 49 | 19   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 2C | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 49 | 20   | 511(任土)      | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 21   | 511(SH15)    | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 22   | 952(SH1)     | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 23   | 952(SH1)     | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 24   | 511(任土)      | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 25   | 511(SH13)    | 有付鉢  | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 26   | 511(任土)      | 有付鉢? | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 49 | 26   | 511          | 有付鉢? | 口    | 6  | 3  | 灰、長多、角   | 内外: 明瓦   | なし    | 内外: 明瓦         |           |
| 50 | 27   | 90(SH1)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 28   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 29   | 90(SH11)     | 深鉢   | 口    | 6  | 1K | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 30   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1K | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 31   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 32   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 33   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1K | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 34   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1K | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 35   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 36   | 511          | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 37   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 38   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角   | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 39   | 511(任土)      | 深鉢   | 口    | 6  | 1K | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 40   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 41   | 511(SH19)    | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 42   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 43   | 90(SH11(任土)) | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 44   | 952(SH1)     | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 45   | 511(SH12)    | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |
| 50 | 45   | 511(SH12)    | 深鉢   | 口    | 6  | 1H | 灰、長多、角、少 | 内外: にかき滑 | なし    | 内外: にかき滑       |           |





第12表 上中島遺跡 土器類表(その4)

| 図 瓦 種類No | 正土位置 | 形状            | 発掘部位 | 口縁形態 | 分類 | 胎土 | 色調    | 付着物 | 調査    | 備考   |
|----------|------|---------------|------|------|----|----|-------|-----|-------|------|
| 54       | 132  | 9F13(平)       | 口    | 底状   | 2A | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内:灰多  | 口:灰多 |
| 54       | 133  | 9G26(平)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 134  | 9G27(平)       | 口    | 底状   | 2A | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 135  | 9G28(平)       | 口    | 底状   | 2A | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 136  | a 9F19(24(縁)) | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 136  | b 9F21(縁)     | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 137  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 138  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 139  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 140  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 141  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 2A | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 142  | 9F21(平)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 143  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 144  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 145  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 146  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 147  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 148  | 9G41(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 149  | 9F24(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 150  | 9F24(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 151  | 9F24(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 152  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 153  | 9F19(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 154  | 9D 23(平)      | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 155  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 155  | 9F23(24(縁))   | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 156  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 157  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 158  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 159  | 61(縁)         | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 160  | 9F20(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 161  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 162  | 9G41(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 163  | 9F23(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 164  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 165  | 9F21(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 166  | 9F13(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 167  | 9F19(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 168  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 169  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 170  | 9F13(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 171  | 9G20(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 172  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 173  | 9E23(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 54       | 174  | 9F18(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 55       | 175  | 9F14(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 55       | 176  | 9G41(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |
| 55       | 177  | 9F24(縁)       | 口    | 底状   | 6  | 灰多 | 内外:灰多 | なし  | 内外:灰多 | 口:灰多 |













第12表 上中島電線 土器調査表 (その11)

| 図  | 図名  | 区口      | 番号 | 形状 | 口縁形状 | 口径 | 高さ | 分類   | 胎土 | 色澤  | 付着物 | 使用地 | 調査地 | 備考 |
|----|-----|---------|----|----|------|----|----|------|----|-----|-----|-----|-----|----|
| 61 | 482 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 483 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 484 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 485 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 486 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 487 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 488 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 489 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 490 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 491 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 492 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 493 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 494 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 495 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 496 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 497 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 498 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 499 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 500 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 501 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 502 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 503 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 504 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 505 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |
| 61 | 506 | 9414(焼) | 口  | 口  | 口    | 口  | 口  | IK 1 | 赤土 | 内赤土 |     | 外赤土 | 外赤土 |    |



第12表 上中島電線工器總覽表 (その13)

| 種別 | 品名    | 数量 | 規格 | 用途 | 材料 | 製造 | 検査 | 備考 |
|----|-------|----|----|----|----|----|----|----|
| 64 | 555   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 64 | 556   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 64 | 557   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 64 | 558   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 64 | 559   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 560   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 561   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 562   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 563   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 564   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 565   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 566   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 567   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 568   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 570   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 571   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 572   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 573   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 574   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 575   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 576   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 577   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 578   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 579   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 580   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 581   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 582   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 583   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 584   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 585   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 586   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 587   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 65 | 588   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 589 a | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 589 b | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 590 a | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 590 b | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 591 a | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 591 b | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 594   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 599   | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 599 a | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 599 b | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |
| 66 | 597 b | —  | —  | —  | —  | —  | —  | —  |

表12-2 上中島連続土器観覧表 (その14)

| 図番  | 場所  | 出土位置         | 層位 | 高所部位 | 口縁形状 | 器  | 分類 | 胎土  | 色調     | 特徴     | 情景     | 調査                      |
|-----|-----|--------------|----|------|------|----|----|-----|--------|--------|--------|-------------------------|
| 66  | 508 | 9H11         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 5  | 1A  | 内外:明褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 調査<br>口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。 |
| 66  | 509 | 8H20         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1B  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 600 | 7E13         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 5  | 1P  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 601 | 8E17         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 602 | 8H19         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 603 | 8H18         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1B  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 604 | 4C3          | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1B  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 605 | 6E18         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1C  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 606 | 6E19         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1C  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 66  | 607 | 501          | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1C  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 608 | a 241c下層     | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 608 | b 8H25       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 609 | a 8H25       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 610 | 9H18-20(捨て場) | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 611 | 5E13-17      | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2A  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 612 | 241c下層       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1C  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 613 | 5C17         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 3   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 614 | 9C7          | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2C  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 615 | 3F14         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1K? | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 616 | 3F14上層       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 1H  | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 617 | 3F14下層       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 4   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 618 | 4E12         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 4   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 619 | 6D5          | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 620 | 2022         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 621 | 8H18-8H24    | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 622 | 241c上層       | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 623 | 7C4上層        | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 624 | 7M4          | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 67  | 625 | 9H11         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | —   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 128 | 628 | 5I11         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 128 | 627 | 4H(SH11(壁土)) | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 2   | 3H(3号土器)     | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 2   | 3H(2号土器)     | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 3   | 4F(2号土器)     | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 4   | 5F(風筒木)      | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 5   | 4E25         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 6   | 4E24         | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |
| 74  | 7   | 5F1上層        | Ⅱ  | 底状   | 口    | 底状 | 6  | 2   | 内外:赤褐色 | 内外:コゴク | 内外:コゴク | 口:黄褐色<br>口:丸唇面正直。       |







# 図 版

## 凡 例

- 1 図版編は図面図版と写真図版から構成されている。
- 2 図面図版・写真図版は、遺跡単位でまとめられている。

### 遺構図版について

- 1 とくに断りが無い限り、平面図・セクション図などに付されたスクリーントーンは以下の事柄を示す。

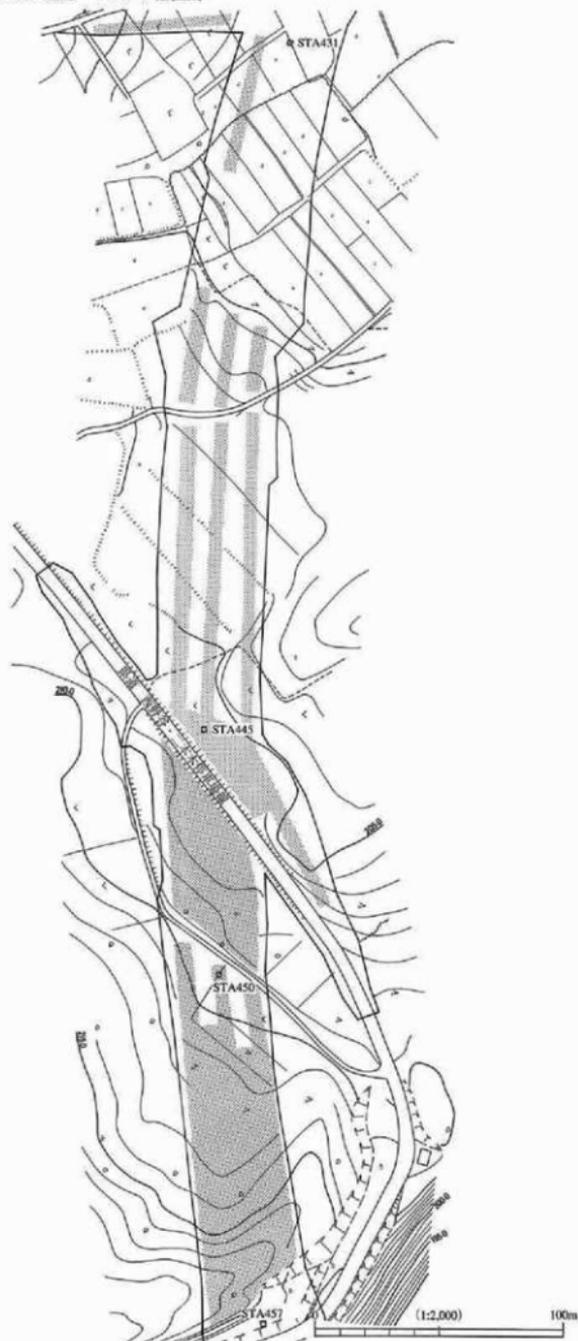


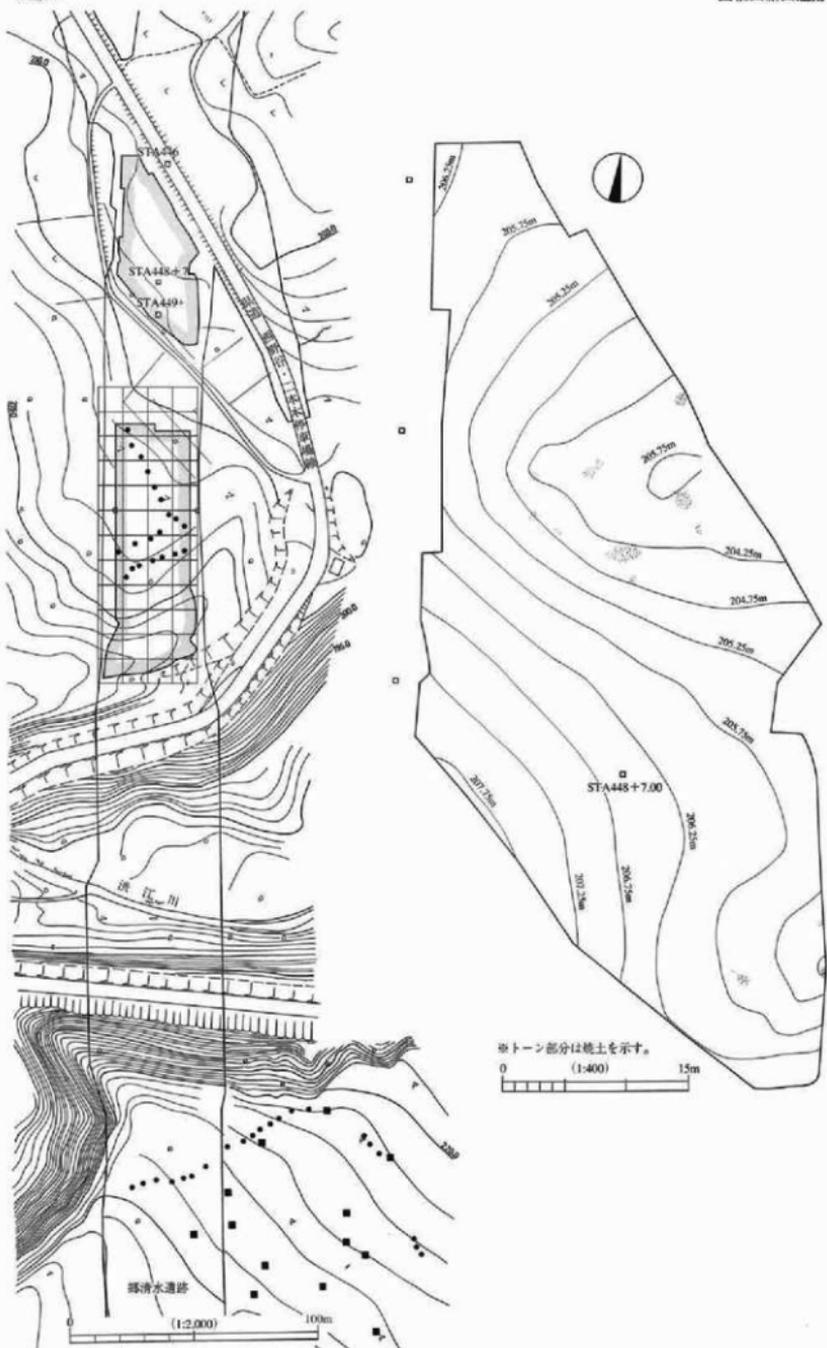
- 2 遺構略図における●は陥穴状土坑、■は炭窯である。

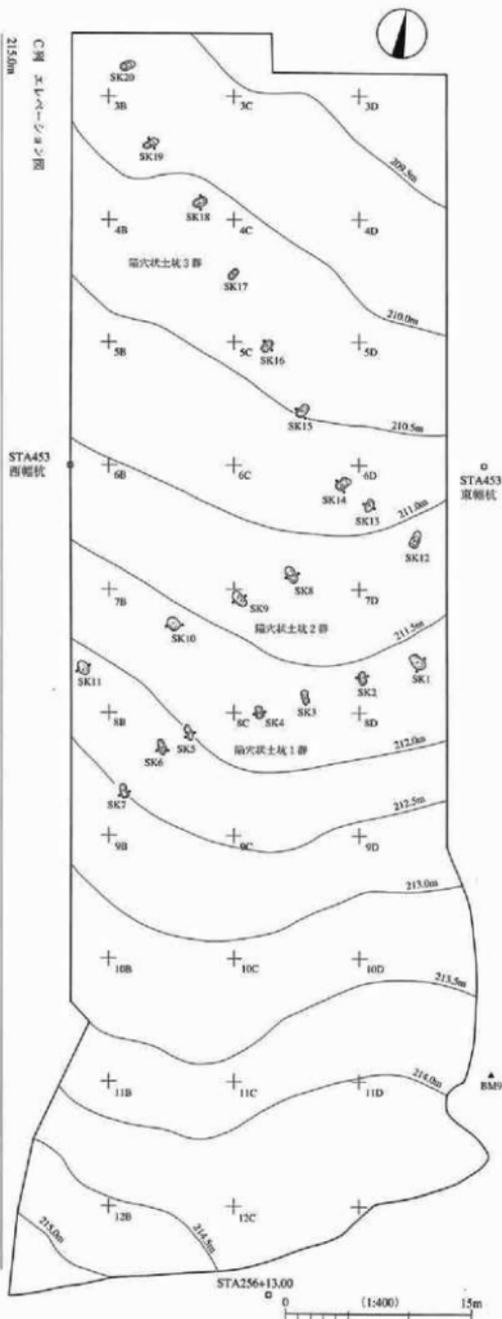
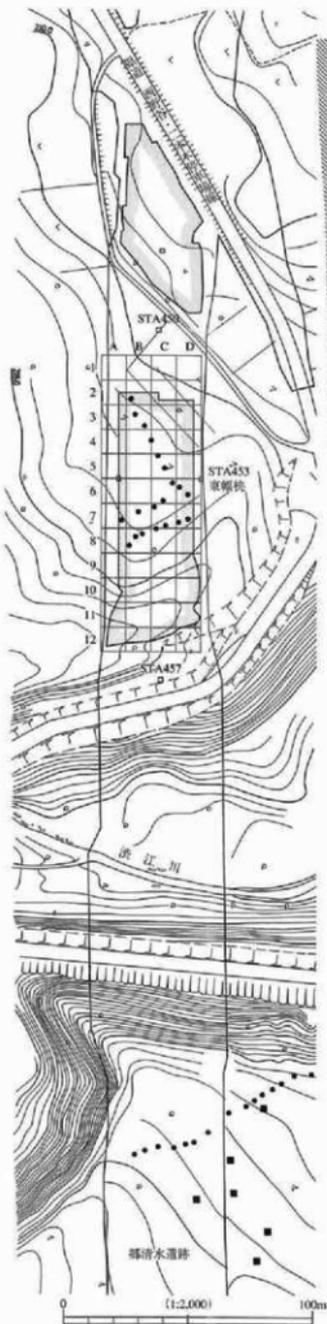
### 遺物図版について

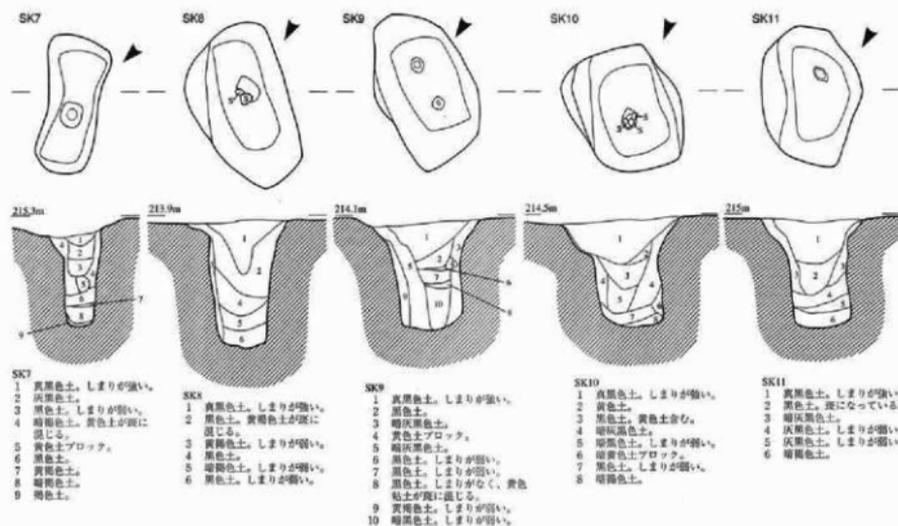
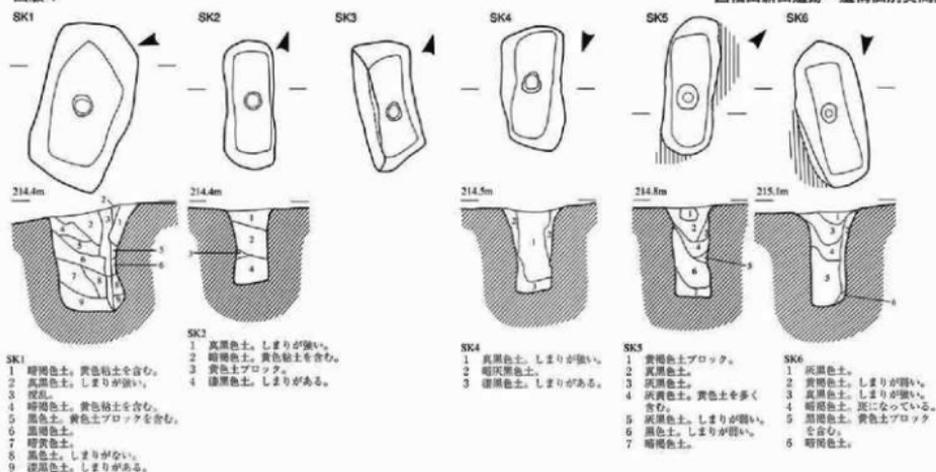
- 1 土器の拓影は断面図の左側が外面、右側が内面を表す。
- 2 土器の口縁は、平口縁は直線で、波状口縁は弧線で結んだ。
- 3 石器に付されたスクリーントーンは以下の使用痕を示す。







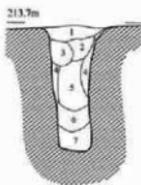




SK12

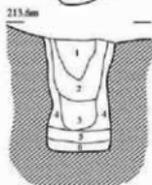


SK13



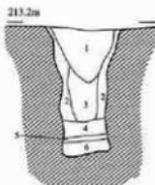
- SK13  
 1 真黒色土。しまりが強い。  
 2 暗褐色土。黄色土ブロックを含む。  
 3 黒色土。黄色土が隙に混じる。  
 4 灰黒色土。ロームブロックを含む。  
 5 灰褐色土。  
 6 暗褐色土。  
 7 濃黒色土。しまりがある。

SK14



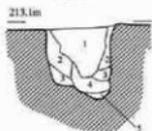
- SK14  
 1 真黒色土。しまりが強い。  
 2 黒色土。黄色土が隙に混じる。しまりが強い。  
 3 黒色土。黄色土ブロックを含む。しまりが強い。  
 4 暗褐色土。  
 5 暗褐色土。  
 6 灰褐色土。

SK15



- SK15  
 1 真黒色土。しまりが強い。  
 2 暗褐色土。  
 3 黒色土。黄色粘土が隙に混じる。  
 4 黒色土。  
 5 黄褐色土。黄色粘土ブロックを含む。  
 6 暗褐色土。

SK16



- SK16  
 1 真黒色土。しまりが強い。  
 2 暗褐色土。  
 3 黒色土。黄色土ブロックを含む。  
 4 暗褐色土。しまりが強い。  
 5 灰褐色土。

SK17

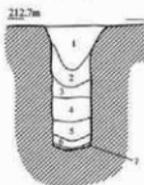


SK18



- SK18  
 1 真黒色土。  
 2 灰黒色土。黄褐色土が隙に混じる。  
 3 暗褐色土。  
 4 黄褐色土。しまりが強い。  
 5 黒色土。  
 6 暗褐色土。  
 7 黄色土。  
 8 黒褐色土。

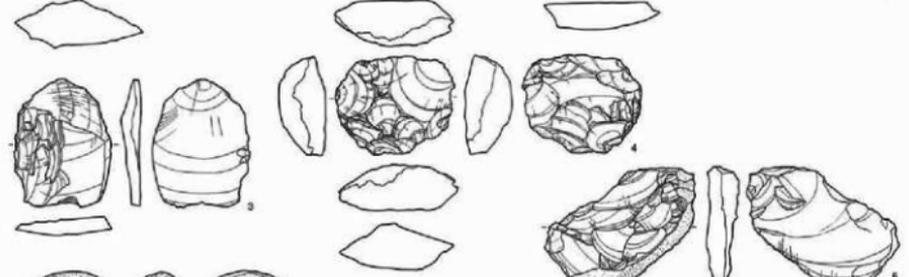
SK19



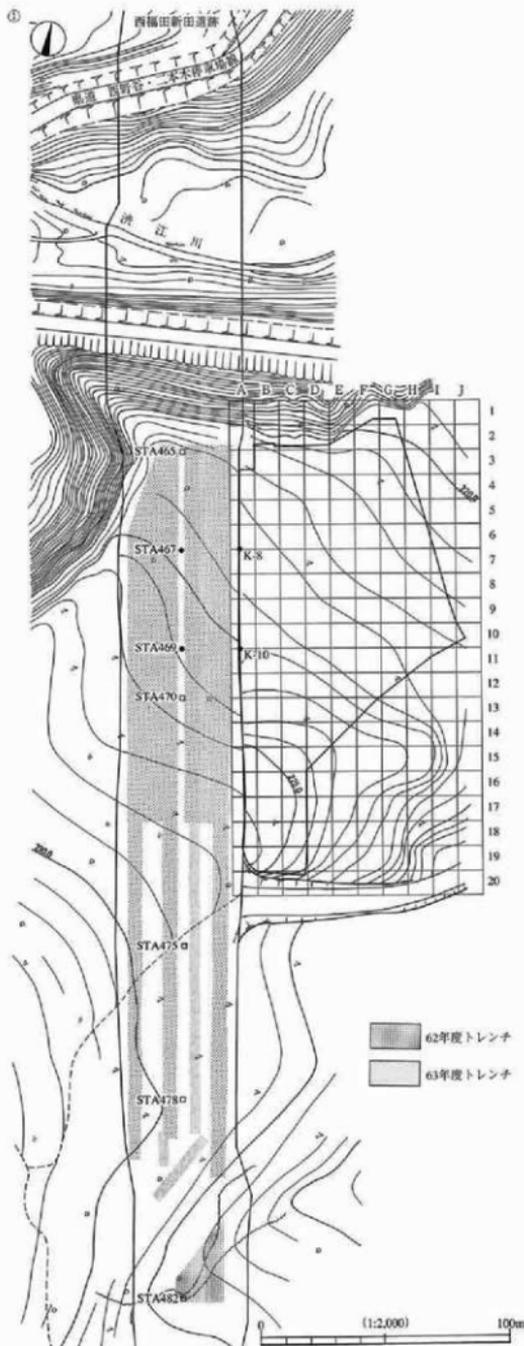
- SK19  
 1 真黒色土。  
 2 灰黒色土。  
 3 黒色土。しまりが強い。  
 4 黒色土。黄色土が隙に混じる。  
 5 黄褐色土。  
 6 暗褐色土。  
 7 灰黒色土。しまりが強い。

SK20

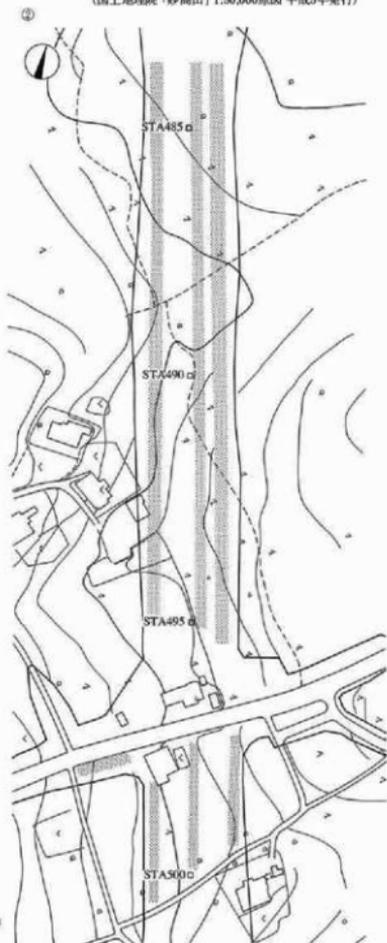


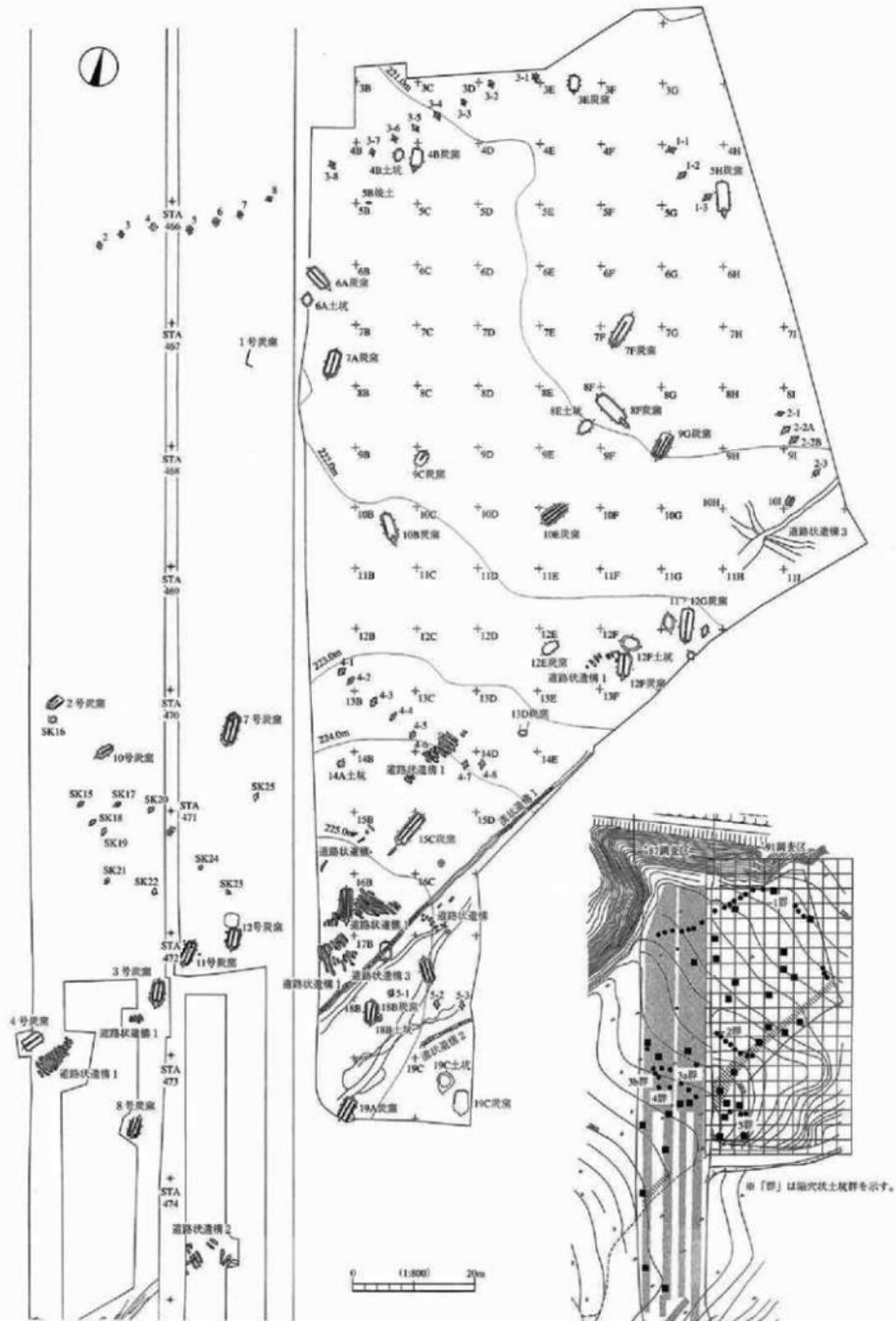


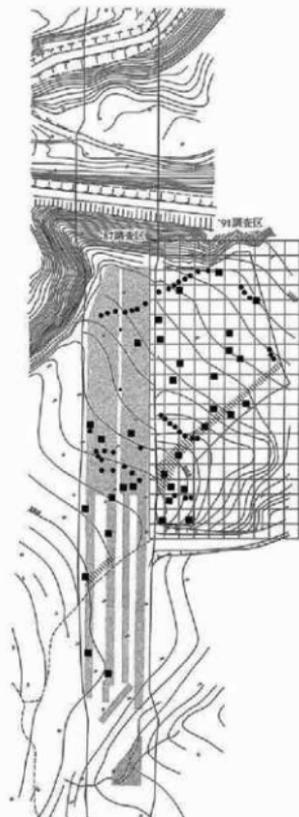
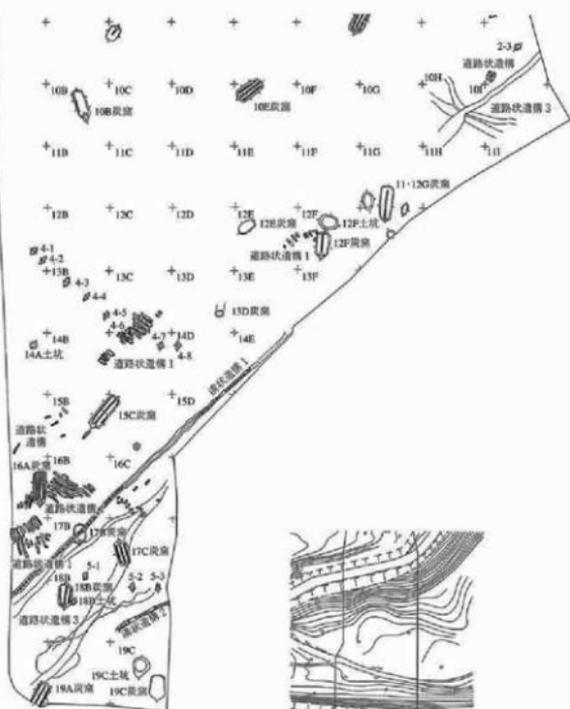
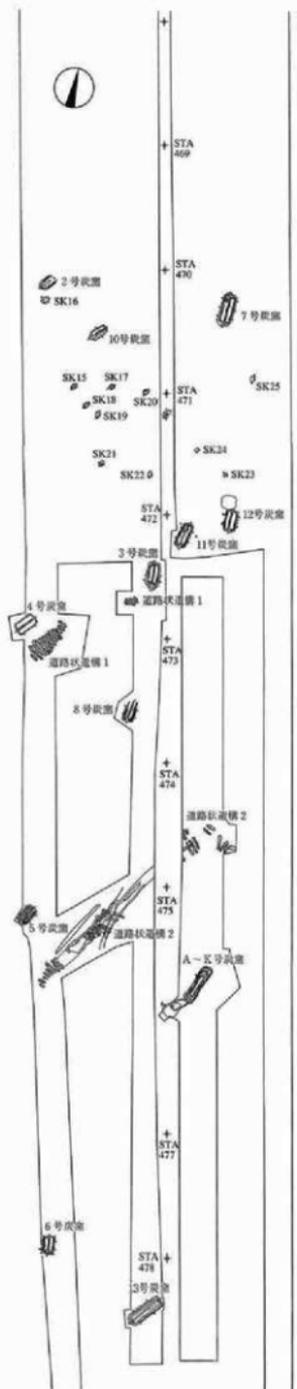
①(土器)~⑪  
 ⑫(石器)4a~⑬(3) 10cm  
 ⑭(土器)1~3①(2,3) 5cm

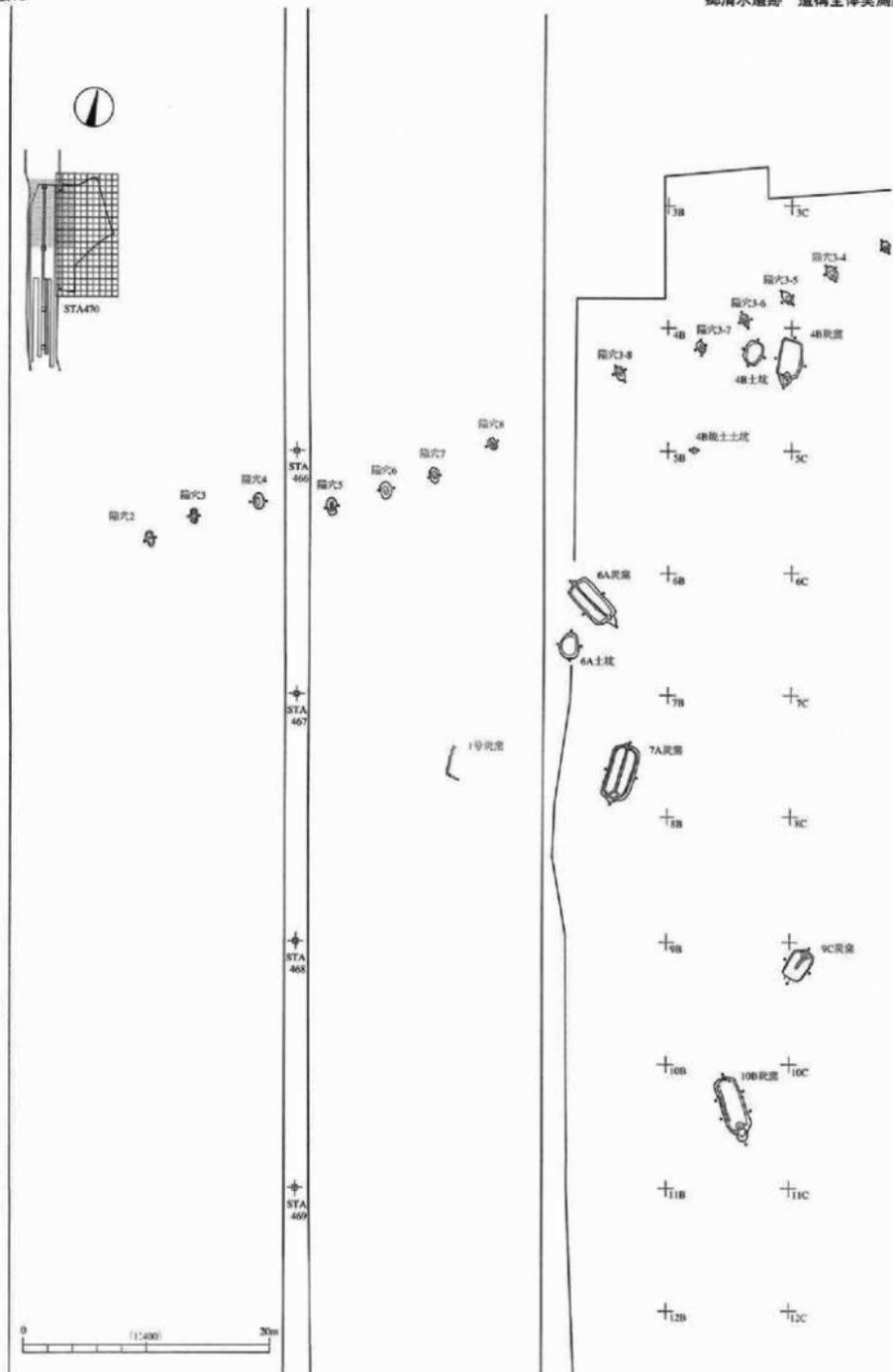


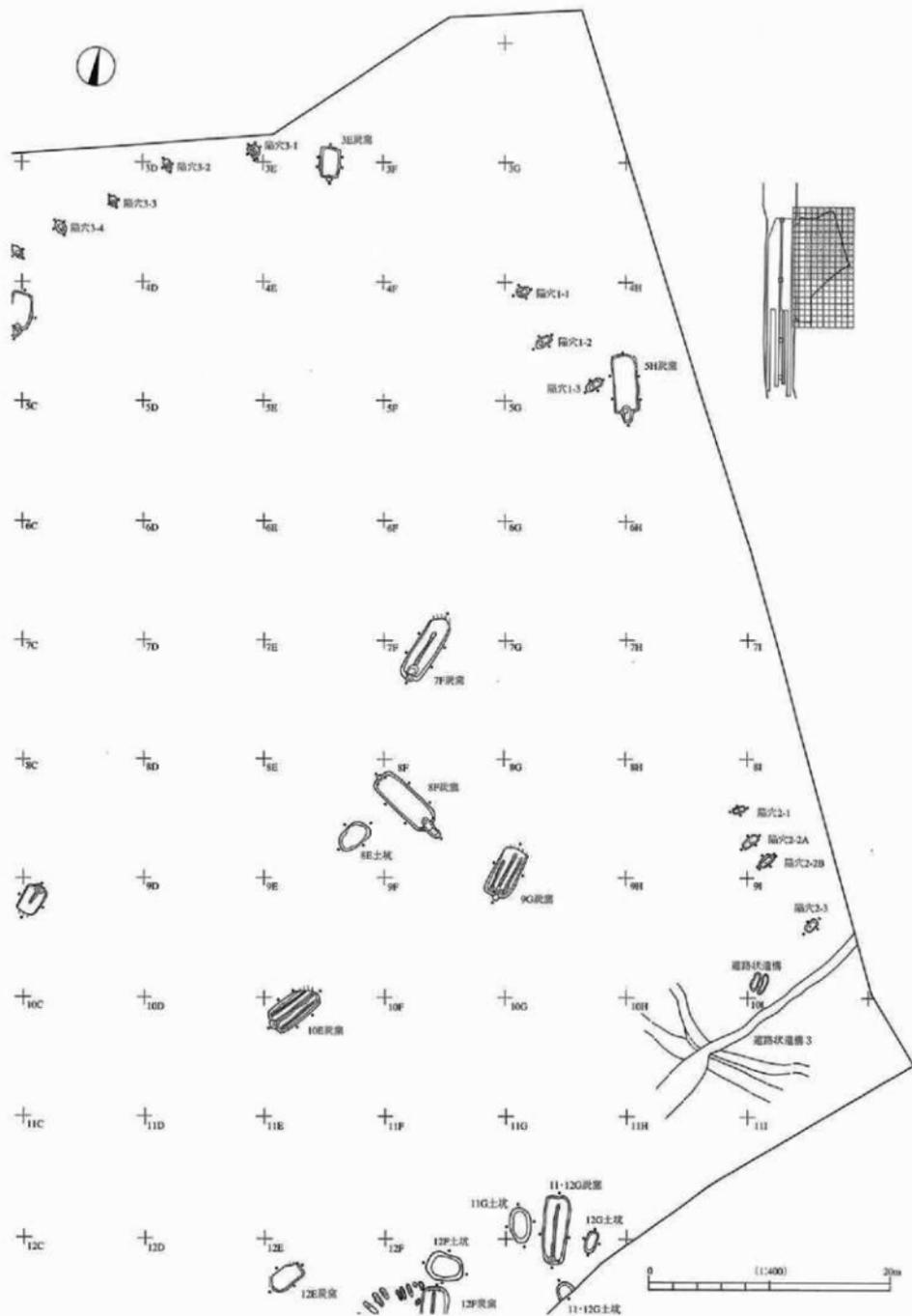
(国土地理院「砂高山」1:50,000原図 平成5年発行)

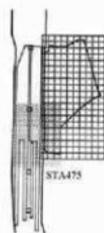
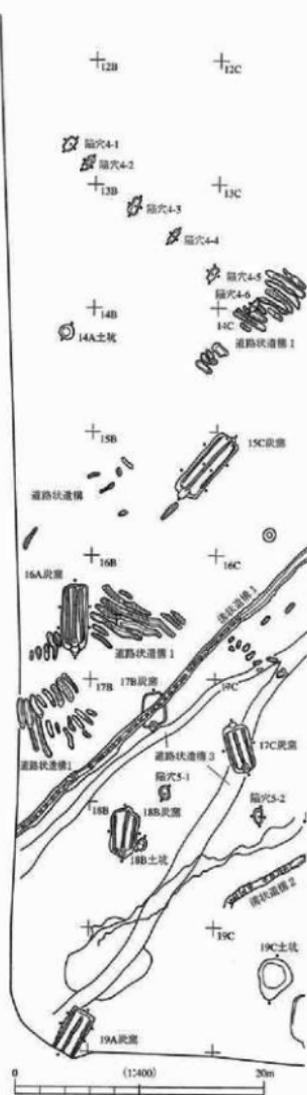
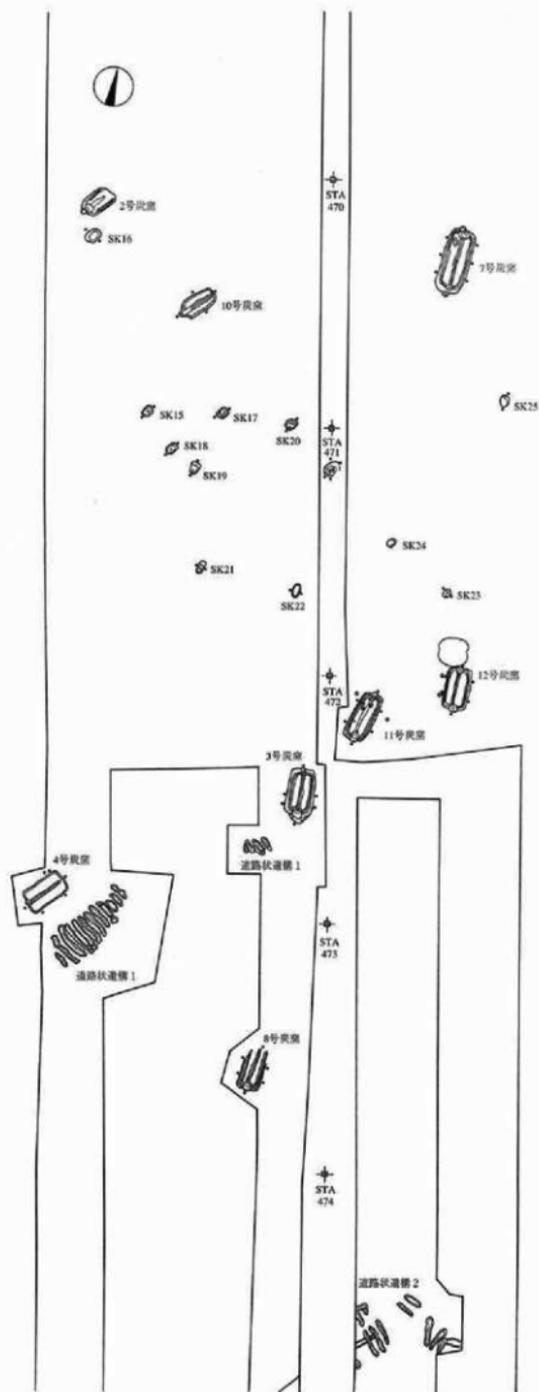


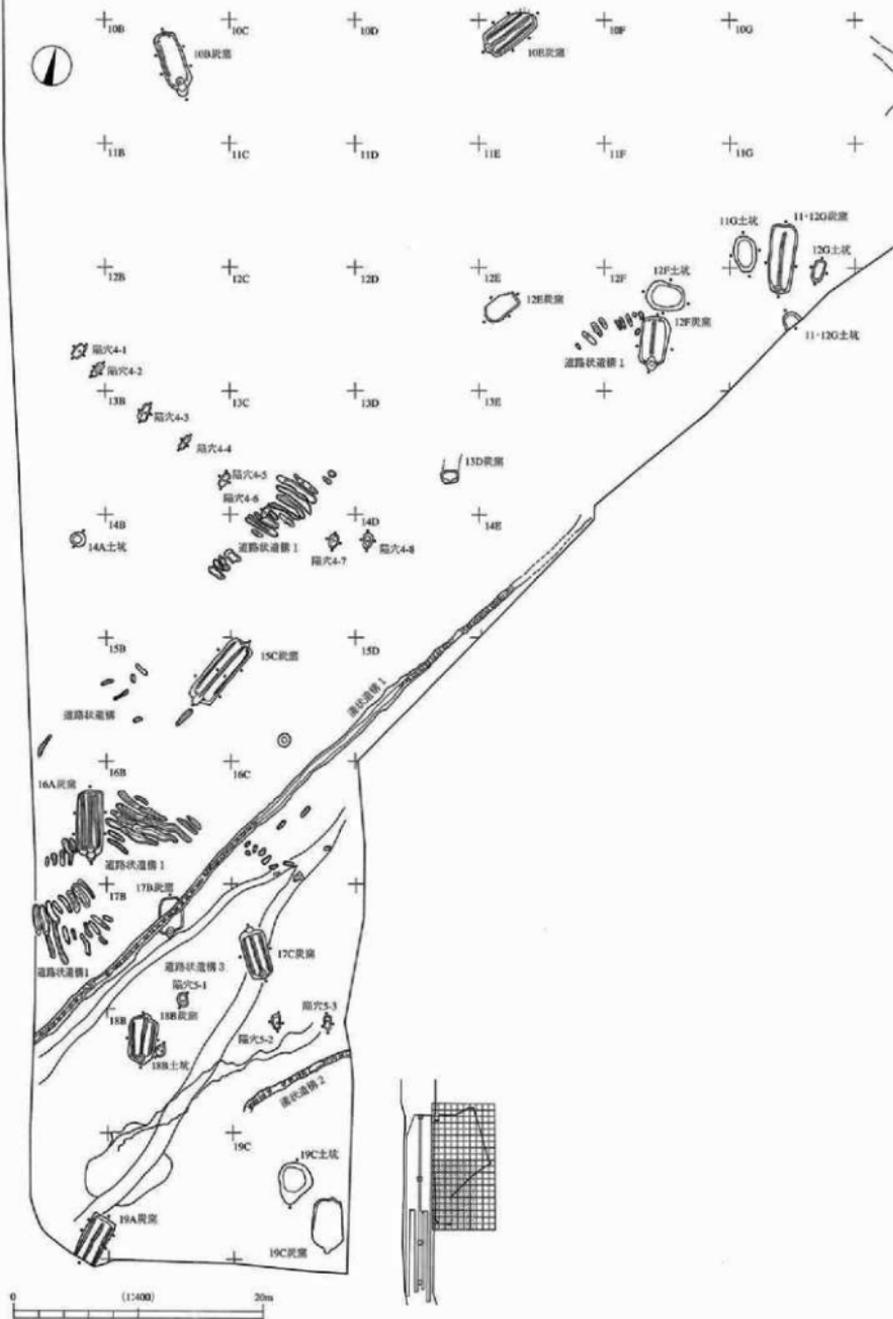


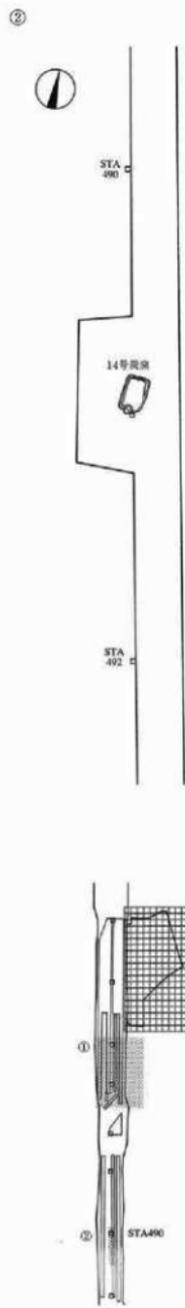
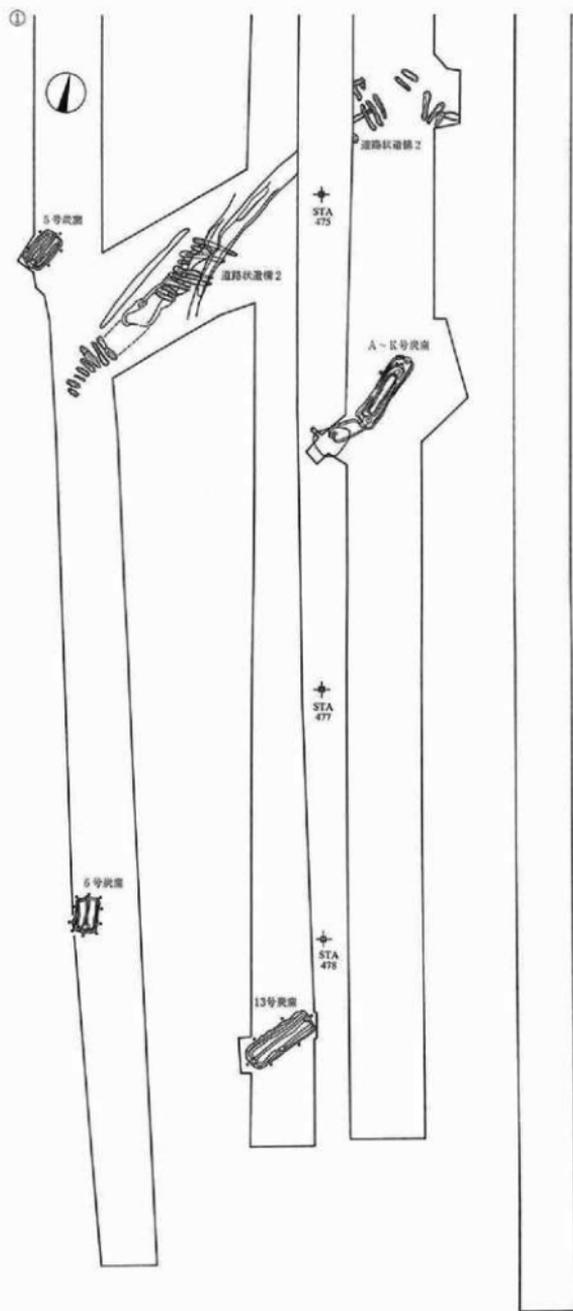




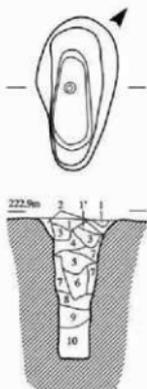






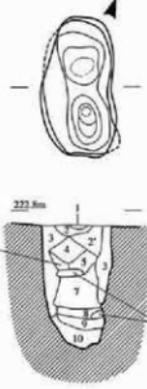


87-窟穴2



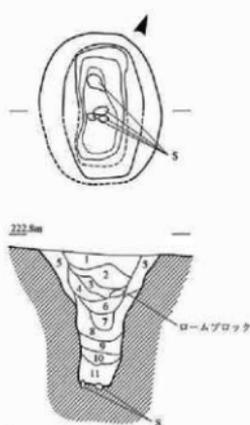
- 窟穴2**
- 1 灰褐色土。粘性がある。
  - 1' 灰褐色土。
  - 1層と比べて若干汚れる。
  - 2 灰褐色土。
  - 3 黄褐色ロームを若干含む。
  - 4 褐色土。赤褐色土を若干含む。
  - 5 暗褐色土と黄褐色ロームの混土。
  - 6 暗褐色土。黄褐色ロームを若干含む。
  - 7 灰褐色土。黄褐色ローム粒を若干含む。
  - 8 若干汚れた黄褐色ローム土。
  - 9 暗褐色土と灰褐色土の混土。
  - 10 黄褐色ローム土混入。
- 層まがりがなくふかふかしている。
- 9 灰褐色土。
  - 黄褐色ローム土が混入している。
  - 層まがりがなくふかふかしている。
  - 10 灰褐色土。
  - 層まがりがなくふかふかしている。

87-窟穴3



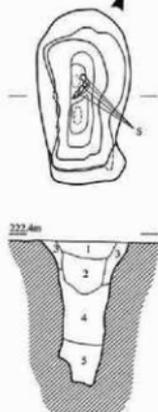
- 窟穴3**
- 1 褐色土と灰褐色土との混土。
  - 2' 灰褐色土。
  - 2 灰褐色土。黄色ローム粒を含む。
  - 3 若干汚れた黄褐色ローム土。灰褐色土との混土。
  - 3' 若干汚れた黄褐色ローム土。灰褐色土との混土。
  - 4 灰褐色土。褐色土。
  - 5 暗褐色土と灰褐色土との混土。
  - 6 暗褐色土。黄褐色ロームを若干含む。
  - 7 灰褐色土。
  - 8 灰褐色土。若干褐色土を含む。
  - 9 褐色土と暗褐色土を若干含む。
  - 10 灰褐色土と黄色ローム土との混土。

87-窟穴4



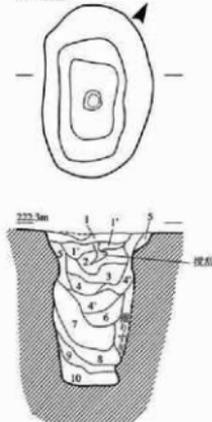
- 窟穴4**
- 1 灰褐色土。暗褐色土と黄褐色ロームを若干含む。
  - 2 暗褐色土。
  - 3 暗褐色土。黄色ロームブロックを含む。
  - 4 灰褐色土。褐色土と暗褐色土を若干含む。
  - 5 汚れた黄褐色ローム土。
  - 6 暗褐色土と褐色土。黄色ロームブロックを若干含む。
  - 7 褐色土。
  - 8 1層に類似する。層まがりがなくふかふかしている。
  - 9 褐色土。黄褐色ローム粒を含む。
  - 10 8層と同じく層まがりがなくふかふかしている。
  - 11 褐色土。黄褐色ロームブロックを含む。
- 層まがりがなくふかふかしている。

87-窟穴5



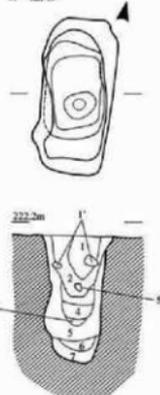
- 窟穴5**
- 1 灰褐色土。黄色ロームを若干含む。
  - 2 暗褐色土。
  - 褐色土。黄褐色土と黄褐色ロームブロックを含む。
  - 3 灰褐色土と黄色ロームの混土。
  - 4 灰褐色土。
  - 5 灰褐色土と暗褐色土と黄褐色ローム粒を含む。
- 層まがりがなくふかふかしている。

87-窟穴6



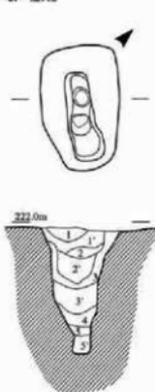
- 窟穴6**
- 1 褐色土。
  - 1' 褐色土。若干色調が暗く黄褐色ローム粒をわずかに含む。
  - 2 暗褐色土と褐色土との混土。黄色ローム粒を若干含む。
  - 3 暗褐色土。黄褐色ローム粒と茶褐色塊土ブロックを含む。
  - 4 暗褐色土。
  - 4' 暗褐色土と灰褐色土との混土。
  - 5 暗褐色土。暗褐色土と黄褐色ローム粒を含む。
  - 6 灰褐色土と黄褐色ロームとの混土。
  - 7 褐色土と灰褐色土との混土。
  - 8 暗褐色土と暗褐色土との混土。
  - 9 灰褐色土と黄褐色ロームとの混土。
  - 10 暗褐色土と黄褐色ロームとの混土。

87-窟穴7



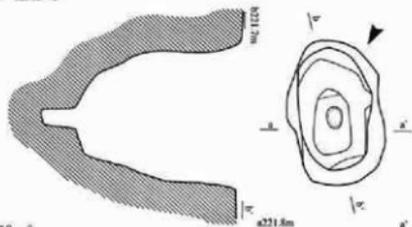
- 窟穴7**
- 1 褐色土。黄褐色ローム粒を含む。
  - 下層は暗褐色土。
  - 1' 黄褐色ロームブロック。
  - 2 灰褐色土。黄褐色ローム粒を若干含む。
  - 下層は褐色土を含む。
  - 3 暗褐色土と黄褐色ロームとの混土。
  - 4 褐色土。黄褐色ロームを若干含む。
  - 4' 2層と同じ。
  - 5 黄褐色ローム。若干汚れた褐色土。
  - 6 暗褐色土を含む。
  - 7 黄褐色ローム。
  - 8 黄褐色ロームと灰褐色土との混土。

87-窟穴8



- 窟穴8**
- 1 褐色土。
  - 1' 褐色土。若干色調が暗く、黄褐色ローム粒を含む。
  - 2 褐色土と暗褐色土との混土。
  - 色調が暗く褐色ローム粒を含む。
  - 3 褐色土と暗褐色土との混土。
  - 4 灰褐色土と黄褐色ロームとの混土。
  - 黄褐色ロームが多く若干明るい。
  - 層まがりがなくふかふかしている。
  - 3' 暗褐色土と黄褐色ロームとの混土。
  - 層まがりがなくふかふかしている。
  - 4 灰褐色土と褐色土との混土。
  - 層まがりがなくふかふかしている。
  - 5 褐色土。黄褐色ロームを含む。
  - 層まがりがなくふかふかしている。
  - 5' 褐色土。層まがりがなくふかふかしている。

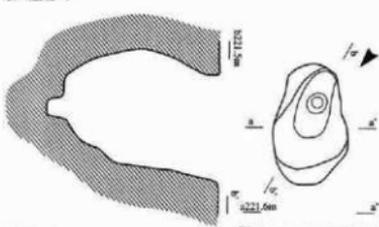
91-陥穴3-8



- 陥穴3-8
- 1 赤褐色土。地山黄褐色粒土が混じる。
  - 2 暗赤褐色土。
  - 3 黄褐色土。1(1~5mm)と黒色土が少々混じる。
  - 4 黄褐色土。少々赤褐色土が混じる。
  - 5 暗赤褐色土。締まりがある。
  - 6 赤褐色土。締まりがやや弱い。細かい粒がバラバラ落ちる。
  - 7 黄褐色土。赤褐色土が混じる。締まりが弱く、中口が崩れやすい。
  - 8 黄褐色土。赤褐色土が少々混じる。締まりが弱く、中口が崩れやすい。



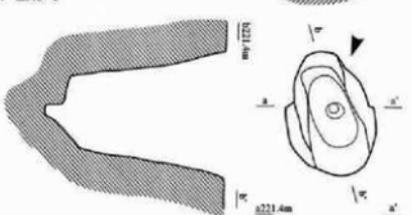
91-陥穴3-7



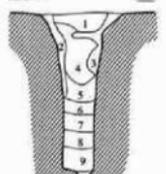
- 陥穴3-7
- 1 黄褐色土。赤褐色土が混じる。
  - 2 赤褐色土。
  - 3 黄褐色土が混じる。
  - 4 暗赤褐色土。
  - 5 黒色土が地山ブロック状に混じる。
  - 6 暗赤褐色土。赤褐色土が少々混じる。
  - 7 黄褐色土。締まりが弱い。
  - 8 黄褐色土。赤褐色土が混じる。
  - 9 暗赤褐色土。締まりが弱く、崩れやすい。黒色土が混じる。



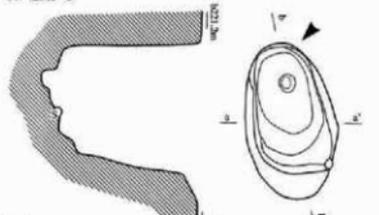
91-陥穴3-6



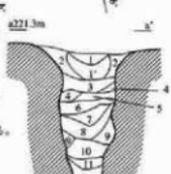
- 陥穴3-6
- 1 赤褐色土。黄褐色土が混じり、締まりがある。
  - 2 黄褐色土。赤褐色土が混じる。
  - 3 赤褐色土。
  - 4 暗赤褐色土。地山粒子が混じる。
  - 5 暗赤褐色土。締まりがある。
  - 6 暗赤褐色土。5層よりやや弱い。締まりが弱く、中口が崩れやすい。
  - 7 暗赤褐色土。締まりが弱く、中口が崩れやすい。
  - 8 暗赤褐色土。黒色粒土を少々含む。締まりがややある。
  - 9 暗赤褐色土。黒色粒土を含む。締まりが弱く、中口が崩れやすい。



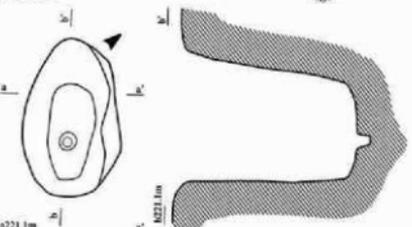
91-陥穴3-5



- 陥穴3-5
- 1 赤褐色土。地山粒が混じる。
  - 1' 赤褐色土。地山粒を1層よりやや多く含む。締まりがある。
  - 3 暗赤褐色土。黒色土粒が混じる。
  - 4 赤褐色土(褐色)。地山粒が混じる。
  - 5 暗赤褐色土。黒色土粒と炭片粒を少々含む。
  - 6 暗赤褐色土。
  - 7 暗赤褐色土。黒色土粒を少々含む。
  - 8 暗赤褐色土。黄褐色土がブロック状に混じる。
  - 9 黄褐色土。赤褐色土が少量混じり、地山ブロック状に入り込む。
  - 10 暗赤褐色土。黒色土粒と赤色土粒を含む。
  - 11 暗赤褐色土。締まりが弱く崩れやすい。
  - 12 黄褐色土。赤褐色土が少々混じる。



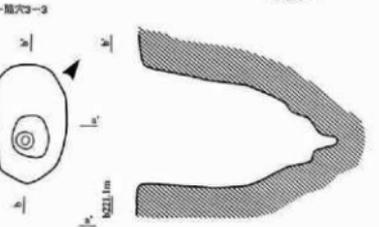
91-陥穴3-4



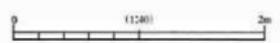
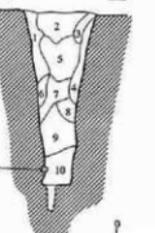
- 陥穴3-4
- 1 赤褐色土。地山細粒が混じる。
  - 2 暗赤褐色土。黒色土が混じる。締まりがあり、地山細粒と中心部に赤色細粒が少々混じる。
  - 3 赤褐色土。地山細粒と中心部に赤色細粒が少々混じる。
  - 4 暗赤褐色土。黒色土が2層より多く混じる。
  - 5 暗赤褐色土。赤色土をやや多く含む。
  - 6 暗赤褐色土。黒色土が2層より多く4層より少し混じる。
  - 7 暗赤褐色土。赤色土が5層より多く含む。
  - 8 黄褐色土。赤褐色土を含む。
  - 9 暗赤褐色土。黒色土を少々含む。
  - 10 黄褐色土。粒がやや大きい。
  - 11 暗赤褐色土(褐色)。



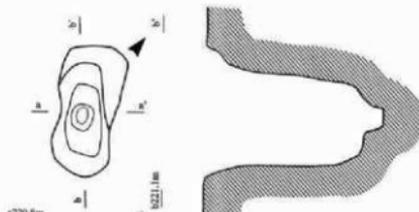
91-陥穴3-3



- 陥穴3-3
- 1 黄褐色土。締まりがある。
  - 2 暗赤褐色土。地山粒子を含む。
  - 3 赤褐色土。締まりがある。
  - 4 黄褐色土。
  - 5 暗赤褐色土。黒色土を少々含む。
  - 6 暗赤褐色土。締まりがある。黄褐色土を含む。
  - 7 暗赤褐色土。締まりがある。
  - 8 黄褐色土。区別色土を含む。
  - 9 暗赤褐色土。黒色土を5層より多く含む。粒を含む地山層。
  - 10 黄褐色土。



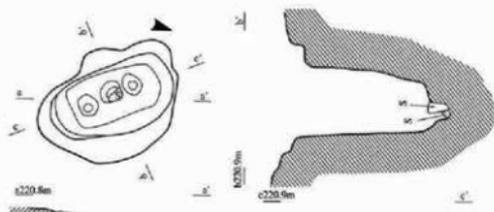
91-窟穴3-2



91-窟穴3-2

- 1 粘赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 2 赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 3 赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 4 赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 5 赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 6 赤褐色土。土山状が少々混じる。
- 7 粘赤褐色土。粘りが少しある。
- 8 赤褐色土。粘りがある。
- 9 赤褐色土。
- 10 赤褐色土。粘り少しある。
- 11 赤褐色土。粘りがある。
- 12 赤褐色土。粘りがない。
- 13 赤褐色土。粘りがある。

91-窟穴3-1



91-窟穴3-1

- 1 赤褐色土。
- 2 赤褐色土。
- 3 赤褐色土。
- 4 赤褐色土。
- 5 赤褐色土。
- 6 赤褐色土。
- 7 赤褐色土。
- 8 赤褐色土。
- 9 赤褐色土。
- 10 赤褐色土。
- 11 赤褐色土。

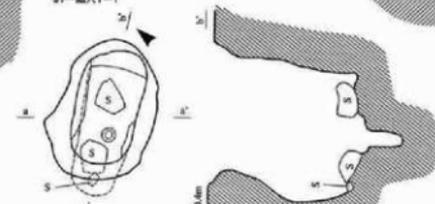
φ230.8mm

φ220.8mm

φ220.9mm

φ230.8mm

91-窟穴1-1



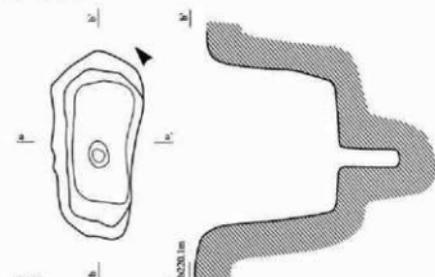
91-窟穴1-1

- 1 黒褐色土。ローム粒子和ロームブロックを少量含む。
- 2 粘赤褐色土。ロームブロックを少量含む。粘りがある。
- 3 赤褐色土。やや臭味を帯びている。粘性がややある。
- 4 粘赤褐色土。2層より黒褐色土の混入が少く明るい。粘性がややある。
- 5 粘赤褐色土(褐色)。石灰質。粘性がややある。
- 6 粘赤褐色土とロームの混合。

91-窟穴1-1

- 1 黒褐色土。ローム粒子和ロームブロックを少量含む。
- 2 粘赤褐色土。ロームブロックを少量含む。粘りがある。
- 3 赤褐色土。やや臭味を帯びている。粘性がややある。
- 4 粘赤褐色土。2層より黒褐色土の混入が少く明るい。粘性がややある。
- 5 粘赤褐色土(褐色)。石灰質。粘性がややある。
- 6 粘赤褐色土とロームの混合。

91-窟穴1-3



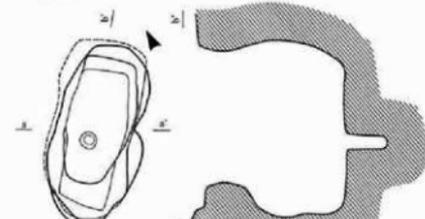
91-窟穴1-3

- 1 黒褐色土。粘りがある。
- 2 黒褐色土。粘りがある。
- 3 粘赤褐色土。粘りがある。ロームブロックがある。
- 4 ロームブロック。
- 5 粘赤褐色土。3層よりやや黒く、粘性がある。
- 6 黒褐色土。ロームブロックがある。
- 7 黒褐色土。ロームが混入している。

91-窟穴1-2

- 1 黒褐色土。粘りがある。
- 2 黒褐色土。粘りがある。
- 3 粘赤褐色土。粘りがある。ロームブロックがある。
- 4 ロームブロック。
- 5 粘赤褐色土。3層よりやや黒く、粘性がある。
- 6 黒褐色土。ロームブロックがある。
- 7 黒褐色土。ロームが混入している。

91-窟穴1-2

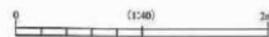


91-窟穴1-2

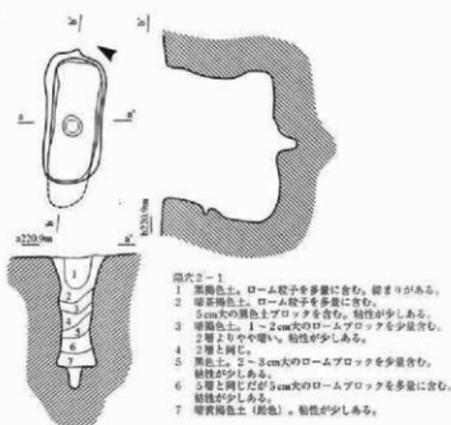
- 1 赤褐色土。粘りがある。
- 2 粘赤褐色土。ロームブロックを含む。粘りがある。
- 3 粘赤褐色土。粘りがある。
- 4 赤褐色土。粘りがある。
- 5 黒褐色土。粘りがある。
- 6 粘赤褐色土。ローム粒子和ロームブロックを含む。粘りがある。
- 7 赤褐色土。粘りがある。
- 8 赤褐色土。粘りがある。
- 9 赤褐色土。粘りがある。
- 10 赤褐色土。粘りがある。
- 11 赤褐色土。粘りがある。
- 12 粘赤褐色土。粘りがある。
- 13 赤褐色土。ロームブロックを含む。粘りがある。
- 14 赤褐色土。粘りがある。
- 15 赤褐色土。粘りがある。
- 16 黒褐色土。ロームを含む。

91-窟穴1-2

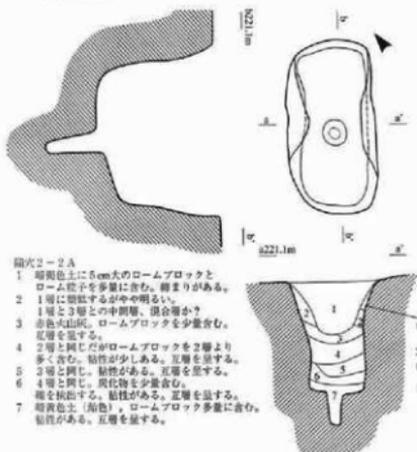
- 1 赤褐色土。粘りがある。
- 2 粘赤褐色土。ロームブロックを含む。粘りがある。
- 3 粘赤褐色土。粘りがある。
- 4 赤褐色土。粘りがある。
- 5 黒褐色土。粘りがある。
- 6 粘赤褐色土。ローム粒子和ロームブロックを含む。粘りがある。
- 7 赤褐色土。粘りがある。
- 8 赤褐色土。粘りがある。
- 9 赤褐色土。粘りがある。
- 10 赤褐色土。粘りがある。
- 11 赤褐色土。粘りがある。
- 12 粘赤褐色土。粘りがある。
- 13 赤褐色土。ロームブロックを含む。粘りがある。
- 14 赤褐色土。粘りがある。
- 15 赤褐色土。粘りがある。
- 16 黒褐色土。ロームを含む。



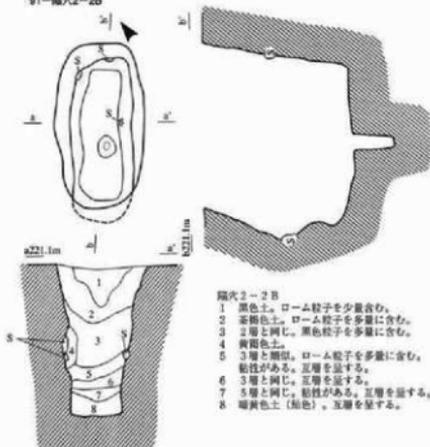
91-陥穴2-1



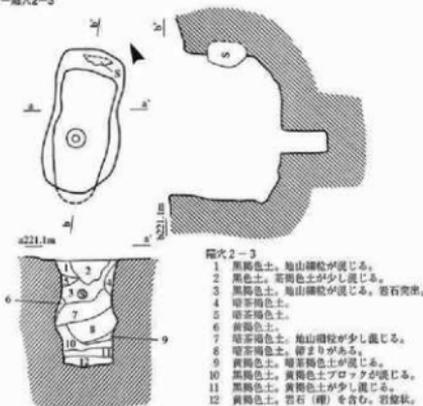
91-陥穴2-2A



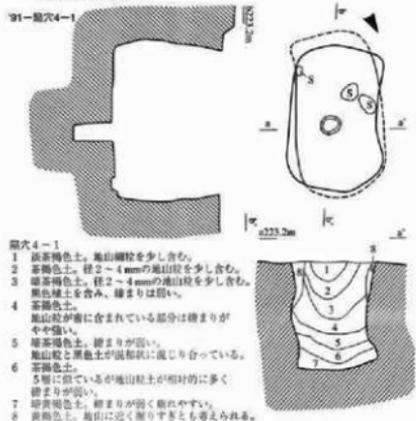
91-陥穴2-2B



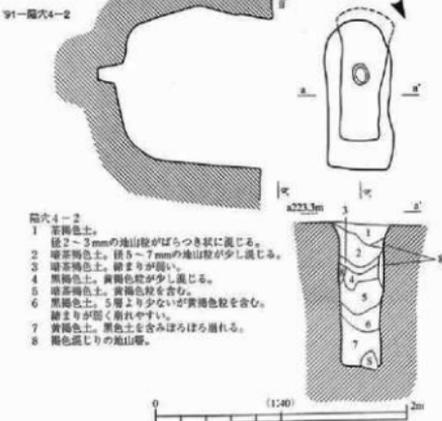
91-陥穴2-3



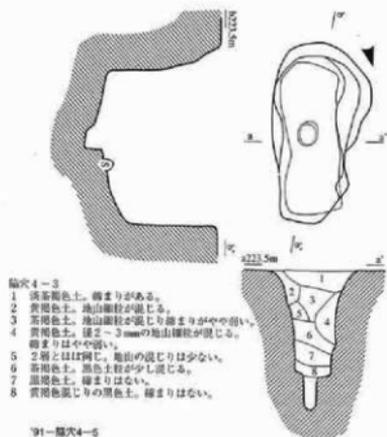
91-陥穴4-1



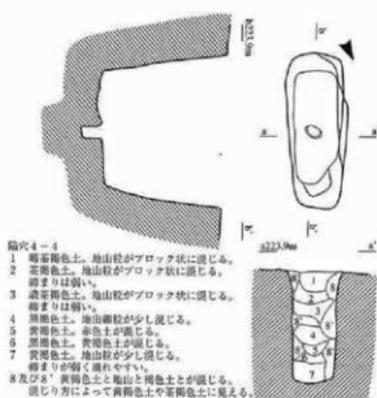
91-陥穴4-2



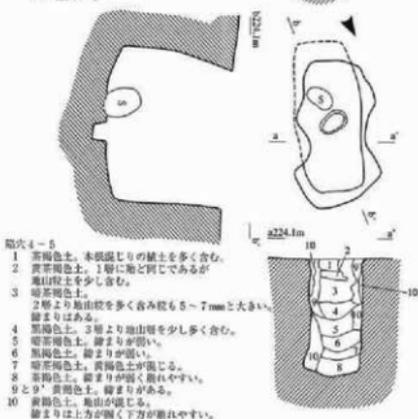
91-窟穴4-3



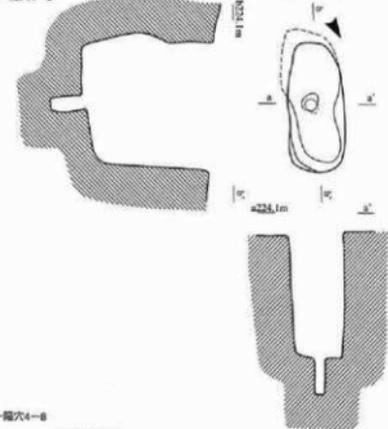
91-窟穴4-4



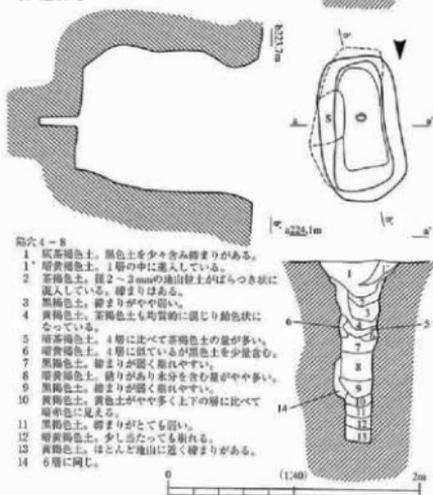
91-窟穴4-5



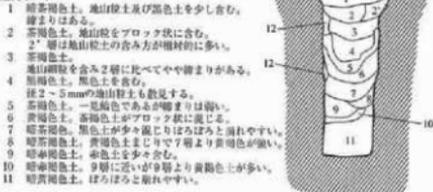
91-窟穴4-6



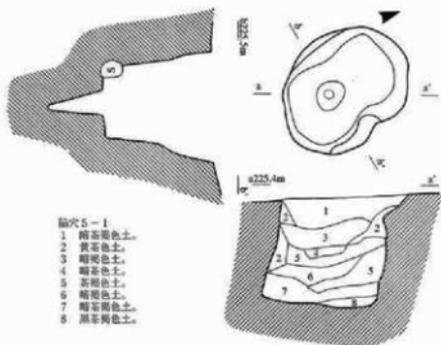
91-窟穴4-8



窟穴4-7

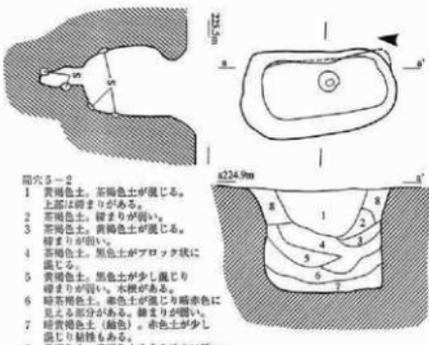


91-陥穴5-1



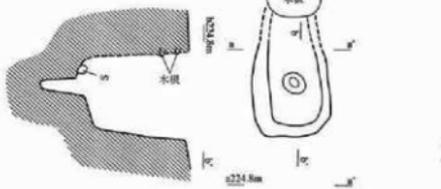
- 陥穴5-1
- 1 黄褐色土。
  - 2 赤褐色土。
  - 3 暗褐色土。
  - 4 暗赤土。
  - 5 赤褐色土。
  - 6 暗褐色土。
  - 7 暗褐色土。
  - 8 黒褐色土。

91-陥穴5-2

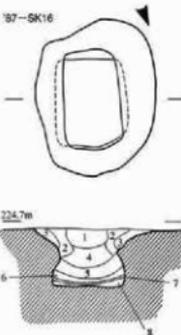


- 陥穴5-2
- 1 黄褐色土。赤褐色土が混じる。上部は締まりがある。
  - 2 赤褐色土。締まりが弱い。
  - 3 赤褐色土。黄褐色土が混じる。締まりが弱い。
  - 4 赤褐色土。黒色土がブロック状に混じる。
  - 5 暗褐色土。黒色土が少し混じり締まりが弱い。木炭がある。
  - 6 暗赤褐色土。赤色土が混じり暗赤色に近くなる部分がある。締まりが弱い。
  - 7 暗赤褐色土。暗赤土。赤色土が少し混じり締まりもある。
  - 8 黄褐色土。赤褐色土を含み地山に近い。

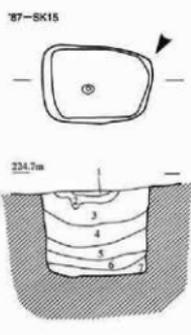
91-陥穴5-3



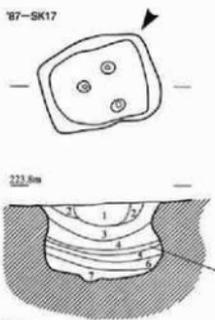
- 陥穴5-3
- 1 黄褐色土。地山層状を含み締まりがある。木炭がある。
  - 2 暗黄褐色土。
  - 3 黄褐色土。黒色土を少し含む。
  - 3' 2層および3層に似ているが3層に近い。
  - 4 黄褐色土。締まりが弱い。
  - 5 暗赤褐色土。示状に4層に進入している。
  - 6 黄褐色土。締まりが弱い。



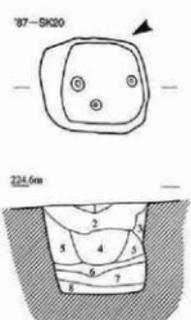
- SK16
- 1 黄褐色土。
  - 2 黄褐色土。
  - 3 赤褐色土。
  - 4 暗褐色土。
  - 5 黄褐色土。
  - 6 黄褐色土。締まりはない。
  - 7 赤褐色土混入黄褐色土。締まりはない。
  - 8 黄褐色土。締まりはない。



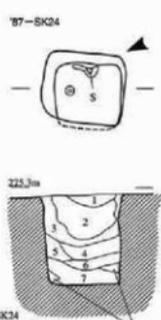
- SK15
- 1 黒土。
  - 2 赤褐色土。
  - 3 黄褐色土。
  - 4 暗黄褐色土。
  - 5 暗褐色土。
  - 6 締まりがなくふかふかしている。
  - 7 黄色ローム混入黄褐色土。
  - 8 締まりが弱くふかふかしている。



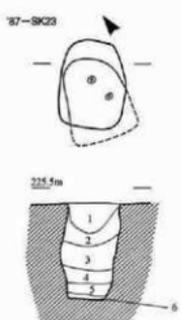
- SK17
- 1 黄褐色土。
  - 2 黄褐色土。
  - 3 暗褐色土。
  - 4 黄褐色土。締まりがなくふかふかしている。
  - 5 黄褐色土。締まりがなくふかふかしている。
  - 5' 5層より弱い。
  - 6 赤褐色土混入黄褐色土。締まりが弱い。
  - 7 赤褐色土はローム層か？
  - 7 黄褐色土。



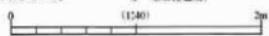
- SK20
- 1 赤土。
  - 2 暗褐色土。
  - 3 ロームブロック。
  - 4 黄褐色土。
  - 5 ローム砂混入黄褐色土。
  - 6 ローム砂混入黄褐色土。
  - 7 黄褐色土。締まりがなくふかふかしている。
  - 8 赤褐色土。締まりがなくふかふかしている。



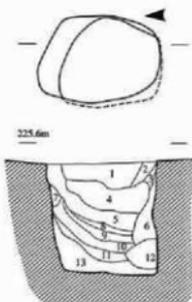
- SK24
- 1 黄褐色土。
  - 2 黄褐色土。
  - 3 赤褐色土混入黄褐色土。
  - 4 暗褐色土。
  - 5 暗褐色土。
  - 6 黄褐色土。
  - 7 黄褐色土混入黄褐色土。
  - 8 ロームブロック。



- SK23
- 1 赤褐色土。
  - 2 赤褐色土。
  - 3 赤褐色土。
  - 4 黄褐色土。
  - 5 赤褐色土。
  - 6 暗赤褐色土。



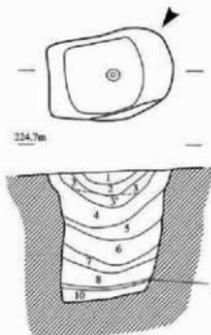
87-SK25



SK25

- 1 暗褐色土。赤色粘土粒が混じっている。
- 2 暗褐色土。
- 3 暗褐色土。黄色粘土粒が混じっている。柔らかい。
- 4 真黒色土。
- 5 黒色土。黄色粘土粒が混じっている。
- 7 ロームブロック。
- 8 暗褐色土。赤茶褐色粘土粒が見えている。柔らかい。
- 9 黒色土。褐色粘土粒が混じっている。柔らかい。
- 10 暗褐色土。褐色粘土粒が混じっている。非常に軟いている。柔らかい。
- 11 黒色土。柔らかい。
- 12 ロームブロック。
- 13 丹紅た黄褐色土。

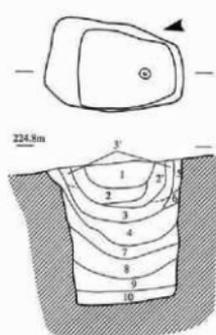
87-SK18



SK18

- 1 真黒色土。
- 2 真黒色土。
- 3 真黒色土。赤色粘土粒が混じっている。
- 4 赤褐色土。
- 5 真黒色土。赤色粘土粒が混じっている。
- 6 黒色土。
- 7 黒色土。黄色ロームブロックが混じっている。締まりがなくふかふかしている。
- 8 黒色土。締まりがなくふかふかしている。
- 9 暗褐色土。黄色ローム粒子が混じっている。締まりがなくふかふかしている。
- 10 真黒色土。粘結性がある。

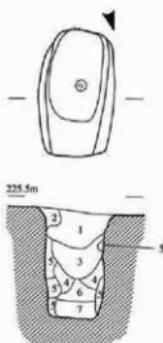
87-SK19



SK19

- 1 黒色土。
- 2 真黒色土。
- 2' 暗褐色土。
- 3 赤褐色土。
- 3' 黒色土。赤色粘土粒が混じる。
- 4 暗褐色土。
- 5 真褐色土。締まりがなく柔らかい。
- 6 暗褐色土。黄色ローム粒が混じる。締まりがなく柔らかい。
- 7 暗褐色土。黄色ロームが混じる。締まりがなく柔らかい。
- 8 黒色土。黄色ロームが混じる。締まりがなく柔らかい。
- 9 褐色土。赤色粘土粒が混じる。締まりはある。
- 10 真黒色土。

87-SK21

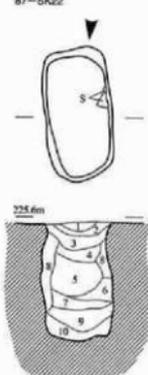


SK21

- 1 黒色土。
- 2 赤褐色土。
- 3 暗褐色土。
- 4 褐色土。ローム粒が混じる。
- 5 暗褐色土。
- 5' ロームブロック。
- 6 黒色土。
- 7 暗褐色土。締まりがなくふかふかしている。

87-BTA47)付近掘穴状土坑

87-BK22



SK23

- 1 暗褐色土。
- 2 褐色土。
- 3 褐色土。
- 4 褐色土。黄色土が混じっている。
- 5 暗褐色土。黄色土が混入している。
- 6 暗褐色土。赤色粘土粒が混じる。
- 7 赤褐色土。
- 8 黄褐色ローム土。
- 9 真褐色土。締まりがなくふかふかしている。
- 10 暗褐色土。締まりがあり混濁して粘結性もある。

STA47)土坑

- 1 暗褐色土。締まりと粘結性がない。
- 2 真褐色土。1層に類似するが、色調がやや暗い。締まりがやや強い。
- 3 暗褐色土。2層に類似するが、色調がやや暗い。締まりはやや強い。
- 4 暗褐色土。2層に類似するが、色調がやや明るい。締まりはやや強い。
- 5 黒色土。ローム粒子をやや多く含む締まり・粘結性に弱い。
- 6 真褐色土。2層に類似するが炭化物を多く含む締まりがやや強い。
- 7 土間色土。ローム粒がやや多量で、締まりは強く粘結性は弱い。
- 8 暗褐色土。5層に類似するが色調が暗い。
- 9 暗褐色土。8層に類似するが色調が暗い。
- 10 真褐色土。8層に類似するが色調が暗い。
- 10' 暗褐色土。10層と11層の境界線。
- 11 暗褐色土。15mm程度のローム粒子を少量含む。炭化物を多く含む。締まり・粘結性ともにやや強い。
- 12 黒色土。炭化物を非常に多く含む。締まり・粘結性ともにやや強い。
- 13 暗褐色土。11層に類似するが色調がやや暗い。
- 14 暗褐色土。11層に類似するが締まりがやや強い。
- 15 黒色土。12層と同じ。
- 16 黒色土。ローム粒子を多量に含む締まり・粘結性ともに弱い。
- 17 暗褐色土。13層と同じ。
- 18 暗褐色土。16層に類似する。
- 19 黒色土。締まり・粘結性ともに弱い。炭化物を少量含む。
- 20 黒色土。19層と同じ。
- 21 暗褐色土。19層に類似するが、炭化物の量が少なく色調が暗い。
- 22 暗褐色土。ロームを主体とし、締まりが強く、粘結性がない。
- 23 暗褐色土。22層と類似するが色調がやや暗い。
- 24 暗褐色土。地中C層に類似するが地中C層よりわずかに締まりが強い。

【地山土質記】

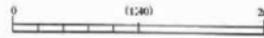
- a ローム層。
- b 黄褐色土。締まりはやや強く粘結性はない。
- c 土層より締まり・粘結性が強く、径2-3cmの黄褐色の火山岩をまばらに含む。
- d 黒土に類似するが径1cm未満の小礫を多量・均等に含む。粘結性は弱い。
- e d層よりは色調はやや暗い。径5mm程度の小礫を多量・均等に含む。締まりは強く粘結性はない。
- f 黄褐色土。径5mm以下の小礫を多量に含む。下層は径5mm以下の礫層となっている。
- g 暗褐色土。黒く、若狭とみなすこともできる。
- h 黄褐色土。e層とはほぼ同じ。やや色調が明るい。

【P14】

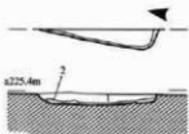
- a 褐色土。炭化物を少量含む。締まりがやや強く粘結性もややある。ローム粒子を少量含む。
- b 暗褐色土。8層に類似するが、a層よりローム粒子を多量含む締まりはやや強い。

【P16】

- 1 暗褐色土。ローム粒子を多量に含む炭化物粒子を少量含む。締まりは強く粘結性はわずかにある。
- 2 暗褐色土。ロームを主体とする層土。締まり・粘結性ともに弱い。
- 3 暗褐色土。ローム粒子をやや多く含む。締まり・粘結性ともに弱い。
- 4 暗褐色土。炭化物粒子を少量含む。締まり・粘結性ともに弱い。

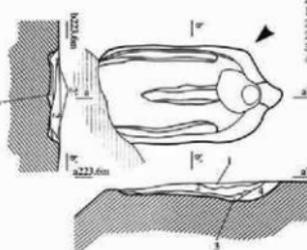


87-1号炭窯



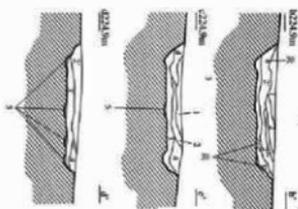
- 1号炭窯  
1 黒褐色土。大きい炭化物を含む。  
2 黒色土。炭化物とローム質ブロックを多く含む。

87-2号炭窯



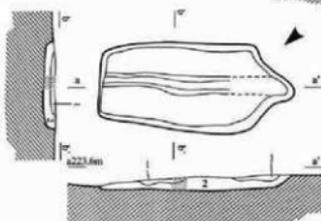
- 2号炭窯  
1 黒褐色土。さらさらしている。  
2 黒色土。炭化物小粒が多く混じる。  
3 暗黒茶褐色土。炭化物粒がわずかに混じる。  
4 黒色土。

87-7号炭窯



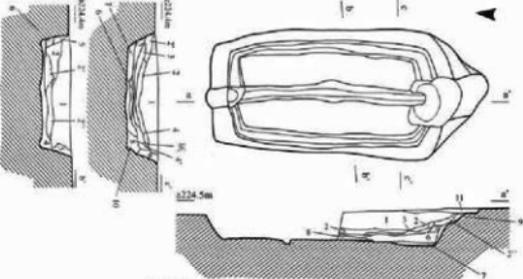
- 7号炭窯  
1 黒褐色土。さらさらしてよく締まる。  
2 黒灰色土。  
3 白灰色の灰（火山灰か？）が混じる。  
4 黒灰色土。  
5 暗褐色土。灰が混じる。  
6 暗褐色土。炭化物を多く含む。  
7 黒色土。  
8 褐色ブロック。炭化物をわずかに含む。  
9 暗褐色土。炭化物をわずかに含む。

87-10号炭窯

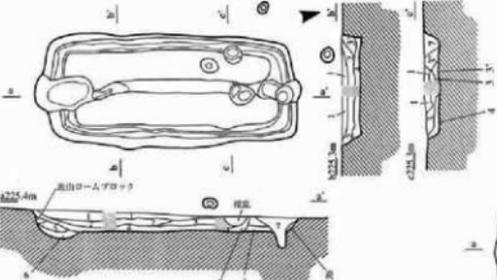


- 10号炭窯  
1 黒褐色土。さらさらしてわずかに炭化物がある。  
2 黒色土。炭化物粒を多く含む。炭がジャリジャリとし、締まりがない。

87-3号炭窯



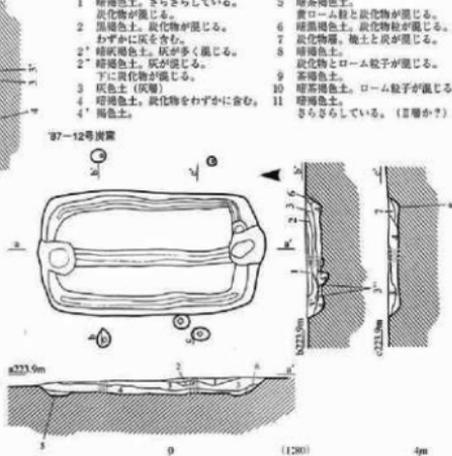
87-11号炭窯



- 11号炭窯  
1 黒灰色土。締まりがある。  
2 わずかに茶褐色粒が混じる。  
3 黒褐色土。  
4 炭化物粒とロームブロックが混じる。  
5 黒褐色土。  
6 暗褐色土。3層に層状に灰を含む。  
7 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
8 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
9 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
10 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
11 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
12 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
13 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
14 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
15 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
16 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
17 暗褐色土。炭化物が多く混じる。  
18 暗褐色土。炭化物が多く混じる。

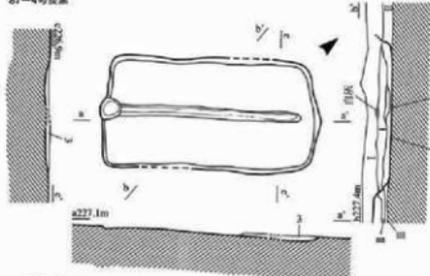
- 12号炭窯  
1 黒褐色土。  
2 黒褐色土。黄褐色粒子が多く混じる。  
3 黒褐色土。径1-2cmの黄褐色ロームブロックが混じる。  
4 暗褐色土。さらさらしている。  
5 暗褐色土。1層に灰で炭化物の混入が少ない。  
6 暗褐色土。炭化物粒が多く混じる。  
7 暗褐色土。炭化物粒が少なくさらさらしている。  
8 暗褐色土。  
9 暗褐色土。黄褐色ロームブロックが混じる。  
10 暗褐色土。黄褐色粒子が混じる。  
11 暗褐色土。炭化物とロームブロックが混じる。

87-12号炭窯



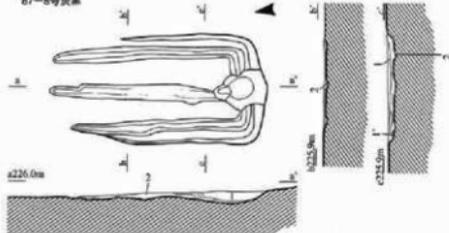
- 3号炭窯  
1 暗褐色土。さらさらしている。  
2 暗褐色土。炭化物が混じる。  
3 暗褐色土。炭化物が混じる。  
4 暗褐色土。炭化物が混じる。  
5 暗褐色土。炭化物が混じる。  
6 暗褐色土。炭化物が混じる。  
7 暗褐色土。炭化物が混じる。  
8 暗褐色土。炭化物が混じる。  
9 暗褐色土。炭化物が混じる。  
10 暗褐色土。炭化物が混じる。  
11 暗褐色土。炭化物が混じる。  
12 暗褐色土。炭化物が混じる。  
13 暗褐色土。炭化物が混じる。  
14 暗褐色土。炭化物が混じる。  
15 暗褐色土。炭化物が混じる。  
16 暗褐色土。炭化物が混じる。  
17 暗褐色土。炭化物が混じる。  
18 暗褐色土。炭化物が混じる。  
19 暗褐色土。炭化物が混じる。  
20 暗褐色土。炭化物が混じる。  
21 暗褐色土。炭化物が混じる。  
22 暗褐色土。炭化物が混じる。  
23 暗褐色土。炭化物が混じる。  
24 暗褐色土。炭化物が混じる。  
25 暗褐色土。炭化物が混じる。  
26 暗褐色土。炭化物が混じる。  
27 暗褐色土。炭化物が混じる。  
28 暗褐色土。炭化物が混じる。  
29 暗褐色土。炭化物が混じる。  
30 暗褐色土。炭化物が混じる。  
31 暗褐色土。炭化物が混じる。  
32 暗褐色土。炭化物が混じる。  
33 暗褐色土。炭化物が混じる。  
34 暗褐色土。炭化物が混じる。  
35 暗褐色土。炭化物が混じる。  
36 暗褐色土。炭化物が混じる。  
37 暗褐色土。炭化物が混じる。  
38 暗褐色土。炭化物が混じる。  
39 暗褐色土。炭化物が混じる。  
40 暗褐色土。炭化物が混じる。  
41 暗褐色土。炭化物が混じる。  
42 暗褐色土。炭化物が混じる。  
43 暗褐色土。炭化物が混じる。  
44 暗褐色土。炭化物が混じる。  
45 暗褐色土。炭化物が混じる。  
46 暗褐色土。炭化物が混じる。  
47 暗褐色土。炭化物が混じる。  
48 暗褐色土。炭化物が混じる。  
49 暗褐色土。炭化物が混じる。  
50 暗褐色土。炭化物が混じる。  
51 暗褐色土。炭化物が混じる。  
52 暗褐色土。炭化物が混じる。  
53 暗褐色土。炭化物が混じる。  
54 暗褐色土。炭化物が混じる。  
55 暗褐色土。炭化物が混じる。  
56 暗褐色土。炭化物が混じる。  
57 暗褐色土。炭化物が混じる。  
58 暗褐色土。炭化物が混じる。  
59 暗褐色土。炭化物が混じる。  
60 暗褐色土。炭化物が混じる。  
61 暗褐色土。炭化物が混じる。  
62 暗褐色土。炭化物が混じる。  
63 暗褐色土。炭化物が混じる。  
64 暗褐色土。炭化物が混じる。  
65 暗褐色土。炭化物が混じる。  
66 暗褐色土。炭化物が混じる。  
67 暗褐色土。炭化物が混じる。  
68 暗褐色土。炭化物が混じる。  
69 暗褐色土。炭化物が混じる。  
70 暗褐色土。炭化物が混じる。  
71 暗褐色土。炭化物が混じる。  
72 暗褐色土。炭化物が混じる。  
73 暗褐色土。炭化物が混じる。  
74 暗褐色土。炭化物が混じる。  
75 暗褐色土。炭化物が混じる。  
76 暗褐色土。炭化物が混じる。  
77 暗褐色土。炭化物が混じる。  
78 暗褐色土。炭化物が混じる。  
79 暗褐色土。炭化物が混じる。  
80 暗褐色土。炭化物が混じる。  
81 暗褐色土。炭化物が混じる。  
82 暗褐色土。炭化物が混じる。  
83 暗褐色土。炭化物が混じる。  
84 暗褐色土。炭化物が混じる。  
85 暗褐色土。炭化物が混じる。  
86 暗褐色土。炭化物が混じる。  
87 暗褐色土。炭化物が混じる。  
88 暗褐色土。炭化物が混じる。  
89 暗褐色土。炭化物が混じる。  
90 暗褐色土。炭化物が混じる。  
91 暗褐色土。炭化物が混じる。  
92 暗褐色土。炭化物が混じる。  
93 暗褐色土。炭化物が混じる。  
94 暗褐色土。炭化物が混じる。  
95 暗褐色土。炭化物が混じる。  
96 暗褐色土。炭化物が混じる。  
97 暗褐色土。炭化物が混じる。  
98 暗褐色土。炭化物が混じる。  
99 暗褐色土。炭化物が混じる。  
100 暗褐色土。炭化物が混じる。

77-4号遺構



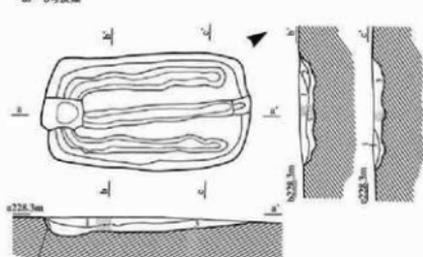
- 4号遺層  
 1 黒褐色土。炭化物が混じる。  
 2 黒褐色土。さらさらしている。  
 3 黒褐色土。炭化物が多く混じる。

77-8号遺構



- 8号遺層  
 1 暗褐色土。わずかに炭化物が混じる。  
 2 暗褐色土。炭化物が少量混じる。  
 3 炭化物層。焼土が混じる。

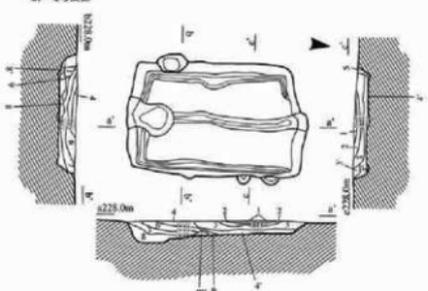
77-5号遺構



ロームブロック

- 5号遺層  
 1 赤褐色土。  
 2 黄褐色土。  
 3 黒色土。

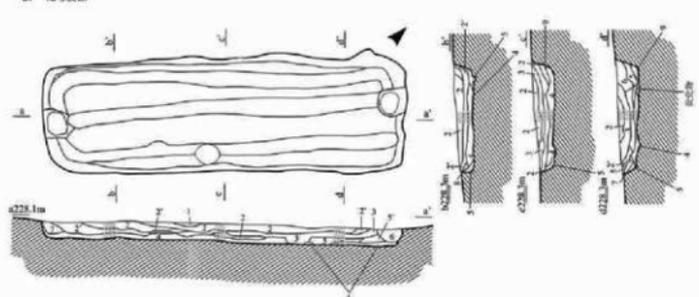
77-6号遺構



- 6号遺層  
 1 暗灰褐色土。白灰が多く混じる。  
 2 黒褐色土。わずかに炭化物が混じる。  
 3 暗褐色土。茶褐色ローム粒が混じる。  
 4 暗灰褐色土。炭化物とロームブロックが混じる。  
 5 暗灰褐色土。やや暗褐色土に近い色調。  
 6 暗灰褐色土。

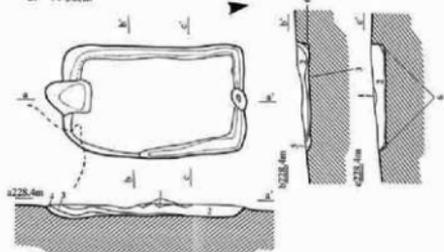
- 6 暗灰褐色土。白っぽい灰を含む。  
 7 暗灰褐色土。  
 8 黒色土。炭化物が多く混じる。  
 9 暗灰褐色土。ローム粒が混じる。  
 10 暗灰褐色土。ローム粒が多く混じる。  
 11 暗灰褐色土。炭化物と灰が多い。  
 12 7層に類似する。  
 13 暗赤褐色土。炭化物が混じる。

77-13号遺構



- 13号遺層  
 1 黒褐色土。  
 2 黒灰褐色土。白灰が多く混じる。  
 3 黒灰褐色土。炭化物と灰が混じる。  
 4 黒灰褐色土。2層に比べて硬まりが強い。  
 5 黒色土。炭化物が多く混じる。  
 6 暗赤褐色土。炭化物と黒山ブロックが混じる。  
 7 暗赤褐色土。黒山ブロックが混じる。  
 8 黒色土層を基調とした黒山ブロック状が混じる。  
 9 暗灰褐色土。焼土と灰が混じる。  
 10 暗灰褐色土。黒山ブロックと灰が混じる。

77-14号遺構

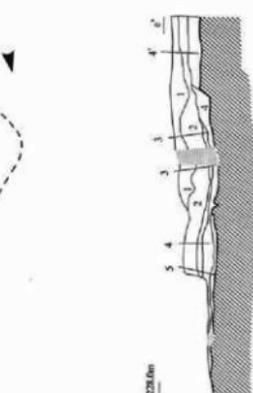
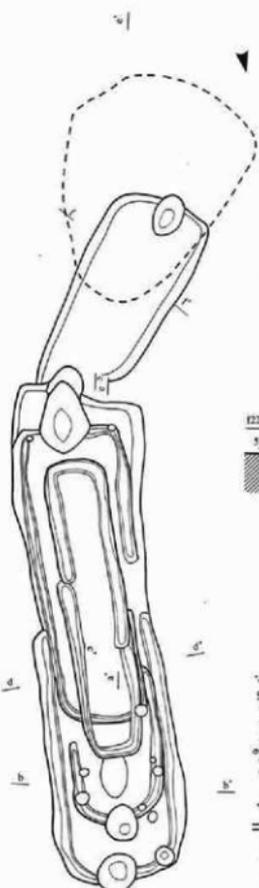
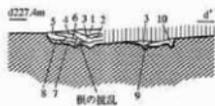
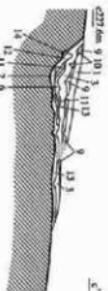


- 14号遺層  
 1 暗灰白色土。灰を主体とし褐色土を微量含む。硬まり粘性ともにない。  
 2 暗褐色土。径1~2cmの木炭粒を少量含む。硬まり粘性ともにやや強い。  
 3 黒褐色土。木炭を主体とし焼土粒と暗褐色土を微量含む。硬まり粘性ともにない。  
 4 黒褐色土。木炭層。硬まり粘性ともにない。  
 5 に近い黄褐色土。ローム粒を主体とし。硬まりが強く粘性は強い。  
 6 褐色土。ローム粒と暗褐色土を主体とし。硬まり粘性ともに強い。

07-A-K号炭窯



- A号
- B号
- C号
- D号
- E号
- F号
- G号
- H号
- I号
- J号



- A-K号炭窯  
e-c'とe-f'
- 1 明褐色土。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 2 暗褐色土。跡まりは強く粘性は弱い。
  - 3 灰白色土。灰を主体とし跡まりは粘性にやや強い。
  - 4 黒褐色土。炭化物を多量に含む跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 5 1等に類似するが灰の成分の量土である可能性がある。
  - 6 黒色土。炭層。

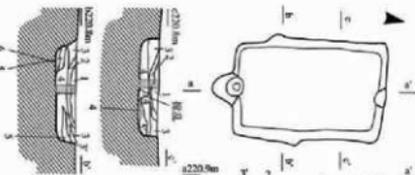
- A-K号炭窯  
e-c'とd-d'
- 1 暗褐色土。跡まりはやや強く粘性は弱い。微量の灰が混入する。
  - 2 灰白色土。灰を主体とし少量の暗褐色土を混入する。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 3 暗褐色土。1等に類似するが灰を含まず微量の炭を含む。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 4 暗褐色土。3等に類似するが3層より灰を多く含む。
  - 5 褐色土。4等とは同じだがローム粒子を少量均質に含み色調が明るい。
  - 6 暗褐色土。灰を主体とし微量の暗褐色土を均質に含む。
  - 7 黒色土。炭層。
  - 8 暗褐色土。6等に類似するが更にローム粒子が多い。
  - 9 白色土。灰の結晶。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 10 灰褐色土。9等の炭粒子を主体とし3等の粒子を少量均質に含む。跡まりは粘性に弱い。
  - 11 褐色土。焼土粒子を少量含む。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 12 黒色土。6等と同じ。
  - 13 黒色土。12等と同じ。
  - 14 12等に類似するがほとんど暗褐色土を含まない。

- A-K号炭窯  
e-g'とe-f'
- 1 暗褐色土。跡まりはやや強く粘性は弱い。微量の灰が混入する。
  - 2 灰白色土。灰を主体とし少量の暗褐色土が混入する。跡まりはやや強く粘性は弱い。
  - 3 褐色土。灰を主体とし、微量の暗褐色土を均等に含む。
  - 4 明褐色土。焼土を主体とし少量のロームを含む。
  - 5 暗褐色土。1等に類似するが焼土粒子を微量均質に含む。
  - 6 黒色土。炭層。
  - 7 黒色土。炭層。6等と同じ。
  - 8 褐色土。微量の焼土を均質に含む。跡まりは強い。
  - 9 暗褐色土。8等に類似するが6層より焼土は少ない。
  - 10 暗褐色土。3等と同じ。
  - 11 暗褐色土。1等に類似するが焼土粒子を微量均質に含む。
  - 12 褐色土。11等に類似するが焼土粒子の含有量が多い。
  - 13 暗褐色土。11等と同じ。
  - 14 黒褐色土。3等と同じ。
  - 15 明褐色土。4等に類似するが焼土が少なくローム粒子を多く含む。
  - 16 黒色土。9、7層より灰が細かい。

K号炭窯 炭出土状況



'91-3E断面

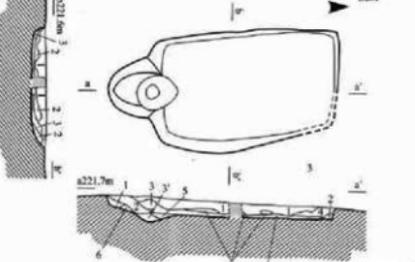


- 3E断面  
 1 暗褐色土。  
 2 白色火山灰。焼山噴出物。  
 3 暗褐色土。層厚は黄色味が強い。基本的には1層と同じ。  
 3' 暗褐色土。1層、3層と同じ。  
 4 黒色炭層。焼いた灰を取り出した際の屑灰及び炭化殻を多く含む黒色土。  
 5 黄褐色土。基本的には1層、3層、3'層と同じ。  
 5' 赤褐色ブロック。焼いた灰を取り出す際に崩れた炭化土を含む。  
 6 黒黄褐色土。炭化殻を含む。

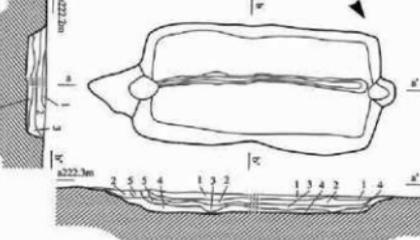
6A断面

- 6A断面  
 1 灰褐色土。火山灰を含むため白く見える所がある。締まりがある。  
 2 赤褐色土。所々に焼土夾味の黄褐色土ブロック及び硝灰を含む。  
 3 暗黄褐色土。赤灰及び赤黄褐色土がモザイク状に含む。  
 4 黒色土。多量の炭片炭灰を含む。  
 5 暗褐色土。焼山、炭片等が突き合っている。

'91-4B断面



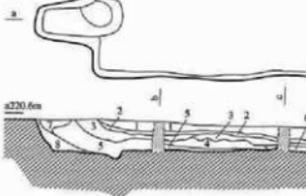
'91-6A断面



4B断面

- 4B断面  
 1 暗茶褐色土。ロームブロック炭化物を少量含む。締まりはある。  
 2 黄褐色土。焼山。炭化物を少量含む。  
 暗茶褐色土も一部多量に混入する。締まりはある。  
 3 灰層。暗茶褐色土とローム粒子を多量に含む。炭がブロック状に入っている。  
 ロームがブロック状に混入している。  
 炭が均状である。  
 4 1層と同じだがやや幅広い。  
 5 褐色土。炭化物をブロック状に多量に含む。ロームブロックを少量含んでいる。やや締まりがある。  
 6 暗茶褐色土。

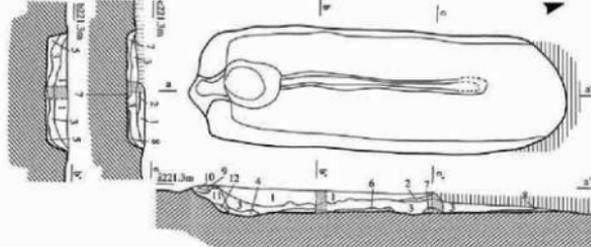
'91-5H断面



5H断面

- 5H断面  
 1 暗茶褐色土。締まりがある。  
 2 火山灰土と暗茶褐色土の混合。締まりがある。  
 3 赤褐色土。炭層にり。締まりがある。  
 4 赤褐色土。焼土が混じる。締まりがある。  
 5 灰層。  
 6 褐色土。  
 7 赤褐色土。8層より締まりが弱い。  
 8 暗茶褐色土。締まりがある。  
 9 暗茶褐色土。締り過ぎか？

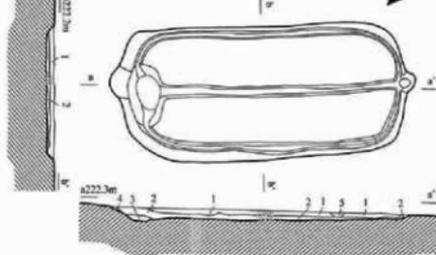
'91-7F断面



7F断面

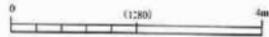
- 7F断面  
 1 暗褐色土。炭化殻を含む。  
 2 黒色炭層。硝灰、炭化殻を多量に含む。  
 3 暗茶褐色土。焼土を多量に含む。屑灰、炭化殻も含む。  
 4 暗黄褐色土。  
 5 4層と同じ。  
 6 4層と同じ。  
 7 暗褐色土。炭化殻を含む。基本的には4、5、6、8層と同じ。  
 8 4層と同じ。  
 9 暗茶褐色土。多量に焼土を含む。  
 10 暗褐色土。焼土を少量含む。  
 11 焼土ブロック。  
 12 暗黄褐色土。炭化物を含む。

'91-7A断面

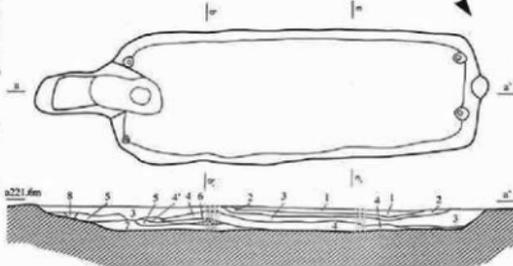
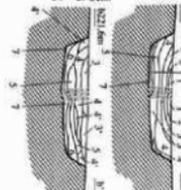


7A断面

- 7A断面  
 1 暗茶褐色土。焼土と炭灰を含む。  
 2 黒色炭層。屑灰と炭灰を多量に含む。  
 3 暗茶褐色土。焼土を多量に含む。屑灰も混じる。  
 4 赤褐色土。締り過ぎか？  
 5 赤褐色土。焼土を多量に含む。炭灰も混じる。

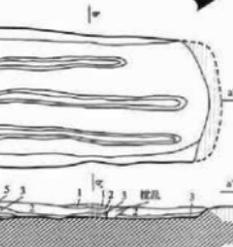
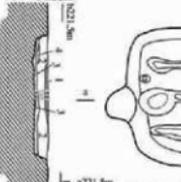


'91-0F断面



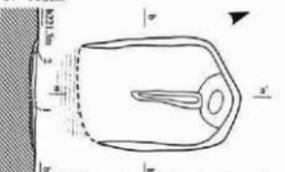
- 9F断面
- 1 赤褐色土。跡まりがある。
  - 2 灰褐色土。府々に火山灰（白）がブロック状に露出する。
  - 3 赤褐色土。炭片粒を少量含む。跡まりがある。
  - 3' 3層とはほぼ同じ。炭片が大きい。
  - 4 暗褐色土。炭片粒を多量に含む。赤褐色土が露出している。
  - 4' 4層に比べ炭片粒が少ない。
  - 5 灰層。黒色土中に多数の炭片粒を含む。
  - 6 黒色土。粒状である。
  - 7 黒褐色土。5層より粒子の細かい炭片粒からなる。跡まりは弱く崩れやすい。
  - 8 赤褐色土。ブロック状に露出する。

'91-0G断面



- 9G断面
- 1 灰褐色土。ペレット付近は火山灰土が集中している。灰白色に露出。
  - 2 黒褐色土。小炭片を両側に含む。
  - 3 灰層。黒褐色土中に炭片粒を多量に含む。
  - 4 暗赤褐色土。赤色粒子を多量に含む。
  - 5 灰層。小炭粒炭片をかなり多量に含む。
  - 6 暗赤褐色土。跡まりがある。炭片粒を少量含む。
  - 6' 6層より跡まりが強い。
  - 7 灰褐色土。黄褐色土を含む。炭粒を含む。
  - 8 赤褐色土。紅色状で跡まりがある。

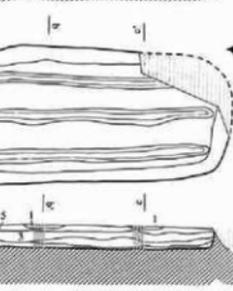
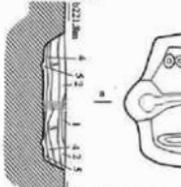
'91-0C断面



9C断面

- 1 黒褐色土。炭粒が混じる。跡まりがある。
- 2 黒色灰層。黒色土中に炭片と炭粒が多い。
- 3 暗赤褐色土。黒褐色土で跡まりがある。

'91-10E断面

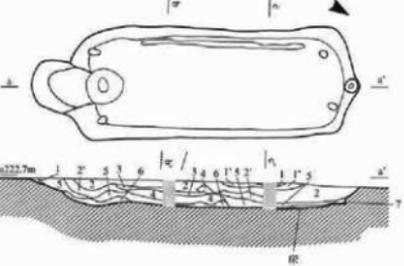


- 10E断面
- 1 灰褐色土。火山灰（白）が明々見じている。跡まりがある。
  - 2 黒褐色土。繊維状及び木炭が少し混じる。
  - 3 赤褐色土。黄褐色土が少し混じる。
  - 4 暗赤褐色土。炭片粒がかなり混じる。
  - 4' 4層とはほぼ同じだが炭粒が多い。
  - 5 灰層。炭片粒が多く含まれる。
  - 6 黒褐色土。一見褐色であるが跡まりが弱く崩れやすい。

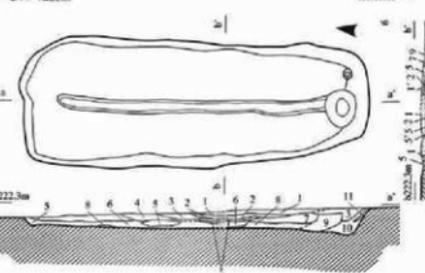
10B断面

- 1 暗黒褐色土。
- 1' 1層と同じだが白色火山灰を多量に含む。炭化物も少量含む。
- 2 暗黒褐色土。炭化物とローム粒を少量含む。根痕が見られる。
- 2' 2層と同じだが2層より暗い。2層より大きい炭化物が含まれる。
- 3 2層と同じだが炭化物を多量に含む。炭層である。
- 4 暗赤褐色土。硬く跡まっている。一種の厚状を呈する。
- 5 3層の灰層に対応するものであろう。
- 6 灰層。粒状である。ローム粒子を少量含む。暗赤褐色土を混入する。
- 6' 灰層。粒状である。
- 7 粒状を呈する。

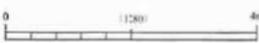
'91-10B断面

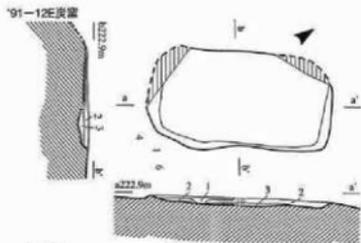


'91-G11-12断面



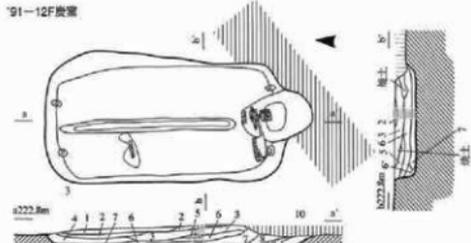
- 11-12G断面
- 1 灰褐色土。白色の火山灰を含む。
  - 1' 灰褐色土。火山灰が見えたらないが基本的に1層と同じ。
  - 2 黒色土。
  - 3 暗褐色土。ローム粒と小炭粒と褐色土が混じる。
  - 4 暗褐色土。小炭粒を多く含む。
  - 5 暗褐色土。ローム粒と褐色土が混じる。
  - 6 灰層。
  - 7 黒褐色土。繊維状を多く含む。
  - 8 黒色土。塊状に炭粒を含む。褐色土を包んでいる。
  - 9 灰層。
  - 10 黒色灰層。粒状に炭粒を含む。
  - 11 暗赤褐色土。ロームブロックが混じる。
  - 12 暗赤褐色土。





12E実測

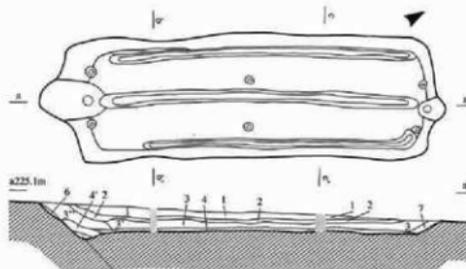
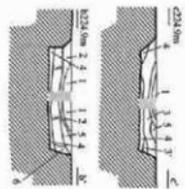
- 1 暗褐色土。
- 2 炭粉。暗褐色土が入っている。
- 3 茶褐色土。隅り過ぎ?



12F実測

- 1 暗褐色土。
- 2 炭粉。火山灰をベースに1層と裏じり白色層となっている。
- 3 暗褐色土。カーボン、焼土、ロームの炭粒を含む。
- 4 黒褐色土。3層をベースにカーボンが多く含まれる。
- 5 明黄褐色土。6層をベースに、ローム粒が多く含まれる。
- 6 黄褐色土。3層をベースにローム粒が多く含まれている。
- 6' 6層と同質であるがやや軟らかい。
- 7 炭粉。暗褐色土を含む。
- 8 茶褐色土。土粒が多い。
- 9 炭粉。厚2cm程度の炭粒ががさがとまっている。
- 10 炭粉。7層に散らばっているがより跡まりがある。

91-15C実測



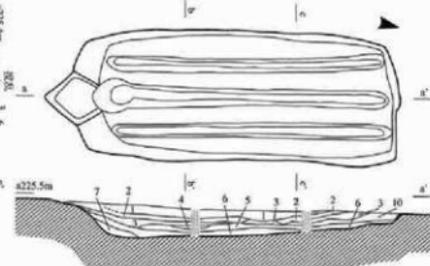
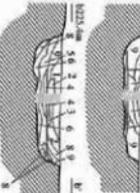
15C実測

- 1 暗褐色土。
- 2 白色火山灰層。暗褐色土が混じる。
- 3 暗褐色土。ローム粒子と炭化物をブロック状に少量含む。1層に比べて明るい。
- 3' 3層に比べてやや黒っぽい。
- 3'' 3層に類似するがローム粒子の混入が多く黄色味が強い。
- 4 炭粉。ブロック状である。暗褐色土を多量に焼土を少量含む。
- 4' 炭がブロック状でありローム粒子と暗褐色土を多量に含む。
- 4'' 4層と同じく炭が粒状である。
- 5 暗褐色土。1層と比べて暗い。
- 6 焼土。炭化物を若干含む。
- 7 暗褐色土。ブロック状の炭が多量に含まれる。ローム粒子と焼土を少量含む。

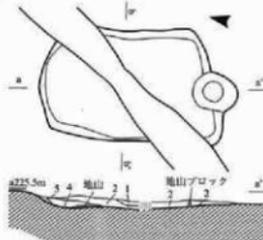
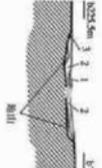
16A実測

- 1 暗茶褐色土。炭粒と黄褐色土を少量含む。
- 1' 1層と同じであるが白色火山灰を多量に炭化物を少量含む。
- 1'' 1層と同じであるが炭化物の混入の割合が高くやや暗い。
- 2 黒褐色土。炭粒を多量に含む。
- 3 暗茶褐色土と炭化物との混合層。ロームブロックを少量含む。
- 3' 炭粉。炭がブロック状になる。ローム粒子を多量に含む。
- 3'' 3層にロームの混入が非常に多い。
- 7 炭粉。炭が粒状である。ローム粒子を多量含む。
- 8 黄褐色土。径3~4mmの炭粒を少量含む。
- 9 暗茶褐色土。厚1cm程度の黄褐色土と径2~3cmの炭片を所々に含む。
- 10 茶褐色土。炭化物とロームを少量含む1層に類似するがやや明るい。

91-16A実測



91-17B実測



91-17C実測

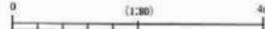


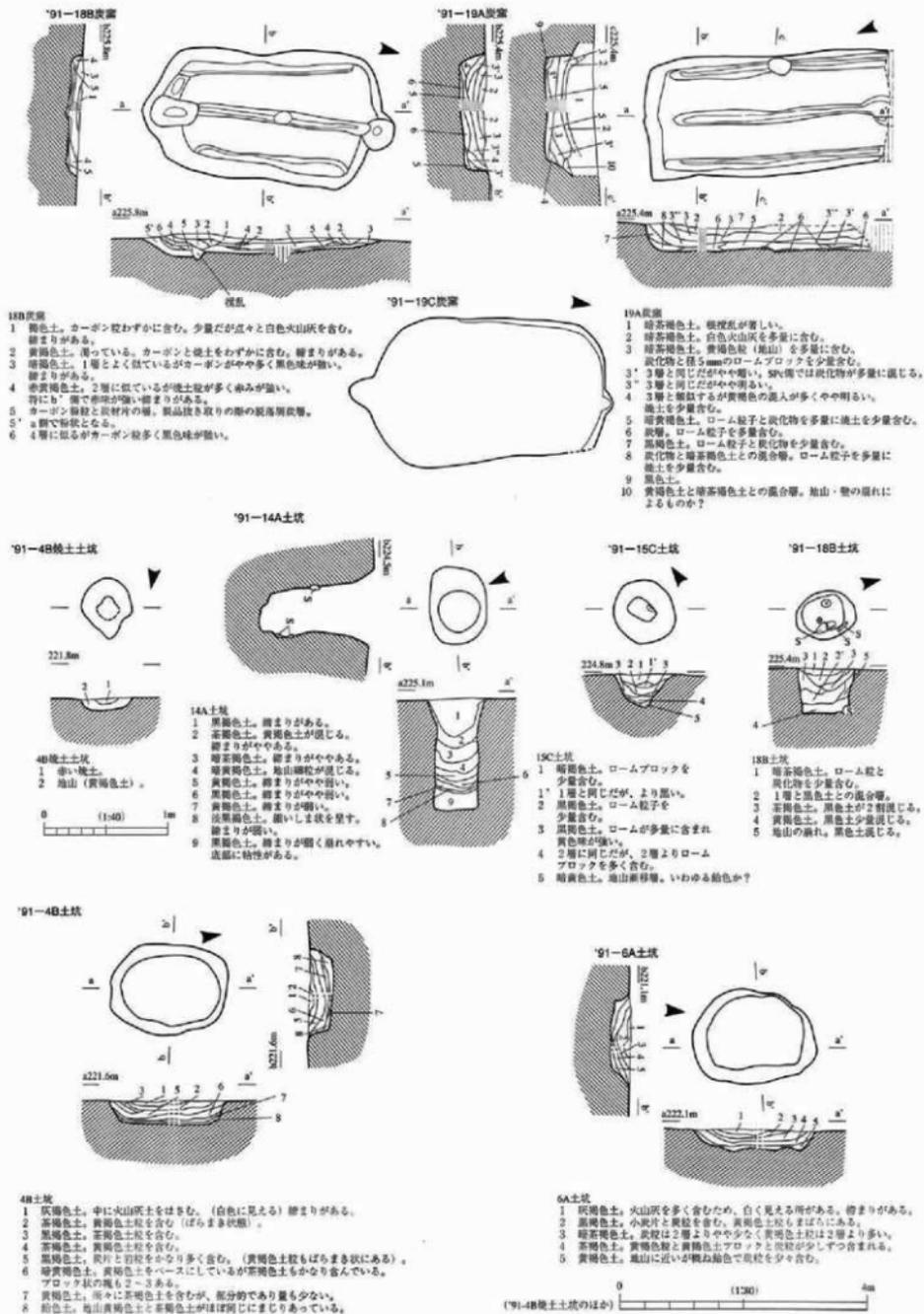
17B実測

- 1 基本層には12層と同じだが断続乱雑しく炭粒している。
- 2 暗褐色土。炭化物を多量。ローム粒子を少量含む。
- 3 焼土の崩落土であらうが。2層と混じったような土である。
- 4 炭粉。炭が粒状になっている。
- 5 暗褐色土と暗褐色土との混合層。炭化物を少量含む。

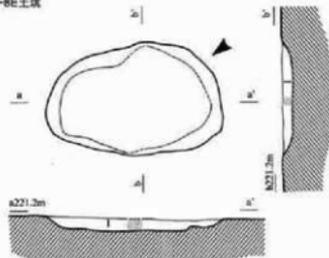
17C実測

- 1 暗茶褐色土。
- 2 暗茶褐色土。白色火山灰が混じる。
- 3 暗茶褐色土。炭が混じる。ローム粒子を少量含む。
- 4 黒褐色土。炭が混じっている。
- 5 茶褐色土。ローム粒子と炭化物と焼土を少量含む。
- 6 暗褐色土。炭が粒状に入っている。
- 7 焼土。





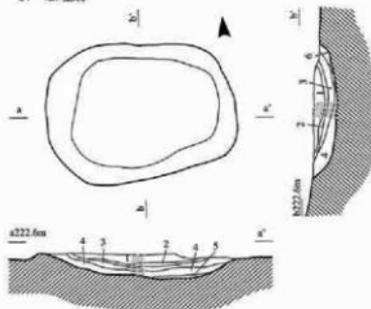
'91-8E土坑



坑土坑

I 黒色土, II層に同じ。混入物は認められない。床は凸凹がある。

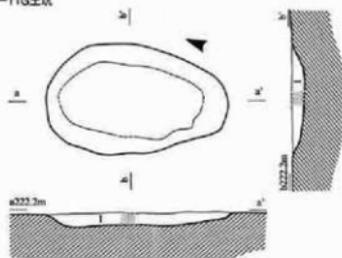
'91-12F土坑



12F土坑

- 1 褐色土。火山灰粒を含む。カーボン粒をわずかに含む。
- 2 灰層。火山灰が多く、白色層となっている。
- 3 黒褐色土。カーボン粒とローム粒を含む。
- 4 暗茶褐色土。ローム粒多く、カーボン粒を含む。
- 5 黄褐色土。4層2Fロームが多い。
- 6 黒色土。ブロック状に多い。

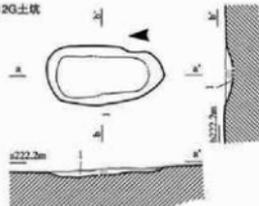
'91-11G土坑



11G土坑

- 1 暗茶褐色土。炭粒とローム粒を多く含む。
- 12G土坑と同じ。

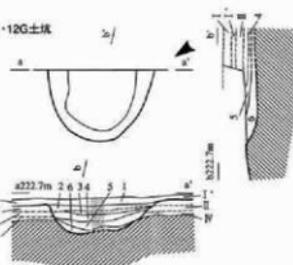
'91-12G土坑



12G土坑

- 1 暗茶褐色土。炭粒とローム粒を多く含む。
- 11G土坑と同じ。

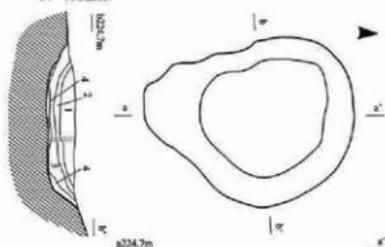
'91-11-12G土坑



11-12G土坑

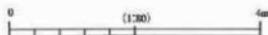
- 1 黄土①。I層に同じ。
  - 2 黄土②。I'層によく転じているが、2層-3層(3層超)の白色火山灰をわずかに含む。
  - 3 黒褐色土。火山灰の層がブロックを含む。炭粒などに顕著に認められた層と同一層が火山灰を含むはずか。(床を中心部の黄土とみなす)
  - 4 黒褐色土。炭ブロックをわずかに含む。
  - 5 黒褐色土。炭ブロックを含む。
  - 6 暗茶褐色土。炭ブロックを多く含む。ローム粒を含む(II'層の黒土と混濁土と共通する)。
- \*4層、5層、6層は本来同一の層序で炭粒とローム粒の配合によって細分されたもの。
- 1 黄土①。草木層と腐葉土。
  - 1' 黄土①。黒茶褐色土。
  - II 黒色土。
  - IV 暗茶褐色土。暗茶色ローム。
- 地山 ローム。層は含まない。1m~1.5m下位に層がある。

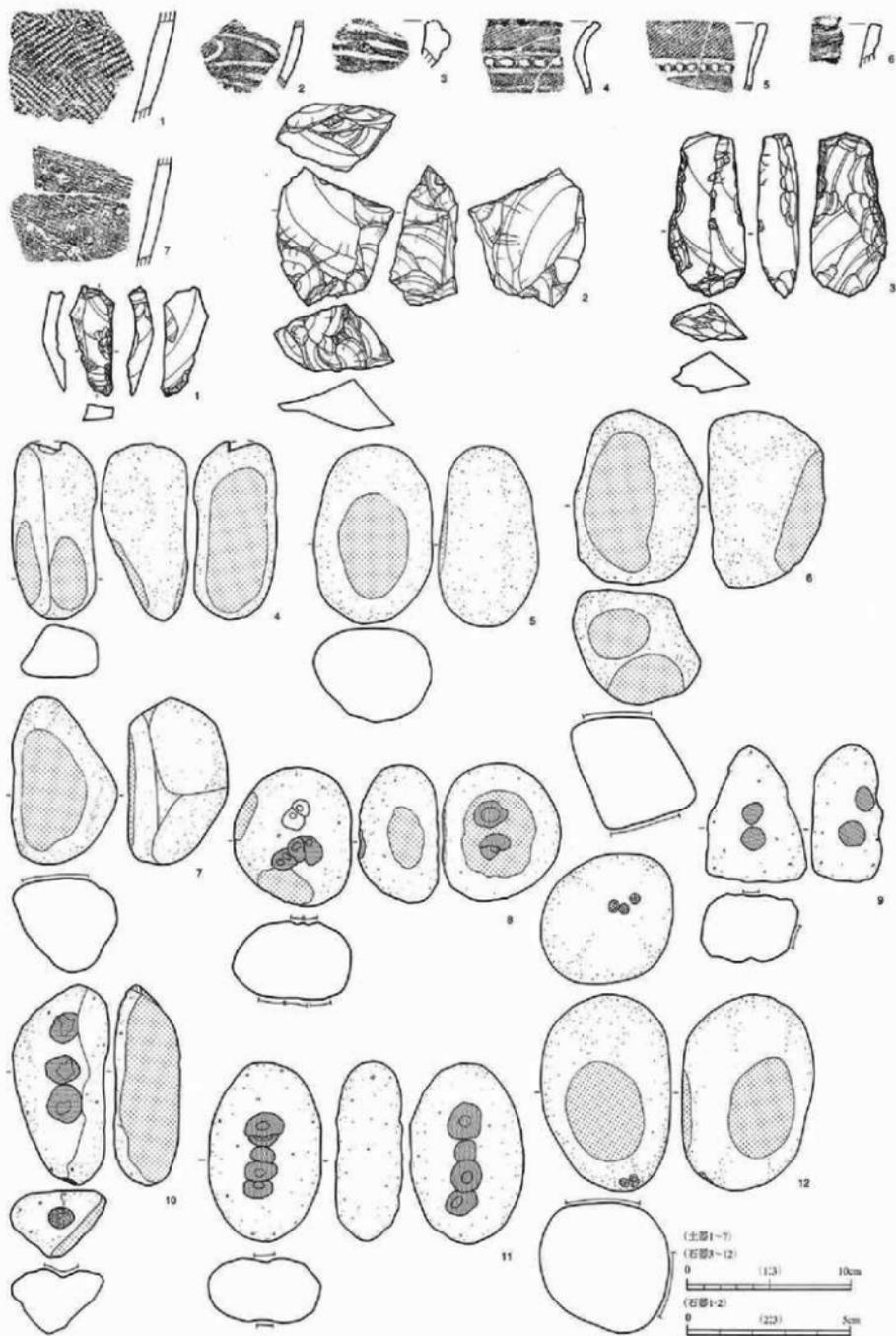
'91-19C土坑

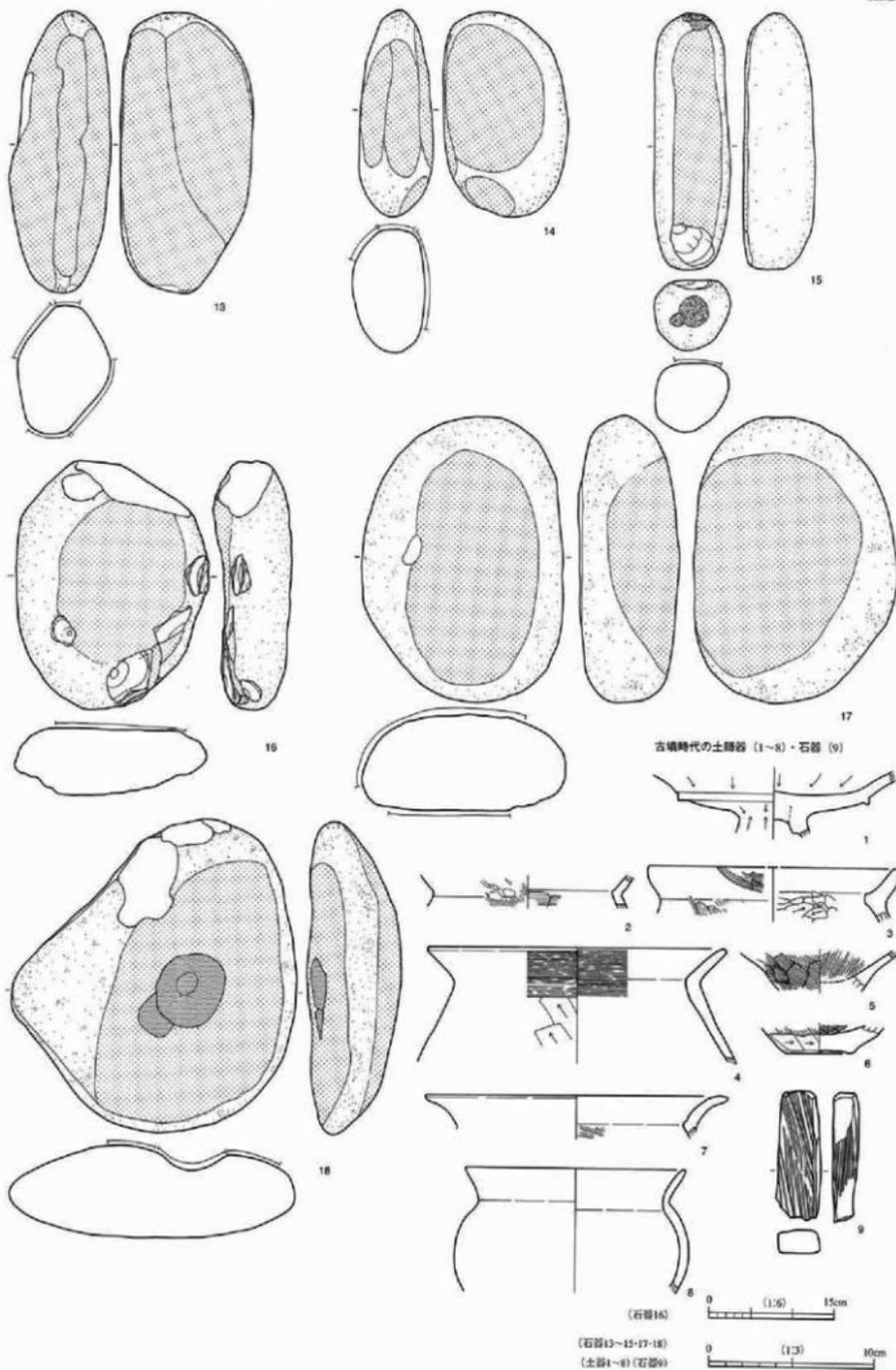


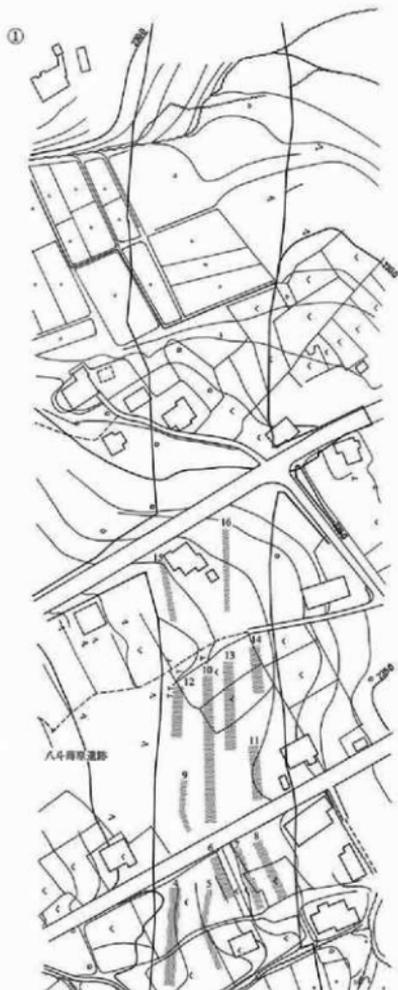
19C土坑

- 1 暗茶褐色土。
- 2 暗茶褐色土に白色火山灰が混じっている。
- 3 暗茶褐色土に炭が混じっている。
- 4 黒茶褐色土に炭が混じっている。



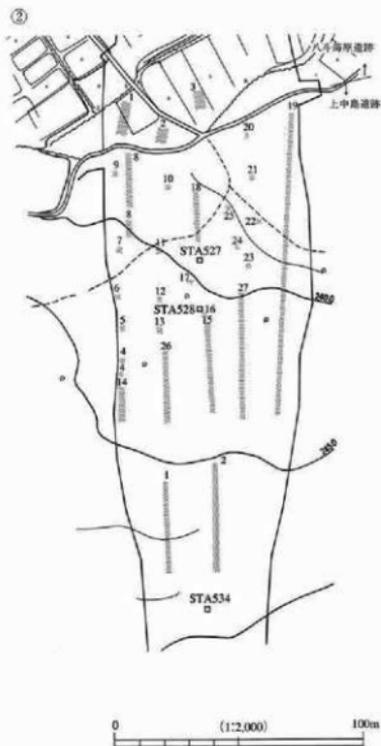


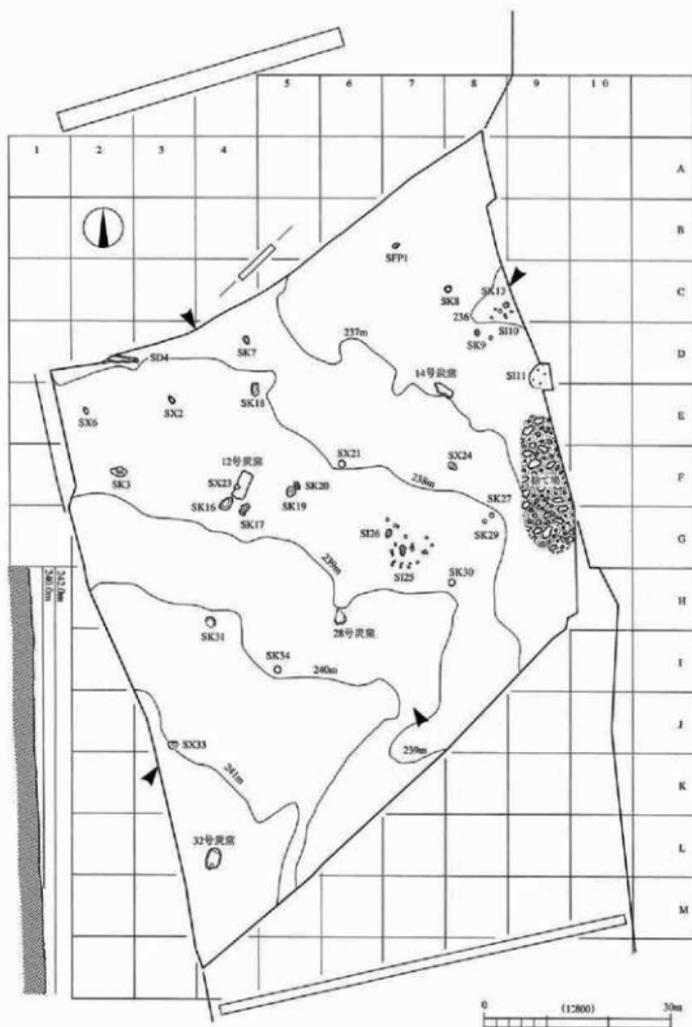
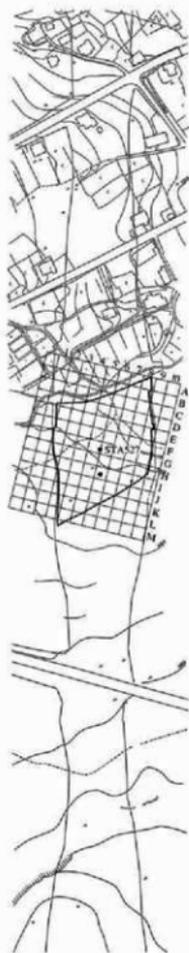


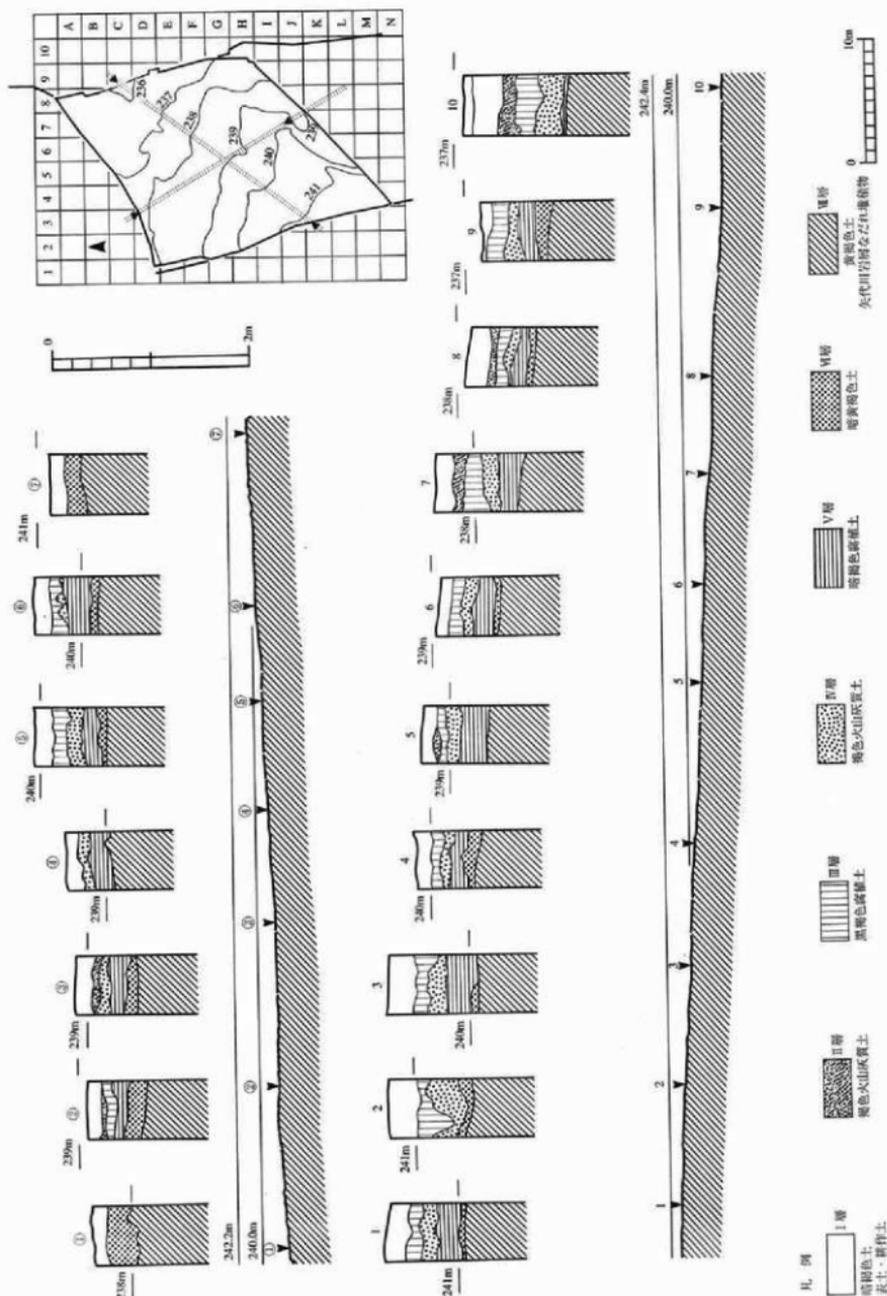


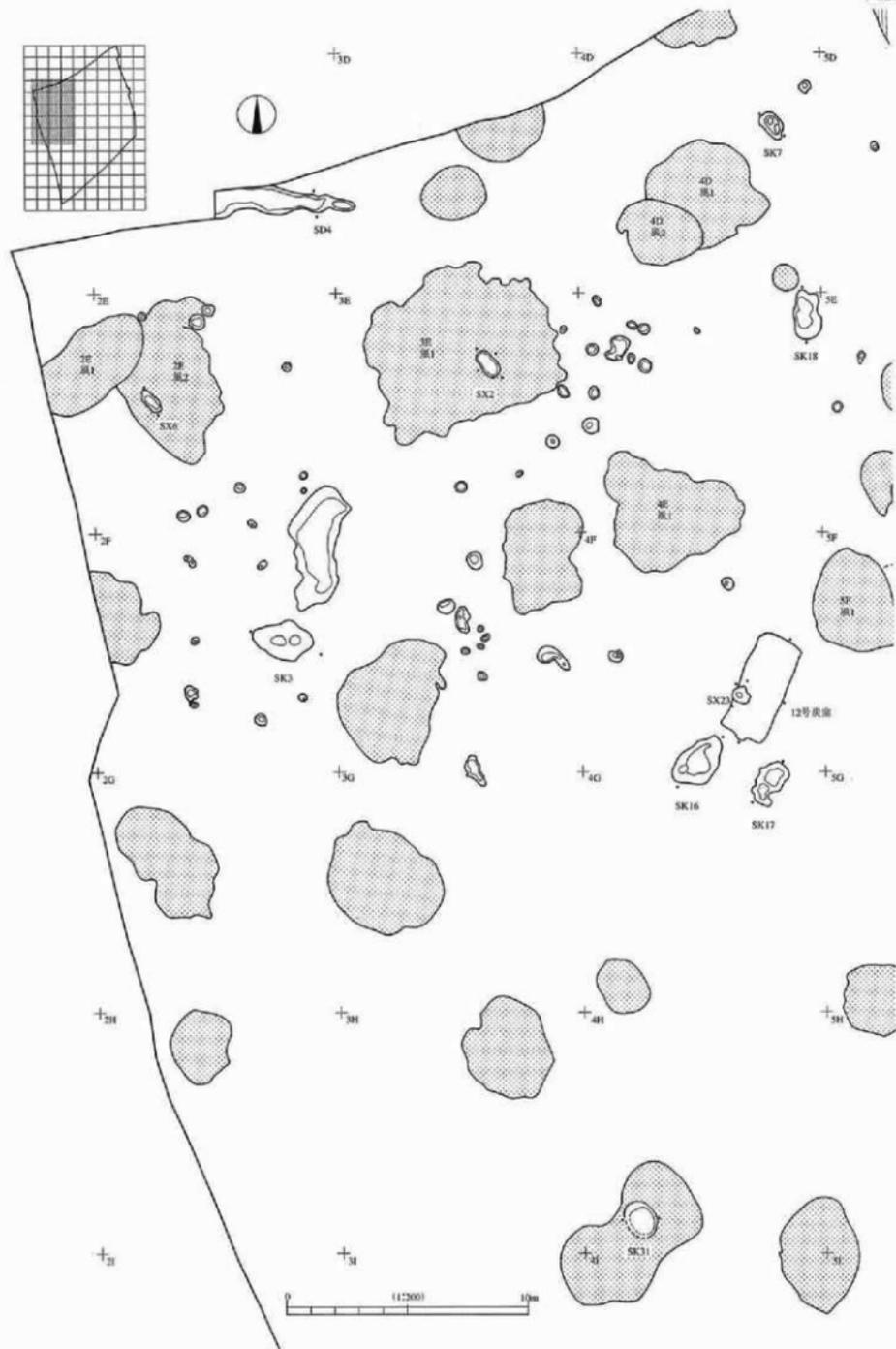
0 (1:50,000) 2,000m

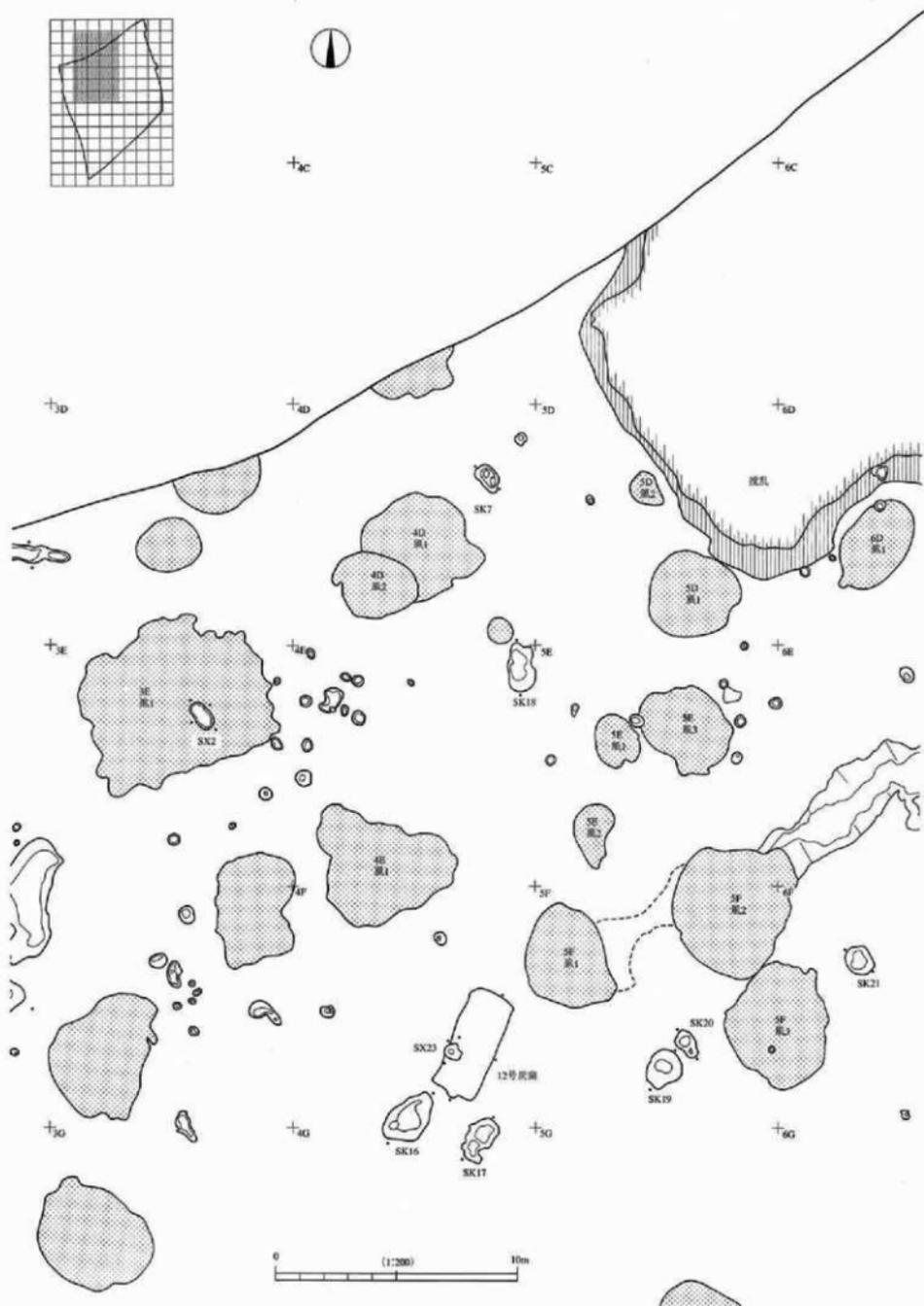
(国土地理院「妙高山」1:50,000原図 平成5年発行)

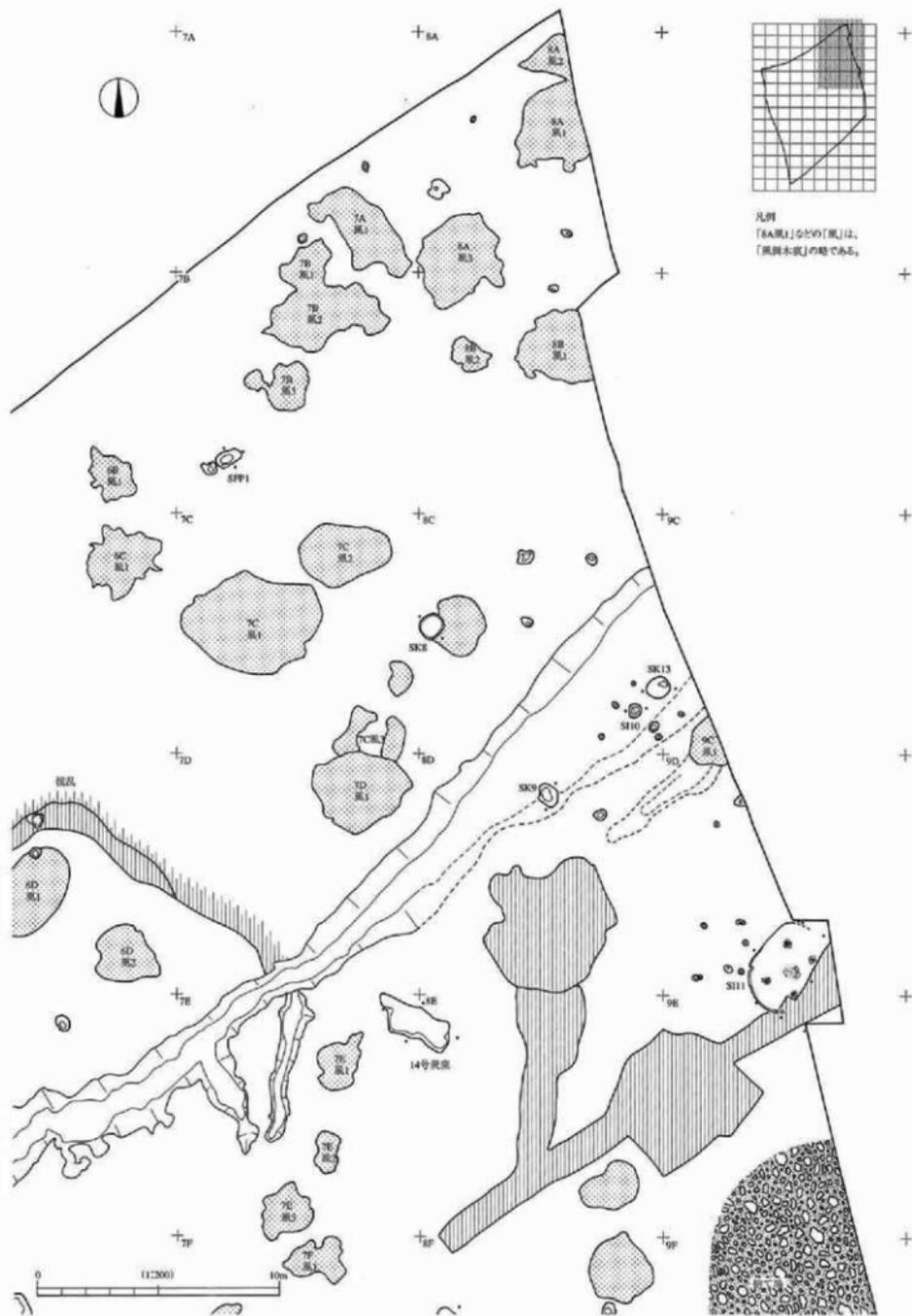


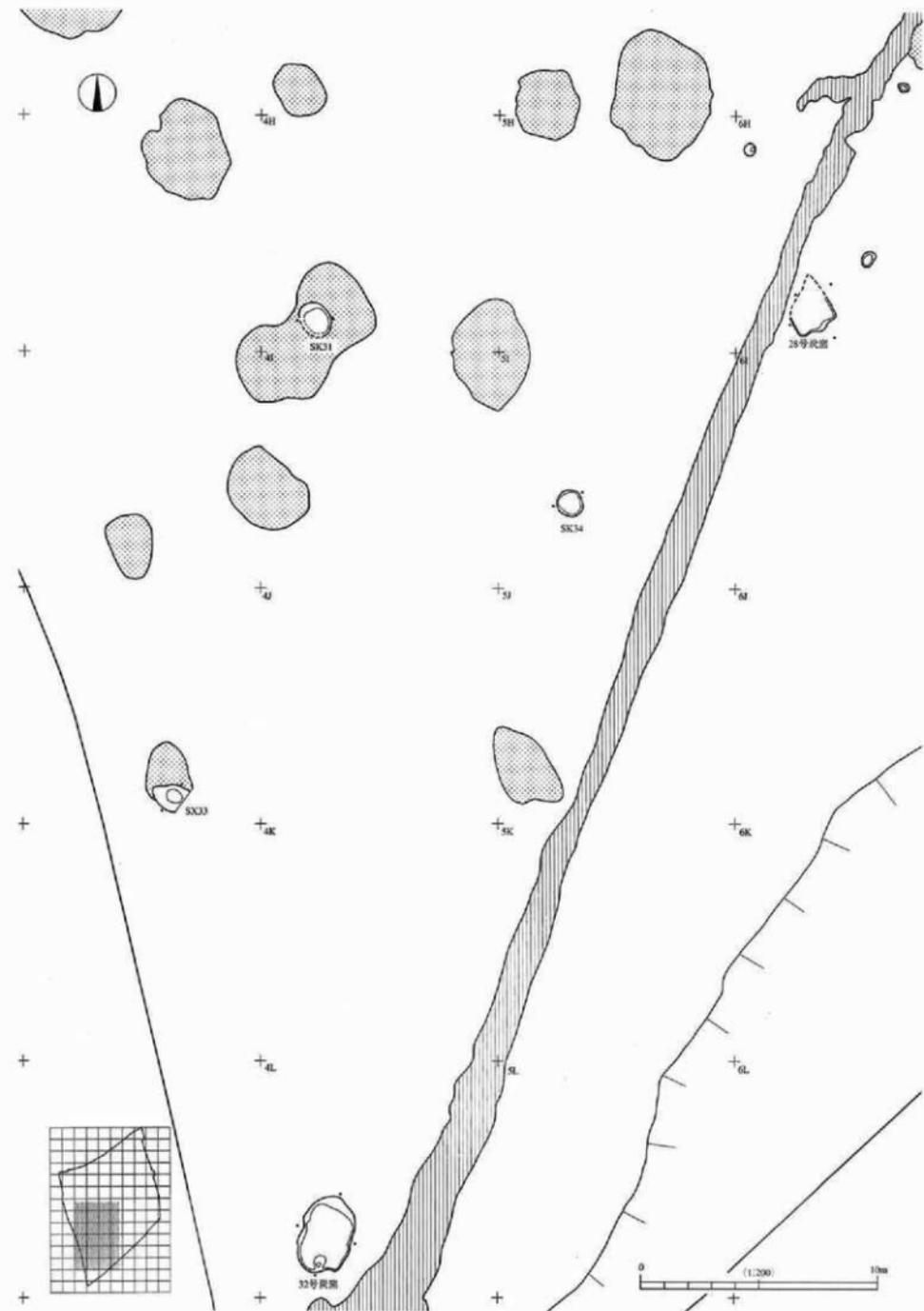


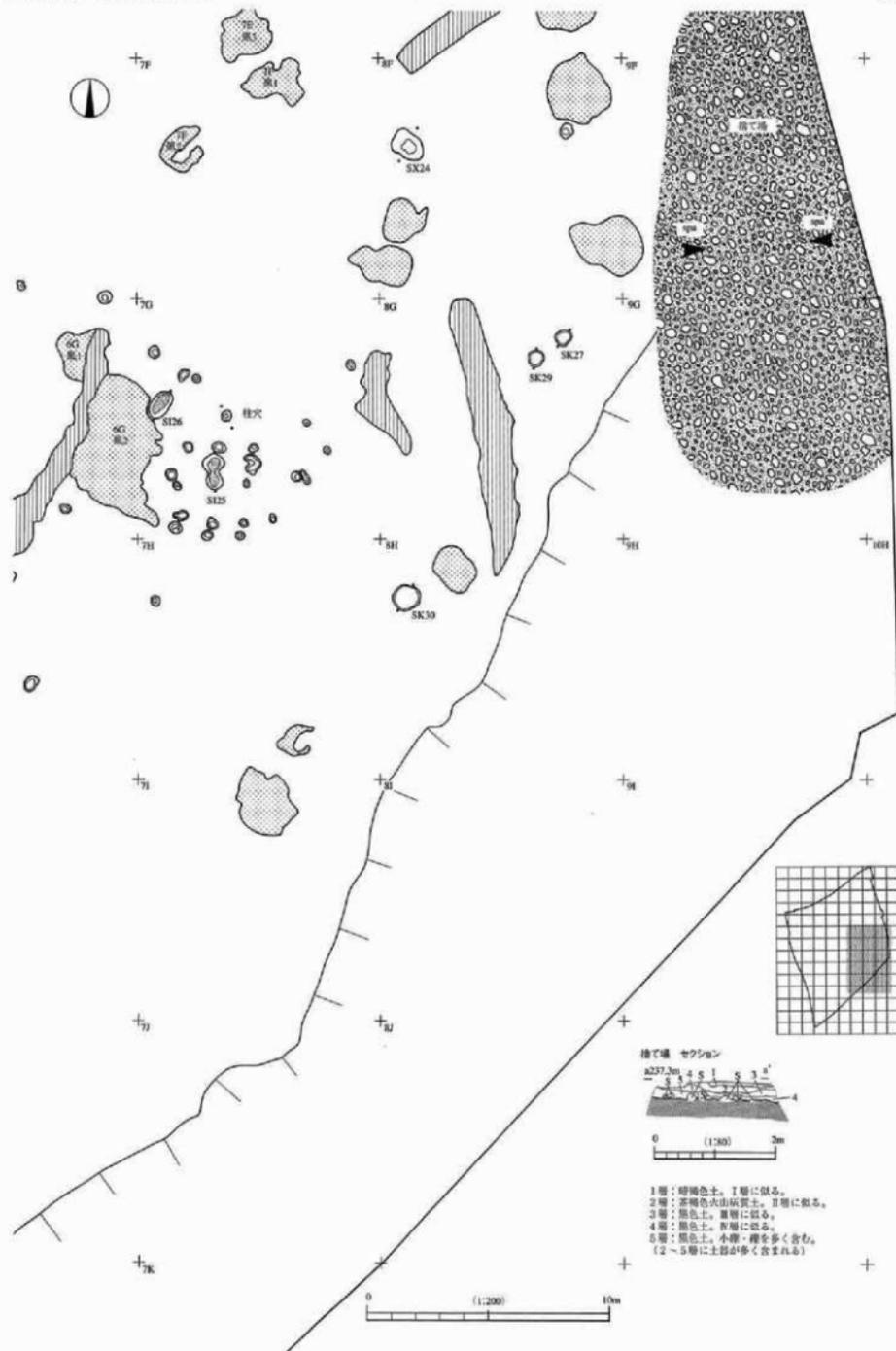












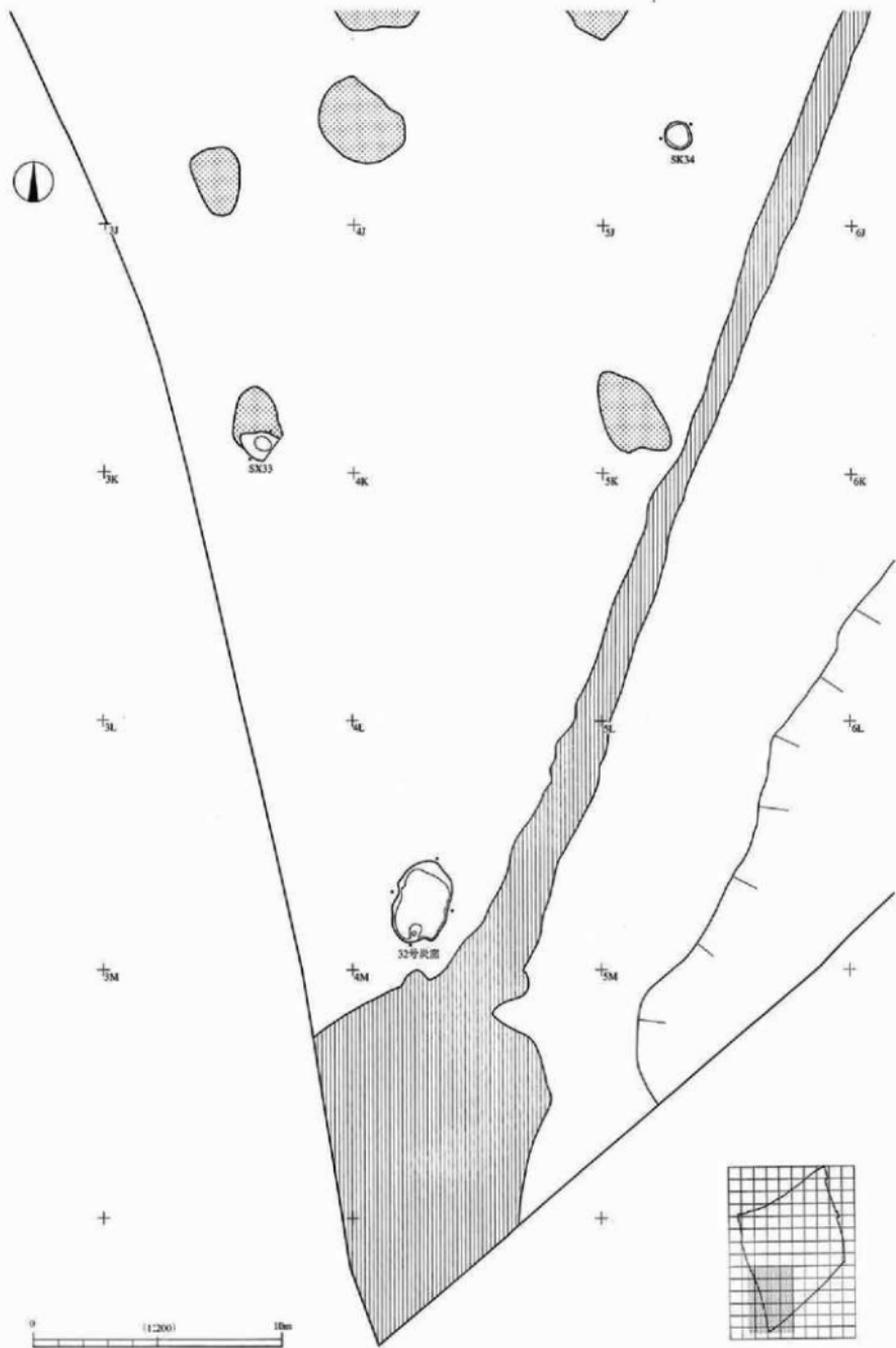
捨て溝 セクション



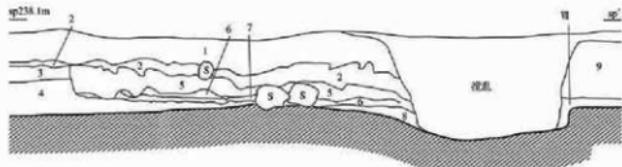
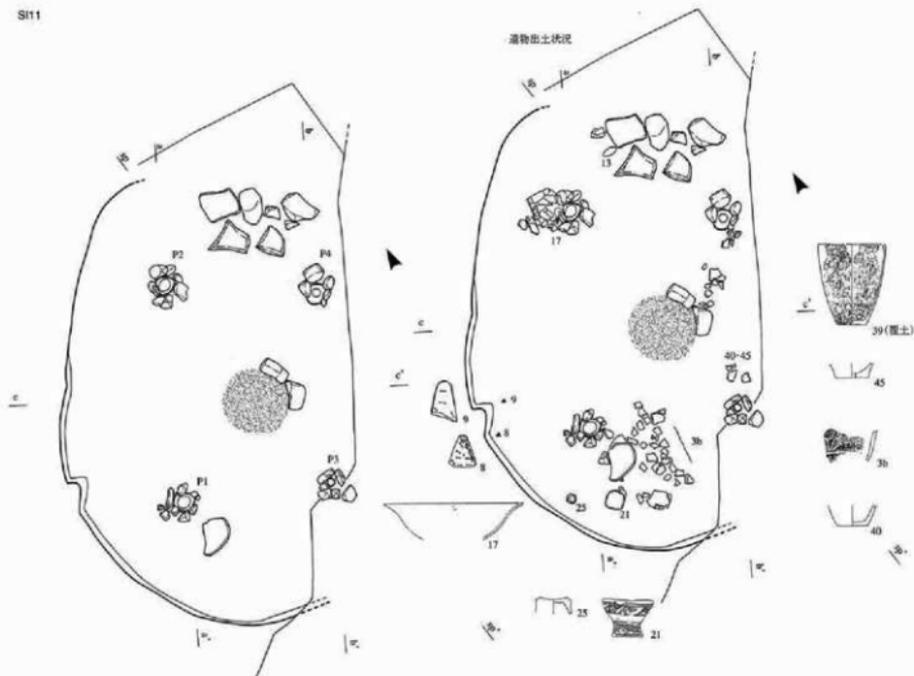
0 (1:50) 2m

- 1層：黄色土、I層に似る。
- 2層：茶褐色火山灰質土、II層に似る。
- 3層：黄色土、III層に似る。
- 4層：黒色土、IV層に似る。
- 5層：黒色土、小礫・砂を多く含む。  
(2～5層に土器が多く含まれる)

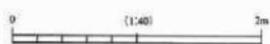
0 (1:200) 10m



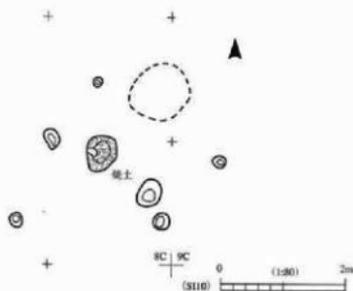
SI11



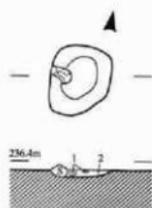
- SI11
- 1 灰土。暗褐色土。基本層1層に同じ。
  - 2 褐色火山灰質土。火山灰の二次堆積物。
  - 3 黄褐色土。基本層2層に近接する。
  - 4 暗褐色土。基本層V層に近接する。
  - 5 暗褐色土。やや粗粒質であり、5mm程度の礫を含む。土器を多く含む。
  - 6 黄褐色土。5層に北へて礫質質。土器を多く含む。
  - 7 暗褐色土と黄褐色土とが混じる。胎味と考えられる。しまりがある。
  - 8 暗黄褐色土。基本層VI層に同じ。
  - 9 暗褐色土。沢の堆積土。



SI10

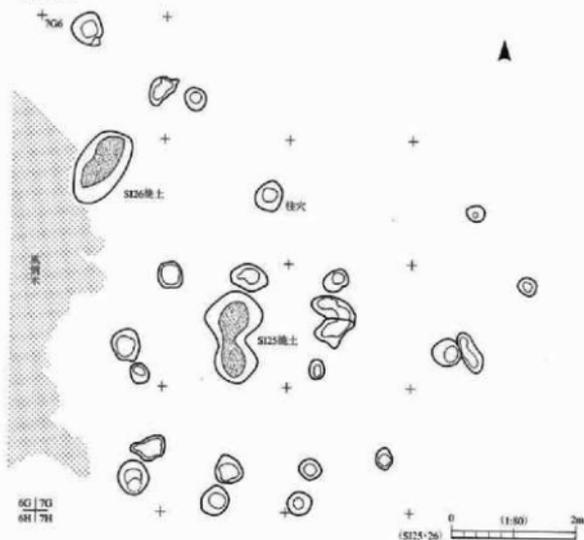


SI10焼土

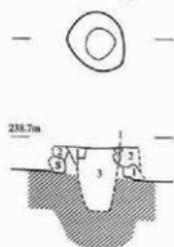


SI10焼土  
1 焼土。  
2 黒褐色土層位置。

SI25-SI26

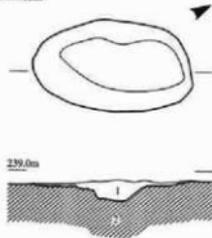


SI25-SI26柱穴



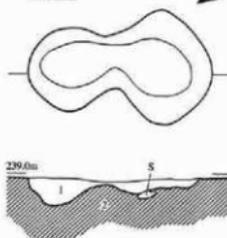
柱穴  
1 淡黄褐色土。  
2 黒褐色土。  
3 黒褐色土に淡黄褐色土の小粒のブロックが混じる。

SI26焼土



SI26焼土  
1 黒褐色腐植土に暗褐色の焼土がブロック状に多量に含まれる。  
2 淡褐色腐植土。

SI25焼土



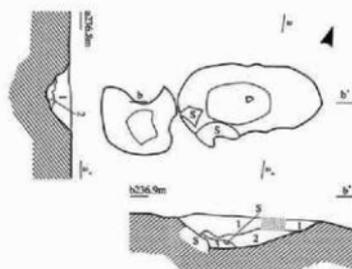
SI25焼土  
1 黒褐色腐植土に暗褐色の焼土がブロック状に多量に含まれる。  
2 黒褐色腐植土。

凡例



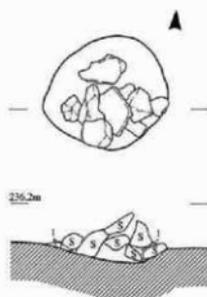
0 (1:80) 2m  
(焼土・柱穴)

SFP1



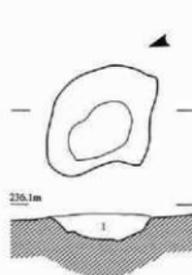
- SFP1  
 1 暗褐色土。炭化物をやや多く、焼土を少量含む。しまりがある。  
 2 地土。炭化物・暗褐色土の混入土。しまりがある。  
 3 暗褐色土と炭化物の混入土（炭化物が多く、焼土はやや少ない）。

SK13



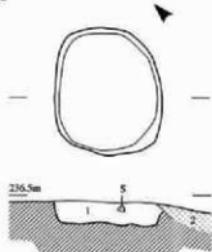
- SK13  
 1 黒色土。しまりはない。縦紋質。

SK9



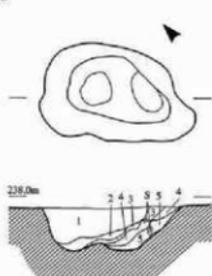
- SK9  
 1 暗褐色土。きめ細かい粒子。

SK6



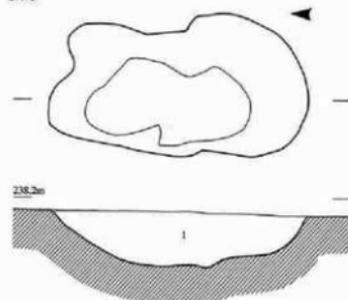
- SK6  
 1 暗褐色土。縦紋質の層（大山性）をやや多く含む。  
 2 原褐色土。基本層序首層に近似する。

SK7



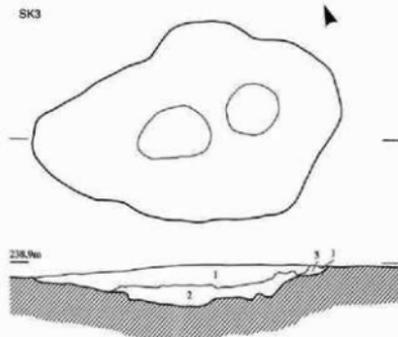
- SK7  
 1 暗褐色土。しまりはない。きめこまかい土。  
 2 暗褐色土。しまりはややある。きめこまかい土。  
 3 暗褐色土。しまりは強い。きめこまかい土。  
 4 原褐色土。しまりは強い。やや縦紋質。  
 5 暗褐色土。しまりは強い。やや縦紋質。

SK18



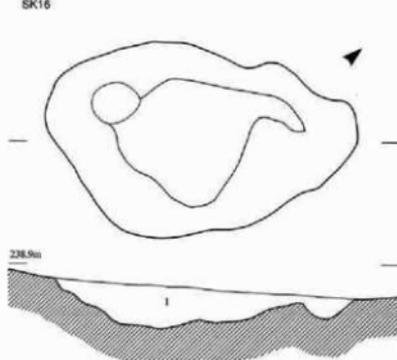
- SK18  
 1 暗褐色土。

SK3



- SK3  
 1 暗褐色腐植土。  
 2 1層より暗い。  
 3 1層よりやや赤っぽく濃い。

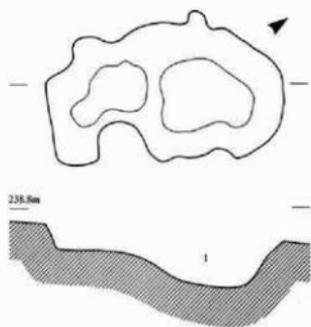
SK16



- SK16  
 1 暗褐色土。

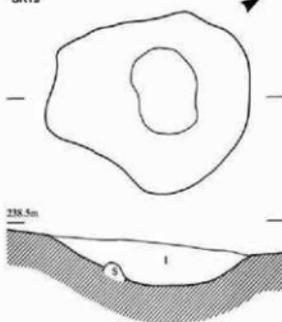
0 (1:40) 2m

SK17



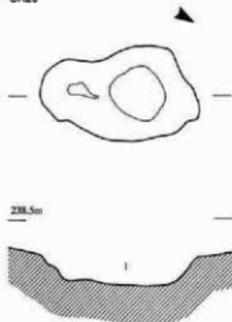
SK17  
1 暗褐色土と黒褐色土の混じり。

SK19



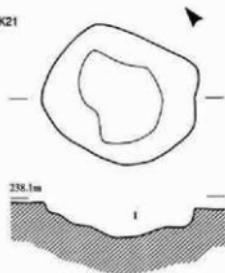
SK19  
1 暗褐色土と黒褐色土の混合土。

SK20



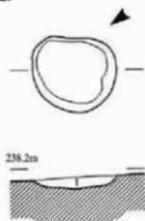
SK20  
1 暗褐色土と黒褐色土の混合土。

SK21



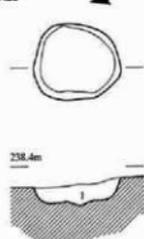
SK21  
1 暗褐色土と黒褐色土の混合土。

SK27



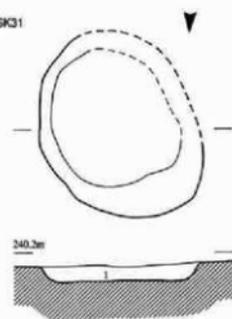
SK27  
1 黒色土。炭化粒を少量含む。しまりがややある。

SK29



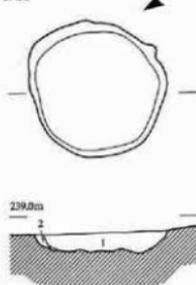
SK29  
1 暗褐色土。黄褐色土を少量含む。

SK31



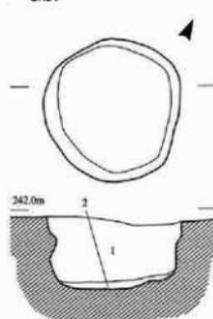
SK31  
1 暗褐色土。楕円。

SK30

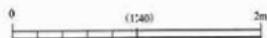


SK30  
1 暗褐色土。黄褐色を少量含む。やや楕円質。  
2 黄褐色土と暗褐色土の混合土。

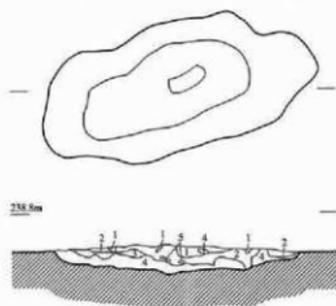
SK34



SK34  
1 暗褐色土。しまりがややある。約1cm程度の小礫を多く含む。楕円質。  
2 暗褐色土と黄褐色土の混合土。しまりがややある。

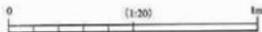


SX6

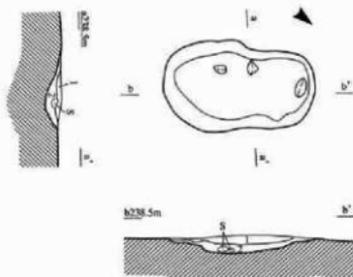


SX6

- 1 淡灰色火山灰層（ブロック状）
- 2 暗褐色砂質土。小粒の炭化物  
ブロックを含む。
- 3 暗褐色土。
- 4 淡褐色土。
- 5 黒色炭化物。



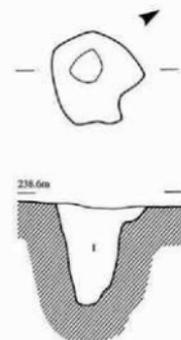
SX2



SX2

- 1 火山灰（灰白色。やや茶褐色を呈する部分もある）。しまりがややある。
- 2 暗褐色土。炭化物を少量含む。しまりがややある。

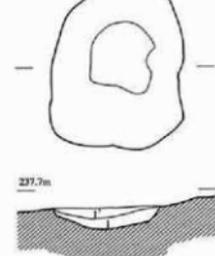
SX23



SX23

- 1 暗褐色土。

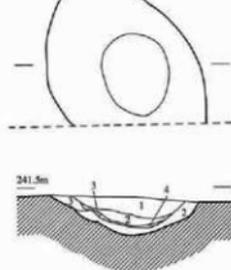
SX24



SX24

- 1 黒褐色土。しまりはない。小粒を含む。
- 1' 1層と同じと思われるが、削平されている。

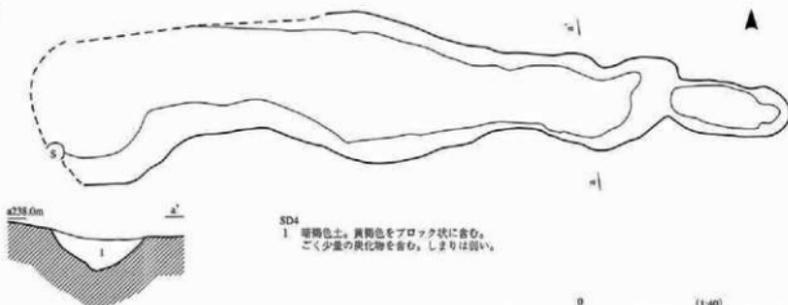
SX33



SX33

- 1 黒色土。しまりはない。細粒質。
- 2 灰白色火山灰。しまりがある。細粒質。
- 3 黒色土と火山灰の混合土。細粒質。
- 4 黒色土と火山灰の混合土。3層より黒色が深い。細粒質。

SD4

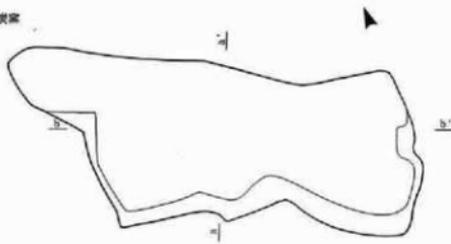


SD4

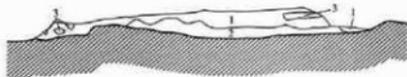
- 1 暗褐色土。黄褐色をブロック状に含む。ごく少量の炭化物を含む。しまりはない。



14号坑家



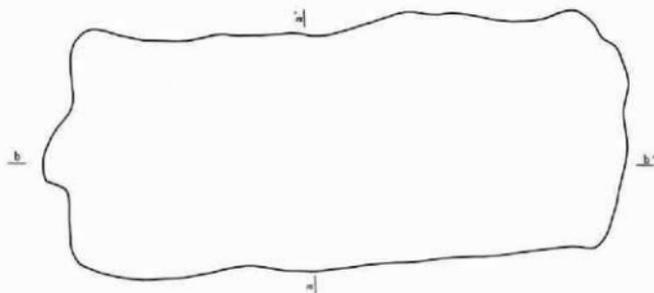
b 237.2m



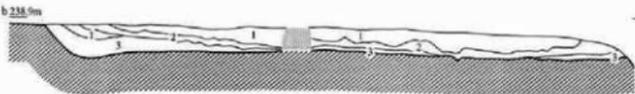
14号坑家

- 1 暗褐色土。少量の灰白色火山灰と炭化物を含む。しまりはない。
- 2 炭化物。
- 3 灰白色火山灰。少量の暗褐色土を含む。しまりがある。

12号坑家

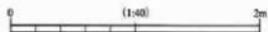


b 238.9m

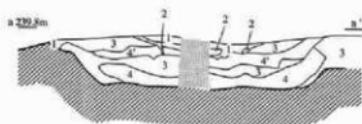
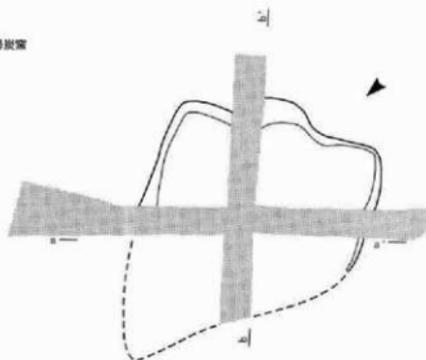


12号坑家

- 1 暗褐色土。炭化物ブロックを少量含む。
- 2 灰白色火山灰層。少量の炭化物ブロックを含む。
- 3 炭化物層。



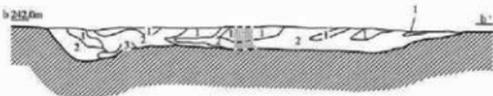
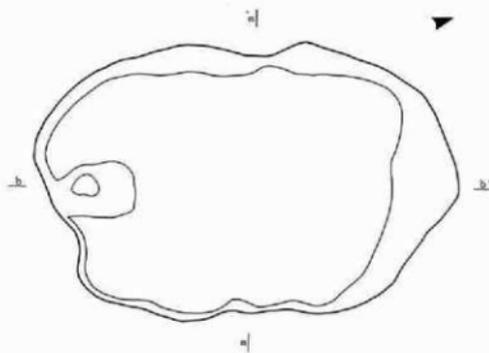
28号遺構



28号断面

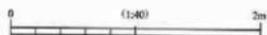
- 1 暗褐色土に薄く白灰色火山灰層が含まれる。
- 2 灰白色火山灰層のブロック。
- 3 暗褐色土に小粒の炭化ブロックと黄褐色ブロックが混じる。
- 4 黒色炭化物。(大きな炭を多く含む)。
- 4' 暗褐色土に炭化物を多く含む。

32号遺構



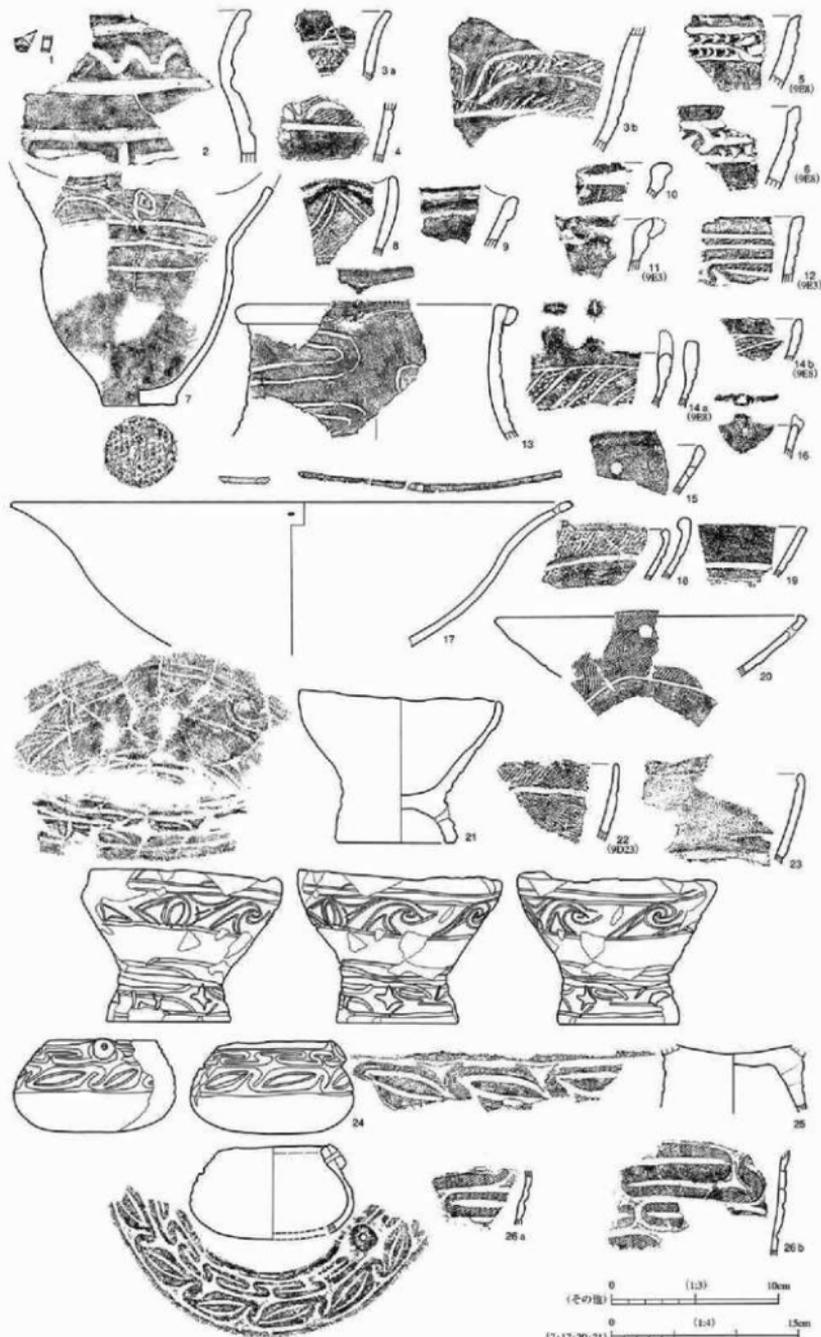
32号断面

- 1 暗褐色土。
- 2 黒色炭化物層。大きな炭ブロックを含む。
- 3 黄褐色炭化土。(粘土?)

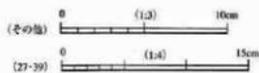
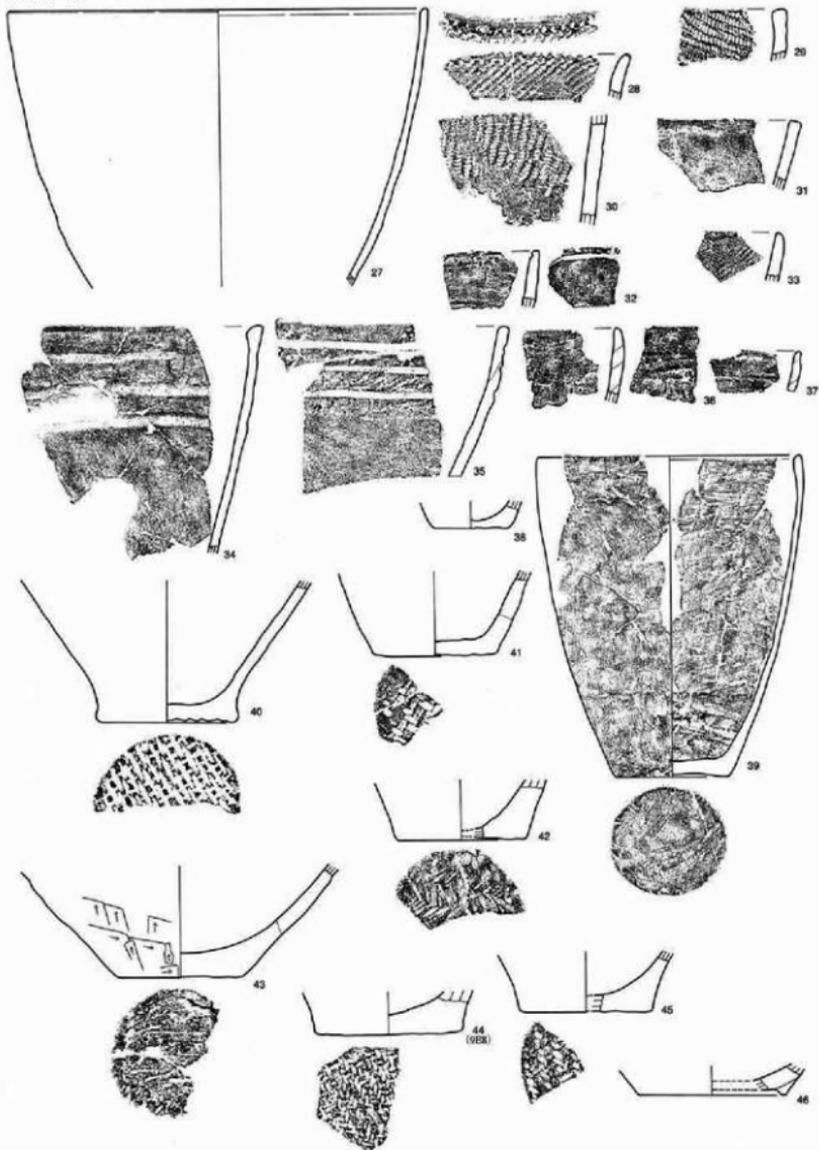




SI11 (1~26)



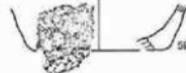
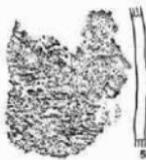
SI11 (27-46)



SI25-26  
7GPt1 (47-48)



7GPt2 (49-52-54-59)



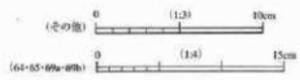
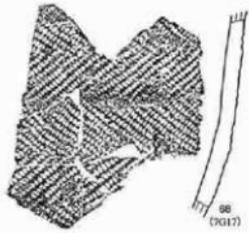
SI26 伊 (61-61a-63a-63b)



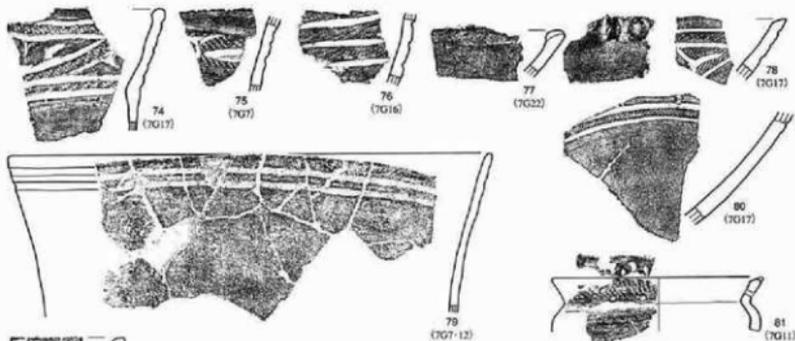
SI26 伊 (65)



SI25-26周辺の包含層 (66-73)



525-26周辺の土器群 (74-82)



SFP1 (83)



SK30 (84)



SX2 (85)



12号片断 (86)



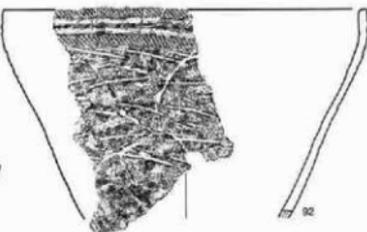
4D黒樹木2 (87)



4E黒樹木 (88-89)



5D黒樹木1 (90-93)



6D黒樹木1 (94)



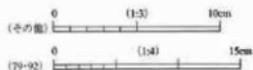
7A黒樹木1 (95)



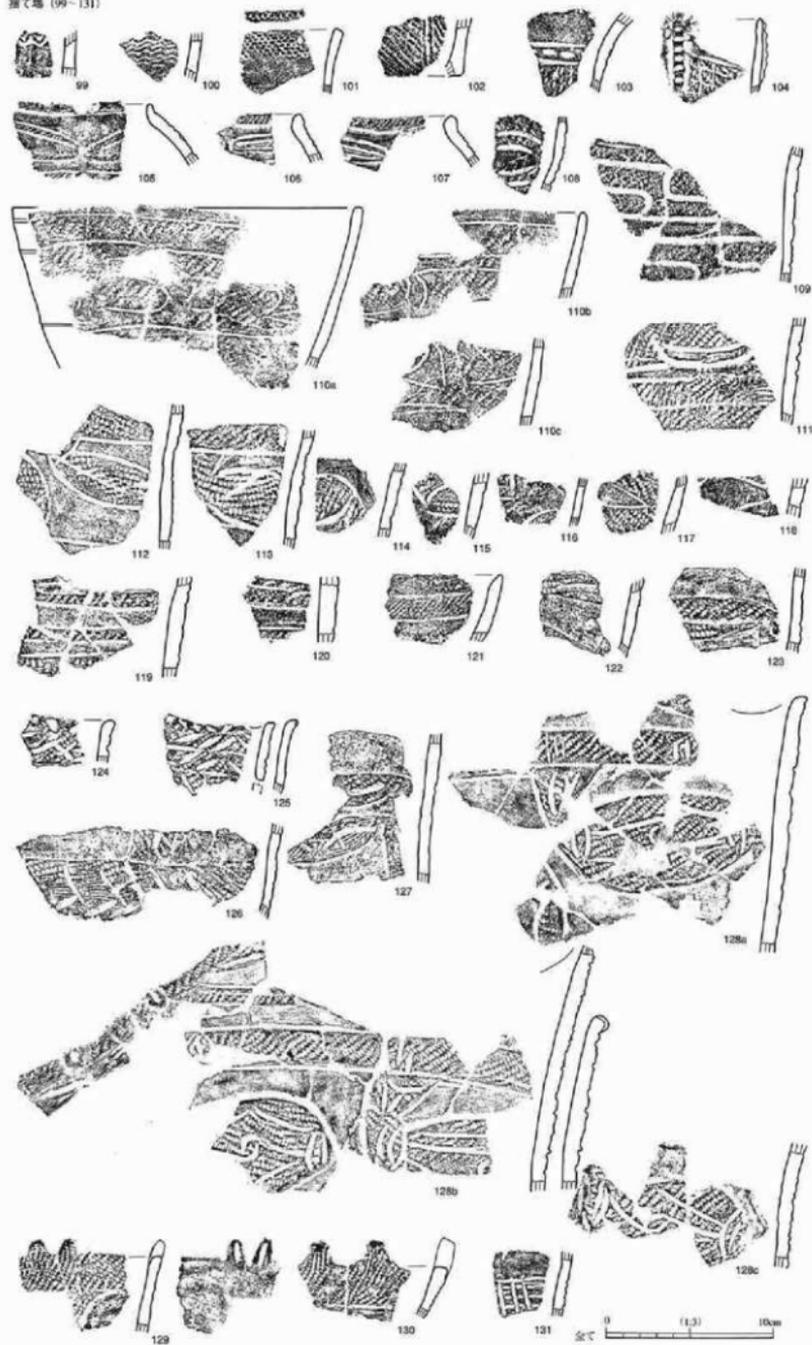
7D黒樹木2 (96-97)



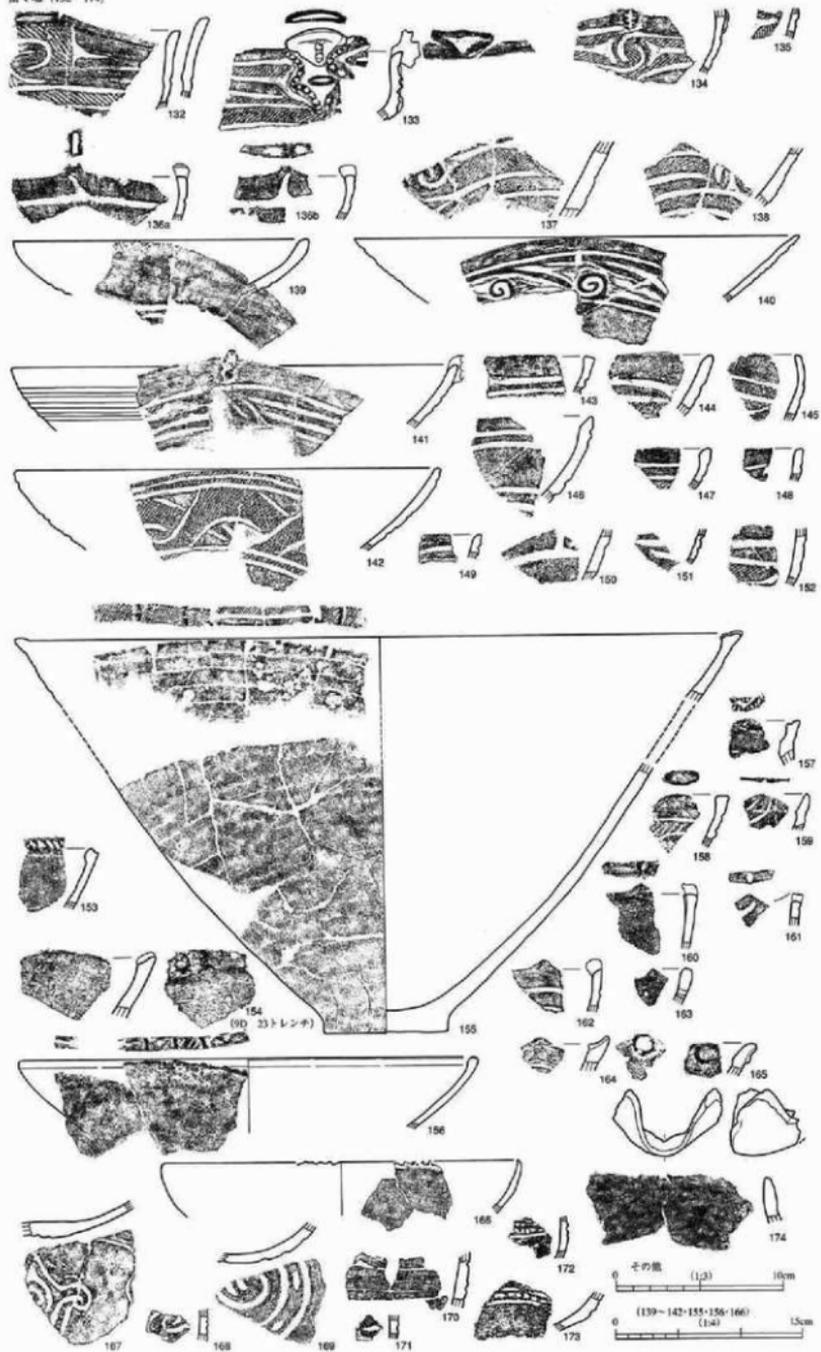
7B黒樹木3 (98)



接着場 (99-131)



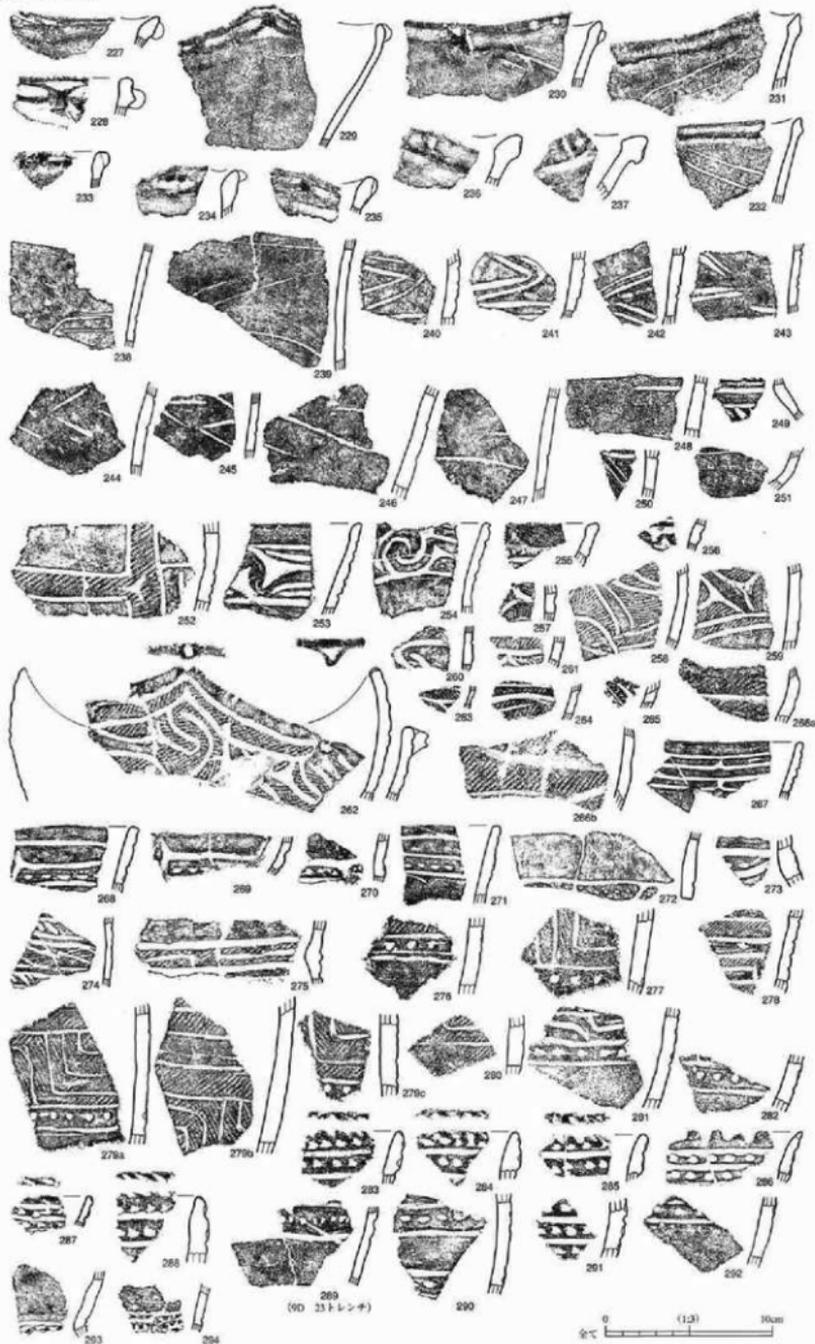
捨て場 (132-174)



捨て縄 (175~226)



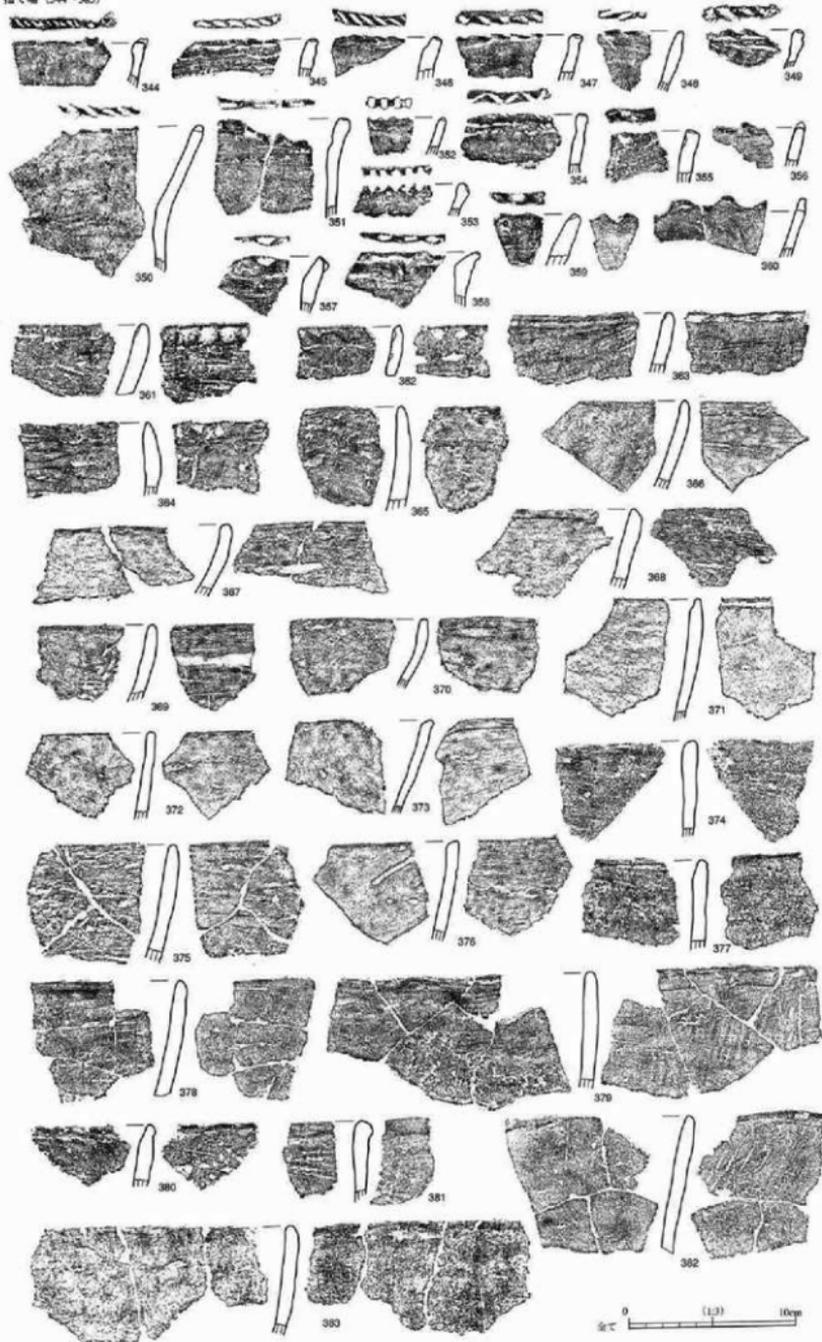
捨て場 (227~294)



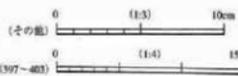
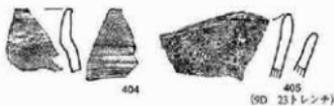
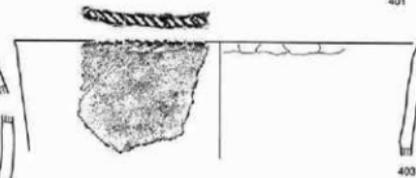
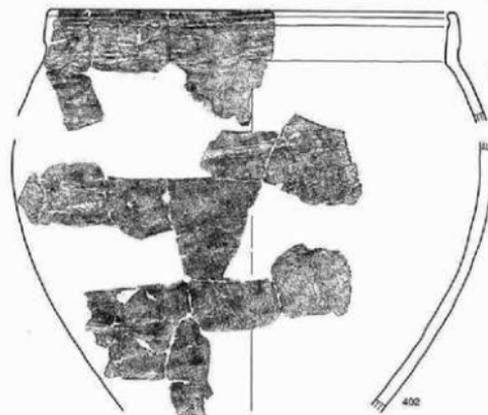
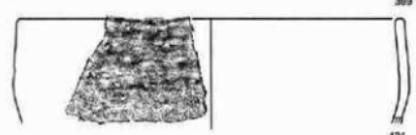
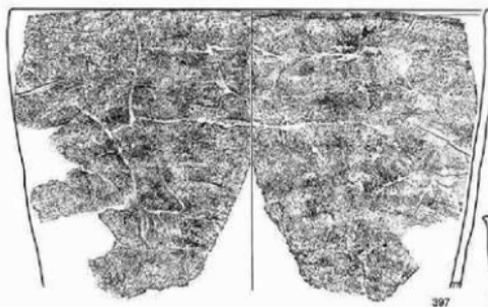
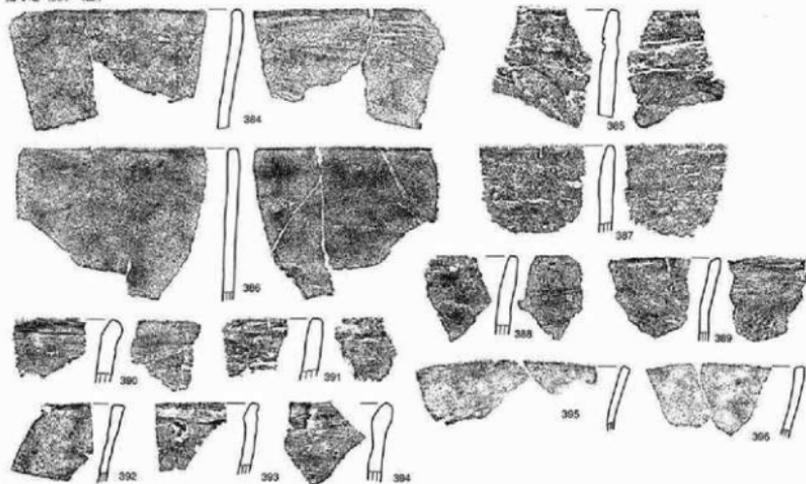
捨て場 (295~343)



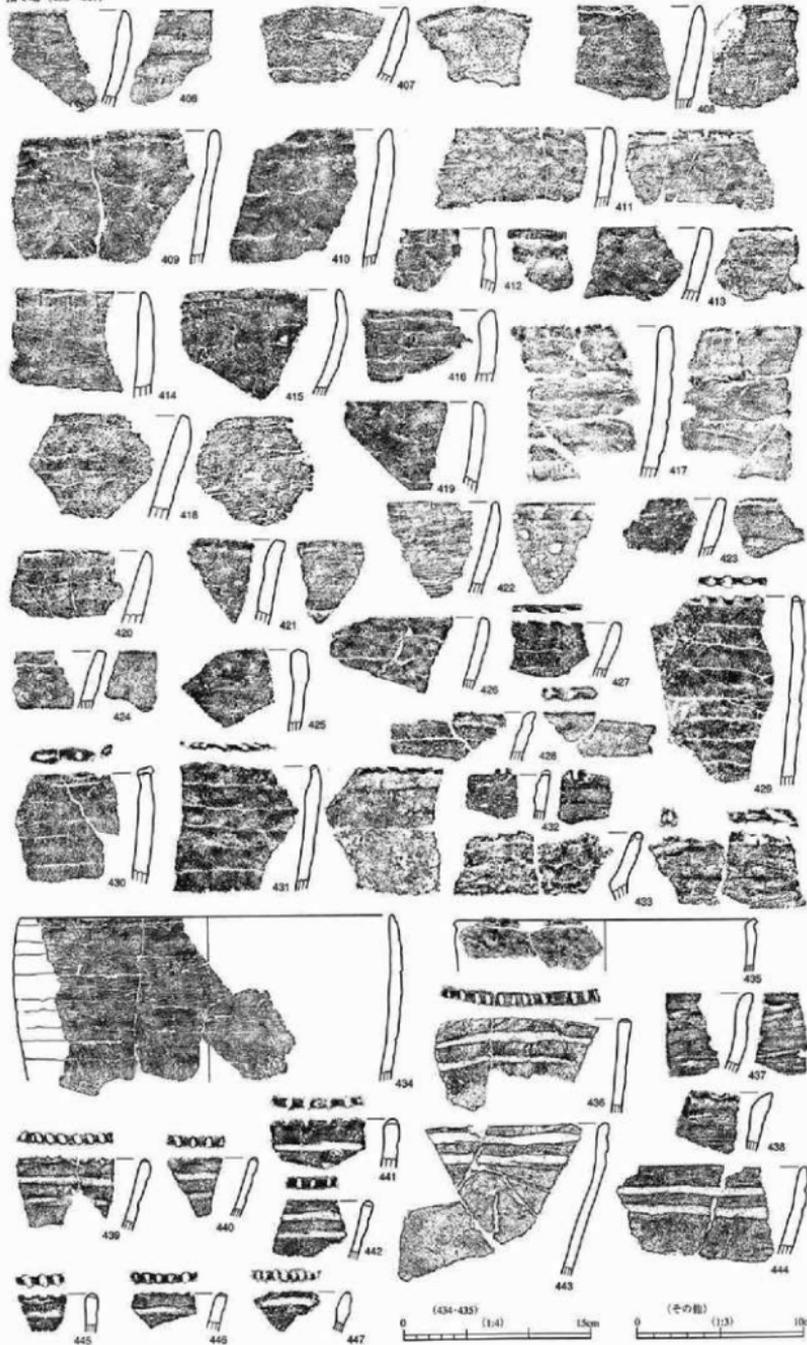
捨て場 (344~383)



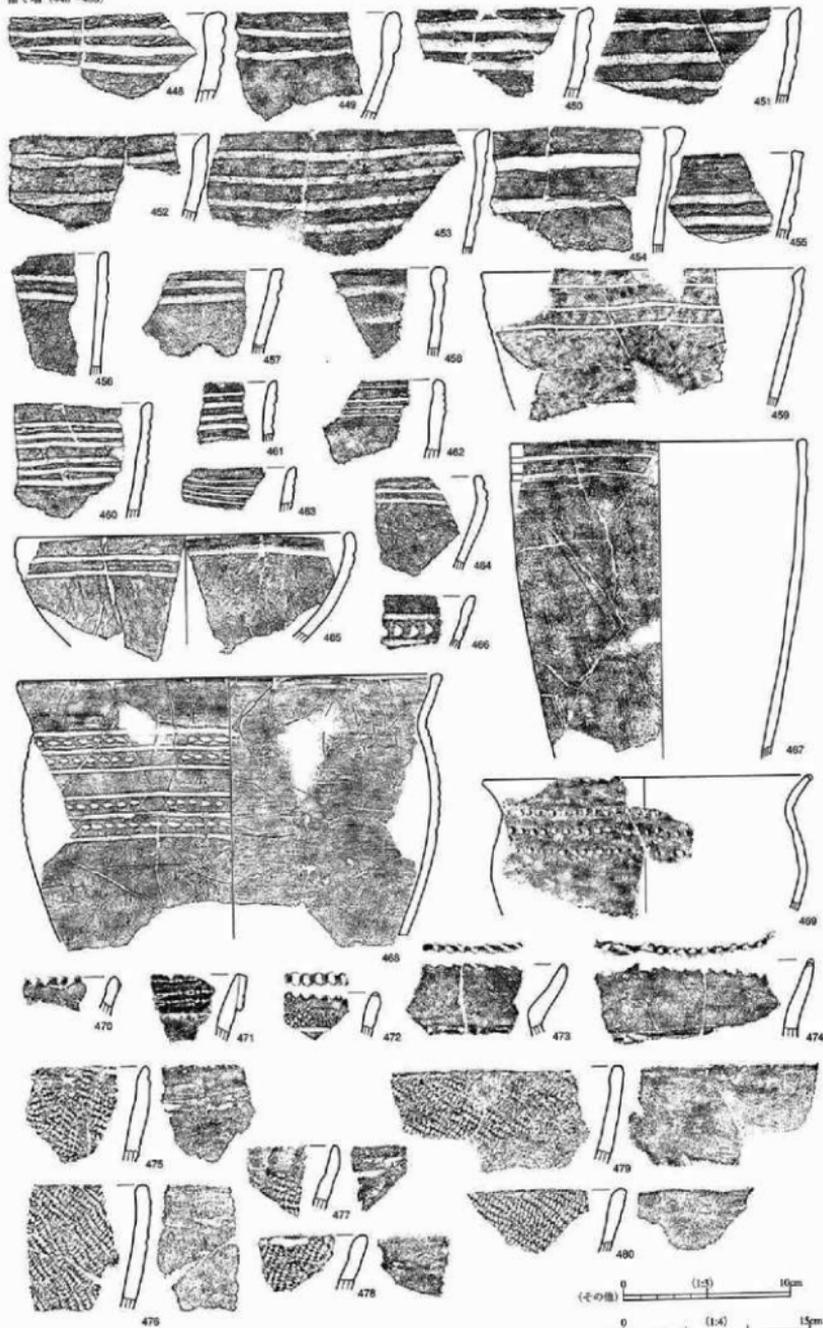
捨て場 (384~405)



捨て場 (406-447)



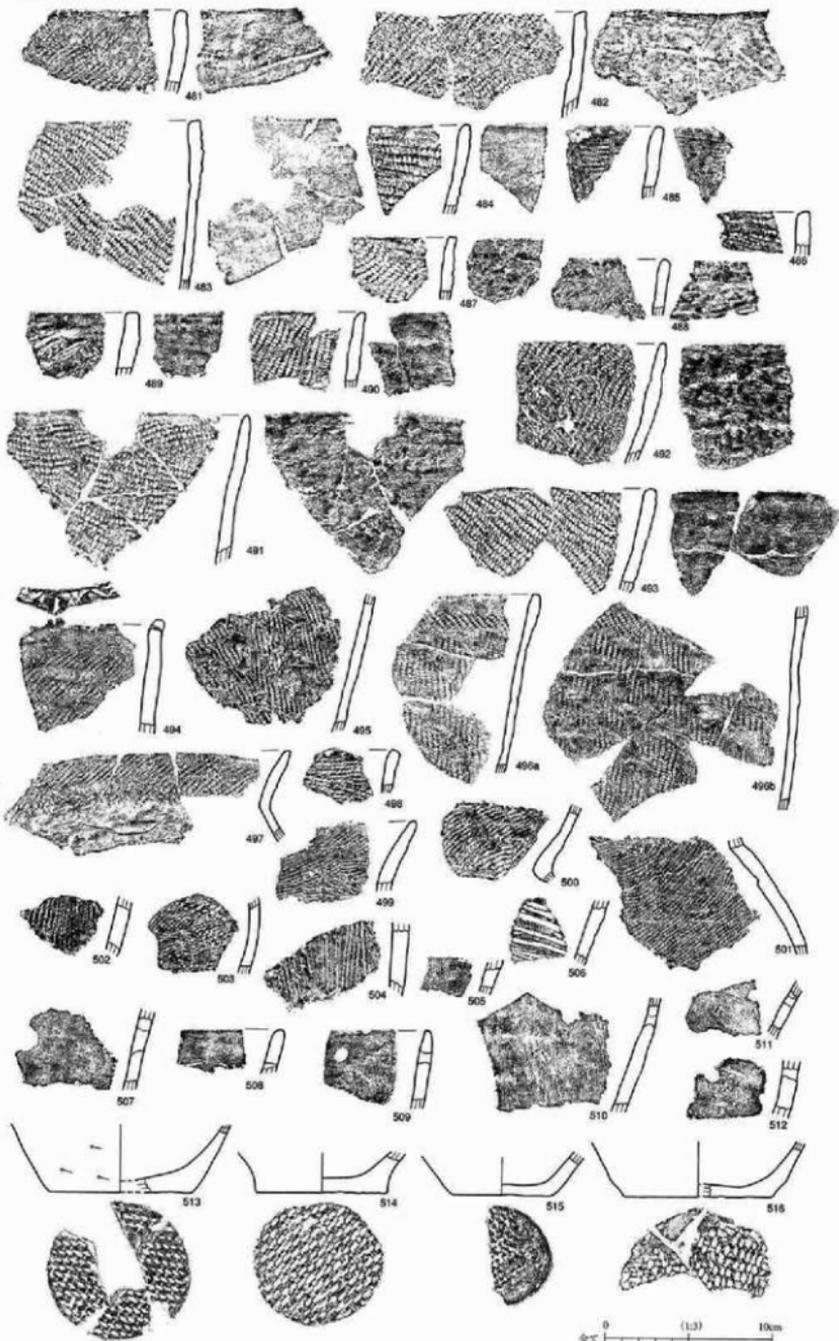
捨て場 (448~480)



(その他) 0 (1:3) 10cm

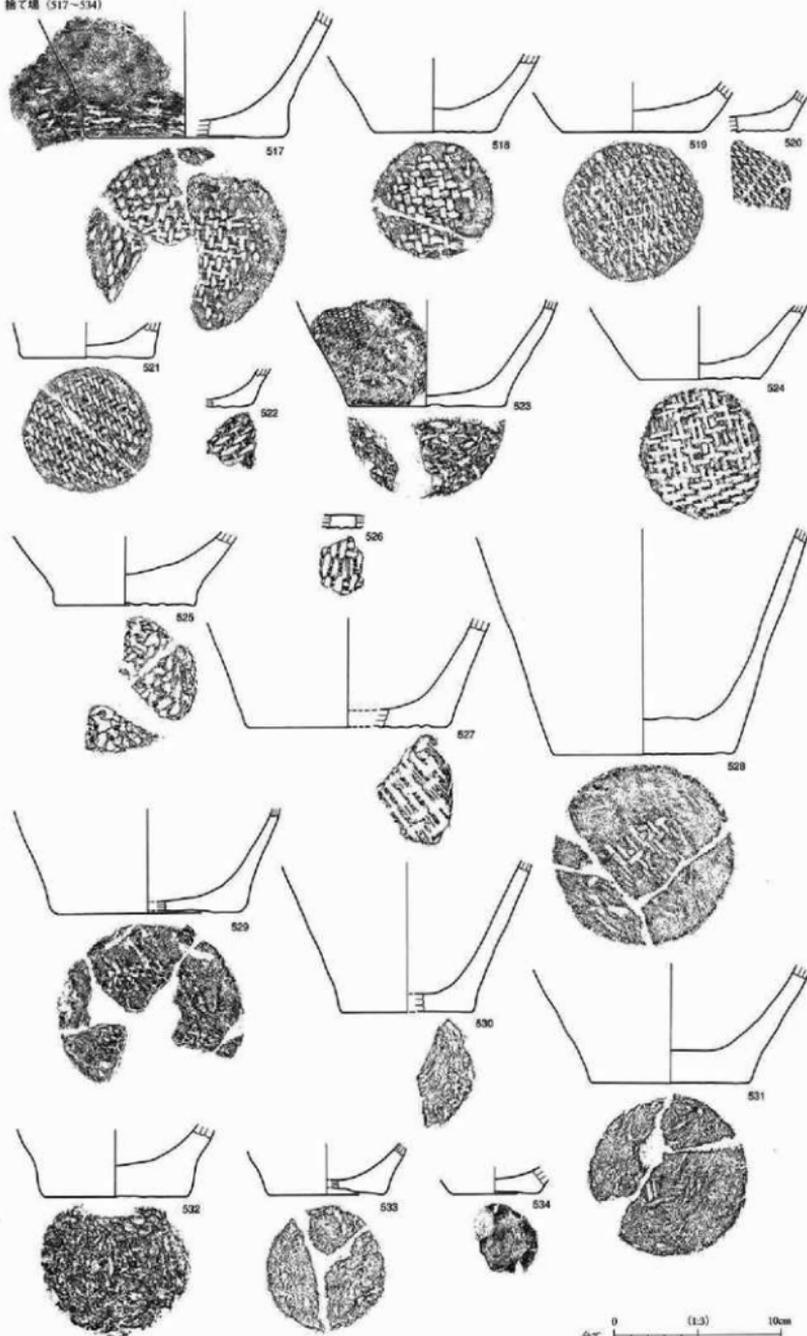
(459-467-469) 0 (1:4) 15cm

捨て場 (481~516)

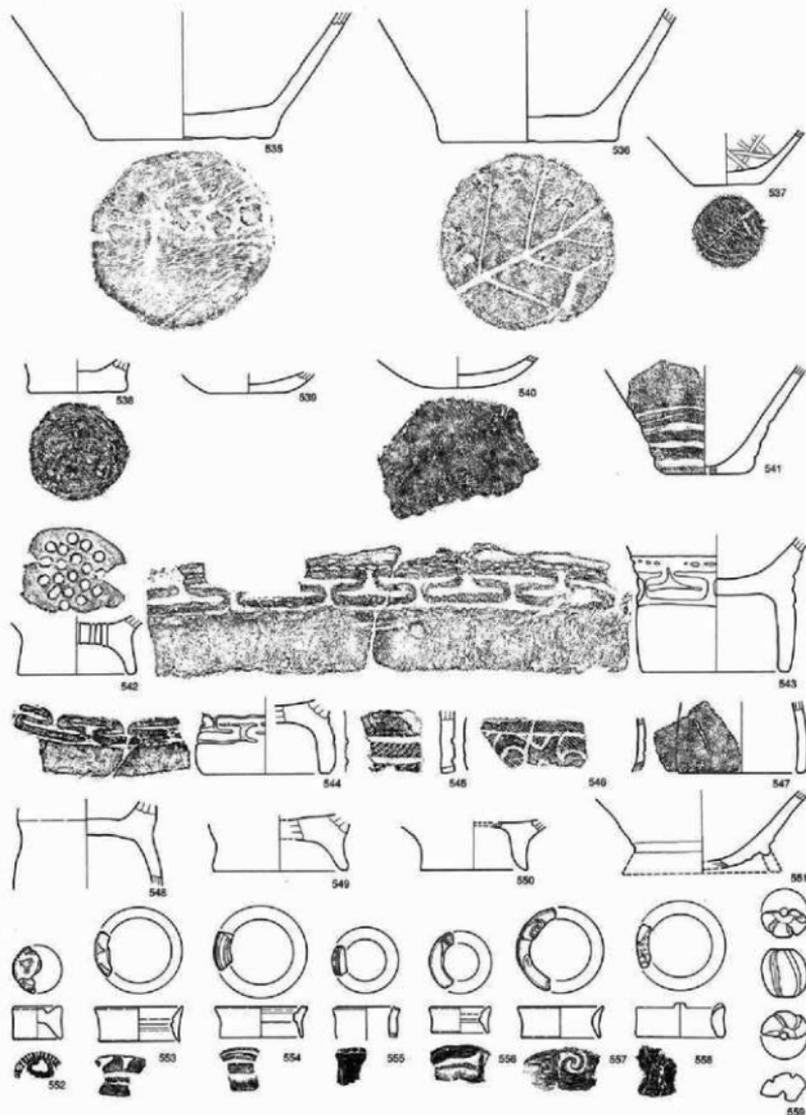


0 (1:3) 10cm  
全て

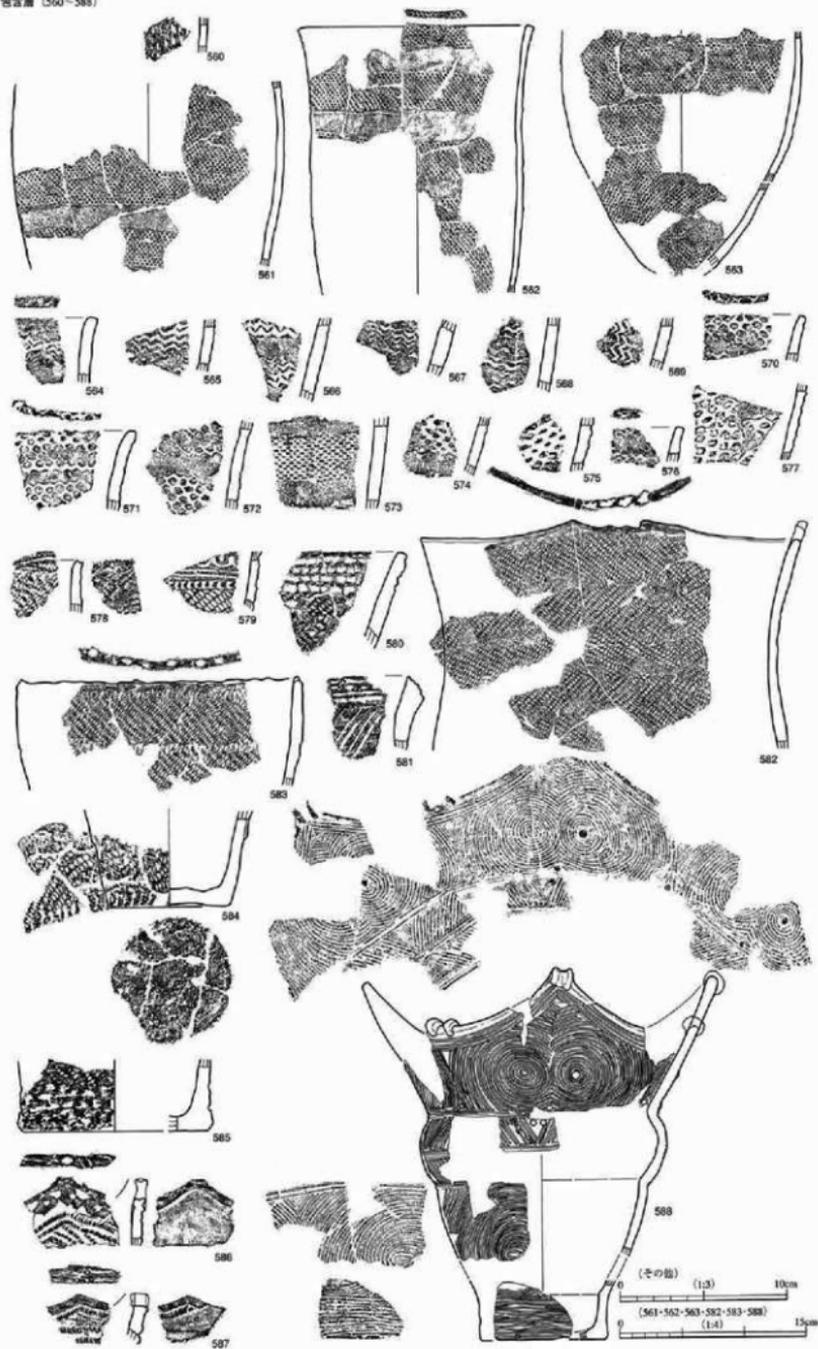
検出場 (517~534)



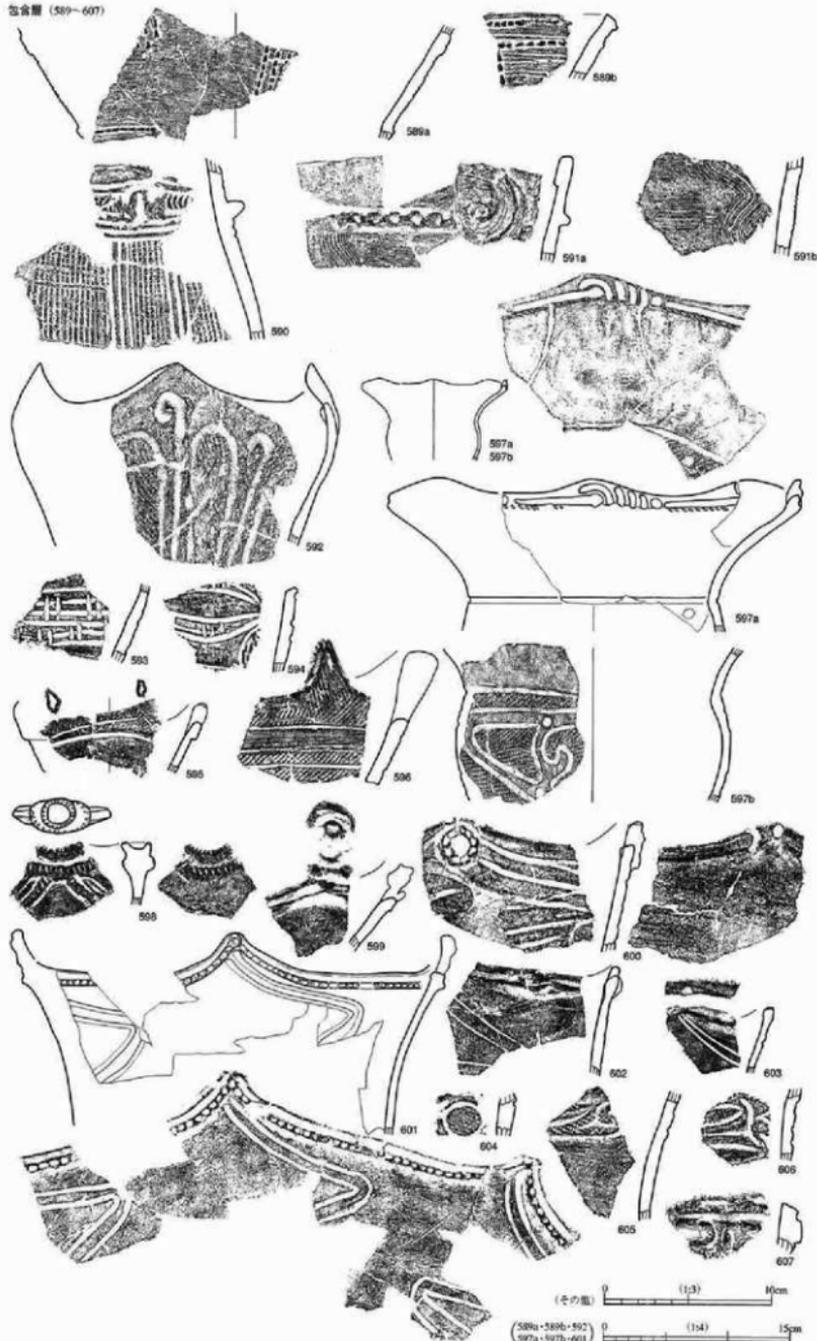
捨て場 (535~559)



0 (1:3) 10cm  
 (その他) 0 (2:3) 5cm  
 (552~559)

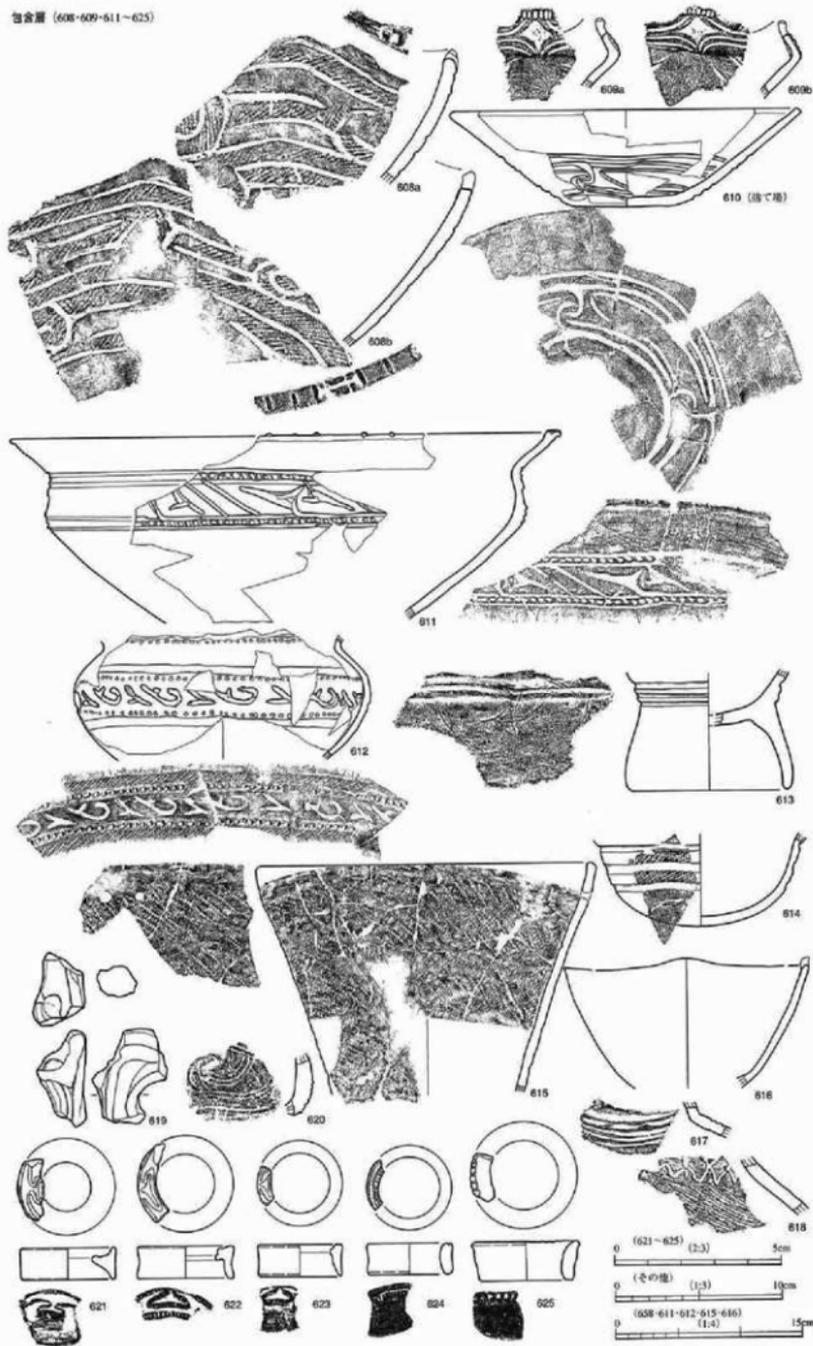


包合器 (589-607)

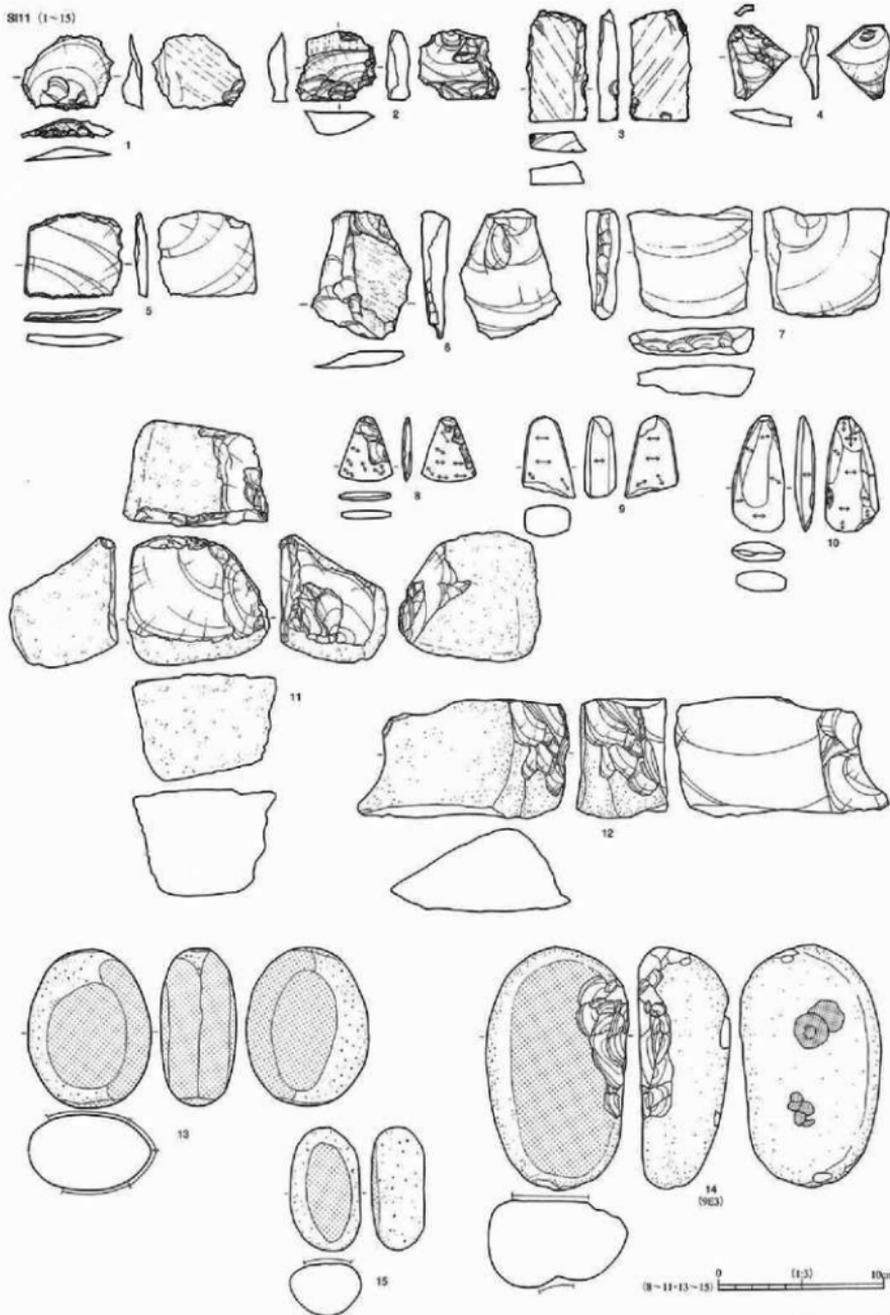


(その順) (1:3) 10cm  
 (589a-589b-592) 0 (1:4) 15cm  
 (597a-597b-601)

惣倉屋 (608-609-611-625)

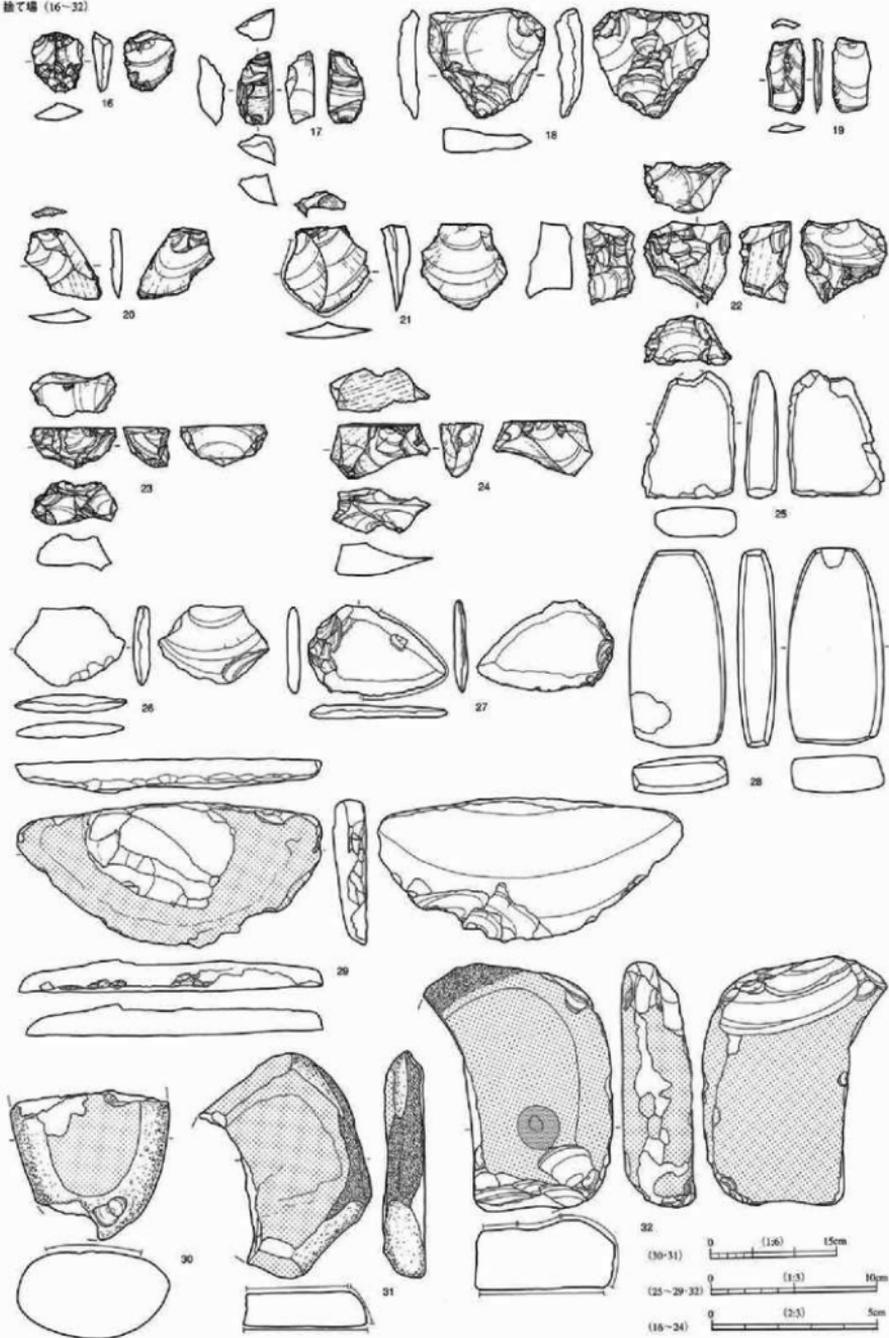


SH11 (1~15)

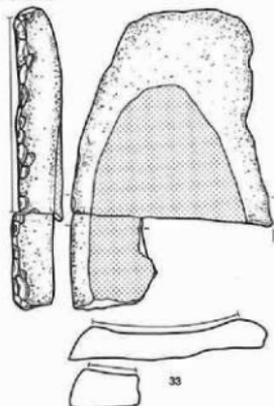


0 (1,3) 10cm  
 0 (2,3) 5cm  
 (8~11,13~15)  
 (1~7,12)

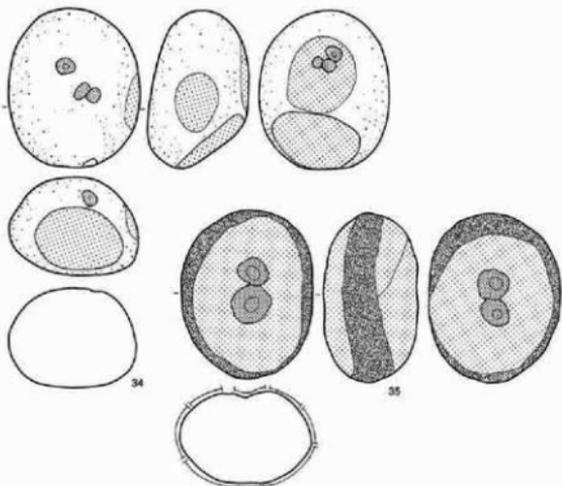
絵て場 (16~32)



繪て種 (33~38)

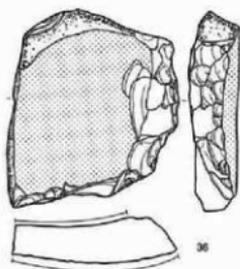


33

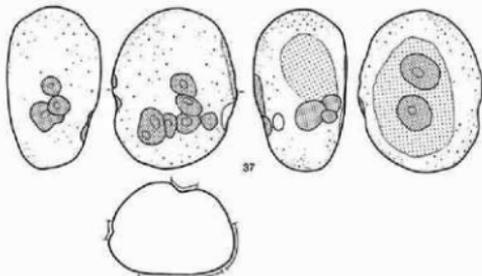


34

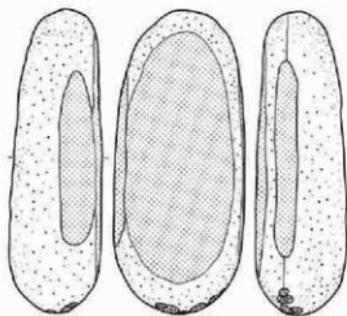
35



36

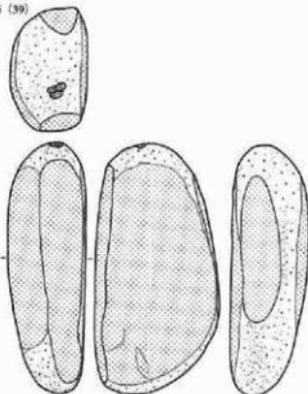


37

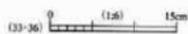


38

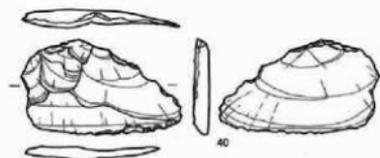
SK16 (39)



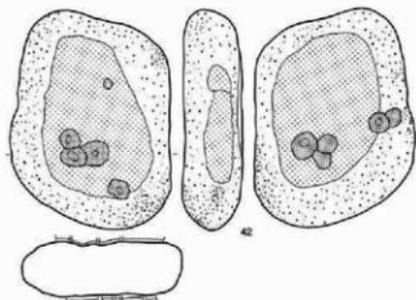
39



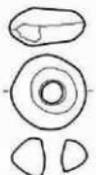
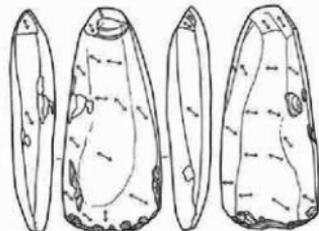
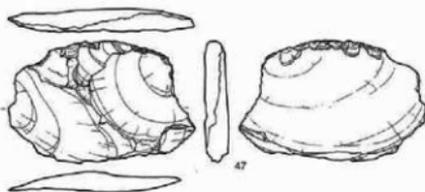
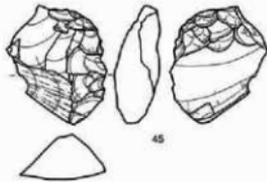
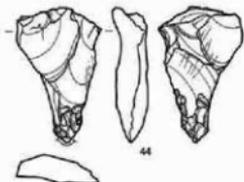
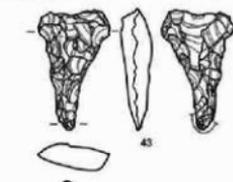
S25-26 (42)



40 風倒木2 (41)



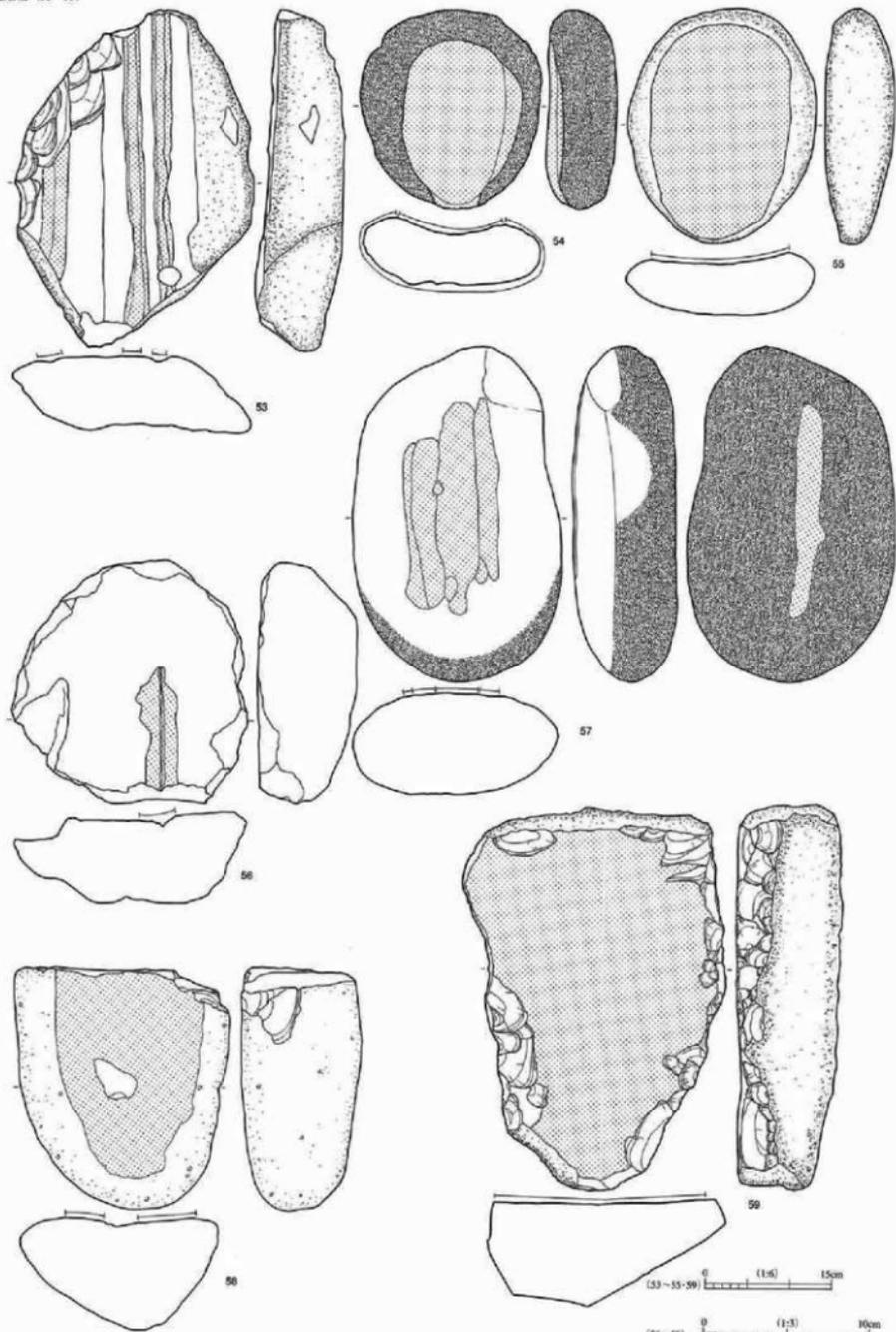
包含層 (43-52)



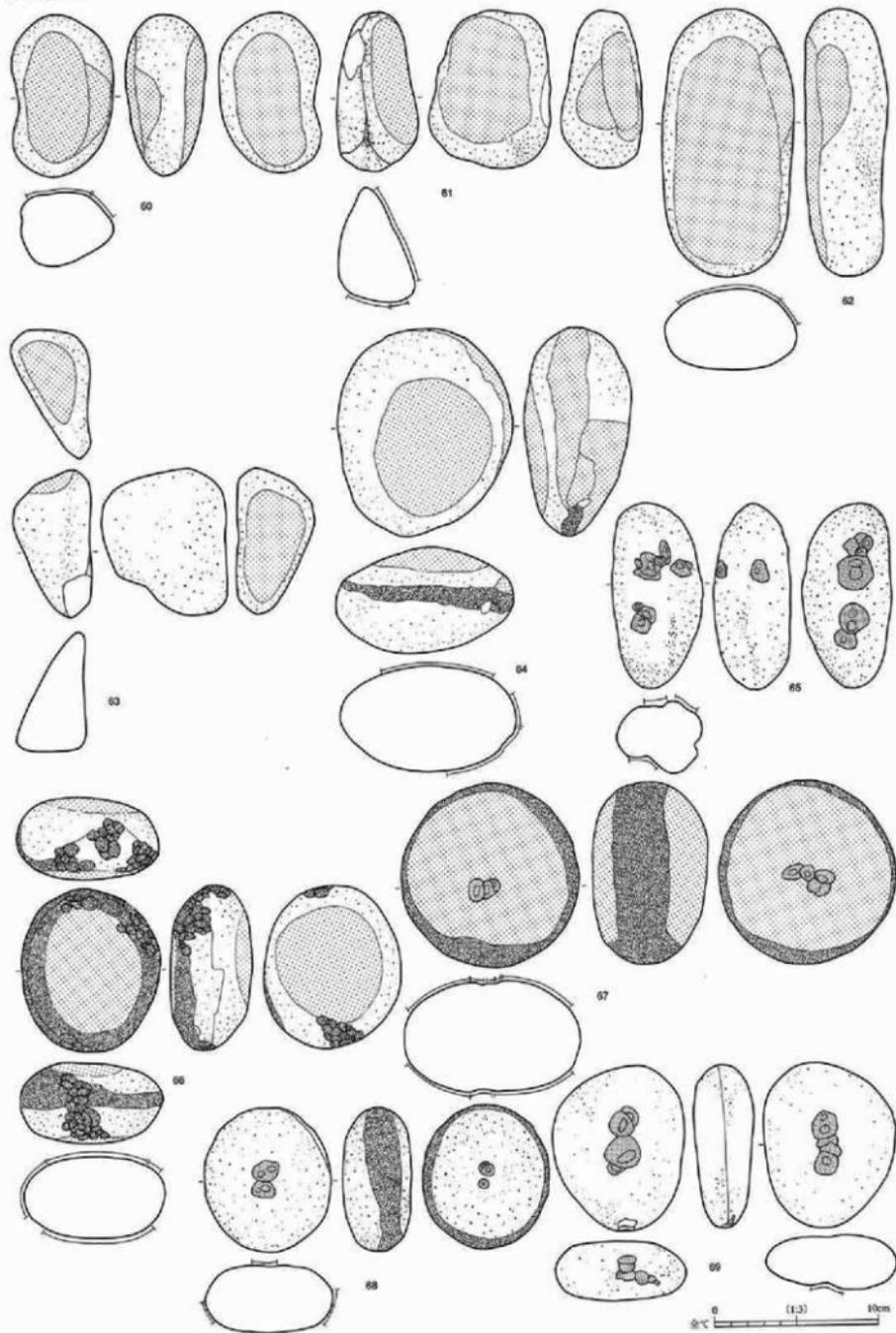
(42-46-50) 0 (1:3) 10cm

(40-41, 43-45-51-52) 0 (2:3) 5cm

碧玉類 (53-59)

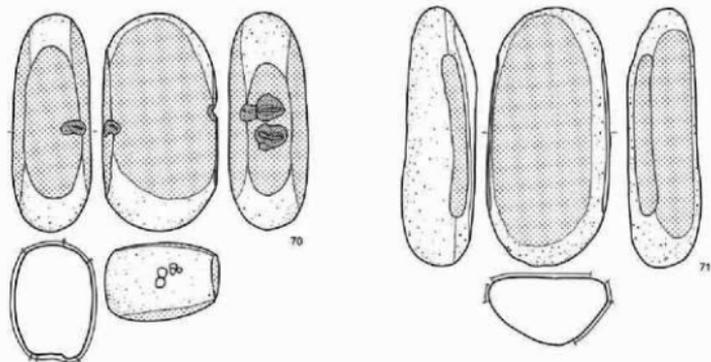


包含層 (60-69)

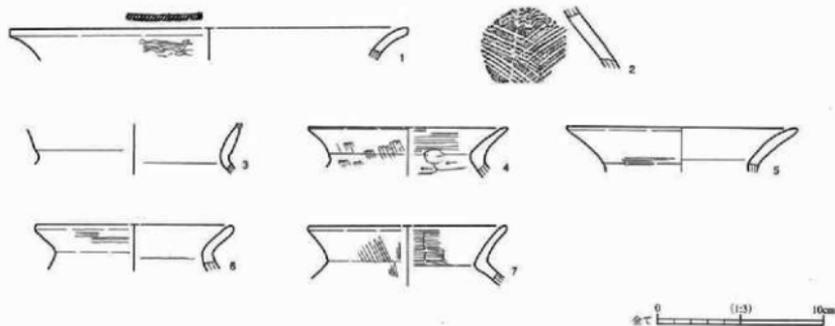


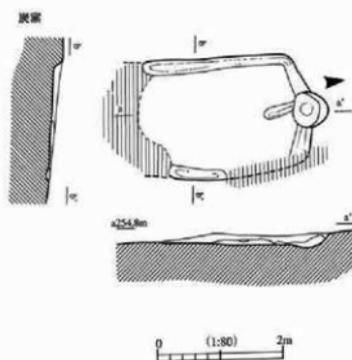
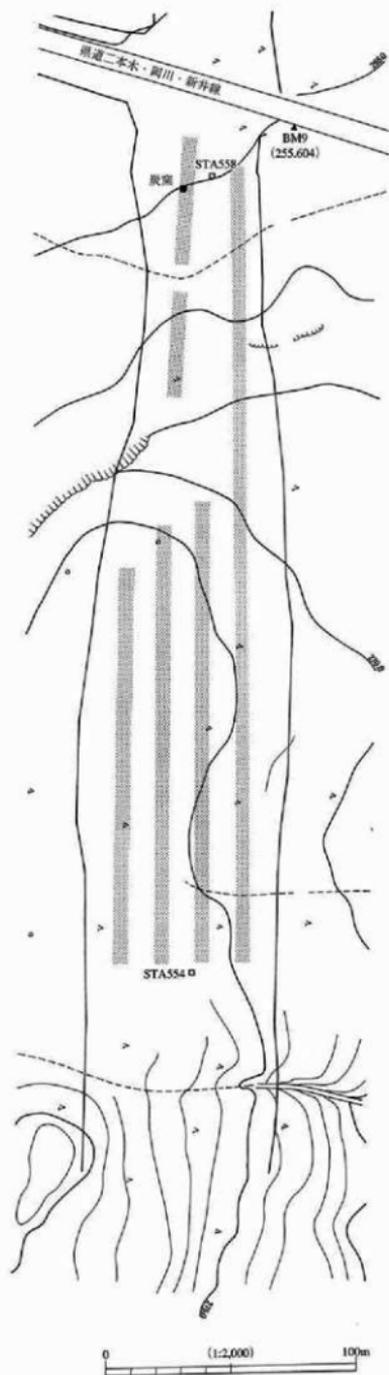
0 10cm (1:3)

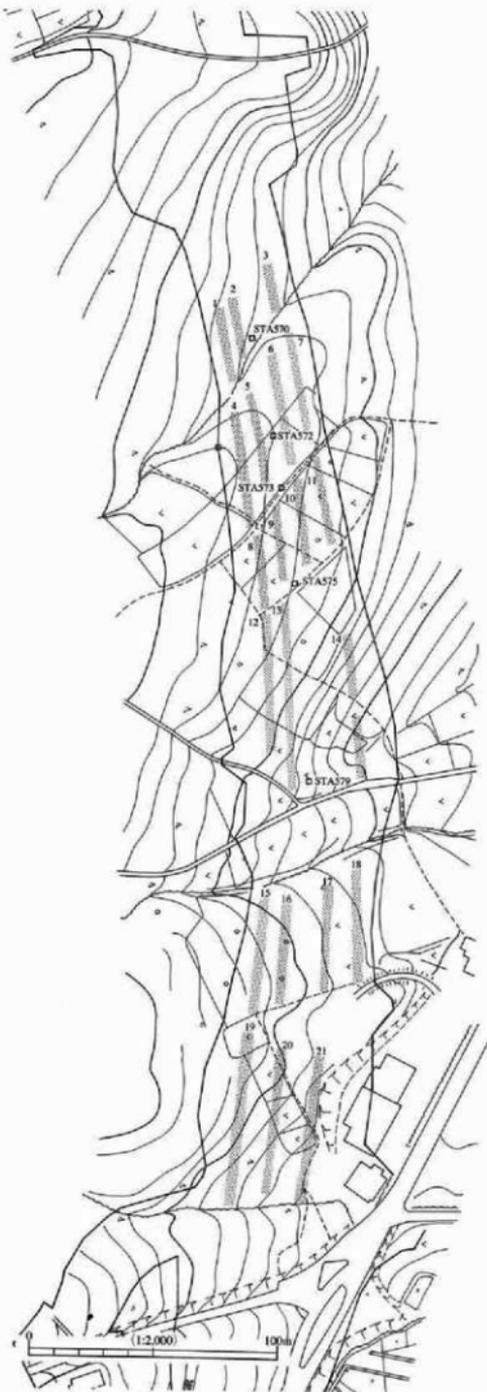
包含蓋 (70-71)



弥生時代以降の遺物 (1-7)







(国土地理院「砂高山」1:50,000原図 平成5年発行)

0 (1:50,000) 2,000m



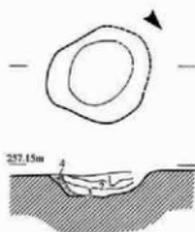


SK3 伊

SK1

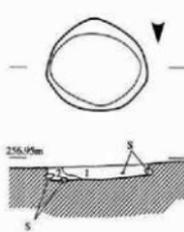
SK2

SK3



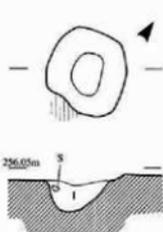
SK3

- 1 明赤褐色土。上部はやや固いが下部は柔らかい。さらさらしている。炭土
- 2 暗赤褐色土。1層粒子を密平流入している。染らなく締まりがない。炭化物粒子を混入。
- 3 真黒色土。染らなくやや粘性がある。火山塵の粒子を少量混入。
- 4 黄褐色土。盛り形の壁についた粘土層。1層とは若干色味が異なり、赤たい。



SK1

- 1 真黒色土。締まりあり。乾いてばさばさする。上部で縄文土器片4点出土。
- 2 暗赤褐色土。やや粘性あり。



SK2

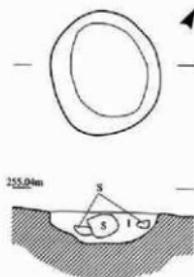
- 1 真黒色土。締まりがある。乾いてばさばさする。



SK3

- 1 真黒色土。

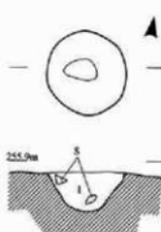
SK4



SK4

- 1 真黒色土。縄文土器1片出土。

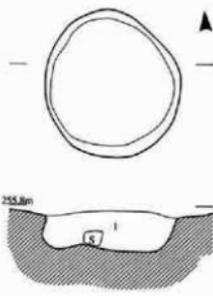
SK5



SK5

- 1 真黒色土。

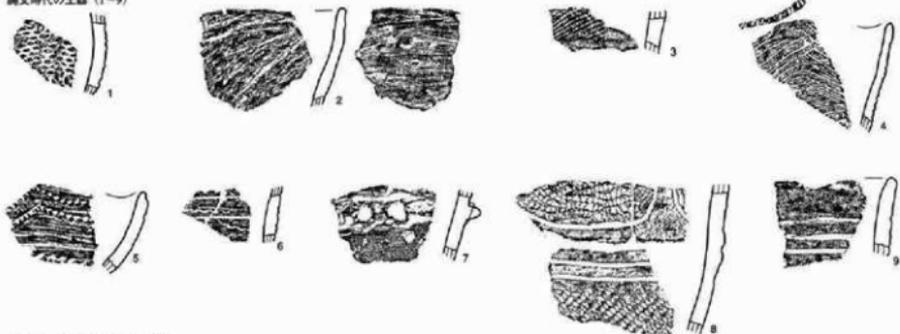
SK6



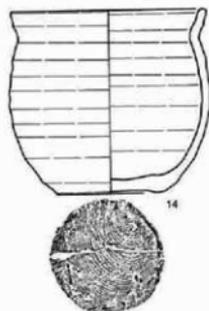
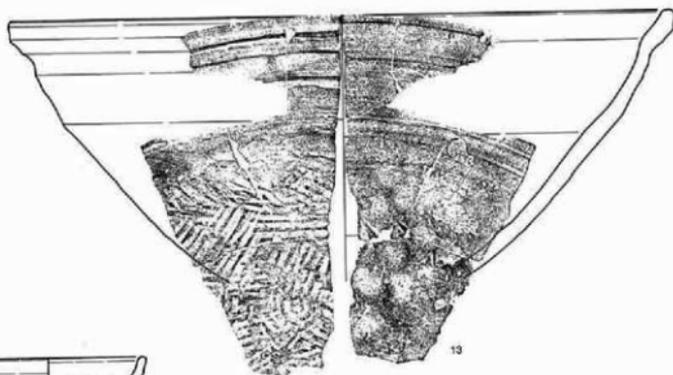
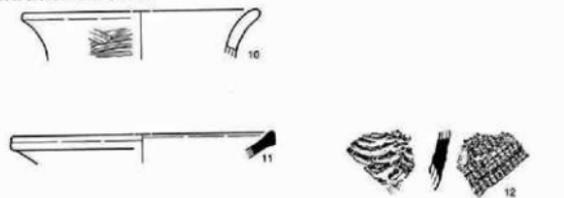
SK6

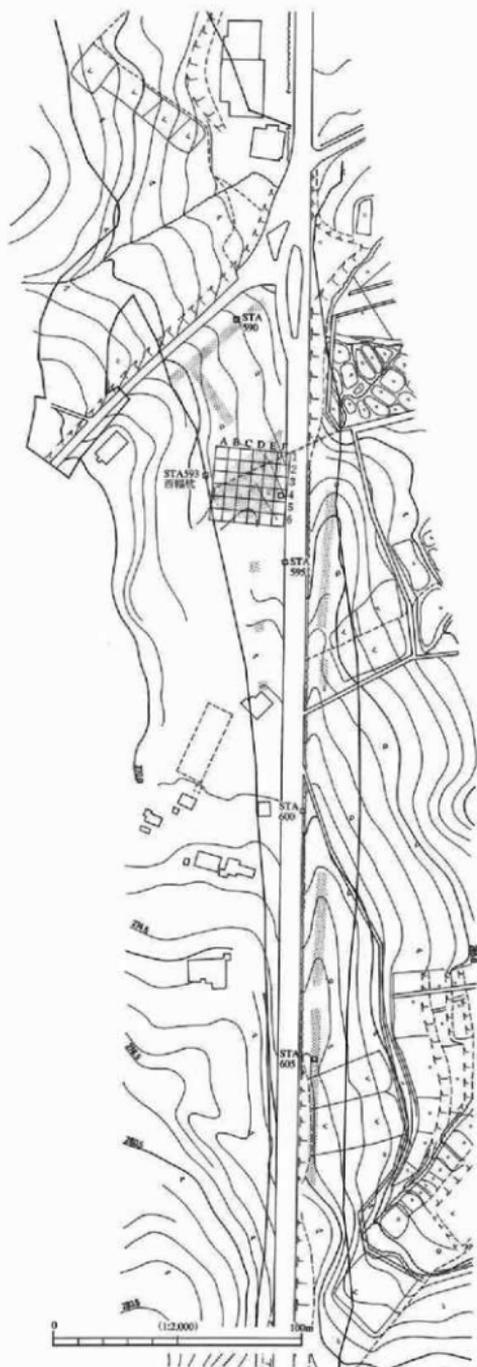
- 1 真黒色土。

縄文時代の土器 (1-9)

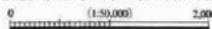


古墳時代以降の遺物 (10-15)



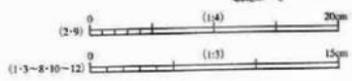
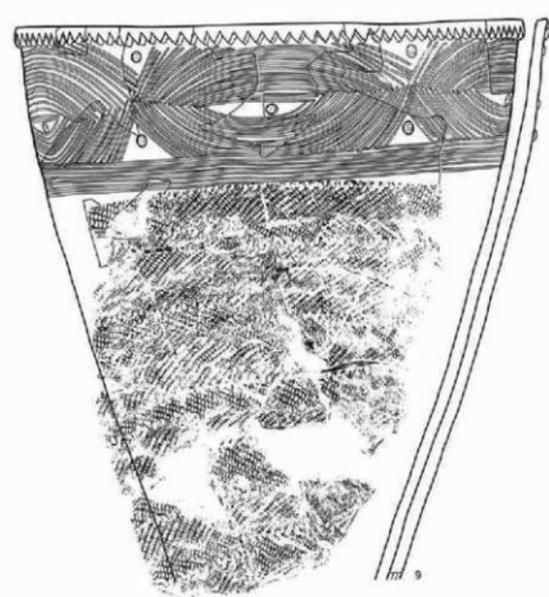
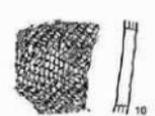
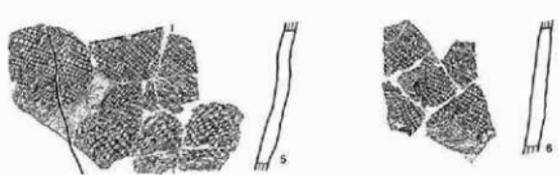
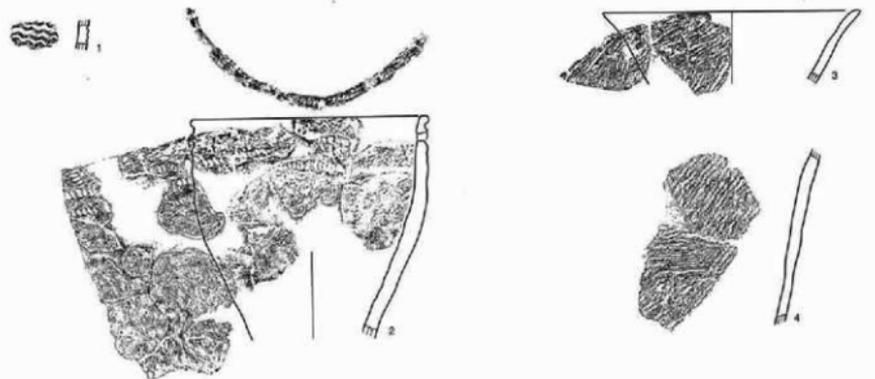


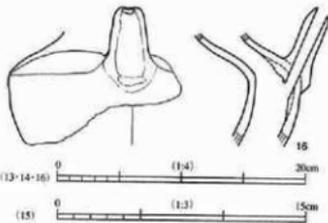
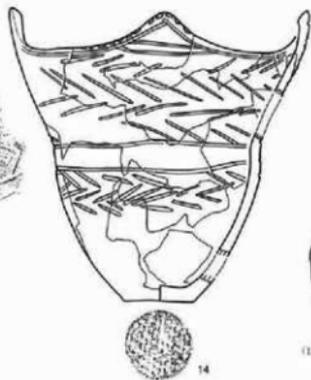
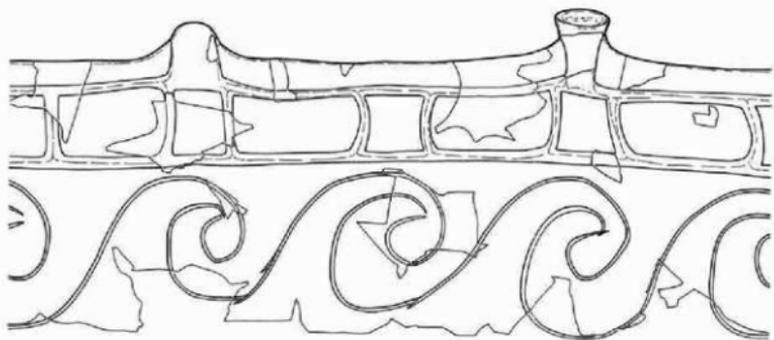
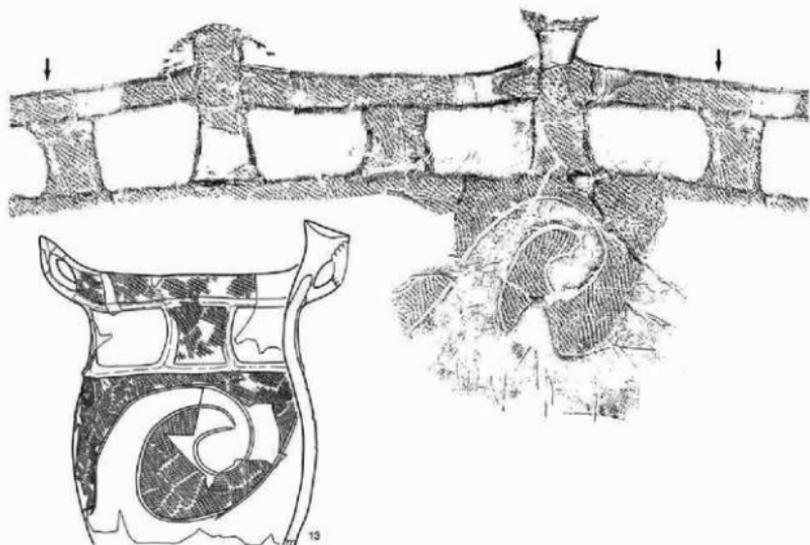
(国土地理院「妙高山」1:50,000原図 平成5年発行)

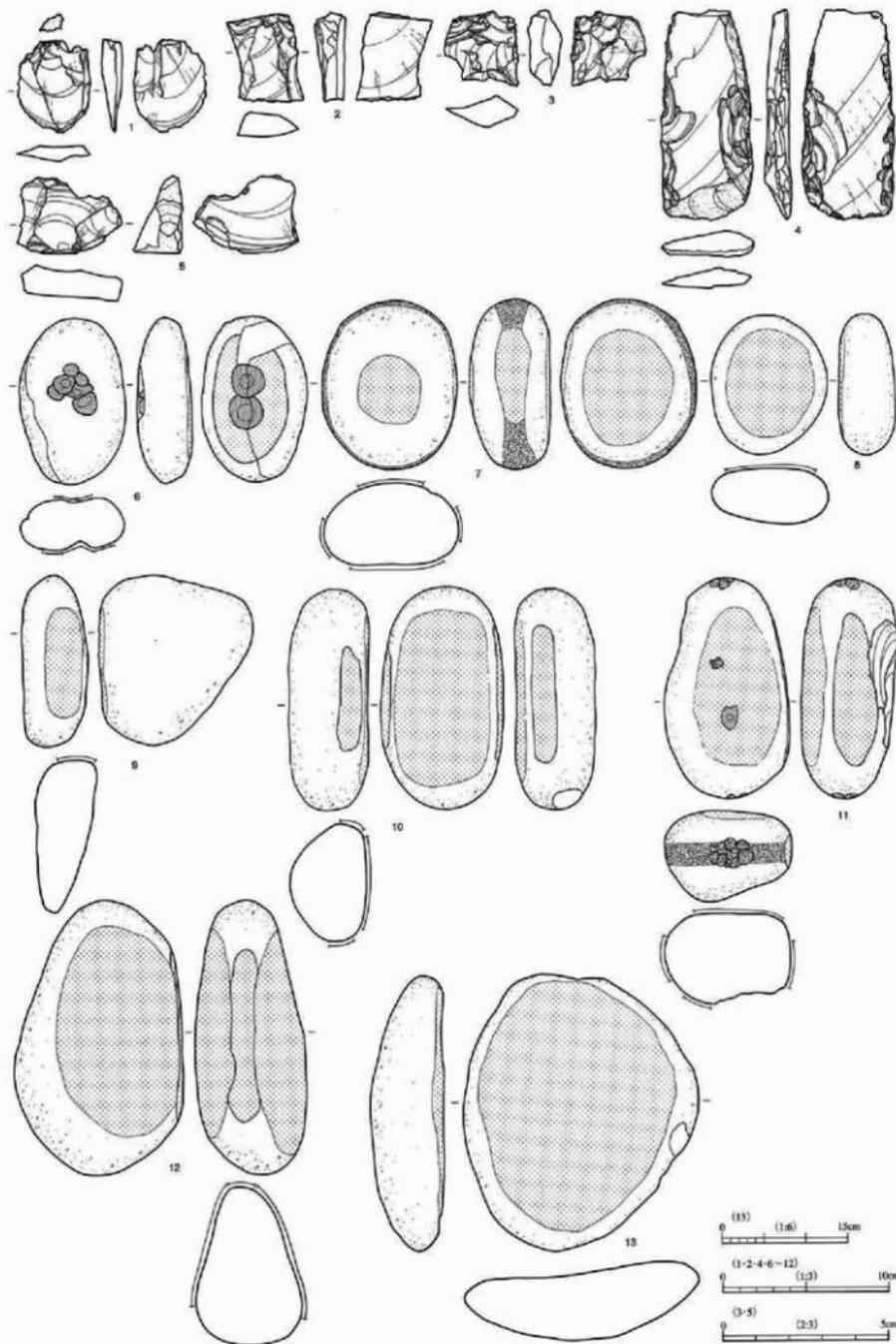




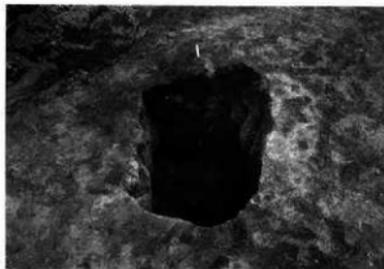




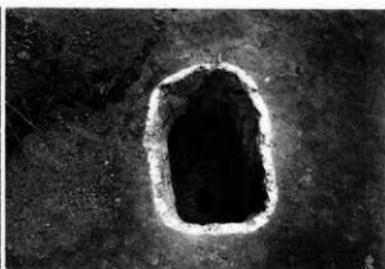




陥穴SK1 半載



陥穴SK1 完掘



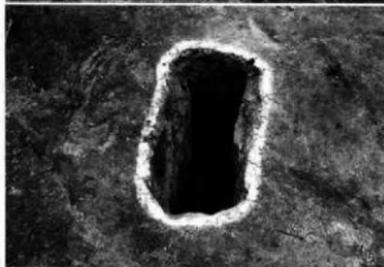
陥穴SK2 半載



陥穴SK2 完掘



陥穴SK12完掘



陥穴SK3 完掘



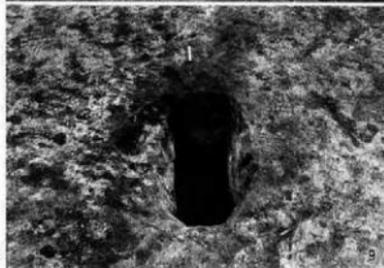
陥穴SK4 半載



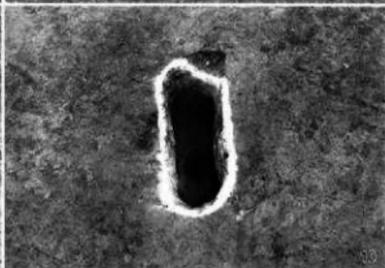
陥穴SK4 完掘



陥穴SK5 半載



陥穴SK5 完掘

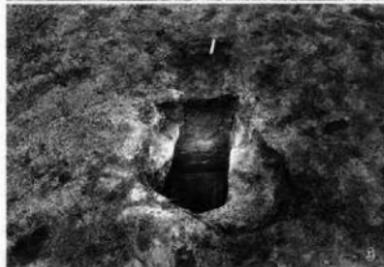




陥穴SK 6 半截



陥穴SK 6 完掘



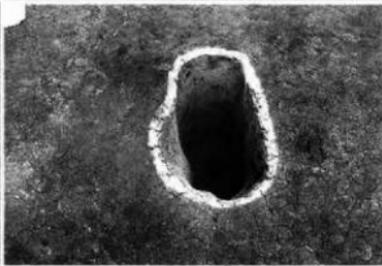
陥穴SK 7 半截



陥穴SK 7 完掘



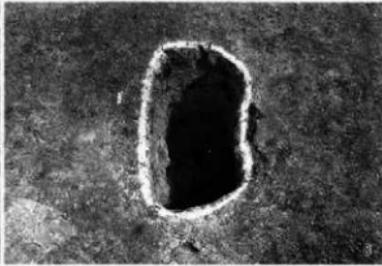
陥穴SK 8 半截



陥穴SK 8 完掘



陥穴SK 9 半截



陥穴SK 9 完掘



陥穴SK10半截

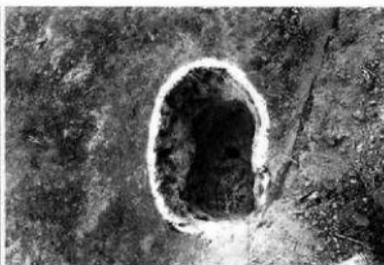


陥穴SK10完掘

陥穴SK11半載



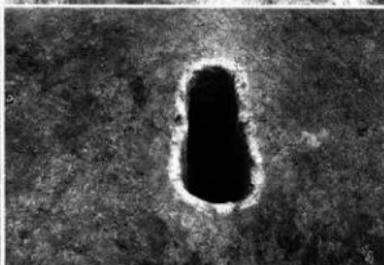
陥穴SK11完掘



陥穴SK13半載



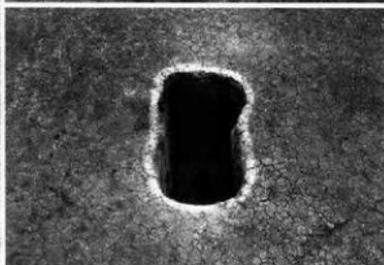
陥穴SK13完掘



陥穴SK14半載



陥穴SK14完掘



陥穴SK15半載



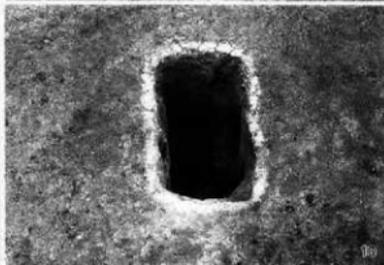
陥穴SK15完掘

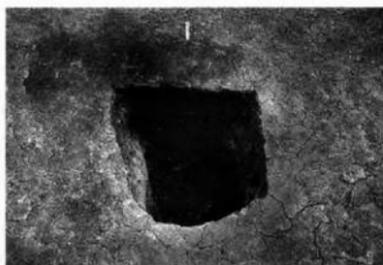


陥穴SK16半載

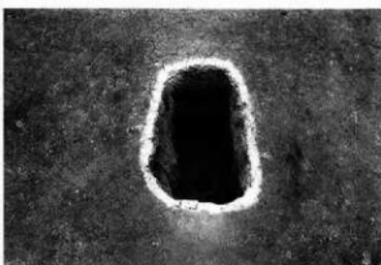


陥穴SK16完掘





陥穴SK18半截



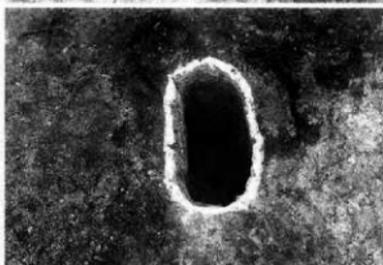
陥穴SK18完掘



陥穴SK19半截



陥穴SK19完掘



陥穴SK20完掘



陥穴SK17完掘



陥穴状土坑列  
完掘 (6C・  
6D付近)



陥穴状土坑列  
完掘 (7B・  
8B・8C付近)



陥穴状土坑列  
完掘  
(5C付近)



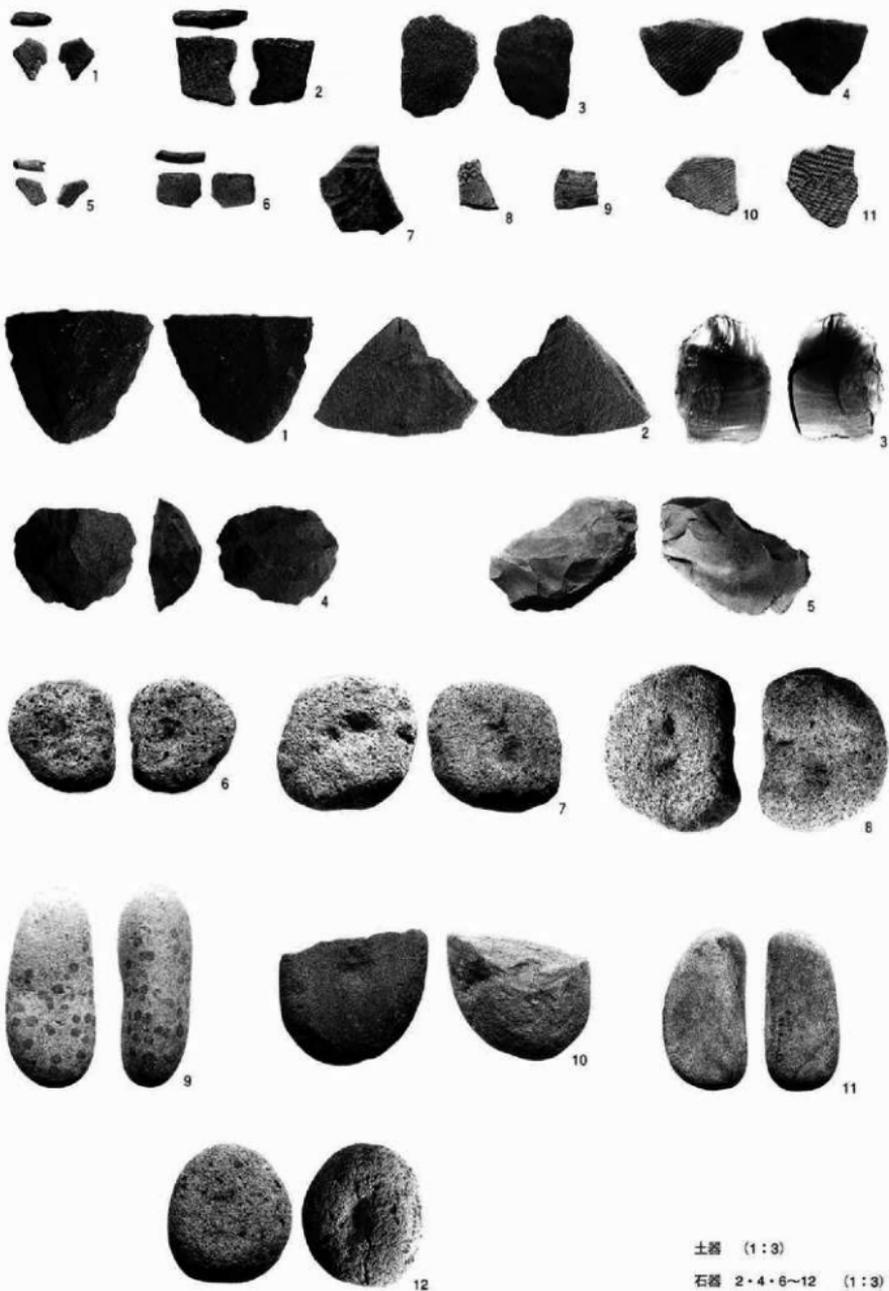
完掘  
(南側崖線)



全景



近景



土器 (1:3)

石器 2・4・6~12 (1:3)

1・3・5 (2:3)

'87-陥穴SK 2 半截



1

'87-陥穴SK 2 完掘



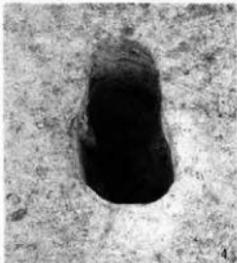
2

'87-陥穴SK 3 半截



3

'87-陥穴SK 3 完掘



4

'87-陥穴SK 4 半截



5

'87-陥穴SK 4 完掘



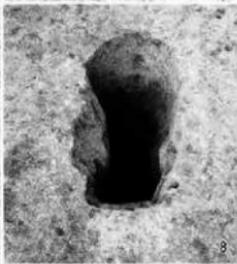
6

'87-陥穴SK 5 半截



7

'87-陥穴SK 5 完掘



8

'87-陥穴SK 6 半截



9

'87-陥穴SK 6 完掘



10



'87-隨穴 7 半截



'87-隨穴 7 完掘



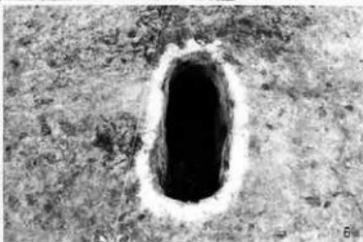
'87-隨穴 8 半截



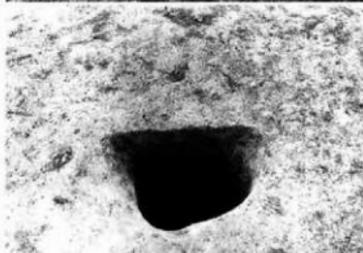
4. '87-隨穴 8 完掘



隨穴狀土坑群  
完掘



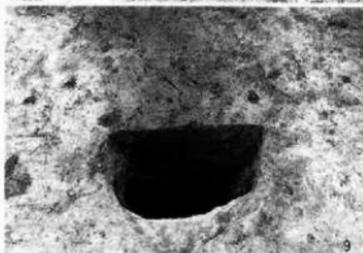
'91-隨穴  
4-6 完掘



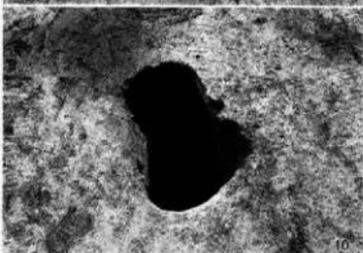
'91-隨穴  
3-8 半截



'91-隨穴  
3-8 完掘



'91-隨穴  
3-7 半截

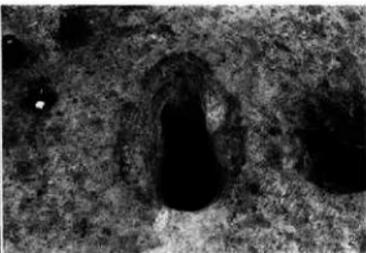


'91-隨穴  
3-7 完掘

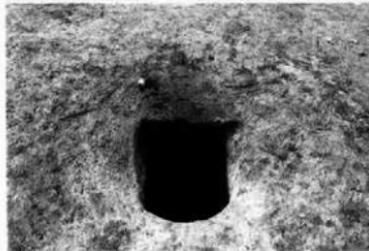
'91-陥穴  
3-6 半載



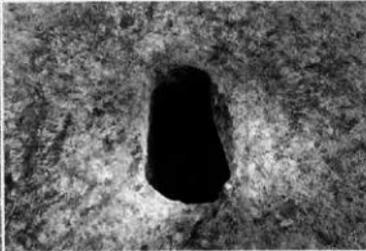
'91-陥穴  
3-6 完掘



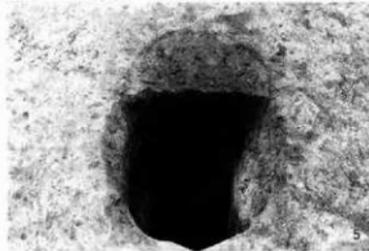
'91-陥穴  
3-5 半載



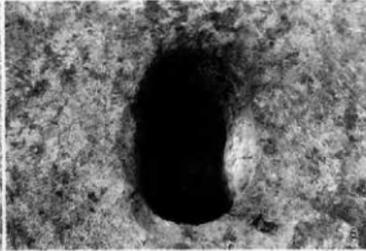
'91-陥穴  
3-5 完掘



'91-陥穴  
3-4 半載



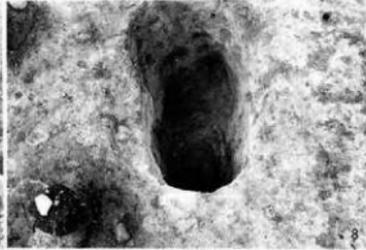
'91-陥穴  
3-4 完掘



'91-陥穴  
3-3 半載



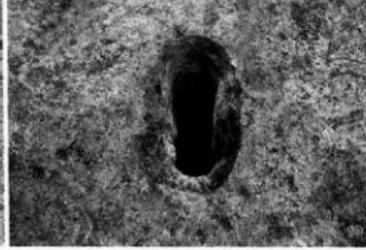
'91-陥穴  
3-3 完掘

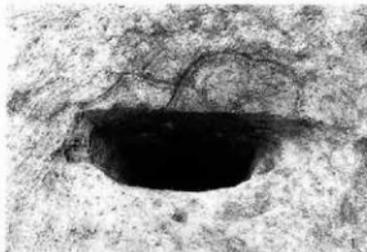


'91-陥穴  
3-2 半載



'91-陥穴  
3-2 完掘

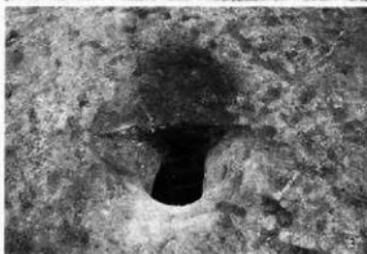




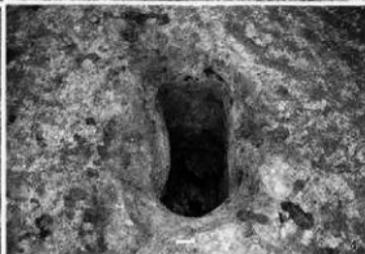
91-臨穴  
3-1 半截



91-臨穴  
3-1 完截



91-臨穴  
1-1 半截



91-臨穴  
1-1 完截



91-臨穴  
1-2 半截



91-臨穴  
1-2 完截



91-臨穴  
1-3 半截



91-臨穴  
1-3 完截

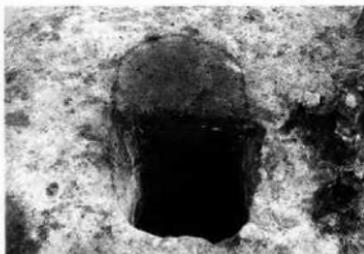


91-臨穴  
2-1 半截



91-臨穴  
2-1 完截

91-陥穴  
2-2 A半截



91-陥穴  
2-2 A完掘



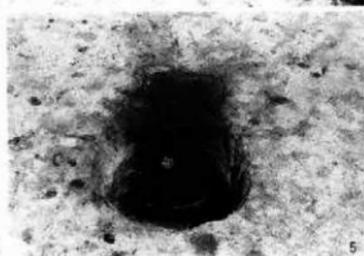
91-陥穴  
2-2 B半截



91-陥穴  
2-2 B完掘



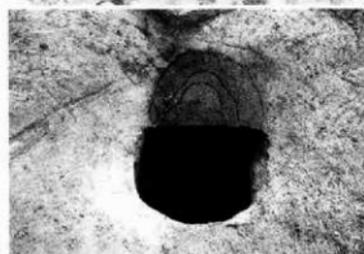
91-陥穴  
2-3 半截



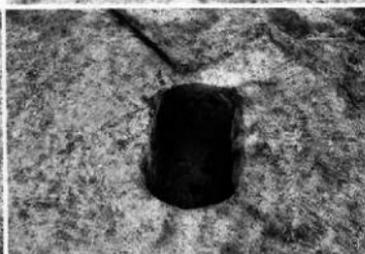
91-陥穴  
2-3 完掘



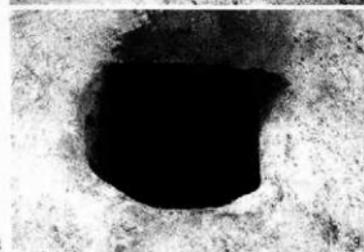
91-陥穴  
4-1 半截



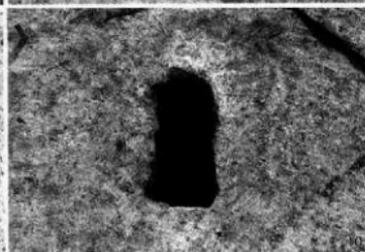
91-陥穴  
4-1 完掘



91-陥穴  
4-2 半截



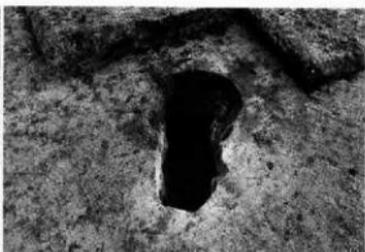
91-陥穴  
4-2 完掘



91-陥穴  
4-3 半截



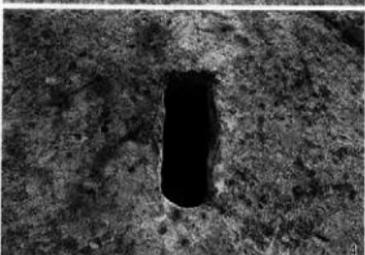
91-陥穴  
4-3 完掘



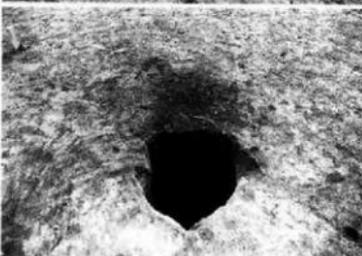
91-陥穴  
4-4 半截



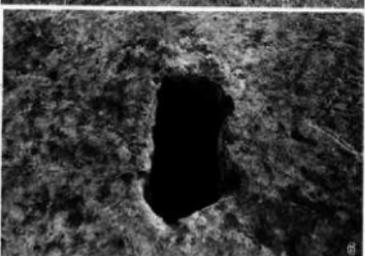
91-陥穴  
4-4 完掘



91-陥穴  
4-5 半截



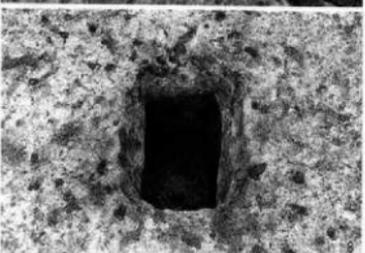
91-陥穴  
4-5 完掘



91-陥穴  
4-7 半截



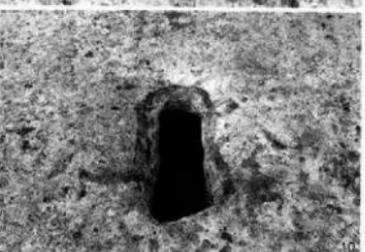
91-陥穴  
4-7 完掘



91-陥穴  
4-8 半截



91-陥穴  
4-8 完掘



'91-陥穴  
5-1完掘



'91-陥穴  
5-2完掘



'91-陥穴  
5-3半掘



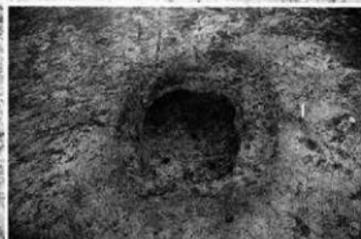
'91-陥穴  
5-3完掘



'87-SK16半掘



'87-SK16完掘



'87-SK15半掘



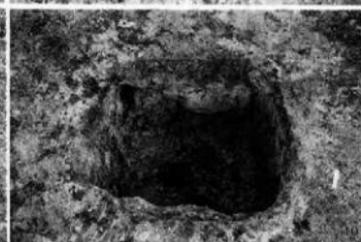
'87-SK15完掘



'87-SK17半掘



'87-SK17完掘



'87-SK20半截



2

'87-SK20完掘



'87-SK24半截



3

4

'87-SK24完掘

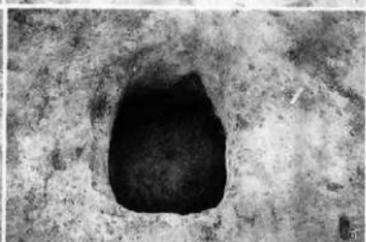


'87-SK23半截

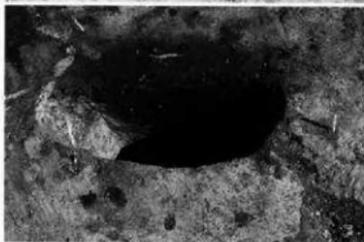


5

'87-SK23完掘



'87-SK25半截



6

'87-SK25完掘



'87-SK18半截



7

10

'87-SK18完掘





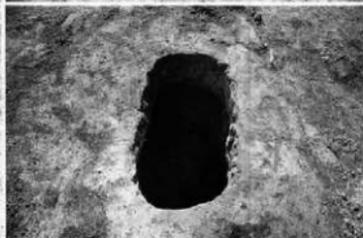
'87-SK21半截



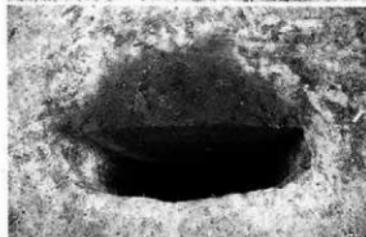
'87-SK21完掘



'87-SK22半截



'87-SK22完掘



'87-SK19半截



陥穴  
'87-SK15~25  
完掘



'87-1号  
炭窯半截



'87-1号  
炭窯完掘



'87-2号  
炭窯半截



'87-2号  
炭窯半截

'87-2号炭窯  
完掘



'87-7号炭窯  
半截



'87-7号炭窯  
半截



'87-7号炭窯  
半截



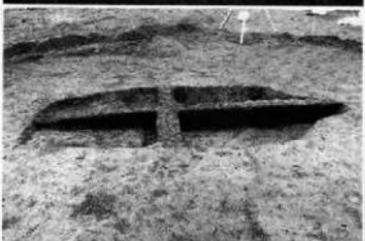
'87-7号炭窯  
完掘



'87-10号炭窯  
半截



'87-10号炭窯  
半截



'87-10号炭窯  
完掘



'87-12号炭窯  
半截



'87-12号炭窯  
半截





'87-12号炭窯  
完掘



'87-11号炭窯  
半截



'87-11号炭窯  
半截



'87-11号炭窯  
完掘



'87-3号炭窯  
半截



'87-3号炭窯  
半掘



'87-8号炭窯  
半截



'87-8号炭窯  
半截



'87-6号炭窯  
完掘



'87-5号炭窯  
半截



'87-5号炭窯  
半截



'87-5号炭窯  
完掘



'87-4号炭窯  
半截



'87-4号炭窯  
半截



'87-A~K号  
炭窯半截



'87-A~K号  
炭窯半截



'87-A~K号  
炭窯完掘



'87-6号炭窯  
半截



'87-6号炭窯  
半截



'87-6号炭窯  
完掘

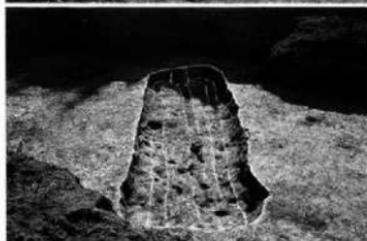
87-13号炭室  
半截



87-13号炭室  
半截



87-13号炭室  
完掘



87-14号炭室  
完掘



91-4B炭室  
半截



91-4B炭室  
半截



91-4B炭室  
半截



91-4B炭室  
半截



91-4B炭室  
完掘



91-3E炭室  
完掘





'91-4 B  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯完掘



'91-5 H  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯半截



'91-5 H  
炭窯半截



'91-6 A  
炭窯半截



'91-6 A  
炭窯半截



'91-6 A  
炭窯完掘



'91-7 F  
炭窯完掘



'91-7 F  
炭窯半截



'91-7 F  
炭窯半截



'91-7 F  
炭窯半截



'91-7 F  
炭窯半截



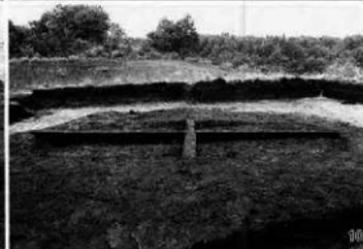
'91-7 F  
炭窯半截



'91-7 F  
炭窯半截



'91-7 A  
炭窯半截



'91-7 A  
炭窯半截

'91-7A  
炭窯完掘



'91-8F  
炭窯完掘



'91-8F  
炭窯半截



'91-8F  
炭窯半截



'91-8F  
炭窯半截



'91-8F  
炭窯半截



'91-8F  
炭窯半截



'91-8F  
炭窯半截



'91-9G  
炭窯半截



'91-9G  
炭窯半截





'91-9G  
炭窯完掘



'91-9C  
炭窯完掘



'91-9C  
炭窯半截



'91-9C  
炭窯半截



'91-10E  
炭窯完掘



'91-10E  
炭窯半截



'91-10E  
炭窯半截



'91-10E  
炭窯半截



'91-10E  
炭窯半截



'91-10E  
炭窯半截

'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯半截



'91-10B  
炭窯完整



'91-11・12G  
炭窯完整



'91-11・12G  
炭窯半截



'91-11・12G  
炭窯半截





'91-11・12G  
炭窯半截



'91-11・12G  
炭窯半截



'91-12E  
炭窯半截



'91-12E  
炭窯半截



'91-12F  
炭窯半截



'91-12F  
炭窯半截



'91-12F  
炭窯半截



'91-12F  
炭窯半截



'91-15C  
炭窯半截



'91-15C  
炭窯半截



'91-15C  
炭窯半載



'91-15C  
炭窯半載



'91-15C  
炭窯半載



'91-15C  
炭窯完掘



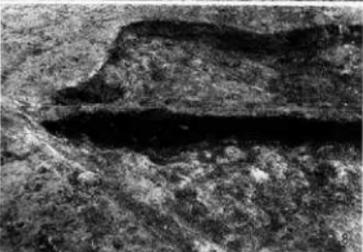
'91-16A  
炭窯半載



'91-16A  
炭窯半載



'91-16A  
炭窯完掘



'91-17B  
炭窯半載



'91-17B  
炭窯半載



'91-17B  
炭窯半載



91-17B  
炭窯半截



91-17B  
炭窯半截



91-17B  
炭窯完掘



91-17C  
炭窯半截



91-17C  
炭窯半截



91-17C  
炭窯完掘



91-18B  
炭窯半截



91-18B  
炭窯半截



91-18B  
炭窯完掘



91-19C  
炭窯完掘



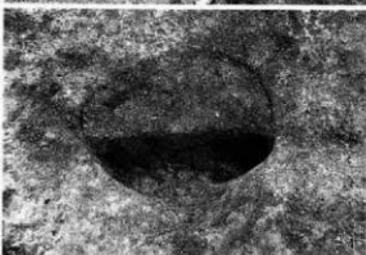
91-19A  
炭窟半截



91-19A  
炭窟半截



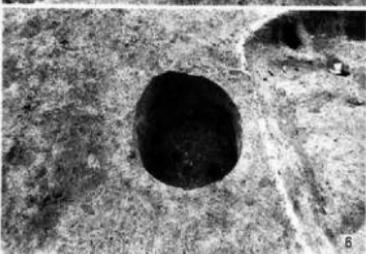
91-19A  
炭窟完掘



91-4B燒土  
土坑半截



91-18B  
土坑半截



91-18B  
土坑完掘



91-15C  
土坑半截



91-4B  
土坑半截



91-6A  
土坑半截



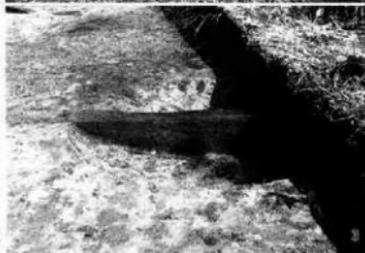
91-6A  
土坑半截



91-8E  
土坑半截



91-8E  
土坑半截



91-12G  
土坑南半截



91-12G  
土坑南半截



91-12G  
土坑東半截



91-12G  
土坑東半截



91-12G  
土坑西半截



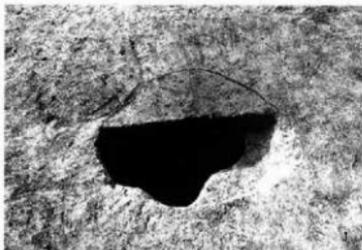
91-12G  
土坑西半截



91-12F  
土坑半截



91-12F  
土坑半截



91-17B  
土坑半截



91-19C  
土坑半截



道路状遺構 1  
(STA473付近)



道路状遺構 1  
(STA473付近)



道路状遺構 1  
(STA473付近)



道路状遺構 1  
(19C)



91-91  
道路状遺構



道路状遺構 1  
(12F)



道路状遺構 2



溝状遺構 1



溝状遺構 1 半截



溝状遺構 1 完掘



遠景  
('91調査区)



遠景  
('91調査区)



郷清水道跡より  
西福田新田道跡  
をのぞむ



郷清水道跡より  
長野方面をのぞむ



|    |     |       |
|----|-----|-------|
| 土器 | 1~7 | (1:3) |
| 石器 | 1・2 | (2:3) |
| 石器 | その他 | (1:3) |



16

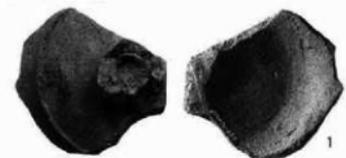


17

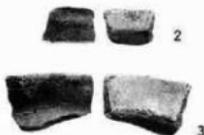


18

古墳時代の遺物

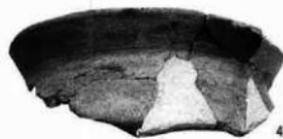


1



2

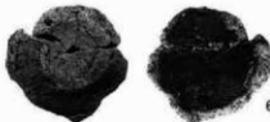
3



4



5



6



7

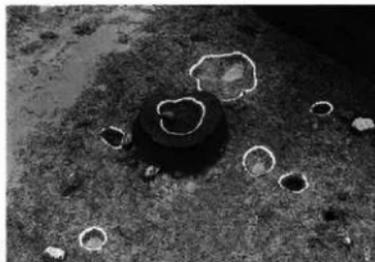


8



9

石器 16 (1:6)  
 石器 17・18 (1:3)  
 土器 1~8 (1:3) 石器9 (1:3)



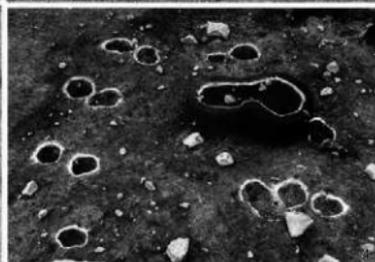
SI10完掘



SI10炉半截



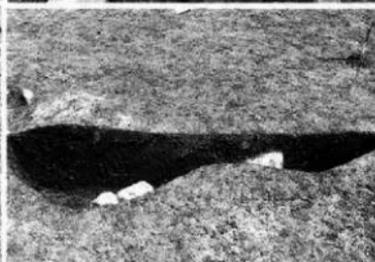
SI26完掘



SI25完掘



SI26炉半截



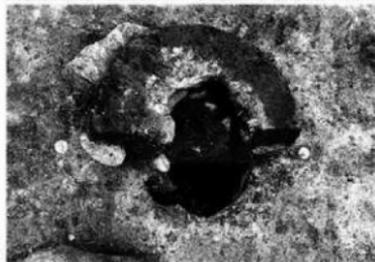
SI25炉半截



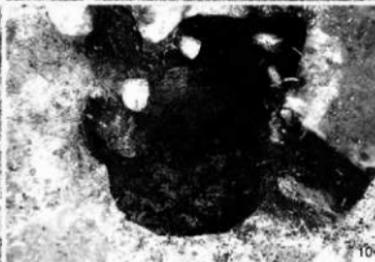
SI26伊完掘



SI25伊完掘



SI25・26  
罎柱穴半截



SI25・26  
罎柱穴完掘

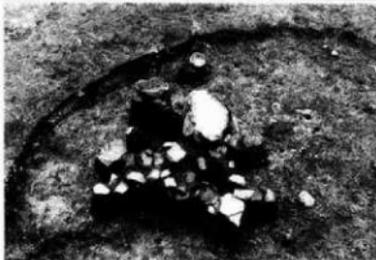
SI11遺物  
出土状況



SI11遺物  
出土状況



SI11遺物  
出土状況



SI11遺物  
出土状況



SI11半截



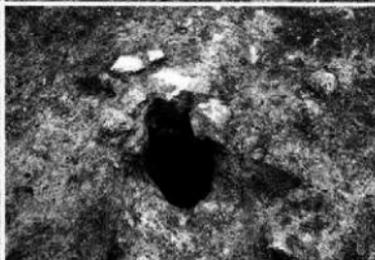
SI11完掘



SI11Pit1  
横出状況



SI11Pit1  
半截



SI11Pit2  
横出状況



SI11Pit2  
半截



SI11Pit 3  
検出状況



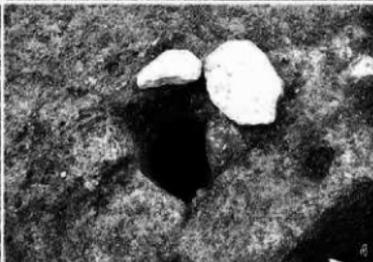
SI11Pit 3  
半載



SI11Pit 4  
検出状況



SI11Pit 4  
半載



SFP 1 半載



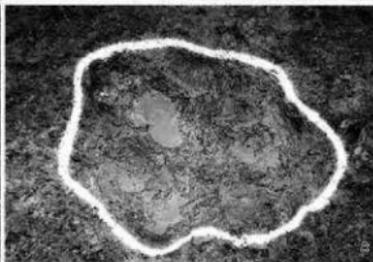
SFP 1 完掘



SK13  
検出状況



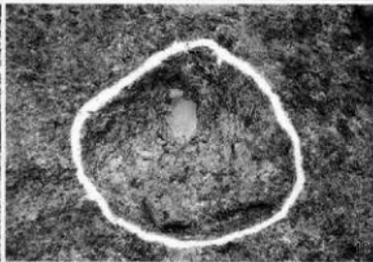
SK13完掘

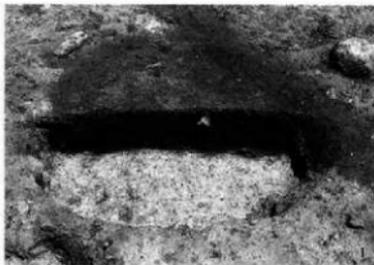


SK 9 半載

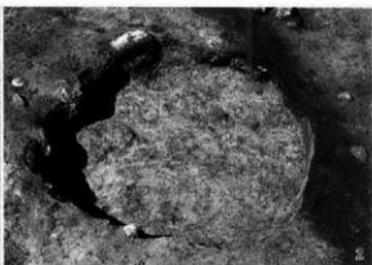


SK 9 完掘





SK 8 半截



SK 8 完掘



SK 7 半截



SK 7 完掘



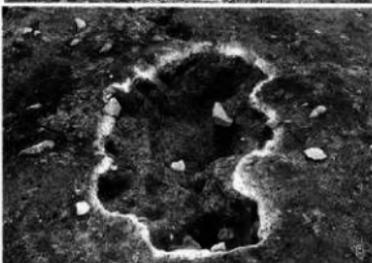
SK 3 半截



SK 3 完掘



SK 16 完掘



SK 17 完掘

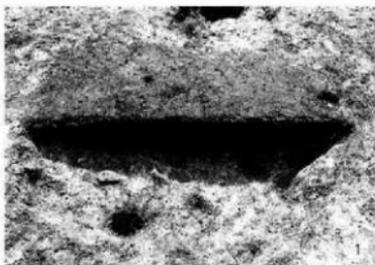


SK 19 完掘

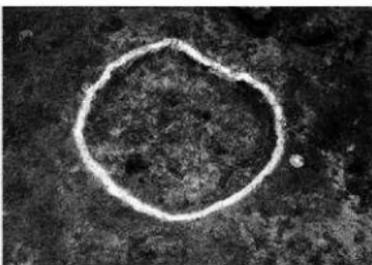


SK 20 完掘

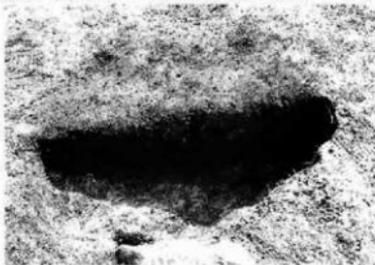
SK27半截



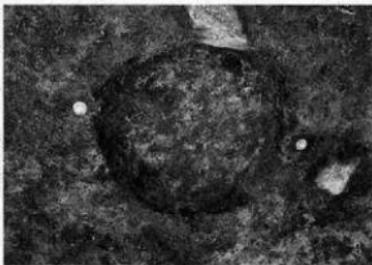
SK27完掘



SK29半截



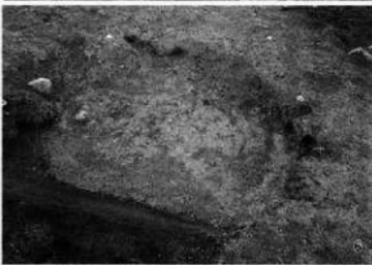
SK29完掘



SK31半截



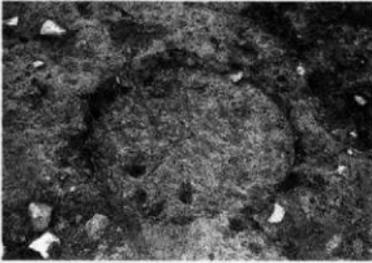
SK31完掘



SK30半截



SK30完掘



SK34半截



SK34完掘





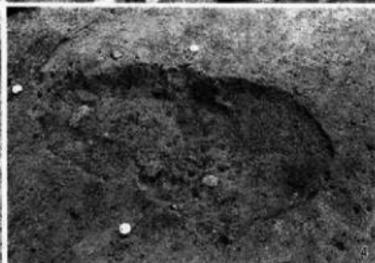
SK21完掘



SX 2  
東西半截



SX 2  
南北半截



SX 2完掘



SX24半截



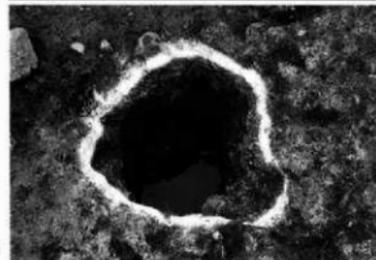
SX24完掘



SX33半截



SX33完掘



SX23完掘



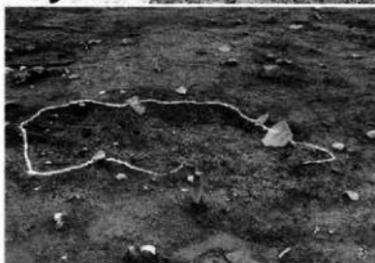
SD 4半截



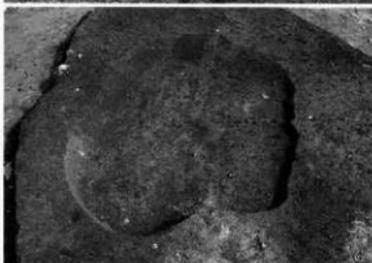
14号炭窯半截



32号炭窯半截



14号炭窯完掘



32号炭窯完掘



12号炭窯  
南北半截



26号炭窯  
南北半截



12号炭窯  
東西半截



26号炭窯  
東西半截



12号炭窯完掘



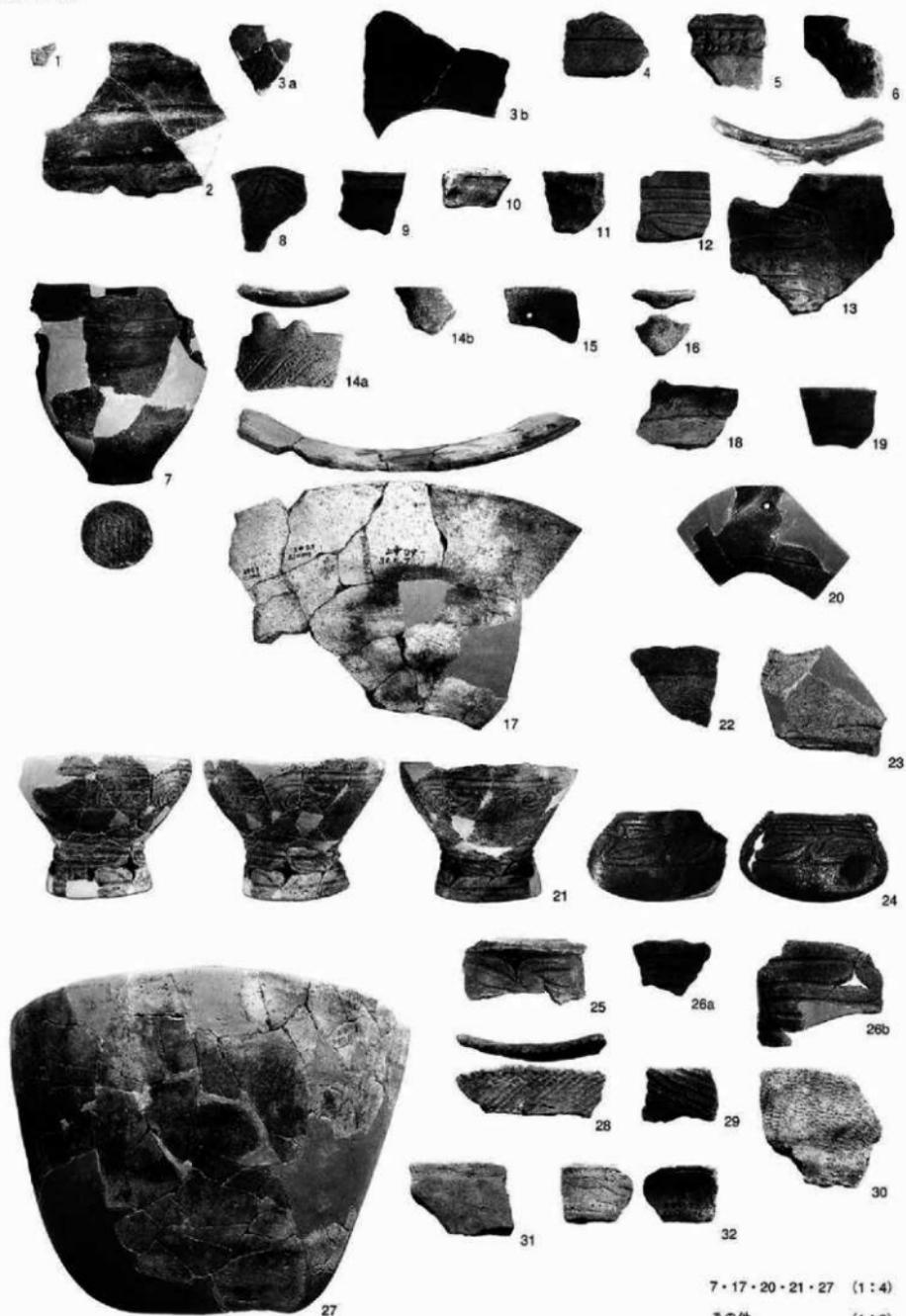
26号炭窯完掘

第二層



第一層



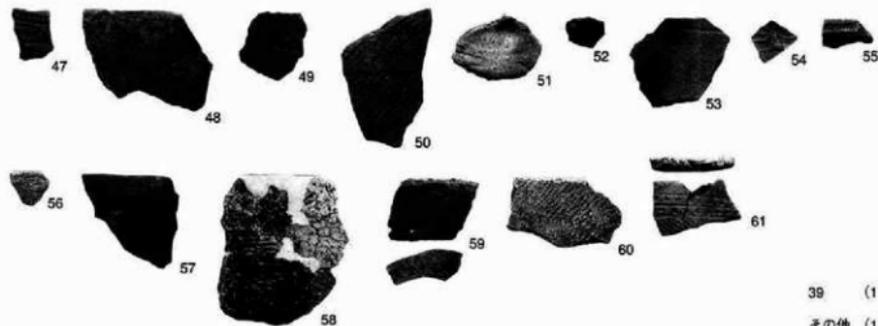


7・17・20・21・27 (1:4)

その他 (1:3)

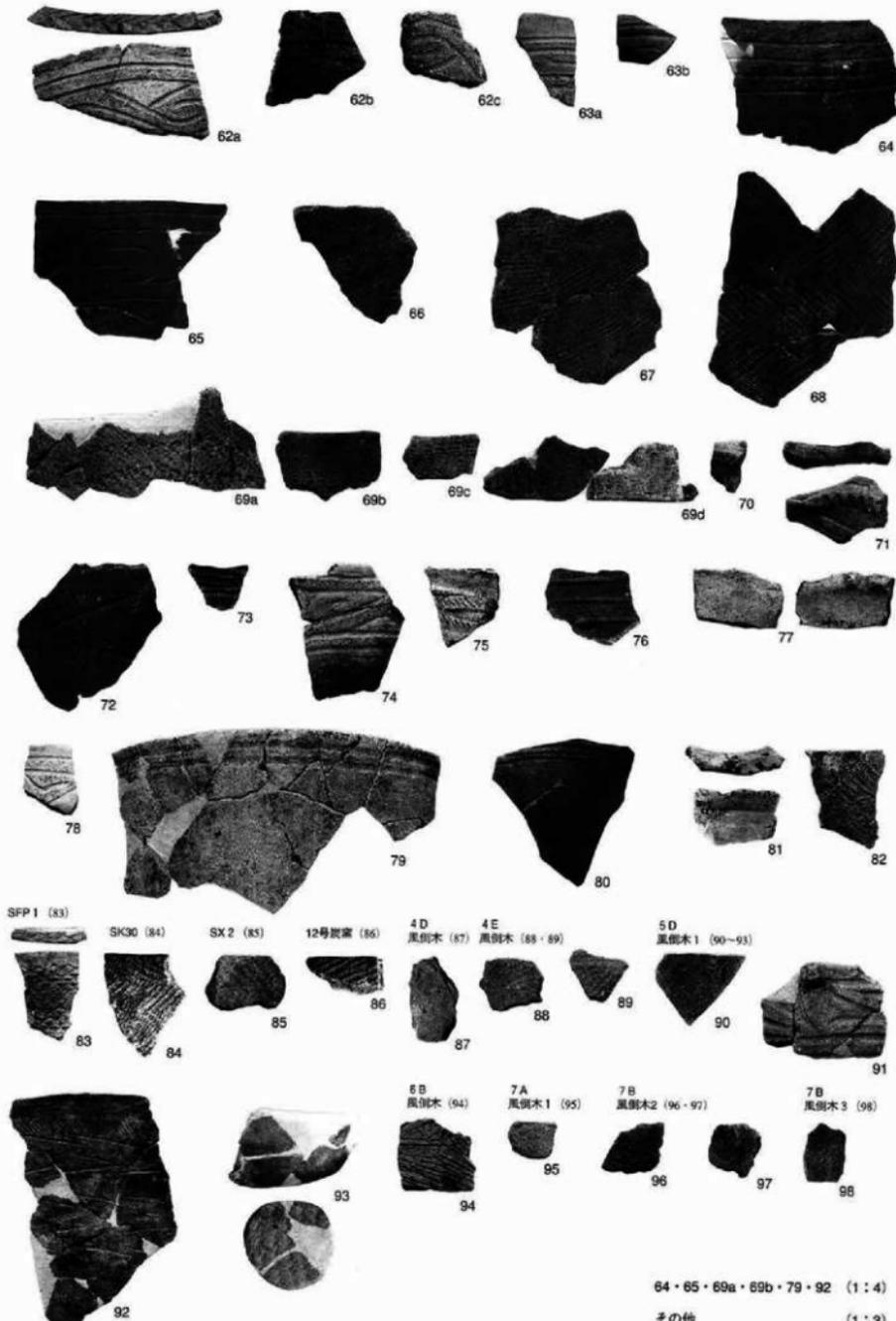


SI 25・26 (47-61)



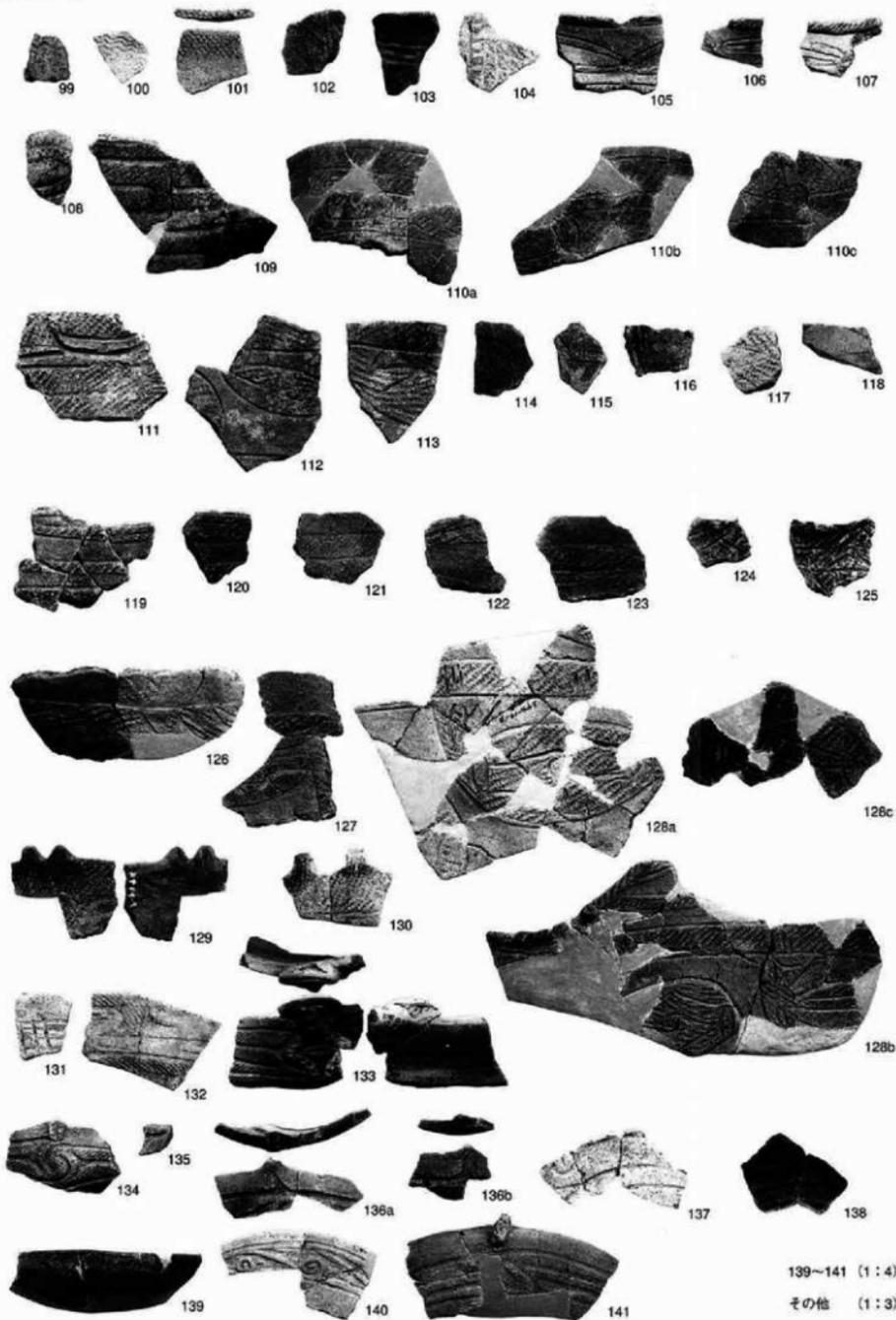
39 (1:4)

その他 (1:3)



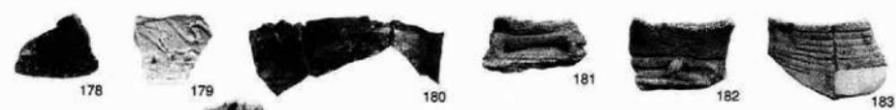
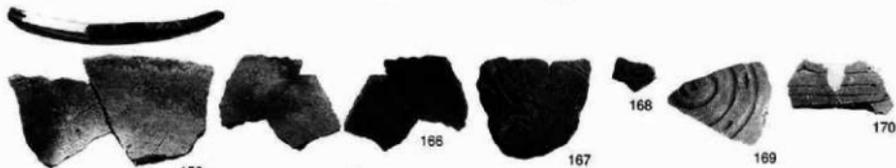
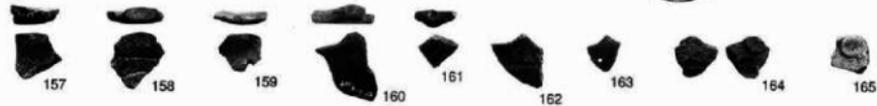
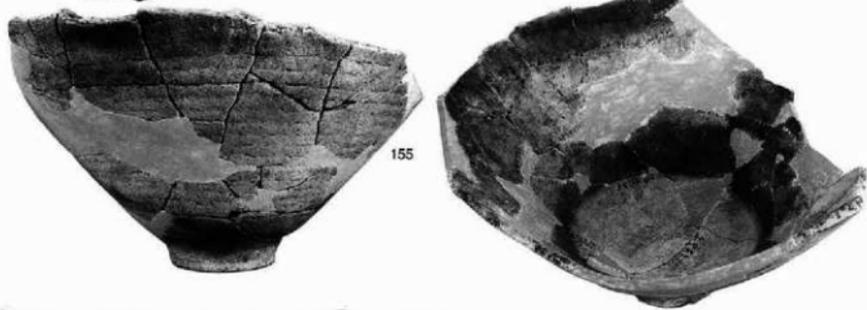
64・65・69a・69b・79・92 (1:4)

その他 (1:3)



139~141 (1:4)

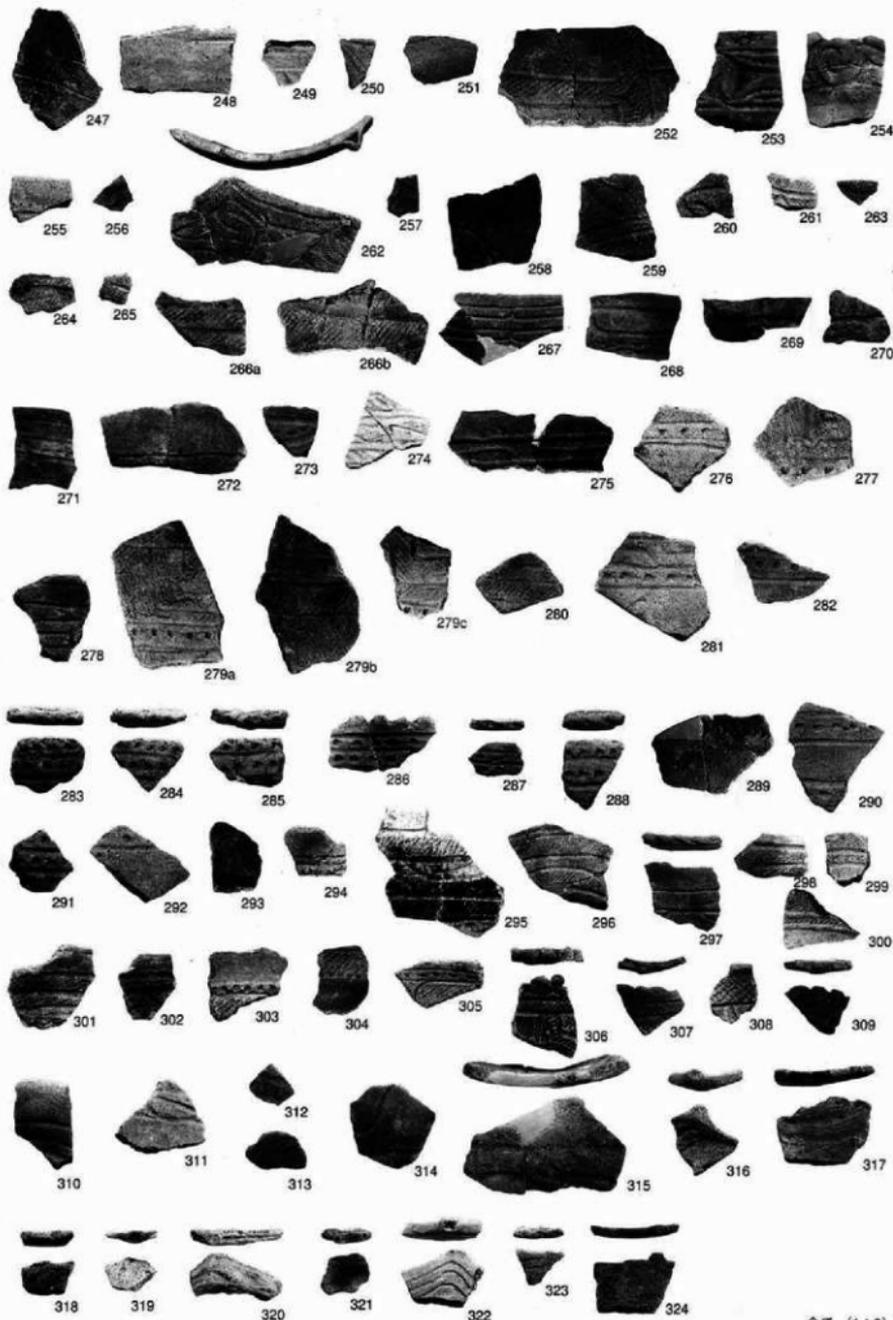
その他 (1:3)

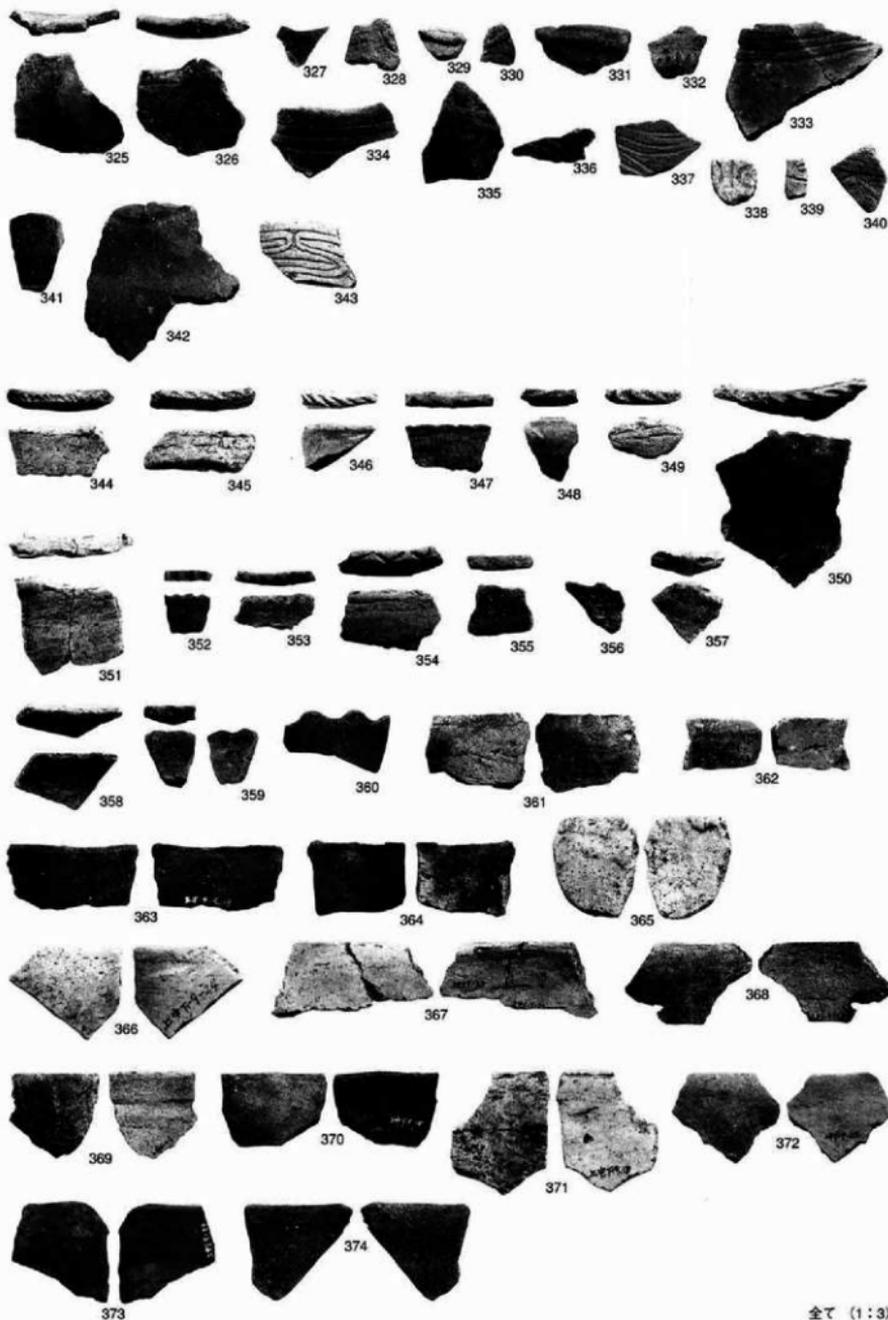


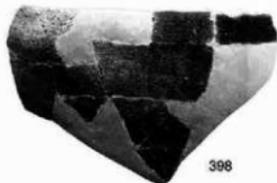
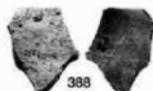
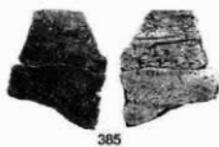
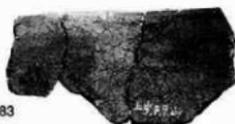
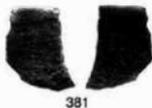
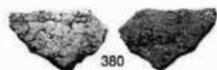
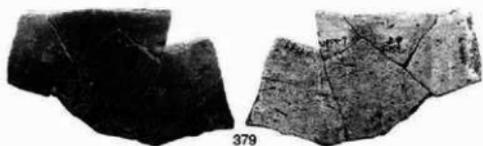
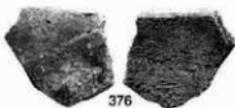
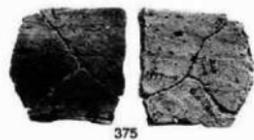
142・155・156・166 (1:4)

その他 (1:3)



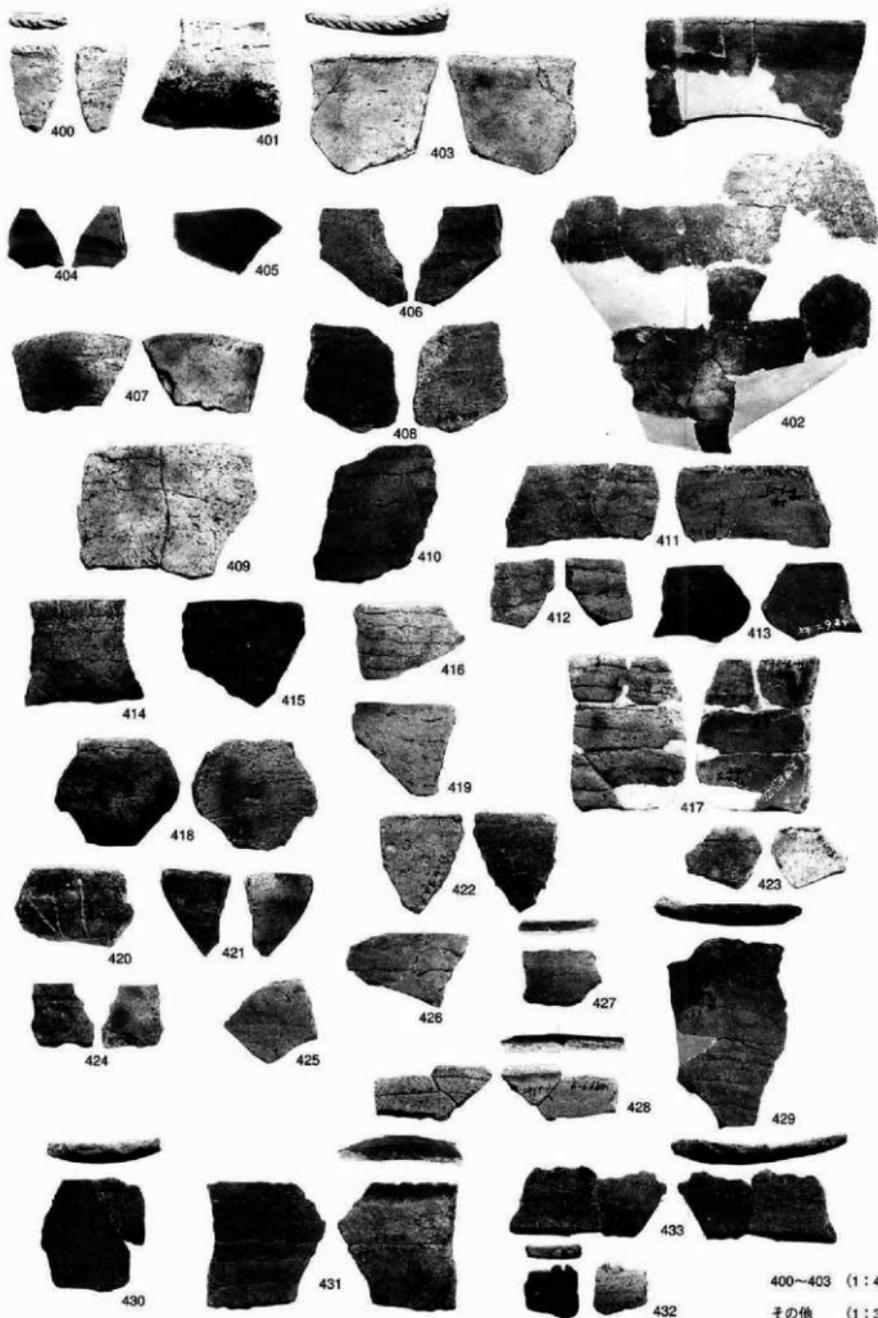






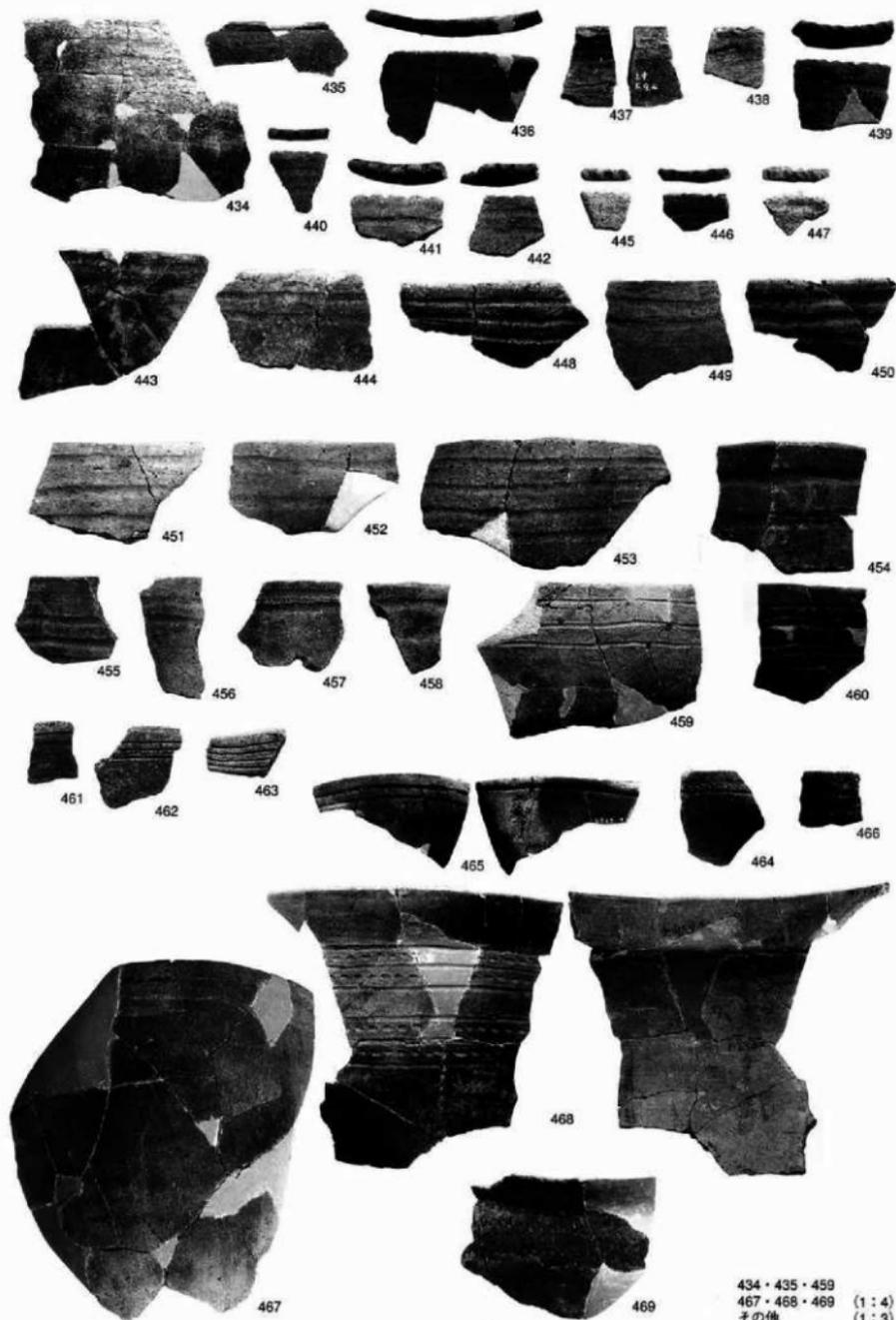
397・398・399 (1:4)

その他 (1:3)

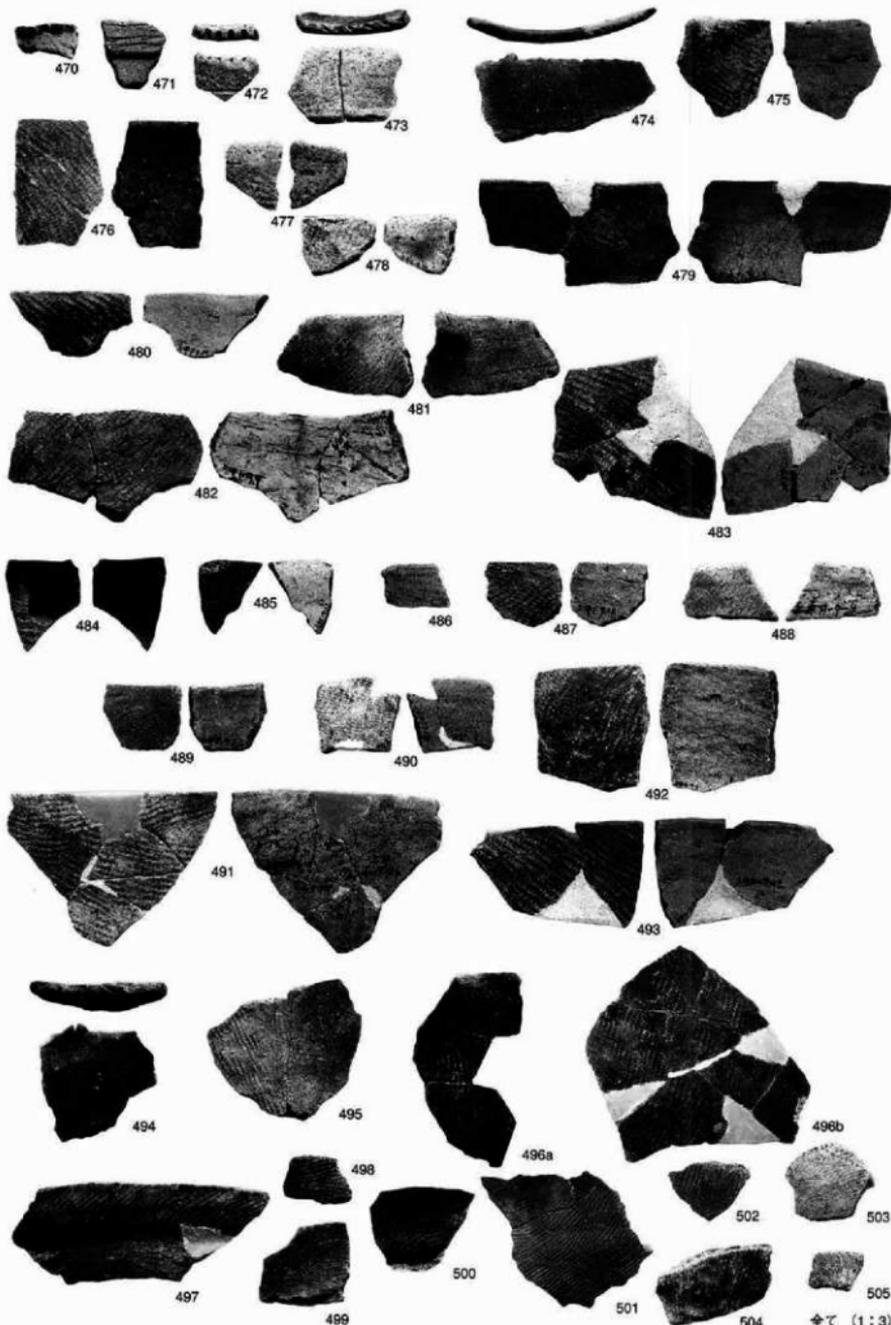


400~403 (1:4)

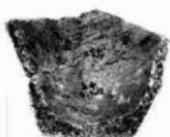
その他 (1:3)



434・435・459 (1:4)  
 467・468・469 (1:3)  
 その他







529

530



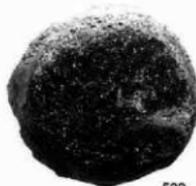
528



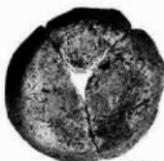
531



535



532



533



534



552・553・554・555・556・557・558・559  
(1:1)

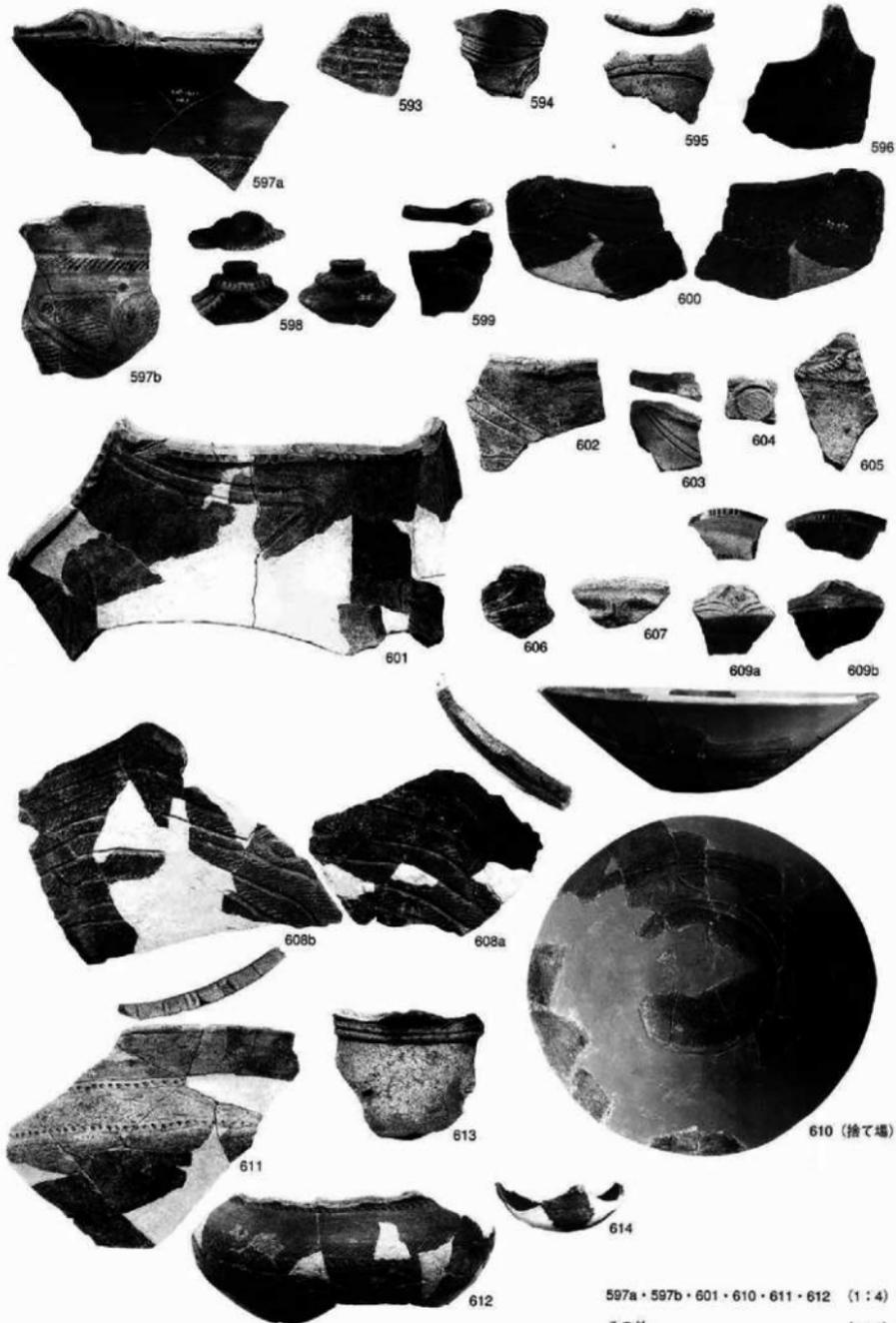
その他 (1:3)



561・562・563・582・583・588・589・591a・592 (1:4)

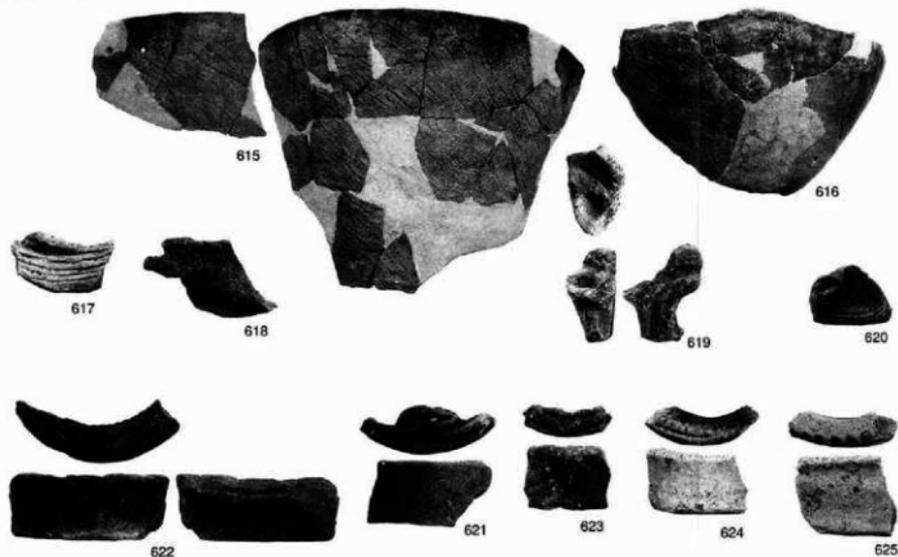
その他

(1:3)

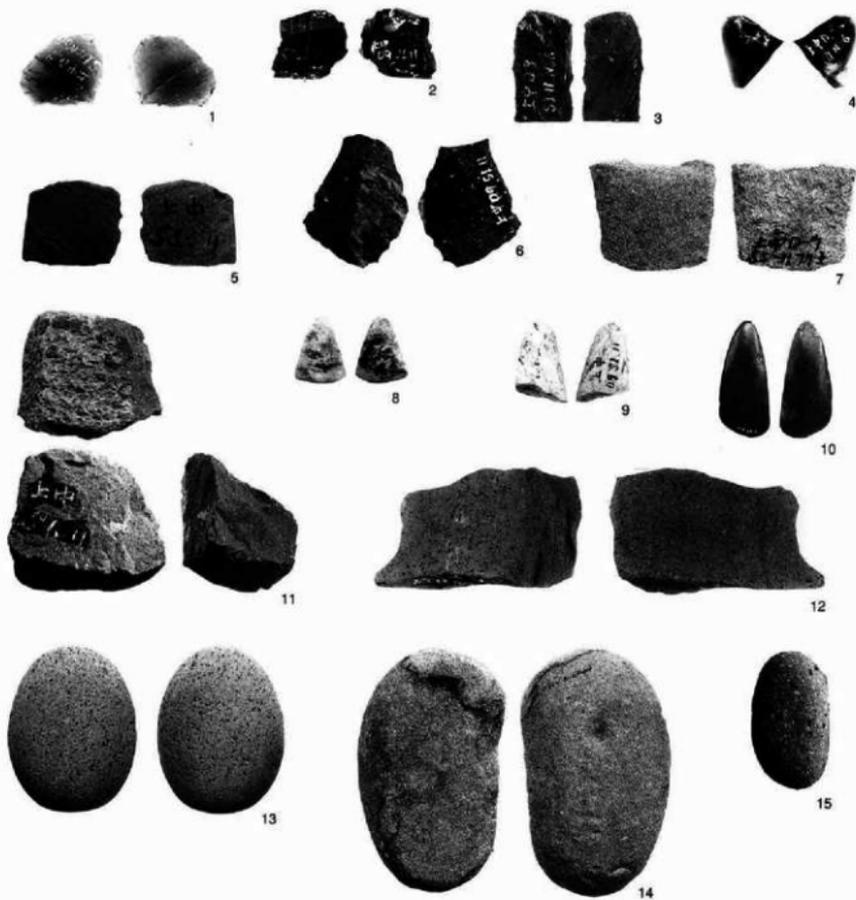


597a・597b・601・610・611・612 (1:4)

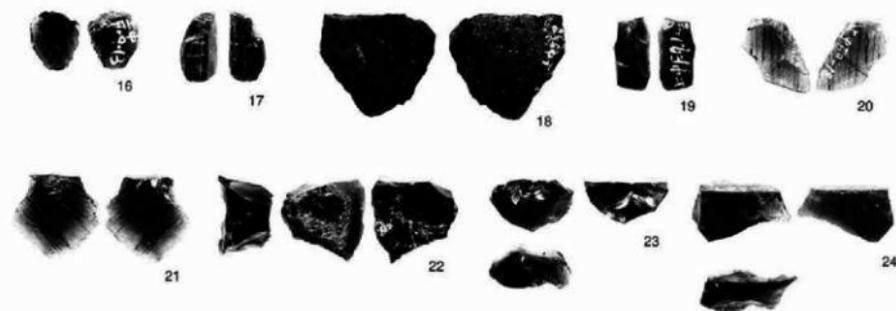
その他 (1:3)



615・616 (1:4)  
621~625 (2:3)  
その他 (1:3)



捨て場 (16~24)



8~11・13~15 (1:3)

1~7・12・16~24 (2:3)



25



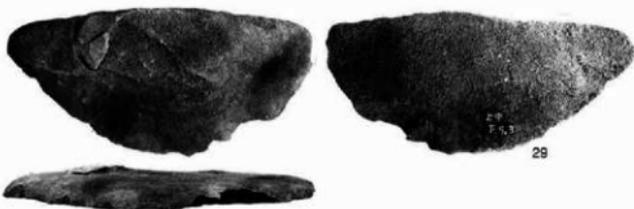
26



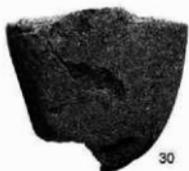
27



28



29



30



31



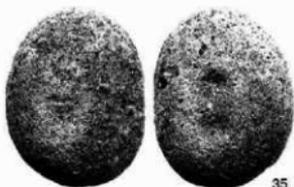
32



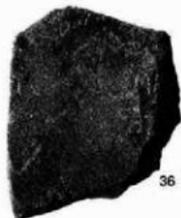
33



34



35



36

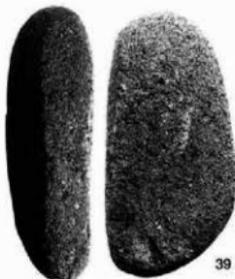


37



38

SK15 (99)



39

25~29・32・34~39 (1:3)

30・31・33 (1:6)

SI 25・26 (42)



40



42

4D 黒樹木2 (41)



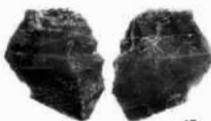
41

包含層 (43~55)



43

44



45



46



47



48



49



50



51



52



53



54



55

42・46~50 (1:3)  
40・41・43~45・51・52 (2:3)  
53~55 (1:6)



56



58



59



57



60



61



62



63



64



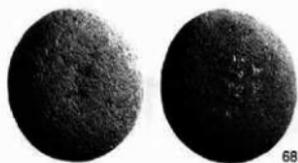
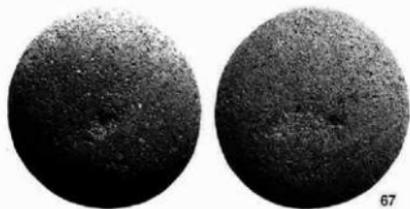
65



66

56~58・60~66 (1:3)

59 (1:6)



67~71 (1:3)

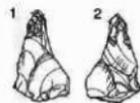
弥生時代以降の遺物



1~7 (1:3)

顕微鏡写真

石鏃 (図版71-44) の先端





トレンチ



トレンチ



炭窯検出



炭窯完掘



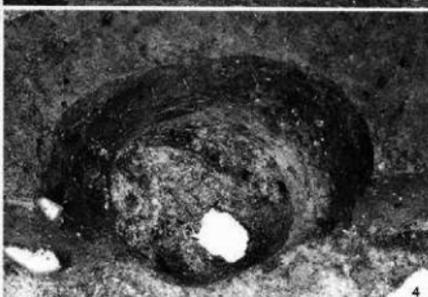
SI 2 検出



SI 1・2  
半検



SI 1・2  
地山上面



SI 1  
伊完掘  
4



SI 3  
伊半掘



SI 3  
伊完掘  
6



遺景



遺景

中原D遺跡  
縄文時代の土器 (1~9)



古墳時代以降の土器 (10~13)





炭窯検出



炭窯検出



炭窯半截



炭窯南側  
突出部半截



炭窯完備



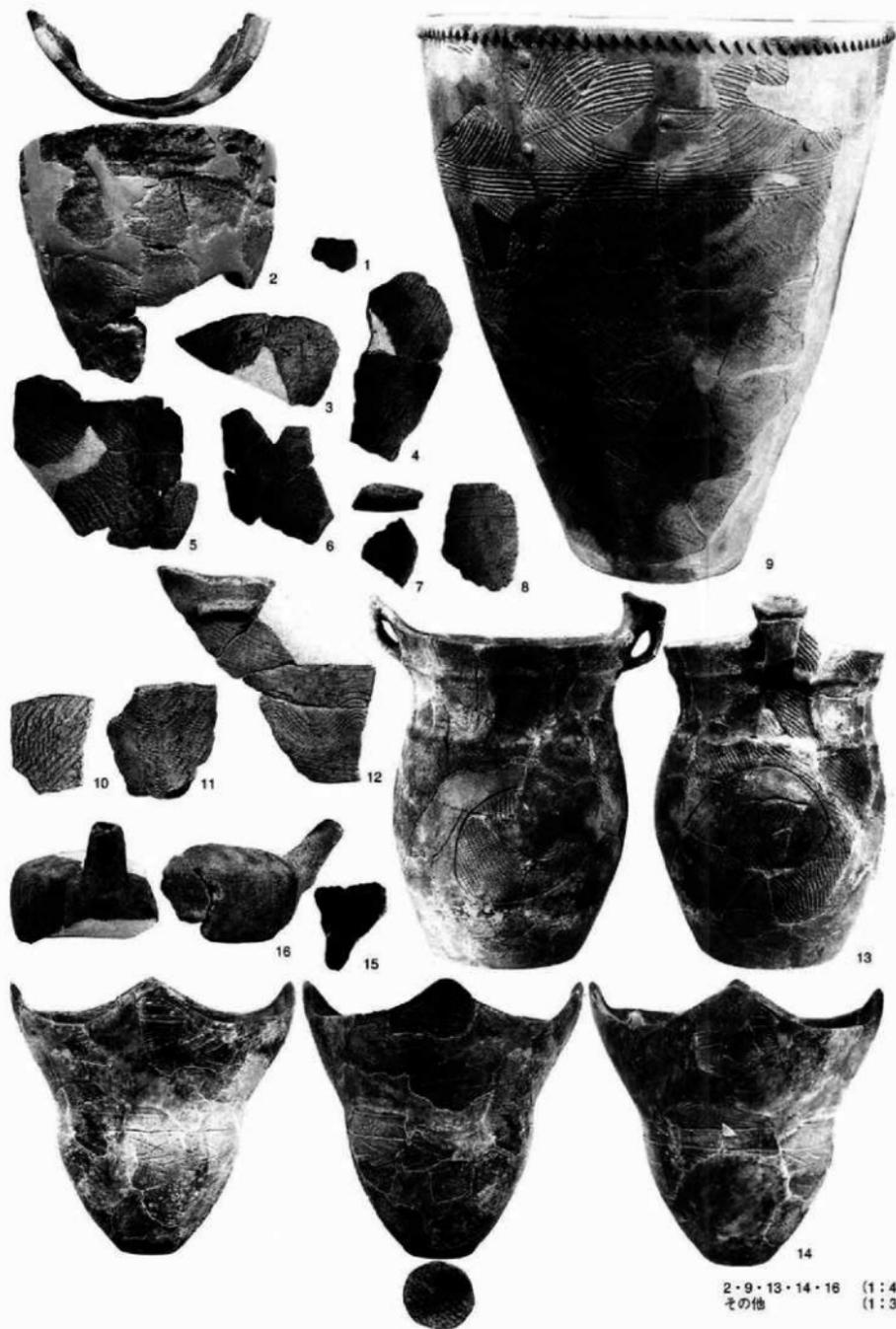
基本層序



全景



全景



2・9・13・14・16 (1:4)  
その他 (1:3)



13 (1:6)  
 1・2・4・6~12 (1:3)  
 3・5 (2:3)

## 報告書抄録

| 書名      | 西福田新田遺跡 郷清水遺跡 上中島遺跡 上滝ノ沢遺跡 中の原D遺跡 窪畑B遺跡 |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
|---------|---|-----------------------------|--------------------------------|----------------------|------------|--|---------|---------------------------|
| 副書名     | 国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書 IV                 |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| シリーズ名   | 新潟県埋蔵文化財調査報告書                           |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| シリーズ番号  | 第94集                                    |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| 編・著者名   | 立本(土橋)由理子・吉澤環・保バレオ・ラボ(植田弥生)・木越邦彦        |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| 編集機関    | 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団                      |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| 所在地     | 新潟県新潟市大字金津93番地1 電話(0250)25)3961         |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| 発行年月日   | 平成11年(西暦1999年)3月30日                     |                             |                                |                      |            |  |         |                           |
| 所収遺跡名   | 所在地                                     | コード                         |                                | 北緯                   | 東経         | 調査期間                                   | 調査面積    | 調査原因                      |
|         |   | 市町村                         | 遺跡番号                           |                      |            |  |         |                           |
| 西福田新田遺跡 | 新潟県中頸城郡中郷村大字西福田新田1226ほか                 | 15-546                      | 87                             | 36°59'15"            | 138°13'17" | 19870819~19871009                      | 9,455㎡  | 一般国道18号上新バイパス建設に伴う事前調査    |
| 郷清水遺跡   | 新潟県中頸城郡中郷村大字藤沢1464-1ほか                  | 15-546                      | 88                             | 36°59'05"            | 138°13'20" | 19870901~19871031<br>19880510~19880617 | 11,195㎡ |                           |
|         |   |                             |                                |                      |            | 19910819~19911129                      | 15,010㎡ | 上新バイパス掘削除雪ステーション建設に伴う事前調査 |
| 上中島遺跡   | 新潟県中頸城郡中郷村大字二本木字上中島1700ほか               | 15-546                      | 34                             | 36°58'45"            | 138°13'25" | 19890524~19890929                      | 6,784㎡  | 一般国道18号上新バイパス建設に伴う事前調査    |
| 上滝ノ沢遺跡  | 新潟県中頸城郡中郷村大字二本木字上滝ノ沢1493ほか              | 15-546                      | 91                             | 36°58'20"            | 138°13'33" | 19871012~19871022                      | 4,340㎡  |                           |
| 中の原D遺跡  | 新潟県中頸城郡中郷村大字松崎字中の原540-1ほか               | 15-546                      | 92                             | 36°57'53"            | 138°13'41" | 19880517~19880707                      | 4,950㎡  | 805㎡                      |
| 窪畑B遺跡   | 新潟県中頸城郡中郷村大字市原535-2ほか                   | 15-546                      | 93                             | 36°57'41"            | 138°13'38" | 19880629~19880728                      |         |                           |
| 所収遺跡名   | 種別                                      | 主な時代                        | 主な遺構                           | 主な遺物                 |            | 特記事項                                   |         |                           |
| 西福田新田遺跡 | その他(塚場)                                 | 縄文時代早期                      | 陥穴状土坑列                         | 縄文時代の土器・石器           |            |  |         |                           |
| 郷清水遺跡   | その他(塚場)                                 | 縄文時代早期~晩期<br>古墳時代前期<br>平安時代 | 縄文時代の陥穴状土坑列、平安時代の炭竈、時期不明の道路状遺構 | 縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器  |            |  |         |                           |
| 上中島遺跡   | 集落・生産遺跡                                 | 縄文時代後期~晩期                   | 縄文時代の住居跡4基・捨て場1か所、平安時代の炭竈      | 縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器  |            | 縄文時代後期~晩期の土器が住居・捨て場からまとまって出土           |         |                           |
| 上滝ノ沢遺跡  | 生産遺跡                                    | 平安時代                        | 平安時代の炭竈                        | なし                   |            |  |         |                           |
| 中の原D遺跡  | 集落                                      | 縄文時代<br>平安時代                | 平安時代の住居跡                       | 縄文時代の土器、平安時代の土師器・須恵器 |            |  |         |                           |
| 窪畑B遺跡   | 集落                                      | 縄文時代早期~晩期                   | なし                             | 縄文時代の土器              |            |  |         |                           |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第94集  
 国道18号上新バイパス関係発掘調査報告書IV  
 西福田新田遺跡・郷清水遺跡・上中島遺跡・  
 上滝ノ沢遺跡・中の原D遺跡・窪畑B遺跡

平成11年3月25日 印刷  
 平成11年3月30日 発行

発行・編集

新潟県教育委員会  
 〒960-8570 新潟市新光町4-1  
 電話 025(285)5511  
 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
 〒956-0845 新潟市大字金津93-1  
 電話 0250(25)3966  
 印刷  
 新高速印刷株式会社  
 〒960-0963 新潟市南出来島2-1-25  
 電話 025(285)3311

新潟県埋蔵文化財調査報告書第94集 『西福田新田遺跡 野清水遺跡 上中島遺跡 上滝ノ沢遺跡』  
 正誤表

| 頁  | 行      | 誤               | 正               |
|----|--------|-----------------|-----------------|
| 77 | 下から8行目 | 松崎遺跡            | 上滝ノ沢遺跡          |
| 奥付 | 下から4行目 | 電話 0250(25)3986 | 電話 0250(25)3981 |